
I S インフィニット・ストラトス Dream Soldier

紅だった人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス Dream Soldier

【Nコード】

N5814T

【作者名】

紅だった人

【あらすじ】

藍越学園の受験会場で偶然出会った織斑一夏と立花葵は、これまた偶然にも女性しか起動できないはずのISを動かしてしまう。2人はISを動かせる男としてIS学園に入学し、そして・・・。

この物語は、原作知識を持たない転生者らしからぬオリキャラ主人公『立花葵』が不幸や劣悪なる環境にも負けずに歩んでゆく物語である。

第1話　ありえぬ転生者

「今日も冷えるな」

自宅の玄関を開けた立花葵の第一声はそれだった。

中肉中背の決して高くもない身体を精一杯伸ばし、大きく息を吸って冷たい空気をその中へ入れる。

普段は嫌な身震いが起こるが、今日ばかりはそれが何となく気持ちよい。

その理由を求めて右手に持ったものを見る。

藍越学園受験票

今日は中学生生活最大の難関ともいえる高校受験の日だ。

偏差値を度外視して家との距離だけで決めた高校で、中学の先生からは「なんでもっと高いところ受けないんだ!？」と、何度も口をすっぱくして言われてきた。

普段の成績と今日の体調を見てもまず受かるだろうと思うが、やはり緊張をぬぐえない。

家の中の両親に「いつてきます」と告げて、葵は自転車を使い受験会場である多目的ホールへ出発した。

立花葵には秘密がある。

とはいっても、大したものではない。少なくとも葵本人にとってはそうだ。

葵は転生者である。

—— すごいー！ と反応した人には、違うと否定しておこう。

—— バカ言ってるじゃねえよ！ と反応した人には、その通りだと肯定しよう。

葵は間違いなく後者よりの考えだった。

なぜなら、葵には転生前の記憶がほぼ一切ないからだ。

普通は、転生者といえは前世の記憶をある程度持っているものと相場は決まっているのだが、葵には当てはまらなかったらしい。

ただ漠然と、葵はある程度成長してきたときから、自分には前世があつたという感覚があつたのだ。

それに転生者として覚えていることも2つだけだがある。

1つは、この今いる世界は前世からみた創作物の世界であるというここと。

2つは、この世界という創作物の名前が『 I S インフィニット・ストラトス 』であるということだ。

うん。 実に大したことのない情報だ。

この世界が創作物であつたとしても、前世の世界の記憶がないのだから比べようはなく、この世界は間違いなく葵にとってのリアルな世界なのだ。

正直、転生者としての意味がまるでない。

この世界は誰が主人公で、どんなストーリーになるのかさっぱり分らないのだ。

仮に葵の転生者が物語の登場人物としての設定であるとしても作者はなんでそんな設定をしたのだろうか？ と思う。

まあ、それはともかくとして、そんな理由から、葵は今の人生を転生者としてではなく、普通の一般人として生きていた。

少なくとも本人はそう思っていた。

多目的ホールに到着した葵は、まず案内板を見た。

「なんだこれ？ よく分からんな」

受験会場は2階なのだが、案内板が意味不明だ。

つまり読めない。

この建物、見た目は前傾的なデザインだが、案内板すらも奇抜なデザインなのはやりすぎである。

これでは、葵のような初めてここに来た人は手探りでないと目的地までたどり着けない。

ふと、葵は隣に人が立っているのに気付く……というか、目が合った。

「君も藍越の受験生？」

「ああ。君も？」

答えながら、葵は少年を見た。

背は葵より頭半分くらい高く、流行ファッションをしているわけ

でもないのに、同姓ながらカッコいい奴だと葵は思った。まあ、どうでもよいことだが。

「俺は織斑一夏っていうんだ。君は？」

「立花だ。立花葵」

「立花葵？ あれ、どこかで聞いたことある名前だな」

「ああ・・・この前テレビに出たし、それかな？」

「ああっ、そうだ！！ 立花葵っていえば、DS ドリーム・ソルジャー」の世界大会優勝者」

一夏の驚いた声がホールに響いた。

さて、DS ドリーム・ソルジャー を説明するには、まずはIS インフィニット・ストラトス について語らなければならぬ。

IS インフィニット・ストラトス

それは、今おそらくもつとも世界的に有名な兵器・あるいはスポーツの名前である。

かつて、天才博士『篠ノ之 束』が開発した軍事飛行用パワーダスーツ（元々は宇宙用のマルチフォーム・スーツ）でその圧倒的な戦闘力は既存の兵器を時代遅れの産物の変えてしまうほどのものだ。

『白騎士事件』その有効性が実証され、その戦闘力から『アラス

力条約』という独占禁止条約まで組まれたものだが、ISにはある特徴がある。

それは女性だけにしか操れないことだ。

これによりISを操れる女性は強く、操れない男性は弱いという女尊男卑の社会に世の中は移行していった。

ISはここまでにし、次はDSについてだ。

DSを簡単に説明すると、ISに酷似している機体を使った仮想空間を用いるバーチャルゲームである。

元々は、ある企業が男性も使えるISを開発しようとして失敗し、残ったデータを男女ともに使えるISのゲームにしたのが始まりだ。

それが今や世界的に爆発的な人気を博し、ユーザー総数は全世界で1,200万人を超えるほどになった。

その壮大なユーザーの頂点にいるのが、2ヶ月前の第5回DS世界大会で3連覇を成した立花葵である。

ちなみにDS ドリーム・ソルジャー という名前は、開発者が「結局、男性も使えるISの開発は夢の域をでなかった」との呟きをそのまま使った、あまりにもキレの悪い皮肉だ。

「今はただの受験生だよ。織斑君は、受験会場分かる？」

「いや。でも任せてくれ」

「は？ いや、ちよつと待て・・・」

一夏の言い回しが気になったものの、腕をとられた葵は一夏にそのまま引きづられていった。

その結果。

「・・・現在地はどこだ？」

思いつきり迷った。来たルートすら分かりません。

「次に見つけたドアを入れてみよう。それで何とかなる・・・はず」

「・・・そうだね」

言い回しがすでにダメっぽいのが、代わる考えもないので葵は一夏に頷いた。

部屋に入ると、薄暗い部屋の真ん中に鎧が鎮座してある。

「これは、ISか？」

「みたいだね。名前は忘れたけど、確かこれって、日本の量産型だ」

葵と一夏は後で分かったことだが、このISは『打鉄うちがね』という名前だ。

無骨なフォルムが男心をくすぐるが、今は見とれている場合では

ない。

葵がそう思つて、引き返そうとすると、一夏が惹かれるように打鉄に近づき、触れた。

慌てて、葵は一夏の元へ走った。

「おい、何を・・・」

「これ、分かる」

「えっ？」

「ISつてこういうものなんだ」

ボンヤリと呟く一夏の触れた打鉄が金属音を鳴らして反応する。

「動いた!？」

葵が驚愕したのと同時に、ドアが開いて数人の女性が入ってきた。

「こらっ！　そこで何をしている!」

「あっ・・・」

女性の怒鳴り声に驚いた一夏が打鉄から手を離すと、それまでの反応が嘘のように打鉄は元の置物ののように静かになった。

そして、同じく女性の声に驚いた葵が打鉄に触れる。

「（えっ？　なんだ、これ）」

そのとき、彼の世界は一変した。

第1話 ありえぬ転生者（後書き）

ああ、文才がほしい

みなさん、始めまして

紅だった人と申します。

拙い文章ですが、読んでいただけたら幸いです。

誤字・脱字・批判など、お待ちしております。

第2話 地獄の学園生活

突然だが、春といえばあなたにとってどんな季節だろうか？

よく聞くものを例として上げるとすれば、卒業式などから『別れの季節』、入学式などから『出会いの季節』などが一般的だろう。

後は、『桜咲く季節』とか『花見の季節』とか、『新人歓迎会の季節』・・・は変り種だろう。

まあ、人それぞれ多種多様な捉え方がある。

つまり、何が言いたいかといえば、

「地獄だ」

このたび、めでたくIS学園に入学した立花葵からすれば、今回の春はそんな季節だということだけだ。

数週間前、とある地方の多目的ホールで史上で2番目にISを動かした男として世間を大いに賑わせた葵は、未だに現状を認められずにいた。

「これは夢だ」

否、ただ単に認めたくないだけだった。

教室最前列中央にいた葵はちらりと目だけ動かし右を見る。

そこには女がいた。

まあ、不思議じゃない。学校に女生徒がいることは普通だ。

問題なのは、左側だ。

男生徒がいる。このたび数週間ぶりの再会となり、史上初ISを動かした男と認定された織斑一夏だ。

別に一夏が問題なのではない。

問題は、この学園は生徒・教員・その他要員含めて、男性が葵と一夏しかないことだ。

何を隠そう葵は女性が苦手である。

中学生時代からできるだけ関わらないように勤めてきたのに、高校からは周り全て女子では関わらないことなどできないだろう。正直、荷が重い。

「・・・立花。男は俺とおまえだけだ。これからよろしく頼むぜ」

クラス中の視線が集中していることに耐えられなくなったのか、一夏は葵にこっそり声をかける。

「・・・ああ」

しかし、葵は内心では、一夏とも関わりたくはなかった。

数週間前にいきなりIS学園入学が決まった葵だが、そこからずっと現実逃避していたわけではない。

多少なりとも、今後のことを考えていたわけだが、葵の予想が正しければ、一夏と関わるのは得策ではないことに気付いた。

情報を整理しよう。

まず、葵の転生者としての少ない情報から考えると、この世界『IS インフィニット・ストラトス』という創作物の主人公はおそらく織斑一夏だ。

題名を踏まえ、女性しか操れないISを唯一操れ、女性しかいないIS学園に入学など現実に起こりえないことをみればまず間違いない。葵自身にも当てはまるが、葵は転生者という一種のイレギュラーだここでは前提にしておく。

主人公は織斑一夏。では、ストーリーは？ と考えるが、現状を見ればこちらでも予想は難しくない。

高確率で『SFバトルもの』+『ラブコメ』になるだろう。

特に注意すべきは前者だ。これも予想の域をでないが、おそらくまがり間違えば死んでしまうことがあるほどのバトルになるのではないかと思う。

葵は、こういった創作物の主人公に見られるようなバトルマニアでも熱血バカでもない。人間として死に近い運命を回避できるなら

回避すべきと考える現実思考な一般人だ。

葵の結論として、バトルやラブコメを回避するなら、それらの中心に在るであろう織斑一夏とその周りの人物には近づかない。近づかなければ、この特殊な環境でも、そこそこ普通の生活が送れると考えた。

しかし、入学して教室に入ってみれば葵の席は一夏の隣。幸先は悪そうだ。

「立花君。自己紹介をお願いします」

副担任の山田真耶に声を掛けられ、葵に今がSHRで自己紹介中であつたことを思い出した。

葵は立ち上がる。視線が集中してくるかと思えば、そうでもない。一夏の方に集中しているようだった。まあ、あつちは容姿がいいので、その辺が理由だろう。

「立花葵です。○ 中学から来ました。趣味はDSです。これからよろしくお願いします」

速すぎ遅すぎず、されど淡々と葵は自己紹介を終え席に座る。

少し前、一夏が担任の織斑千冬にぶつたたかれるような飛んだ自己紹介をするほど、葵は勇者ではなかった。

「ねえ、DSって・・・」

「私、テレビでみたことある・・・」

「やっぱり、男ってことね・・・」

ふと、女子の間からヒソヒソとした声が葵に届く。中には葵をバカにしたような笑いも含まれていた。

実はバーチャルゲームDS ドリーム・ソルジャー は、女性、特にISを使う女性からは見下される対象にある。なんでも、男がISを使うように足掻いて失敗した、成れの果てに見えるためだからだそうだ。

言い方はともかく、それは事実だし、ユーザーの大半は男性なのだから仕方のない部分もある。

けど、笑った女子どもよ。高校生なのだし、もうそろそろ自分の言葉が相手にどう受け取られるのか考えられるようになってもいいだろうに。

葵がそんなことを考えていると、チャイムが鳴った。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で身体に染み込ませる。いいか、いいなら返事をしろ。よろしくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

担任である鬼教官の言葉に、葵はこれからの学園生活に不安以外の未来を浮かべることができそうになかった。

「ちょっと、よろしくて」

2 時間目終わりの休み時間。

葵が次の講義を隣の一夏が間違えて捨てた電話帳のような参考書片手に予習していると、金髪ロールのお嬢様風な女子が声を掛けてきた。葵ではなく、一夏にだ。

1 時間目の休み時間には、ポニーテールの箒という女子にも声を掛けられていたし、やはり一夏は女性に縁が深いようだ。

「あなたもですよ」

葵がそう思っていたら、金髪女子は葵にも声を掛けてきた。

女子と話すのは苦手だが、これでは無視するわけにもいかない。

「なんの用だ？」

「まあ、なんて返事ですの。わたくしに声を掛けられるだけでも光栄ですよ。それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

どうしよう、葵は思った。

いきなりこの金髪女子との会話のキャッチボールに不安を覚えてきた。まだ初球ですよ？

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「わたくしを知らない？ あなたはどうなんですの！？」

「そこで俺に振らないでよ。ええつと・・・確かセシリア・・・ごめん、名字までは覚えてない」

セシリアという比較的耳にする欧州系の名前はSHRのとき、葵はなんとか聞き覚えていた。考え事をしながらだったのだから、これでも凄いほうだ。

「オルコットです！ 私はセシリア・オルコット、イギリスの代表候補生にして入試主席ですよ」

「へえ、代表候補生なんだ。ということは、専用機持ち？」

「そうですよ。これでわたくしの偉大さが・・・」

「なあ、立花」

「なんだ？」

「代表候補生ってなんだ？」

一夏の発言に、聞き耳を立てていたクラスの女子数名がずっとこけ

た。

聞かれた葵も、耳元でシンバルを思いっきり鳴らされたかのような衝撃を受けた。

こいつには世間一般常識が欠けているではないか？ と。

咳払いをして気分を落ち着け、葵は説明を始める。

「いいか。代表候補生っていうのは、字のごとく国家代表IS操縦者の候補。オリンピックでも出場有力選手とかいるだろ？ それと同じ」

「へえ、すごいんだな」

「・・・あなた、わたくしをバカにしていますの？」

たぶん素です。と、葵は心の中でツツコミを入れた。

まだ一夏とは受験日と入学式の今日との2日しか接してないが、葵は確信していた。

織斑一夏は天然である、と。

まあ、SHRの珍自己紹介と2時間目の珍行動（IS参考書を電話帳と間違えて捨てる）をみれば、誰でもわかるか。

「大体、あなた方ISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待外れ

ですわね」

「・・・一括りにしないでくれ」

葵は小さく反論するが、セシリアは聞こえなかったようだ。

少なくとも、先ほどの授業もついていけていたし、質問にも答えられた。だから、男だというだけで隣の天然と一緒にされるのは大変遺憾だ。

「ISのことわからないことがあれば、まあ 泣いて頼まれたら教えてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「じゃあ、機会があればよろしく頼む」

たぶんないけど。と、葵は心の中で付け足した。

休み時間も短い。ここは肯定し早々に葵はセシリアとの会話を終わらせようと・・・。

「教官なら俺も倒したぞ」

失敗となった。一夏の一言によって。

余計なことと思ったが、それが聞こえたセシリアは止まらない。

「は・・・？ わ、わたくしだけと聞きましたか？」

「女子だけってオチじゃないか？」

「つ、つまり、わたくしだけではないと　？」

「いや、知らないけど」

「あなた！あなたも教官を倒したって言うの！？」

「うん、まあ。たぶん」

言い合う2人の姿を見ながら葵は思った。

織斑一夏、セシリア・オルコット、そして先の篝という女子。

個性の強さをみても今のところこの3人が、このストーリーの主
要人物だろう。

つまり――

こいつらには、近づかないでおこう

自分の平穏を守るため、葵はそう硬く決意した。

第2話 地獄の学園生活（後書き）

短けえな・・・。

次はもっと長くなるよう頑張ります。

第3話 ゆずれないもの（前書き）

書くのが遅い。

他の作者が羨ましい。

第3話 ゆずれないもの

——こいつらには、近づかないでおう

そう決意した時期が立花葵にもありました。いや、十数分前ですけどね。

しかし、その決意は一時間も経たずして砕けようとしていた。

ことの始まりは3時間目の織斑千冬の授業がはじまってからだ。

「授業の前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

教壇に立った千冬が思い出したように言う。

しかも、このクラス代表は今後1年間のクラス長も兼ねることになるそうだ。

クラス長といえば、どの学校でも担任教師のいい雑用係に他ならない。

だいたいこの手の話し合いは、すぐに決まるか、長々と決まらないかのどちらかだが、このクラスはどうだろうか？

「はいっ。織斑君を推薦します」

推薦されたのは一夏だ。彼が葵の予想通りこの物語の主人公なら、もう決定したようなものだ。

どうやらすぐに決まりそうだと葵は思った。

さらに、追い討ちをかけるようにクラスメイトが次々を一夏を推してゆく。

「ちよっ、ちよっと待った！俺はそんなのやらな——」

一夏が色々と騒ぎ立てているが、クラスの流れはもう決定的だ。

そう葵が考えていると、

「待ってください！納得がいきませんわ！」

セシリアの甲高い声が流れを断ち切った。

「そのような選出は認められません！！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥曝しです！ このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

昨今、ISの導入により女尊男卑の風潮が各国に定着しているが、その以前の男尊女卑の教訓から、言葉高々に男を卑下にするというのは暗黙の禁止となっているので、セシリアのような態度は珍しい。

まあ、他の女性も言葉に出さずとも態度にはよく出ているし、表で言わなくとも影で男を馬鹿にしている発言をしているのは公然の事実だ。

「男を馬鹿にするな！」

「まあ。では、男が女性よりも偉いとしても？ 極東の島国はずいぶんと時代遅れな考えを持っているようですね」

売り言葉に買い言葉とはまさにこのことか。

セシリアと、彼女の発言に怒った一夏の言葉の応酬が始まった。

「男の全てが弱い存在じゃない！ そつだろ、立花？」

「えっ!？」

他人事と眺めていたら、いきなり一夏に話を振られて葵は慌てる。

が、それを見たセシリアは鼻で笑った。

「ほら、ご覧なさい。その男こそ、弱い男の代表みたいなものでしょう。根暗なゲーマーなんてこの国に相応しいですわ」

セシリアの言葉に、クラス中の女子がウンウンと頷く。

まだ入学してから半日経たずとして、葵はそのようなレッテルを貼られたらしい。

まあ、ほとんど誰とも話さないし、ずっと机に座ったままなのだからしょうがない。

「なにもそこまで言わなくてもいいだろ!？」

「いや、事実だし」

「・・・立花。おまえ自身が肯定してどうすんだよ」

一夏は呆れたように言う。

葵としては自分がどうクラスメイトに思われようともどうでもよく、今考えていることは、この目立ってしまった状態を早く終わらせたいということだけだ。

「ふん。あなたは、本当に覇気がありませんのね。まあ、DSなんて低俗なゲームをやっているのだから仕方ありません——」

ダンッ！！！

いきなり、響いた大きな音にクラスは一瞬で静まり返る。

「・・・おい」

音の元凶——机を思いっきり叩いた——である葵が低く静かに声を出す。

「オルコット。今なんて言った？」

「は・・・えっ？」

セシリアはいきなり態度が急変した葵に戸惑いを隠せない。

葵はゆっくりと席を立ち、セシリアに近づく。

まるで金縛りにあつたかのようにセシリアは動けない。

近づいた葵とセシリアの視線が交差する。

葵の何かが変わつたわけではない。背丈も顔の造詣も何も変わつたわけではないのに、セシリアは自分が猛禽類に見つめられた小動物えものような錯覚に陥つた。

「俺を馬鹿にするのはかまわない。男を馬鹿にするのもかまわない。日本を馬鹿にするのもかまわない。だが――」

葵がセシリアを強く見る。

睨まれたわけでもないのに、セシリアはそう感じた。

「DSを馬鹿にするな。おまえにあのゲームの何が分かる？ あれは――」

低く呟くように話す葵の言葉が急に止まる。

「やめろ」

いつの間にか、葵の肩を一夏が掴んでいた。

「男が女の子にやることじゃない」

葵と一夏の視線が交差する。

そのまましばらく時間が経った・・・ようにクラス中は感じたが、実際は数秒くらいだ。

「はぁ・・・」

葵が諦めるように大きく息を吐く。

それと同時に張り詰めていた空気が霧散した。

ゆっくり一夏の手を肩から外し、葵は再びセシリアに目を向ける。

「オルコットさん」

「は、はい」

声をかけられたセシリアはビクリと肩を跳ね上げる。

「驚かせてごめん。悪かった」

葵は自分の腰くらいまで頭を下げた。

葵のまたもや急な変貌ぶりにセシリアはポカーンと眺めていたが、次第に顔を真っ赤にさせてゆく。

「こ、このセシリア・オルコットになんたる非礼、なんたる屈辱を・・・」

「だからこうやって謝っている。それじゃだめか？」

「ダメですわ！ あなた！」

ビシッとセシリアは葵を指差す。

「そして、あなたも！」

今度は一夏を指差す。

「なんだよ？」

「お二人に決闘を申し込みます！」

「それでクラス代表を決めようってことか？ いいぜ、わかりやすくていい」

セシリアの提案に一夏は力強く頷くが、一方の葵はそうもいかない。

「俺は自薦も他薦もされてないんだが・・・」

「ならば、わたくしがあなたを推薦いたしますわ」

男を代表にしないための決闘なのに、その決闘のために男を推薦しては本末転倒ではないだろうか？

葵をそう思ったが、激昂しているセシリアは気付いてないようだ。

「ふむ。話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。3人とも準備をしておくように。では授業を始める」

葵はそうやって話をまとめる千冬を恨めしく見ながらも、その視線が逆らうことは許さんと語ることに気付いて、大きく疲れたように息を吐く。そして、そもそも原因が自分の短絡さであったことを

思い出して頭を抱えるのだった。

放課後になった。

隣で机にぐったりうなだれ、何かブツブツと呟いている一夏を尻目に葵は今日の学園生活を振り返ってみた。

世にも珍しい男のIS操縦者として学年どころか学園中の女生徒が動物園の珍獣を見るかのごとく詰め掛けていたが、どうやら3時間目の授業。あれが一種のターニングポイントだったっぽい。

3時間目を境に、葵は感じる視線の質が変わったのに気付いていた。

見に来た女子は、葵を見るたびに『根暗』やら『オタク』やら『キレやすい若者』など明らかに悪い印象のワードを含めた会話をし始めるのだ。

最初聞こえたときは、セシリアが広めたものかと彼女の方を見たが、その会話が聞こえたであろうセシリアの反応を見る限り違うようだ。代わりに視線が合うと、中指を立てそんなスゴイ顔して睨ん

できたが。

一方、一夏は3時間目の授業のとき、怒った葵を止めたことが好印象に繋がり『優しい』とか『正義感』とか、中には『王子様』と言っている女子もいたり、葵とは対象的な好印象だ。

まあ、その弊害として集まる女子の視線が朝よりも比率を増している。それが葵の隣でぐったりしてる要因の1つだろう。

肝心といわれる第一印象で、葵は最悪の印象を学園中に与えてしまったようだ。

けれど、葵は気にしない。もちろん全くというわけではないが、実は中学時代も似たようなものだった。要は慣れてるのだ。

そうになると、葵は今後自分がどのように扱われるのかも予想がついていた。

このまま何も問題を起こさなければ、興味のない対象としてだんだんと空気のように扱われるはずだ。

それでも『男のIS操縦者』という肩書きが消えないので、今後もある程度の注目は浴びるだろうが、一夏が大半を持っていくってこれそうなので安心している。

そう考えると、3時間目の授業は短絡的な行動を取ってしまったと嘆いた葵だが、結果的に状況はあまり目立ちたくないという自分の望む方へと進んでいる。わざわざ転じて福となす・・・では意味が違うが、そんな感じた。

「2人ともまだ教室にいたんですね。よかったです」

葵が声の方へ顔を向けると、副担任の山田真耶が立っていた。

「なんですか？」

座ったままでいるのも失礼と思い、葵は席を立つ。立ってみると、大柄でもない葵をしてこの副担任は背が低いという印象を受けた。

「えつとですね、2人の寮の部屋が決まりました」

そいつって手渡された鍵と紙を葵は受け取る。

紙には『1002』と書かれていた。

しかし、確か葵の記憶が正しければ、一夏と葵のIS学園入学が決まった時点で寮の部屋割りも決まっており、2人はしばらく自宅が学園の指定したホテルへ宿泊する予定だったはずだ。

そのことを一夏が真耶に尋ねると、どうにも日本政府の特例で入寮を無理やり決め込んだらしい。

一夏にせよ、葵にせよ、世界でたった2人のISを使える男だ。政治家にしてみれば、やや強引でも身の安全を確立させたいのだから

う。

「しかし、1002号室か・・・」

寮へ向かう道中、手渡された鍵を見ながら葵は呟いた。

無理やり部屋を用意したにしては、部屋の番号が若いことが異様に気になる。

そろそろ16歳になるが、この（たぶん）創作物の世界は、たまに確率的にありえないだろうと思うような出来事が前触れもなく起こる。男のIS起動しかり、IS学園入学しかり、ここ最近でも2回もある。

そんな人生の経験則から、これはそのありえない確立の1つではないだろうかと葵は疑っていた。

予想として、1番高いのは女子との相部屋。女子の花園の中に男が一人的な物語の定番からいって、これだろう。

ただし、もしそうになったら学園には断固とした態度で抗議しよう
と葵は決意している。

葵は部屋の前に着いた。

まず、鍵をあけ、ドアを開ける——前に、ノックする。

まずは3回。応答がない。今度は強めに3回ノックし、応答がな

いのを確認してから部屋に入った。

「ふう・・・」

葵は一息をつく。

どうやら、裸の女子とばったり遭遇なんてよくあるラッキーベント的なものはなかったようだ。

世間一般の思春期男子は泣いて喜ぶかもしれないが、葵は違う。女性が苦手な葵は、本気でそのよなイベントが起こらなくて安堵していた。

♪！　　♪♪　　♪！

まるで、タイミングを図ったかのように部屋に入った途端に、葵の携帯電話が鳴り出す。

バックディスプレイで相手の名前を確認すると、葵は口元を動かしほんの少し笑顔を浮かべた。

『ハロー、アオイ』

「マイク。今何時だと思っているんだ？」

『あれ？ 日本時間では今17時半くらいだろ？』

「違う。アメリカ東部海岸は何時かと言っているんだ！」
そっち

電話の相手はマイク・アンダーソン。肩書きはDK社長。世界有数の大企業のトップであり、あのDSの生みの親だ。

葵とマイク。2人の付き合いはかれこれもう3年になる。

最初の出会いは3年前の第2回DS世界大会会場。当時12歳の葵は初めての国外旅行にこの場所を訪れていた。もちろん出場者として。

「ヘイ。そのボーイ・・・いや、少年」

「は、はい。えっと・・・僕のことですか？」

「そうだ。君はアジア代表のアオイ・タチバナだろ？ いや、今年のアジアチャンピオンは若いとは聞いてたけど、本当に若いな」

「ど、どうも」

「そう緊張するなよ。まあ、他の出場者はみんな君より10以上も年上だし、難しいかな？」

「は、はい。でもそれ以上に楽しみです」

「へえ、さすがはアジアチャンプだ。しかし、DSはゲームとはいえ、映像も衝撃もかなり精巧に作られている。怖くはなかったのかい？」

「大丈夫です。だって、僕・・・強いですから」

「は？ アハハハハッ！ なるほど！ これは失礼した。じやあ、私は君が表彰台にあがってくるのを楽しみにしてるよ」

「はあ・・・ありがとうございます？ ところであなたは誰ですか？」

「私はマイク・アンダーソン。じゃあね、アオイ。がんばれよ」

「マイク・・・？ ああっ！ あなたはDKの社長じゃ、あの、待ってください！」

結局、その大会での葵の成績はベスト16。

しかし、その日より2人はたびたび連絡をとる仲となり、今では世代を超えた友情を結んでいた。

ちなみにDK社のDKとはドリーム・キングダムの略。命名者はマイクだ。実に中二病な名前だが、そのいつまでも変わらないマイクの子どもつぼさを葵は気に入っていた。

「東部海岸はまだ朝、いや夜だろ？ まだ起きてたのか？」

『私は夜型の人間だよ。アオイも知ってるだろ？』

「限度があるだろうに・・・まあいいや。それでどんな用？ またDSの新装備でも出来たのか」

カバンをベッドに放り投げ、手近にあったイスに葵は腰をかける。マイクとの電話は大抵長くなるので、立ったままでは疲れるのだ。

『まずは入学おめでとう。学園生活は楽しかったかい？』

電話越しだが、マイクのニヤニヤした顔が葵の脳裏に浮かぶ。

「楽しいわけあるか！ 女の子ばかりなんだよ、ここは」

『女嫌いのアオイには辛いところだな』

「嫌いじゃない。ちょっと苦手なだけだ」

「そうだな。そうだったな。」

クククツ、とさも自分は分かっていますと笑うマイクに葵はもう一度反論を口にしようとして、留まった。これでは、話が前に進まない。

「用はそれだけか？ それだけなら切るぞ」

『ああ、待つて待つて。切るなよ、本題はこれからなんだから』

「はあ……。で、本題って？」

『私は夢を諦めきれない』

急に真面目な口調になったマイクに、それまでリラックスした体勢で座っていた葵は思わず姿勢を正した。

「マイク？」

『私は篠之乃束と同じ高みへ行きたい。挫折したが、やはり一科学者としてはあの領域への道を諦めたくない』

葵は黙ってマイクの話聞く。

『愚かと笑うか？ 私もそう思う・・・だが、私は・・・』

かつてマイクが男でも使えるISを開発しようとして失敗し、D
Sへ転用したのはあまりに有名な話だ。

当時、世界中が開発に失敗したマイクを嘲笑っていたのを葵は知
っている。

友としても、男としても彼を応援してやりたいと思うが、電話越
しの声は何か脅迫観念がにじみ出て、危険を感じさせる。

止めなければと葵は思った。

「マイク。君の気持ちは分かるつもりだ。だけど・・・」

『・・・っ』

「?」

小さかったが、マイクが何か言っているのが聞こえ葵は耳を傾け
る。

『・・・くっ』

「・・・」

『ぶくくくくっ！』

「・・・おい」

『ぶく、あはははっ！ あゝ、無理だ無理。やってみただ、自分で自分が笑える！』

マイクの声とともにバシバシと何か叩く音が聞こえる。たぶん机でも叩きながら笑っているのだろう。

「切るぞ」

『私のマッドな演技に騙されたくせに』

黙って葵は携帯の電源に指をのせる。

『あゝ！ 待つて待つて！ 今度はマジ。本当に用事あるの！』

「・・・それで？」

『さっきのは演技だったけど、言った内容は本気だよ。まあ、男

も扱えるISの開発はすぐには無理だと分かっているから気長にやるけどさ』

「それを聞いて安心したよ。間違っても早まるなよ?」

葵はマイクに釘をさしておく。この世界では、本当にマッドサイエンティストになって世界中を敵に回す・・・なんてことが起こっても不思議ではないからだ。

『そこで、まずは普通のISを作ってみようと思ってる』

「順当だな。いいんじゃない?」

『他人事のように言わないでよ。アオイにも手伝ってもらいたいんだから』

「・・・なんだって?」

葵は自分の耳を疑った。

既存のものとはいえ、新兵器の開発にただの学生である自分を手伝えなんて、マイクは何を考えているのだろう。

『試作機の運用テスト。ぜひアオイにやつてもらいたいんだ』

「いいよ・・・とは言えないな。日本政府が黙ってないぞ?」

ISを起動させて以降。数少ないISを動かせる男として、葵は日本政府の監視と保護を受けていた。この電話だってもしかしたら盗聴されているかもしれないのだ。迂闊なことは言えない。

『大丈夫。すでに話は通してあるよ』

「マジ？」

『おお、マジマジ』

いくらなんでも対応が早すぎる。

おそらく、ISを動かせると世間の報道に流されてからすぐに行動を起こしたのだろうが、その手腕はさすがとしか言いようがない。

男が使えるIS開発に失敗したとはいえ、マイク・アンダーソンは紛れもない天才だ。科学者としても社長としても。

『それで、どうだい？』

「分かった。俺もマイクの作るISに興味あるし、手伝うよ」

『ありがと。まだ、開発するにも長い道があるけど、よろしく頼むよ』

電話が切れると、葵はベッドに飛び込んだ。

図らずとも、これで葵は専用機を持つことになる。

平穩が遠のき、騒動が近くなるであろうことを、葵は確信していた。

ちなみに。

何もないと思った部屋割りだが、隣の1001号室が寮長室。別称『鬼の住処』と呼ばれる織斑千冬の部屋であると知り、葵は大いにへこんだ。

第3話 ゆずれないもの（後書き）

オリキャラ同士の会話しか長くならないとは、二次創作者としては
ダメだろうと思う今日この頃・・・（泣）

第4話 クラス代表決定戦

入学式の翌日。その朝に葵は食堂に来ていた。

自室は寮長室の隣というなんとも最悪な部屋割りになってしまつたが、それを除けば寮の出入り口の近くだったり、自販機がすぐそばにあったりと恵まれた場所だ。いや、本当に寮長室の隣でなければ・・・。

まあ、そんなわけで部屋から出てわずか1分足らずで食堂に着いた葵だったが、今すぐに部屋に戻りたい心境に陥っていた。

それは、葵に集まる視線、視線、視線・・・。

昨日は一夏が視線の避雷針となっていたが、彼がいなければその分、葵に集まるのは自明の理。だが・・・。

「ねえ、ほらあれって・・・」

「昨日クラスの女の子を恐喝したって・・・」

「いえ、押し倒したって聞いたわよ・・・」

「すでに何人もの子が泣かされて・・・」

どうやら昨日の悪名が尾ひれを大量につけて流れているようだ。
視線の質がヘドロよりもドロドロとしており、尚且つ黒い。

自分がどう言われようと平気だが、この視線の弾幕に抗うことは葵には難しそうだ。

食事が半端だが、早々に校舎へ行ってしまうおつかと葵が決めかねていると、自身に向けられていた視線の量が急に減った。

「なあつて、いつまで怒っているんだよ」

「・・・怒ってなどいない」

「顔が不機嫌そうじゃん」

「生まれつきだ」

一夏と箒だ。

2人——正確には一夏にだが、視線が大幅に分担し、葵はほっと一息をつく。

しかし、朝から女の子と同伴出勤とはなんとも羨ましい、と本当は心にも思っていないことを考えながら葵は食事を再開すると・・・。

「おつ、立花だ。おーい！」

何か男の声で聞こえた。しかし、葵は気にしない。

「聞こえなかったのか？ おおーい、立花！！」

聞こえない。そして、気にしない。

「おい、立花つてば！」

葵の前に一夏が現れる。さすがに無視できない。

「・・・なんだ？」

「なんだ、ってさつきから呼んでいただろ。聞こえなかったのか？」

「昔から耳が悪くてな」

嘘だが。と心で付け足すのを葵は忘れない。

「そうか、大変だな」

純粹に心配されて、葵はイラッときた。

普通嘘だと気付きそうなものだが、この天然は違うらしい。空気を読めと声を大にして言いたい。

しかも、さも当たり前のように目の前の席に座る。

「2人がけの席はあっちだぞ」

親切半分、催促半分で葵はその方向を指差す。

とたんに、一夏の隣にいた箒は頬を染め、何か期待した目を一夏へ向ける。

「いや、ここに座らせてもらっよ。いいだろ、箒？」

箒の視線に気付いた様子もなく、一夏は箒に尋ねる。

「・・・ああ」

ここに来たとき以上の不機嫌顔で箒は頷く。そして葵のほうを睨

んだ。

葵は、なんとなく一夏と箒の関係を把握する。男女の関係ではなさそうだ。その一歩手前の友達以上恋人未満というやつだろう。首を突っ込むのは絶対によそうと決意した。そう何度も不満じみた目でこちらを睨まれたらたまらない。

そして、3人揃って食事を取る。・・・のだが、なぜか通夜を連想させる空気になった。

その原因は箒が出す不機嫌オーラにある。いくらなんでも先ほどのやり取りだけでここまで機嫌が悪くなるのはおかしい。

おそらく、ここに来る前に一夏が箒に何かしたのだろうが、生憎先ほどしたばかりの決意を早々に破るほど、葵は色恋沙汰の好奇心は高くない。

残り少なかった朝食をかきこむように胃へ流し込み、葵は席を立つ。

「先に行く」

素っ気無く2人に声をかけ、葵は校舎へ向かった。

「先に行く」

そう言って立ち去る葵の背を、一夏は眺める。

止めようと思ったが、口に物を含んだ状態では喋ることができない。行儀が悪いからな。

一夏が食べ物を咀嚼したときには、葵はすでに食堂の出入り口に差し掛かっていた。もう遅い。

葵と一夏はこの女だらけのIS学園で唯一の男だ。

DS関係の話も興味があるし、できれば仲良くしたいのだが、昨日の3時間目あたりから避けられているように一夏は感じていた。

その理由が一夏には分からなかった。唯一の心当たりは、セシリアとの一件だが、あれはあの場で収まっていたし、違うような気がする。

まさか一夏も、葵が転生者とは思ってもよらなく、自分がこの物語の主人公で関われば厄介事に巻き込まれそうとの理由で避けられているとは予想もしていなかった。当たり前だが。

どうしようか、と一夏は考えるが名案が浮かぶこともなく、朝食の時間は終わりを告げた。

2時間目が終わる。

葵の隣に座る一夏は昨日以上にグロッキーな様子だった。あまりの様子に今まで一夏に声をかけようと伺っていた女子一同も今や遠巻きに見ているだけだ。いや、それだといつもと変わらないか。

無論、ここで一夏に声をかけるといふ優しい選択肢は葵にはない。

むしろ、時折助けを求めるような一夏の視線を葵は断固として無視していた。

授業は進む。

担当は副担任の山田真耶。内容はISは操縦者を特殊なバリアーで包んであり、さらに操縦者の肉体を把握し安定した状態に保つというもの。

実に興味深い。IS学園に入学して2日目だが、今のところ葵の学園生活唯一の楽しみはIS関連の授業だ。

多くはDSと通ずるところがあり、一昔前のSF映画の設定のよ
うな情報は聞いていて実に面白かった。

だが、問題もある。というか、IS学園の生活で問題が浮上しな
かったためしがない。まだ2日目だが。

クラスメイト1名が山田真耶に授業内容について質問すると・・・

「そうですね、例えばみなさんブラジャーをしていますよね」

授業内容を書き取っていた葵は、ノートにブラジャーと書いてし
まった状態で固まった。そこだけ抜き出すと性に目覚めたばかりの
男子中学生のラクガキにも見えなくもない。

「あれはサポートこそすれ、それで人体に悪影響が出るといっ
とはないわけです。もちろん、自分に合ったサイズのものを選ばな
いと、形崩れしてしまいますが——」

山田真耶と葵の目が合う。互いが顔を赤く染めたのはほぼ同じだ
った。

「え、えっと、いや、その、立花君はしていませんよね。わ、わ
からないですね、この例え」

「・・・分かるように努力したいと思います」

この女子同士特有のオープンな内容の会話をどもらずに答えられただけでも、葵は自分を大いに褒めてやりたいと思った。

このように、授業中ですら神経をすり減らす出来事がIS学園では多い。

葵がここで安らぎのある日常を過ごせるのはもう少し先になりそうだ。あるいは来ないかもしれないが。

しかし、この答えは失敗だった。

なぜなら、後日、これを聞いた女子は葵に対する悪口の中に『ムツリ』という単語が新たに加えていたからだ。冤罪なのにひど過ぎる。

「立花」

昼休み

葵が食堂から教室へ向かっていると担任の千冬に声をかけられた。

「織斑先生。なんですか？」

葵は答えながら、そういえば織原先生とともに話すのはこれが最初だったな、と考えていた。

「実はさきほどアメリカから連絡があつてな」

「はあ、アメリカですか・・・」

話の先が読めず、葵は気のない返事をする。

「正確にはDK社だ」

「ああ・・・」

「ふむ。事情はすでに把握しているな」

「俺の専用機ですね」

「そうだ。本人の許可は取ってるからぜひ作らせてくれとアンダーソン社長直々の連絡だったか・・・本当のようだな」

千冬が呆れたように溜息をつく。

「不味いですか？」

「ああ。おまえと織斑はたった2人のISが使える男だ。本来なら、日本政府が監視と観察も兼ねて、おまえの専用機を用意する予定だったが……」

千冬が言葉を切る。何かイラついているように見えるが、それは葵の気のせいではないだろう。

「織斑の専用機を用意するため、政府は余裕がない。よって、D K社の要望をデータ提供と引き換えに了承することになった。……おまえにはすまないことをしたな」

「？ すいません。先生が謝られる理由が分かりません」

「ISの適正ランクを考慮すれば、先に専用機を作られるのはおまえの予定だった。しかし、あのバカめ。一夏を特別扱いしおつて」

どうやら、この件について何か横槍が入り予定が狂ったらしい。

千冬の言動を見るに近しい誰かの仕業みたいだが、さすがにこの誰なのかは葵には分からない。

「話は以上だ。だが、最後に一言だけ言っておこう」

「はい。なんでしょう？」

「立花。おまえが女性が苦手なのは知っている。それを責めはしないが、せめて目を見て話せ。いいな」

「・・・はい」

葵に1つ苦手意識を植え付け、千冬は去っていった。

「しかし、意外だ」

正直、自分の専用機をDK社が作ることを学園が容認するのがここまでスムーズに進むとは葵の予想外だった。

先ほど千冬が言っていた理由もあるが、DK社は世界的企業ではある。しかし、IS関連の実績はゼロ。かつての失敗も考慮すればむしろマイナスと捉えられても不思議ではない。

そんなところに貴重なサンプルともいうべき葵（おひ）を任せるなんて博打に近い。

「裏取引じゃないだろうな・・・」

葵は、遠い異国の友人を思い浮かべて、すぐにやめた。想像したマイクの姿はサムズアップしていたからだ。彼なら、裏取引じゃなくても何とかしてしまいそうな気がする。心配するだけ無駄だ。それに、男が男を思い浮かべるのは大変気持ち悪い。

そんな日常が過ぎ、週が明けた。

今日は1年1組のクラス代表決定戦の日。

第三アリーナに集まった一夏・葵・セシリアがまず行ったことは、

「くじを引いてください」

真耶が三人に手に持ったアイス棒みたいな小さな棒切れを差し出す。

「先生。これは？」

一夏が疑問を口にする。

「期限の都合上、クラス代表は今週中に決めなくてはなりませんけれど、1組が時間丸々アリーナを使用できるのは今日一日しかありません。つまり、今日中に3人の試合を全てこなさなければならなくなりました」

「試合の順によって有利不利が出る。それを解消するためのくじ引きだ。運も実力の内という。せいぜい実力を示せ」

真耶の説明を千冬が引き継ぐ。どうでもいいが、説明する人間が違っただけでここまで空気の温度差が出るのはなんとも不思議だ。

「どの順番で戦おうともわたくしの勝利は揺るがないと思います
が、いいでしょう。では引きますわ。・・・くっ、2番です」

セシリアが引いたのは2番のくじだ。

しかし、そんなに1番くじがよかったのだろうか。たかだかくじで、ここまで悔しがれるなんて中々希少な人種と取るべきかただの傲慢と取るべきか。

「次は俺だ。おっし！ 1番だ」

一夏は1番くじだ。

セシリアと同じ人種がここにもいた。案外、希少な人種ではなかったらしい。

「ということは俺は3番か」

淡々と3番くじを受け取る葵。

相対的にここの希少人種は彼だ。普通のはずなのに……。

「決まったな。試合順はまず1番対2番、次に2番対3番、最後に1番対3番だ。織斑、オルコット。準備にかかれ」

「わかりましたわ」

「わかった……いてえ！」

「わかりました、だ。織斑」

「……わかりました。織斑先生」

一夏とセシリアがそれぞれ向かい側のピットへ歩いていく。

葵はそれを見送りながら、自分は観客席へ移動しようとし千冬に捕まった。

「待て、立花。おまえは別室だ。そしてこの試合を見ることはゆるさん」

「はあ！？ いったいどうしてですか？」

「公正を保つためだ。直前に見ただけでも相手に不利となる。なに、次の試合に開きとなる織斑にも同じ処置をとる。心配するな」

「・・・意外ですね。俺は織斑先生なら、情報くらいで有利不利は変わらん、とかいうものかと思ってました」

「私はそうだ。だが、私的な意見だけで教師をしていないつもりだ」

いつも私的な意見に基づいて行動しているようにしか見えないのに、と葵が考えていると、千冬はどこから取り出したのか出席簿で葵の頭を強く叩くのだった。

数十分後。

一夏とセシリアの試合が終わった・・・らしい。

別室に控えていた葵を迎えにきた真耶がそう伝えた。

「もう、織斑君ってすごかったんですよ。まだIS操縦は2回目なのに、セシリアさんのビットをブレイドで切り裂いたり・・・」

いい試合だったらしく、真耶が熱く葵に語る。

さきほど千冬がいった情報やら公正やらがガン無視されている
がいいのだろうか？

少なくとも今の会話で、セシリアのビットと、一夏のブレイドと
いう情報を葵は得たのだが・・・。

「ところで立花君は、どの機体で試合をしますか？」

「ラファール・リヴァイヴをお願いします」

葵の専用機は今日の試合に間に合わなかった。

昨日のマイクに確認し、葵はこのことを千冬に伝え、今回は学園
が所持している量産型のISを使うことになっていた。

まあ、一週間くらいでISが作られるはずがないのだが。

そもそも、まだ開発も始まっていないらしい。予想以上にIS開発のライセンス取得に時間はかかると、マイクは電話越しに言っていた。

もう数ヶ月、葵は他の生徒と同じく量産型のISを使うしかないようだ。

「へえ、それじゃ私と同じ機体ですね」

真耶が何気なく言った一言で急に葵は不安になった。

やはり、ここは打鉄でいくべきだろうかと一瞬考えた。・・・本当は一瞬だよ。

「それなら、安心ですね」

自身の内心を否定するために葵は言葉の上で虚勢をはる。

「はい。あれはいい機体です」

真耶は葵の言葉を額面通りに受け取った。

ラファール・リヴァイヴ

IS産業世界シェア第3位のデュノア社製の第二世代型ISで、特筆すべきはその安定性と汎用性。固定武装はないが豊富な後付装備で距離を選ばない戦いができる。いわゆる操縦者の力量で強さが左右される機体だ。

打鉄もいい機体だが、葵としては近接仕様の打鉄よりも、オールラウンダーのリヴァイヴの方が合っている。まだ乗ったことないが、ピットに到着した葵は、運ばれてきたリヴァイヴを装着する。

葵も一夏と同じくISを使うのはこれで2度目。IS学園入学試験で使って以来だ。

あの時は打鉄だったが、装着した感覚は大差ない。

むしろしっくりしている。似ているのだ、DSに。

DSも身体にISのような機械をつけて遊ぶのだが、違うのは重量感くらいか。

『武装を選んで下さい』

表示に従い、葵は武装を決める。

ISのいいところは後付装備の付け外しは装備が量子変換されていれば、データのインストールとアンインストールで済むことだ。

「これと、それと、これで」

曖昧な表現だが、ハイパーセンサーが葵の意思を感知し、装備をインストールする。

「準備はできましたか？ セシリアさんの準備もできているそうです」

「大丈夫です」

「では、ゲートを開きます」

薄暗かったピットに光がさす。

眩い光に包まれながら、葵はアリーナへ飛び出した。

第4話 クラス代表決定戦（後書き）

毎度毎度、ちゃんと書けているか不安です。

第5話 1200万分の1の男

葵はアリーナへ飛び出した。

まず見たものは青い空。

感じるのはピリピリとした戦闘前の空気。

空に浮かぶブルー・ティアーズを纏うセシリア・オルコット。

聞こえるセシリアへの歓声。

そして、

「一昨日きやがれ、立花！」

「根暗！」

「オタク！」

「女の敵！」

「×××ー！！（自主規制）」

これ以上はないってほどの葵へのブーイング。

サッカーの試合をアウェイでやるとこんな感じに違いない。一応同じクラスメイトの戦いなのに。

しかし、おかしい。IS学園はほぼ女子校のはずなのに、時折野郎顔負けの罵倒が混じってる。言っているのは誰だ。

「これが女性の男性化ってやつか？」

葵は先日テレビで見た内容を口に出す。そのときは、特に何も思わずに見ていたが、これを見ていると納得してしまう。

「まあいいや。オルコットさん、準備はいいか？　こちらは準備できている」

葵が声をかけるがセリシアが反応しない。

「オルコットさん？　どうしたんだ？」

やはり反応がない。

葵はハイパーセンサーの感度を上げて、セシリアの顔を見る。なんか虚ろだ。

「おい、オルコットさん。どうしたん・・・ん？」

「・・・らっか」

今度は何かぶつぶつと呟いている。顔は赤く染まり、普通じゃない。

セシリアは先ほど試合したばかりだ。体調を崩したか、あるいはケガでも負ったのかもしれない。そう思って葵はセシリアへ近づくと、

「織斑、一夏」

「は？」

今度はしっかりと葵の耳に届いた。しかし、セシリアはなぜここにはいない一夏を呼ぶのか？

「うん・・・？」

改めて葵はセシリアを観察する。

赤くなった顔は体調不良というより、気分の高揚によるものだ。

虚ろな瞳は遠くを見、男の名前を愛おしそうに呟く。

その反応はまるで——恋する乙女そのものだ。

「俺・・・帰っていいか？ いや、いいんだよな」

セシリアの様子を確認すると、試合前だがもうどうでもよくなつた。とつと試合を辞退してベッドで寝たい気持ちが葵を占める。というか、なんで俺ここにいるんだろうとか考えていた。

『何をやってる！ 時間が押しているんだ。早く始めるバカ共め！』

千冬の怒声でセシリアが目を覚ます。寝てはいないが、この表現で間違いない。

「あ、あら。立花さん、いらっしゃっていたんですね。準備はよろしいかしら」

「え・・・」

葵が非難めいた声を出す。

「まだ準備ができておりませんの？　早くしてくださいな」

気分がいいのか、セシリアの言葉遣いが以前よりも柔らかい。何も知らなければ好印象に変わっただろうが、原因が分かっている葵としてはむしろ悪印象だった。

「はあ・・・うん、大丈夫。始めよう・・・」

セシリアに答えるというより、自分に言い聞かせるように葵は呟いた。

場所もコンディションも最悪。

戦う前から葵は圧倒的不利な立場にあった。

セシリアは落ち着かない気分の中にいた。

先の一夏との戦い。勝っていたのは自分だ。だが、最後の一夏の一撃。当たる前に一夏のISのエネルギーがゼロになったが、もし

あれが当たっていたらと思うと、気分がざわめいていた。

だが、悪い気分ではない。今まで感じたことのない不思議な興奮がセシリアの胸の中にあった。

この気持ちを知りたい。

一夏に会えば、何か分かるような気がする。早く一夏に会いたい。そのためには目の前の戦いを終わらせなければ。

今のセシリアのコンディションは最高潮だった。

セシリアの放つスターライトmk?のレーザーを葵は大きく動いて回避する。

「よくかわしましたわ。けれど――」

射撃、射撃、射撃。

「動きが大きすぎますわ!」

回避した葵をセシリアは正確に追跡し攻撃を加える。

しかし、葵には当たらない。

「（傲慢な性格の割りに、射撃は精密。・・・ちよつと意外だな）」

雨のようなレーザーを的確回避しながら、葵は頭の片隅で思考する。

「（武装を見ても、英国のブルー・ティアーズ。やはり遠距離射撃型か!）」

だが、と葵は心の中で繋げる。

少し動いてみて分かった。

ISとDS。両者はそっくりだ。

DSの仮想空間と同じようにISは動いてくれる。自分の慣れ親しんだものと同じように動かせる。

その感覚が試合前の気落ちした感情を葵から遠ざけた。

「ならっ!」

葵は叫び、武装を展開する。

右手に現れるはセシリアのスターライトと同じ遠距離武装。大口
径スナイパーライフル。

「この距離は俺の距離でもある!」

葵は高速で回避行動を取りながら、スナイパーライフルを構える。

「動きながらでは、わたくしに当てることはできませんわよ!」

「言ってる。おまえにゲームでなく、^{リアル}現実を見せてやる」

途端に、セシリアは寒気を覚えた。

葵の視線。それがセリシアの動きを絡みとるように感じる。

「ターゲット、インサイト」

遠距離射撃者としてのカンがささやく。

——避ける！ 避けなければならない

そのカンは実に正しかったが、判断は一步遅かった。

セシリアの右腕に衝撃が走る。

「くっ・・・！」

視界の端に打ち抜かれた装甲が落下してゆくのが見えた。

しかし、衝撃はそれだけでは終わらない。

次いで左肩。

連続した衝撃に、セシリアはつい射撃の構えを解く。

次の瞬間。狙っていたかのように、解かされたスターライトmk
？が打ち抜かれる。

スターライトに閃光が眩き、セシリアはそれを投げ捨てた。

一瞬遅れて、スターライトは爆散する。

「あなた・・・何者ですか？」

セシリアは驚愕を隠しきれない。

遠距離仕様のブルー・ティアーズが遠距離戦で汎用型のリヴァイ
ヴに押し負けたのだ。

機体の同士の有利不利は明らか。ということは、競り負けたのは
操縦者の技量差に他ならない。

しかし、葵は代表候補生ではない。ISを動かせるからといって
も、学園入学前まではほとんど一般人と変わりないはず——つま
りは素人だ。

「みんな言ってるだろ？ ただの根暗なゲーマーだよ。イギリス
代表候補生」

葵の安い挑発だった。

少し考えれば誰でも分かるようなことだ。しかし、今のセシリア
は、一夏こと、先の得意分野で負かされた驚愕など、色々な意味で
普通じゃない。

その結果、

「わたくしが……我が母国が、ただのゲーマーに劣ると!？」

セシリアは安い挑発を買ってしまった。

「そんなの。認められませんか！」

セシリアが叫ぶと同時にブルー・ティアーズに装備されたフィン状のパーツが4つ射出される。そのIS名にもなった武装ブルー・ティアーズだ。

「ふん」

迫りくるブルー・ティアーズ——以下ビットを見て、葵はあまり似合わない不敵な笑みを浮かべた。

「はああ……。すごいですねえ、立花君」

ビットでリアルタイムモニターを見ていた山田真耶が溜息混じり

につぶやく。実は数十分前の一夏・セシリア戦でも、同じことをつぶやいていたのだが、言葉のボキャブラリーが少ないのだろうか？

「確かにな。技量もそうだが、初実戦にしては落ち着いている」

一夏のととは違い、千冬も真耶に肯定する。

「ラファール・リヴァイヴの性能も限界近くまで引き出しています。天才っているものですね・・・」

「いや、違うな」

「違うって、どういうことですか？」

真耶はモニターから目を離し、千冬を見る。

「山田先生はDSをご存知か？」

「DS？ ええ、知ってますよ。確かISのゲーム版みたいなものですよね」

「やってみたことは？」

「ないです。私、ゲームと名前のつくものはからっきしダメです・・・」

照れながら頭をかく真耶。そのセリフに妙に納得してしまうのは、彼女の性格ゆえだろう。

「織斑先生はありますか？」

「ああ。実は一度だけ、ゲームのデバッグをDK社に依頼されたことがある。やってみて分かったが、あれはISのシミュレータともいうべきものだ」

「そんなに似ているものなんですか？」

「あれは似てるとは言わん。同じだ。元はDK社オリジナルのISをゲームに転用したものだと思っていたが、あれほどのものだったとはな」

当時を思い出しているのか、千冬の視線がやや遠くを見ている。

「立花の専用機の件で、DK社から奴のDS関連の情報が送られてきたが驚いた。奴のゲームプレイ時間は、そこいらの軍人のIS稼動時間と同等かそれ以上だ」

「ええっ！　そ、そんなに！？」

真耶は驚愕をあらわにする。軍人のIS稼動時間は規則上かなり

長い。葵はいつたいてうやって学生的身でそのような時間を作ったのだろうか、真耶は考えた。まあ無駄だったが。

「あのゲームはどこでプレイしようとも回線を通じて世界の誰とでも対戦が可能だ。立花の対戦回数は数千以上。つまり、奴はそれだけの時間と回数のシュミレーションをずっと繰り返してきたこととなる」

「な、なるほど。それがこの素人ではありえないIS操縦に繋がるとのことですね」

「そういうことだ」

「はあ……。ゲームとはいえバカにはできないものですね」

「ああ。たかがゲーム。だが、ユーザー総数1200万人という人数を踏まえ、その頂点——世界大会を3度も優勝した立花、その実力は……」

そこで2人の会話は途切れ、再びモニターへ注目していった。

「お行きなさい！」

セシリアはビットに話しかけるように命ずる。

上、右、左後ろ、左斜め下

ビットのレーザーが先のスターライト以上の苛烈さで葵に襲い掛かる。

調子がいいのが理由か、一夏戦の時よりもビットの動きが鋭い。

「さあ、無様に踊りなさい！」

「おまえがな」

まるで、ビットの攻撃がないかのような滑らかな動きで葵は武装を変更する。

スナイパーライフルに代わって右手に持ったのは、リヴァイヴの代名詞ともいえるアサルトライフル。

そのままセシリアを狙い撃つ。

「そんな単純な攻撃に・・・！」

「単純でも当たれば同じだ」

セシリアは回避行動をとるが、それ以上の正確さで葵が追撃してくる。まるで動きが読まれているかのようだ。こちらの攻撃は当たらないというのに。

「くっ……。なんでわたくしのブルー・ティアーズが当たりませんの！」

「ただの慣れだ」

「なっ！ わたくしの動きにもう慣れたんですの！？」

「半分正解、半分はズレだ」

葵がセシリアの動きに慣れたというのは本当だ。

スターライトをなくしたセシリアの攻撃はビットの一点のみ。しかも行動パターンもそう多いわけではなかったため、数度回避するうちに葵はそれを把握していた。

そしてはずれの理由だが、これはDSに関連がある。

現実のISでは、誘導砲台であるビットは珍しい新武装だが、ゲームであるDSでは違う。使用は難しいものの、使うユーザーが多い武器の1つだった。

葵が対戦した中で、ビットを使う相手は何人もいた。中には同時に16機ものビットを完全に使いこなす猛者もいたほどだ。まあ、その相手は世界ランカーだったし、特殊な例にすぎないが。

それに比べれば、たった4機のビットしか使わないブルー・ティーズは葵にとっては楽な相手だった。

それを葵はセシリアに説明した。

「現実とはゲームと違います！」

セシリアは激昂し、それに反応したビットの攻撃が苛烈さを増す。

「認められないか？　だが、現実とは残酷で理想通りにいかないものなんだよ。俺も、おまえもな！！」

葵はアサルトライフルをセシリアに撃ち続けながら、開いた左手でハンドガンを取り出す。

「いい加減に・・・邪魔だ」

葵はビットに狙いをつける。

「させませんわ！」

セシリアも葵の意図に気付いてビットの動きを変える。

思考で操作するビットはパターンを把握すれば、回避はそこまで難しくないが、撃ち落すのは別だ。下手をすればISよりも素早く小回りも利くそれを捉えるのは中々難しい。

だが、誰であれ、どんな行動パターンがあれども、ビットが必ず通る軌道が1つだけ存在する。

ビットがブルー・ティアーズへ戻る。その隙を狙って葵はハンドガン撃った。2機のビットに穴が開き、落下していく。

「セオリー通りだ」

ビットが必ず通る道。それはエネルギー充電のため、本機へ戻るための動きだ。使い捨てるならともかく、使い続けるためにはビットはこの行動を必ず取らなければならない。

DS経験者であれば、誰でも知っている基本だ。

「くっ、まだ手はあります！」

セシリアは残ったビットを庇いながら、腰部から広がるスカート

状のアーマーを動かす。その突起が外れた。

「ミサイル？　だが、使いどころが甘い」

飛来する2つのミサイルを、葵は両手の火器で難なく撃ち落とす。

閃光と爆煙が広がり、両者の視界が一時的に遮られた。

次の瞬間。リヴァイヴのハイパーセンサーが警告音を発する。

「ロック？　・・・マズっ！」

転ぶように、葵は身体を倒す。その後すぐに今まで葵がいた場所にレーザーが通っていった。

「よく避けましわね」

煙が晴れると、スターライトmk3を構えたセシリアが姿を現す。

「予備のライフルか？　身持ちがいいな」

「淑女ですのぞ」

「関係ないぞ。てか、淑女って何だよ？」

「淑女というのはですね・・・」

「言葉の意味が分からないわけじゃないよ!？」

「そう・・・では、堕ちなさい!」

セシリアが攻撃を再開する。今度はレーザーの他にミサイルも同時発射してくる。

「やる!・・・だがっ!」

葵が踏み込む。

瞬間、リヴァイヴのスピードが最高速まで上がった。

「まさか、イグニッションブースト瞬間加速!？」

葵はセシリアの弾幕を垂直に動いて回避する。

回避しきるとそのままのスピードで直角に曲がり、葵はセシリアへ肉薄する。

「なっ！」

熟練者でも難しい瞬間加速中の直角機動。葵はそれをやったのけた。

しかし、それを見て驚く暇がセシリアにはない。

完全に肉薄される前にビットを射出しようとし、

「詰みだ」

間に合わなかった。

懐に入った葵がセシリアに向けてハンドガンを構えている。

「終わらすか？ それとも続けるか？」

まるで審判者のごとく、葵は言葉を紡ぐ。

セシリアは考える。ブルー・ティアーズのエネルギー残量はわずか。おそらく今この至近距離で攻撃を受けたら持たない。しかし、それを回避する術はセシリアにはなかった。

「わ、わたくしは・・・」

「終わりだ」

審判が下される。

葵はハンドガンをセシリアの顔へ向けた。

「ひっ！」

セシリアは小さな悲鳴を上げて、目を瞑る。どんなにISの操縦になれていても、目の前で拳銃を向けられることに抗うことは今のセシリアにはできない。

目を瞑りながら、衝撃に備えていると、

「この試合。俺は棄権する」

意外な形で試合は終わった。

「お待ちなさい！」

試合終了後、寮への道を一人で歩いていた葵は、後ろから聞こえてきた声に反応して振り向く。

声で察していたが、いたのはやはりセシリアだった。

「何？」

「あの試合どういう・・・って、止まりなさい！」

セシリアは、再び歩き出した葵の前に回りこむ。

「俺、早く帰りたいんだけど？」

「わたくしの話を聞きなさい！」

「いいけど、歩きながらでもいいか？ マジで眠い」

堪えきれないのか、葵は欠伸をしながら返事をする。

「先ほど試合したばかりなのに、なんでそんなに眠そうなんです

の？」

「思った以上にISの操縦って負担がかかるんだよ。やっぱゲームのようにはいかない。で、話は終わりか？」

「違いますわ。あなた先ほどの試合はどういうつもりです？」

「・・・結果に納得がいらないか？」

「当たり前です！」

試合はそのまま葵の意見が通り、葵の棄権によるセシリアの勝利で終わった。その結果、先に2勝したセシリアがクラス代表に納まり、一夏と葵の試合は無効試合となって流れることとなった。

「あのまま続けていれば、あなたはほぼ間違いなく勝利を手にしていましたわ。なのになんでそれを手放すような真似をいたしたの？」

「そう思ったから棄権したんだよ」

「・・・どういうことですか？」

「俺は、君が決闘だって言ったから付き合っただけだ。クラス代表になんか興味ない。勝負に勝てれば試合はどうでもよかったんだよ」

「意外に律儀ですね」

意外でもなく、自分は律儀だ。と葵は言葉にしようとしたがやめた。ここで無駄に話を引き伸ばすなんてすることはないからだ。

「それで話は終わり？　なら——」「まだ、終わってませんわ」

——ああ、そうですか・・・」

観念して葵はセシリアの言葉を待つ。が、なかなかセシリアが話し出さない。

不思議に思つて葵はセシリアを横目に見る。

なんか顔が赤くなって恥ずかしそうだ。ついでにわざとらしい堰もしている。

「言いづらいことか？」

「そ、そうではございませんわ！　少々お待ちになって」

仕方がなく葵は待つことにした。

しばらくすると、寮が見えてきた。もう一度葵がセシリアに声をかけようとする、意を決したようにセシリアの口が動く。

「その・・・申し訳ございませんでしたわ」

「ん？ 何のこと？」

セシリアが謝る理由が分からず、葵は聞き返した。

「DSを馬鹿にしたこと。まだ謝ってございませんでした」

「・・・そうだった」

葵はすっかり忘れていた。というよりも、このクラス代表の顛末は、自分の中では先の試合で終わったこととなっていたので、気付くのが遅れた。

そんな本人が忘れていたことを覚えているあたり、セシリアも十分律儀な性格をしていると葵は思う。

「もう気にしてないよ。ただ、次からは気をつけてくれ」

「分かっていますわ。では・・・」

「・・・あの、この手は何？」

「友好の印として握手をいたしましょう。それからこれからはわたくしのことはセシリアでかまいませんわ」

いかん、と葵は直感した。

この手を握れば、たぶん自分はISという物語の渦中に巻き込まれる。そんな予感を葵はしていた。平穏な日常を過ごすなら、この手は握らない方がいい。

「悪いけど、どっちも断る」

そして、何より――

「なっ！ わたくしとの握手を断るなんてどういう――」

「ごめん。無理だから」

葵は逃げるように寮に、そして部屋に駆け込んだ。

このときは、部屋が出入り口に近いことに感謝した。

「……無理だって。俺が女の子の手を握って、名前を呼ぶなんて」

立花葵。

彼の女性への苦手意識は結構深刻だった。

第5話 1200万分の1の男（後書き）

戦闘描写書くの難しい・・・。

自分の求めるものと文章が合っていない気がする。

第6話 チャイナ娘きたる

色々あった1年1組のクラス代表決定戦。

だが、試合の結果に反して、クラス代表になったのは織斑一夏だ。

理由は当事者たちの辞退。1人は面倒臭がつて、もう1人は一夏に経験を積ませるための譲渡という。理由だけ見れば試合する意味なんてなかったかのようなしょうもないものだ。

まあ、そんなわけで、クラスの話題は一夏一色に染まっている。

そんな現状を葵は満足げに受け入れていた。

もう4月下旬。

当初あった葵への悪評も、次々出てくる新たな話題に埋もれて薄まってきたおり、彼への注目度は日に日になくなっていった。

「実に平和だ」

昼休み。

周りに人影のないベンチに座り、葵は現状を満喫していた。

先日見つけたベンチは、学園入り口近くという校舎よりやや遠いところに位置しているため学園の生徒が来ることは滅多にない。

この自室以外で女子がいない場所は、葵にとって砂漠のオアシスと同じような所だ。

明るい日の光を浴びながら、葵は買ってきたパンを食べ始める。

しかし・・・本人がどう思おうとも、傍目には大変寂しい光景だった。似ている光景を例えれば、リストラされたけど、それを家族に言えないお父さんが、朝嘘の出勤をして公園で弁当を食べているのと重なる。

「・・・友人がほしいな。織斑と女子以外で」

どうやら葵自身も寂しい自覚があったらしい。発した言葉が涙を誘う。

葵はこの学園でこそ、人付き合いが悪い存在として認知されてしまっているが、中学までは普通に友人と遊んでいた。別に人間嫌い

ではない。

しかし、この学園では葵が言った以外の選択肢が存在していなかった。

現実は無情だ。

「ねえ、ちょっと」

葵が思考にふけていると、彼の楽園に訪問者が現れた。当然ながら女子だ。左右の高いところで結んだ髪型が特徴的で、なかなかの美少女だ。小柄ではあるが、それが彼女の可愛らしさを助長している。

しかし、この女子。何かおかしい。

原因はすぐに分かった。この女子の服装が学園の制服ではなかったのだ。

「（学生じゃない？）」

葵はそう思ったが、すぐに否定する。少女は小柄だが、年齢は同じくらいだし、何か用事があって学園の外に出かけていたのだろうと見切りをつけた。

「アンタ、立花葵でしょ？」

いきなり見知らぬ女子に名前を呼ばれたが、それだけでは葵は驚かない。

数年前からDS世界大会優勝者という肩書きのため、相手が一方的に自分を知っているなんて事がたまにあった。今は数少ない男のIS操縦者としてさらに知名度が上がっているので不思議じゃない。

「確かにそれは俺の名前だけど、君は誰だ？ たぶん、初対面だろ」

「ああ、ごめん。あたしは凰^{フアン} 鈴音^{リンイン}。今日・・・てか、今からこの学園に編入する予定よ」

「ああ、転入生か。どおりで見覚えがないはずだ」

名前と容姿から察するに、おそらく中国人。それしては日本語が流暢だと葵は思った。というより、この学園の外国人はみんな日本語が上手い。いつから、世界共通語は日本語になったんだ？

「ねえ、アンタ暇よね？ 暇に決まっているわよね」

「なぜに決め付け？」

「だって、見るからに暇そうじゃない。アンタ、遠くから見ると

まるでリストラされたサラリーマンみたいだったわよ」

言葉という名の刃が葵を貫いた。

悪意のある悪口は受け流せるが、悪意のない事実を指摘されるとさすがに傷つく。

「ま、まあいい。それで、凰さんは何のようだ？」

「本校舎一階総合事務受付って場所を探しているんだけど、分かんなくて……。教えてくれない？」

葵は近くにあった時計を見る。

ちょうど昼休みも終わりが近い。鈴音を案内して、そのまま教室へ戻ればいい時間になるだろう。それがなくても、別に断る理由はないが。

「わかった。ついて来てくれ」

「よろしく」

鈴音が軽口を叩く。そこで悪い印象を覚えないのは彼女のサバサバした人柄ゆえだろう。

「ねえテレビで見たんだけど、あんたが史上2人目のISを動かした男っていうのは本当？」

本校舎へ向かう道中、すぐに鈴音が葵に話しかける。どうにも落ち着かない性格のようだ。

「ああ。そうだ」

「じゃ、じゃあさ。やっぱり1人目の男とは仲がいいの？」

葵は何か嫌な予感を覚えた。IS学園に来てからよく感じるそれは、今のところ外したことがない。だが、まだ判断材料が足りない。ここは様子を見よう。

「織斑のことか？ クラスメイトだよ」

間違ってもそれ以上の関係ではありません。と葵は心の中で付け足す。

「へ、へえ。よく話すの？」

「俺、（女子には）口下手だな。向こうから一方的に話しかけられるが多いよ」

葵は嘘を言ってますん。

「へえ。仲いいんだ」

おかしい。

今の少ない会話で、鈴音の中では一夏と葵は仲がいいと判断されたようだ。

鈴音はやや先走りのある性格、と葵は記憶する。

「そうでもない」

「男の子ってみんな、仲がよくてもそう言うよね」

「・・・」

どうやらこの場での訂正は難しいようだ。諦めて、葵は次に進める。

「君は？ 織斑と仲いいの？」

鈴音に気付かれないように葵は聞き耳をたてる。

葵の質問の返答具合によって、この女子との距離感が決定する。テレビで見ただけのミーハーならばまだいい。だが、それ以外だったら――

「あたし？ まあ仲はいいと思うわよ。なにせ一夏の幼馴染だし」

彼女との付き合いはここまでのようだ。

葵は鈴音との距離は極力遠くなるようにしようと決意する。

「・・・凰さん。次の授業までの時間がない。悪いけどここからは1人で行ってくれないか？ 目の前の建物があるだろ。あれが本校舎。入ってすぐの受付が総合事務受付だ」

何事も事を起こすのは早いほうがいい。葵は早くも自分の決意を実行する。

「あ、うん。ありがと。ここまで教えてくれれば大丈夫よ」

「ああ、悪いな」

葵は逃げるようにその場を去る。

これで大丈夫。後はこれまで通り、一夏に関わらなければ、鈴音とも接する機会もない。葵はそう思っていた。

しかし・・・。

「ちよつとまって。・・・ああ、行っちゃった。アンタにも聞きたいことがあったんだけどな。・・・」

この鈴音の呟きを葵が聞いていれば、そのしばらく後起こる出来事は回避できたかもしれない。

本当に現実は無情である。

その夜。

寮の食堂では1年1組代表決定を祝うパーティーが行われていた。クラス全員が出席を命じられたパーティーだったが、欠員が1名

いる。無論葵だ。

「立花は、やっぱり来てないのか？」

パーティーの主役である一夏は、食堂を見回して葵の姿がないのを確認する。

「用事があるんだって。付き合い悪いよね」

「うんうん。織斑君とは大違い」

近くにいた女子が答えるが、相変わらず好き勝手言っている。

「まったく、わたくしの誘いを断るなんて、失礼ですわ」

そう一夏の隣でぶつぶつ文句を言っているのはセシリアだ。

クラスの誰もが嫌がった葵に声をかけるといふ行為を行ったのは意外なことに彼女だった。

当初はクラスの葵嫌いの先鋒的位置にいたセシリアだったが、代表決定戦で葵と戦った後は、クラスで一番葵を認めている立場となっている。また、試合以降、それを観戦した女子の間では、葵に対する評価が若干上がりつつあった。まあ、『IS』の操縦はそこそこ

うまいけど、やっぱり根暗』ぐらいの違いではあるが。

一夏にとって、セシリアのその態度は嬉しいものだったが、当の葵にとっては大変迷惑であった。なにせセシリアは毎日放課後になるたびに「再戦ですわ!」と葵を追いかけているのだ。日に日に葵が教室にいる時間が減っているのはきつとそのせいだと一夏は思っていた。

半分はそれで正解である。しかし、もう半分は一夏に声をかけられるのが嫌なための行動であることを、一夏本人はまだ気付いていない。

一方、その頃。

用事があると断った葵だが、建前ではなく、本当に用事があった。

『助けて! ドラ。も〜——』ブツリ

葵はかかってきた電話を即座に切る。間違った行動ではない。

♪！　　♪　♪　♪　♪！

「・・・なんだ？」

再び鳴った携帯電話を葵は気だるそうに出た。

『なぜ切った！』

「あれで切られないとでも思ったのか？　マイク」

やや怒気を込めて葵は答える。

電話の主は例によって、マイクだった。

『おかしいな。助けを求めるときは、ああ言うのが日本の定番なんだろ？』

「大いに違う！」

『アオイはノリが悪いな』

「・・・そんなノリだから、最近娘さんに避けられてるんだろ」

『うぐっ！』

マイクには葵くらいの年頃の娘がいる。その溺愛っぷりは凄まじく、葵はなんとその自慢話をされたのか数え切れない。

しかし、その娘も年頃で、最近はマイクに対して扱いが冷たくなってきたらしい。今のマイクに娘の話はタブーだった。

『うう・・・そうなんだよ。昨日の夜もさ、私が声をかけても返事してくれなくて・・・』

「・・・すまん。俺が悪かった」

『あつ、そう？　じゃあ、話を始めよう』

「・・・こいつ」

マイクのあまりにらしい態度の変化に、葵は握った拳がふるふる震えるのを必死に抑えた。

『アオイの専用機だけどさ』

「ああ、どこまで出来たんだ？」

『ごめん。まだ全然作ってない』

「はあっ！！！！？」

大声を出した後、葵は部屋を見渡す。かなりの音量だったはずだが、どうやら部屋の防音性はしっかりしていたようだ。

「なんで！？ ライセンスはこの前取れたって言ってただろ？」

『ライセンスは・・・ね？』

「・・・もしかしてコアか？」

『うん。さすがアオイだ』

ISの心臓部たるコアは篠ノ之束が作った全部で467個しか存在せず、束が製作を中止したためにこれ以上増えない。つまり、既存のコアをどこから調達しなければならぬのだが・・・。

『思ったよりもアラスカ条約って厄介だよ。コアを取引しちゃダメだってさ』

「取引しないとコアは手に入らない。ということは、俺の専用機作成は中止か・・・」

葵は落胆を隠せない。

自身の専用機も魅力的だったが、何よりもマイクの作ったISを

葵は見てみたかったのだ。

『まあ、待つて。今まで小技ばかり使っていたのがいけなかった。こうなった以上、大技を持ってコアを手に入れようと思う』

「・・・どうということだ？」

『コアを取引しちやいけないなら、もっとでかいものを取引すればいい』

「・・・おい、それってまさか・・・」

葵は息を飲む。

『そうだ。企業を買収してコアごと手に入れる』

「・・・まさに大技だな。普通考え付いても誰もやらんぞ」

『アオイってさ。いつも最後の最後で抜けてるよね』

「？ 何のことだ？」

そう言った瞬間、葵は思い出す。確か前にISを作る電話をしたときも似たような状況になったことを。

「あの・・・冗談だよな？」

『手伝って』

語尾にハートマークを付けそうな甘い声が電話越しの葵の耳に届いた。

冗談ではないようだ。

「今度は何をさせようって言うんだ？」

『アオイ。私は知っているんだよ。きみさ、今わが社の株どのくらい持つてるの？』

「・・・」

退路が絶たれたように葵は感じた。

『DS世界大会の優勝商品の1つは、我がDK社の株0・1%。アオイは3度優勝したから0・3%のはずだけど、今君が持っているのは約2%。なんで増えてるの？』

「・・・偶然？」

『アオイ。きみ、たまにアホになるよね』

「やっぱり、バレてる？」

「バレてるよ。アオイさ、株取引やってるでしょう?」

1年ほど前のことである。

当時、2度目のDS世界大会優勝を果たした葵だったが、世界有数企業DK社の株0.2%という莫大な資産を持て余していた。現金に還元するのは簡単だが、金額が馬鹿みたいな数字になったのでやめた。

そこでふと思いついたのが株の取引だった。

どうせ元値はタダだし、全部なくなっても構わないと始めたが、やるからにはトコトンやろうと真面目にやった。

結果は大成功。

しかし、そのために以前より自分の資産に頭に悩ませることになった。

『資金が足りないんだ。アオイのその才で、ぜひわが社の悲願を』

「俺、学生なんだが?」

『何を言ってる名誉社員』

DS世界大会優勝商品その2、DK社の名誉社員の称号である。

これがあれば、将来フリーパスで本当にDK社の社員となることも可能な優れものだ。

しかし、今の葵にとっては、呪いのアイテムに近い。解呪のアイテムはもちろんない。

『まあ、確かに難しい問題だしね。夏くらいまでに返事をくれればいいよ。もしかしたら、それまでに私らだけで資金が集まるかもしれないし』

「分かった。考えとくよ」

これからしばらくの頭痛のタネができて、葵は深く溜息をついた。

『それはそうと、別口でアオイに頼みがあるんだ』

「今度はなんだ？」

『そう警戒しないでよ。こっちは別に難しい問題じゃない』

「・・・」

『あ、信じてないな。頼みっていうのは他でもないDSのことだよ』

「DS?」

『アオイさ。最近DSやってないでしょ？』

確かに。藍越学園の受験からの1ヶ月余り、自身とその周りの状況が忙しすぎて、葵はゲームセンターに行っていない。

DSを始めてから2週間以上DSをやらなかったことがないから、今のこの状態は葵にとって初めてのことだった。

「まあ、そうだけど、それが何か問題あったのか？」

『大アリだよ。アオイがDSを離れてから、『チャンピオンはDS辞めちゃったんですか！？』とかいう電話がうちの本社・支社問わず鳴りっぱなしなんだから。特に日本支社の部長なんかは過労で倒れたんだよ。責任とれ』

「知るか！」

『そうは言わずにたまにはDSもプレイしてくれよ。じゃあな、チャンピオン』

「ちょ……。くそ、言いたいことだけ言って切りやがった」

通話の切れた携帯電話を見ながら葵は再び溜息をつくのだった。

翌日の朝。

ピンポン。

歯を磨いていた葵は、チャイムの音に気付き、急いで口をゆすいだ。

誰だろうと、考えつつ葵は部屋のドアへ向かう。女子ではないだろうから、一番確率が高いのは一夏あたりだろう。嫌なことに。

「起きているな、立花」

いたのは隣の織斑千冬鬼教官どのだった。そう考えていた葵の頭に出席簿が直撃する。

「なんで叩くんですか!？」

「不穏な空気を感じたからだ」

鋭い。この教師は読心術でも極めているのかと葵は思った。

「おまえにやってもらうことがある。SHRで配る書類を職員室まで取りに來い。朝食後すぐにだ」

どうでもいいが、この教師は命令口調しかできないのであるうか？ しかも、それに違和感がない。社会人として何か間違っているように葵は思う。

「クラス代表は織斑ですよ？」

「関係ない。理由がほしければ、そうだな……。お前の方が部屋に近かったからな」

まさかと思うが、今後も同じ理由でこき使われるのではないかと葵は不安になった。

「いいか。忘れずに來い。以上だ」

もう用はないと言わんばかりに、千冬はドアを即座に閉めた。

「否定どころか、肯定もさせてくれないのか……」

今日も辛くなりそうだ。ほぼ毎日の事ながら、葵はそう思わずに

いられなかった。

「あの・・・先生？」

控えめに表現して、両手いっぱい書類を抱えた葵は、目の前を歩く千冬に声をかける。その手には出席簿しかない。

「なんだ？」

「い、いえ。なんでもありません」

とても手伝ってくださいと言える雰囲気ではなく、葵は何もいない。

この女尊男卑の社会はごく当たり前の光景ではあるが、千冬にかつてはそんな社会でなくても、こういったことを男にやらせそうなのがする。

「ほら、遅れているぞ。早くしろ」

「は、はあ・・・」

「返事は、はいだ」

「はい」

それにしても、本当に鬼だ。

葵は目の前の視界も整わない中、必死に千冬について行く。

「何格好つけてるんだ？　すげえ似合わないぞ」

「んなつ　！？何てこと言うのよ、アンタは！」

教室の近くまで来ると、SHR間近だというのに大声を出している生徒がいる。書類が邪魔で、何を言っているかまでは葵には聞かえなかったが。

「ほお、またバカがいるな」

千冬ちふの声は葵にも聞こえた。まるで地獄から響く声だ。これならば聞こえないほうがマシだったと葵は思う。

「おい」

「なによ!？」

千冬の声かけに、女性徒は怒鳴り返す。

今、確かに押されちゃいけない類たぐいのスイッチが押される音が葵の脳裏に響いた。

続いて聞こえる何かを叩く音。

「さつさと自分の教室へ戻れ」

「は、はい」

女生徒が教室から出るとき、葵はその顔を見た。鈴音だ。

「あ」

鈴音も葵に気付く。鈴音は何か言いたそうな表情を見せたものの、チラリと千冬を見て、逃げるように隣の2組へ走って行った。

「うーん？」

葵は鈴音の表情に気付いたものの、とりあえず朝のSHR前に彼女と鉢合わせしなかったことを千冬に感謝した。ほんの少しだけ。

第6話 チャイナ娘きたる（後書き）

内容が薄いか・・・？

でも、これが作者の限界です。

くそお、文才がマジでほしい。

第7話 リベンジ

4月29日

日本においてゴールデンウィークと呼ばれる大型連休の始まりの日である。

IS学園も例に漏れず、学生たちはこれを機会に外出したり、あつる者は間近に迫ったクラス対抗戦への自主トレなど、各々に休日を使っていた。

その日の昼前、鈴音はズカズカと寮の廊下を歩いていた。

「（もうー！　一夏め、一夏め、一夏めー！）」

十代乙女の何かを捨ててしまいそうな形相で鈴音が考えているのは、先日再会した幼馴染の男——一夏のことだ。

1年ぶりに再会した一夏に鈴音は期待していた。

それは、約束の成就。かつて『料理が上達したら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる？』というのを鈴音は一夏と約束していたのだ。中国へ帰った後も、鈴音はその約束を果たすべく、苦手だった料理をISの訓練が忙しいながらも続けた。

「（それをあいつはー！）」

料理がうまくなったのに、肝心の一夏は、鈴音との約束をちゃんと覚えていなかった。さらに、それが分かってから数日経つのに、一夏は謝りに来る様子もない。

「（ぜーったいに、後でメツタメタにしてやるんだから！）」

先日、もうすぐ行われるクラス対抗戦の日程が発表された。それによると、2組代表の鈴音の最初の対戦相手は1組代表、つまり一夏だ。

本当なら今すぐ一夏をボコボコにしてやりたいが、どうせなら皆の見てる前でやってろつと、少々意地の悪い考えを鈴音は思いつき、それまでは我慢することに決めていた。

「あれ？」

ふと、鈴音が見ると、生徒が道を明けるように廊下の端に移動している。

よく見ると、その間に遠ざかっていく背中が見える。葵だ。

どうやら、廊下の女生徒は、彼を避けるようにしているみたいだ。

葵を見てヒソヒソと話す様子が鈴音の気分を害する。

この学園にしばらくいれば自然と耳にするのが、この学園の異端児である男の2人。一夏と葵のことである。この両者は不思議なことに評価が完全に真逆であった。細かいことは省くが、善が一夏で、悪が葵だ。

「（そうでもないと思うんだけどな）」

それが鈴音の学園の噂に対する思いだった。

この学園の女子は入学前から女子校出身者が多く、そのためか男子に対する評価が極端になっているというのが鈴音の感想である。

鈴音が評価するところ、確かに一夏はかつこいいが——ここは絶対ゆずれないところ——、葵は普通くらいのはずだ。たぶん。強いて言えば、会話のとき目を合わせないのがマイナスポイントか。

「あ！」

鈴音は思い出す。葵に聞きたい、いや、言いたいことがあったのだ。

鈴音は葵を追いかける。葵はすでに学園校門に差し掛かっていた。

学園を出た葵はとある場所に来ていた。

「久しぶりだな」

そう呟いて葵が建物に入る。入り口をくぐると、葵の耳に賑やかな電子音が流れ込む。

ここはアミューズメントパーク。通称ゲームセンターである。IS学園近くにある一番大きなところであるここに、葵は訪れていた。先日マイクに言われたからでの訪問ではあるが、葵自身もしばらくDSをやっていないことへの寂しさがあったことは否めない。

まるで最初にDSをプレイしたときのような高揚感が葵を占める。

案内板を頼りに、葵はDSコーナーへ向かった。

「おおっ！」

3階にあつたDSコーナーへ到着すると、思わず葵は歓声を上げた。フロア全てがDSだけで占められており、その機械が9つもある。普通の規模のゲーセンでは3つくらいだから倍以上の規模だ。

しかし、さすがに休日なのか全て稼働中の状態であり、見ている客もかなり多く、尚且つ順番待ちの人数も9人以上はいる。葵がプレイするには次の次まで待たなければならないようだ。

仕方がなく葵は順番待ちの最後尾に並ぶ。

順番を待ちながら、稼働中のDS戦が映っているモニターに目を向ける。プレイヤーたちの腕は可もなく不可もなくといった具合だ。

つんつん。

「（ん？）」

そうしていると、葵の背に何かがぶつかる感触があつた。後ろに人が並んだようだし、その人のかばんでも当たっているのだらうと思ひ、葵はそのままモニターを見つめる。

ぐいぐい。

しばらくすると、今度は服を引っ張られる感触。後ろの人物は自分に用があるらしい。そう思つて、葵は後ろを振り向く。すると――

「さつさと振り向きなさいよ」

ちよつと怒つた顔した鈴音こあくまがいた。

葵の行動。

葵は周りを見た。3階フロアの出口付近に人影はない。今なら一直線で行けるだろう。

再び、葵の行動。

葵は逃げるを選択した。

……。鈴音てきに回り込まれてしまった。逃げるできない。

「って、なんで逃げようとするのよ！」

「……。トイレだ」

嘘です。鈴音に服を掴まれてしまった葵はそう言うしかなかった。

「今の間は何よ。それにトイレは反対側よ」

しかも、鈴音にはしっかりバレている。

それにしても迂闊だった。基本ISを使う女性はDSを馬鹿にする傾向が多く、そのためDSをプレイヤーである葵もIS学園にて評価が低い。だから、DSをプレイする場所にIS学園の生徒が来るはずないという認識が葵にはあった。

仕方なく、葵は鈴音へ向き合う。目は合わせないが。

「凰さんもDSをやりにきたのか？ 何なら順番譲るよ」

「違うわよ。あたしは、あんたに用があつたの。学園から追いかけてくるの大変だったんだから」

いかん、と葵は直感する。

一夏とその周辺人物に関わりたくない葵にとって今の状況はよくない。こうなれば、鈴音の用というのが何だか分からないが、すぐに聞いて終わらすのが最適だ。とにかく、鈴音と一緒にいる時間を少しでも少なくしよう。

「用って何だ？ ここで済ませられることか？」

「むしろ最適な場所よ。立花葵、あたしはあなたに再戦を申し込むわー！」

葵を指差し、鈴音は声高々に宣言した。

彼女の声は電子音がひしめいていたゲーセン内でも遠くに響き渡る。

それが最悪だった。

響いた声に、その場にいた人間が一齐に振り向く。集まる視線、視線、視線。

ここまではIS学園でも同じようなもんだ。しかし――。

「おい、あれ・・・いや、あの人は」

「うん。間違いないな」

「伝説のチャンピオンだ」

「……立花葵だ!!」「」「」

鈴音の声に反応した視線の質は、IS学園の時とは完全に違っていた。集まる視線には羨望が混じり、ゲーセン内は急にライブ会場のような盛り上がりを見せた。

DSのプレイヤーたちにとって、世界大会3連覇を成した葵はまさしく英雄^{スター}。年齢の上下関係なく憧れの存在だ。

さて、ここで問題です。

仮に自分の大好きな芸能人が、自分の目の前に表れたら、その人

が大好きな人たちはどんな行動を取るでしょう？

その正解の1つが、現実として葵に襲い掛かる。

「げっ！」

「何・・・って、うそー！！」

葵と鈴音は同時に悲鳴を上げる。

2人が見たものは波。むろん水ではなく、人のだ。

「さ、サイン下さい」

「俺は握手を。チャンピオン、俺と握手をー！」

「僕は写真を！ ツーショット？ いえ、撮らせてくれれば十分です！」

「俺を抱いてー！！」

2人は津波にのまれた。

約1時間後

葵はゲーセンにて、とある人にはTシャツにサインを、ある人には握手を、ある人にはツーショットを、自分のズボンを下げようとした奴（男）にはシャイニング・ウィザードをプレゼントし、DSをプレイすることなく、近くの公園のベンチで一息入っていた。

「（・・・疲れた。DSもできなかったし、なんて最悪な。それというのも・・・）」

葵は買ってきた缶ジュースを飲みながら、ちらりと横を見る。

隣には、同じく缶ジュースをおいしそうに飲む鈴音の姿があった。

「はあゝ・・・。大変だったね」

「（おまえが言うなあああああ！！！！！）」

葵は心で絶叫を上げる。手に持ったアルミ缶がぐしゃりと変形した。

しかし、これで葵が考える『一夏とその周りの人間に関わると厄介事に巻き込まれる』という仮説の実証をまた1つ得た。

自分の考えは間違っていない。今後ともこれ突き通そうと葵は決意を新たにする。

「ところでさ。さっきの返事は？」

「返事？」

「そう。あたしと戦ってくれる？」

そういえば、と葵は思い出す。そもそもこの騒動の原因はそれだった。

「再戦って、俺は君と戦ったことあったか？」

葵のDSにおけるプレイヤー対戦の回数は数千以上。有名なプレイヤーならともかく、それ以外のプレイヤーの名前は覚えていない。名前はな。

「甘寧」

鈴音はポツリとそれだけ言葉をこぼす。

最初はなんで三国志の武将と葵は思ったが、すぐに思い出す。

確か1年ほど前から何度か戦った中国在住のDSプレイヤーがそんな名前だったはず。DSの仮想空間では相手の顔も分からないが、かなりの腕を持った男だと葵は思っていた。

「覚えがある。もしかして、それが・・・」

「そう。あたしのプレイヤー名」

名前からして男だと思っていたプレイヤーは実は女の子だったらしい。

「ん？ 甘寧・・・鈴の音で敵を乱したという武将・・・鈴の音？」

「分かりやすいでしょ」

いや、分かりづらい。というか、そんな連想で相手の名前が分かるのは本人を知っている場合のみだと葵は思う。

「で、どう？ あたしと戦う？」

「断る」

もし、ただの甘寧というプレイヤーが挑んできたのなら、例え苦手な女の子であっても葵は戦っただろう。しかし、鈴音は別だ。葵の中では彼女と交わる道は一切ない。

「逃げるの？」

「逃げるさ」

鈴音の軽い挑発。一夏であればのったかもしれないが、生憎葵には効かない。

葵は立ち上がり、中身のなくなった缶をゴミ箱へ投げ捨てる。そのまま鈴音を見、じゃあな、と声をかけようとしてやめた。それと言つと、また何かしらの理由で接点が出来てしまいそうが気がしたからだ。

マナーは悪いが、何も言わずにこのまま立ち去ろう。葵はそう思い、鈴音に背を向けた。

背を向け、立ち去ろうとする葵を見ながら鈴音は考えた。

やはり、葵は一夏と同じようにはいかない。一夏なら、さきほど葵にした挑発をすれば、男の意地を見せてのってくる。

学園で噂を気にした様子もないらしいことから、葵は冷静で自分で自分を制する術を持っているのだろう。

そうになると、鈴音にはどう対応すればいいのか分からない。

共学だった小中学校では、男女問わず気さくな女子と認知されていた鈴音だが、実際に男子で仲がよかったのは一夏と五反田弾くらいだ。2人とも、多少性格の差はあれど打てば響くタイプだったの
で参考にならない。

そうまで考えても葵と戦いたい理由が鈴音にはあった。

1年前に中国に帰国し、ISの適正が認められて訓練を始めたが、あるときふとしたきっかけでDSをプレイした。その時の対戦相手が葵だったのだ。結果は惨敗。手も足も出ないとはこのことだ。

後に相手は世界大会に（当時）2度も優勝したプレイヤーだと知ったのだが、同い年の相手に手も足もでないというのは、負けず嫌いの鈴音には我慢できなかった。

以降、鈴音はISの訓練の合間をぬって、何度もDSで葵と戦ったが、今のところ戦績は全戦全敗。

鈴音が日本に再び行くことになって、最も会いたかったのは一夏

だが、次点は葵だった。その理由は再戦のため。ニュースで2人もISS学園にいることは知っていたが、学園に来て最初に会ったのが葵であったことは、実は結構な驚きだった。

「（仕方ないわね）」

背を向け歩き始めた葵を見て、鈴音は覚悟を決める。

葵という男子がどういう人間なのかまだよく分からないが、鈴音は葵を振り向かせるだろうと思われる言葉を1つだけ噂で知っていた。言うのは大変不本意ではあるのだが。

「意気地なし。これだからDSをやっている男子はダメね。まあ、DSなんて低俗なゲームしか取り得のないあんたに言っても無駄――」

「おい」

鈴音の想定通り、葵は振り向いた。ドスの効いた声と鋭い目つきを携えて。

「DSを低俗なんて言うのは許さん。だいたいおまえは、その低俗なゲームで俺に勝てたことなど1度もないだろうが！」

自分で誘導した結果とはいえ、鈴音は葵の急変にすこしビビっていた。

この女尊男卑の世界では、男がこのように女性を頭越しに怒るという場面はかなり珍しく、学園の女生徒たちが葵を敬遠しているのはこのあたりが理由だろう、と鈴音は思う。

「ふ、ふん！ もう昔のあたしと同じなんて思わないでね。なにせあたしは、中国の代表候補生なんだから！」

「たかだか代表候補生だろうが！」

「なんですって！」

努力の結果を、たかだかなんて言葉で片付けられ、鈴音は自分が熱くなるのを感じた。

「決めた！ 今すぐあんたを叩き潰す！」

「上等だ！ 返り討ちにしてやる！」

ちなみにこの様子を売り言葉に買い言葉という。両者とも自業自得だ。

「・・・どうしてこうなったんだ」

公園での口論から1時間後。冷静になった葵は、1時間前の自分を殴ってやりたい衝動に襲われていた。

どうにも自分はDS関係になると冷静ではいられなくなる。そのことを分かっているのだが、葵は前回のセシリアに引き続き、今回も自分を制せなかったことに大きく落胆していた。

「（決意した矢先にこれか・・・）」

鈴音には、関わらないと決意した瞬間にこれである。というよりも、最近何かを決意したその直後に不運や不幸に巻き込まれている気がする。葵はそう思った。

「それにしても、どうして本当にこうなったんだ・・・？」

葵は眼前を見ながら同じ事を呟く。

目の前にいるのは、鈴音。しかも自身のIS『甲龍』を装着した姿でいる。そして、何を隠そう葵自身もラファール・リヴァイヴを装着済みである。

公園での口論後、DSで戦うために再びゲーセンに向かった葵と鈴音だったが、ゲーセン付近で葵を探していたファンを遠目に見つけたため、行くのを断念した。

その後、どうしようかと葵が考えていると、「当てがある」という鈴音に従い来たのがIS学園だ。

ちなみに、現在の場所は第2アリーナ。そこを使っていた生徒に鈴音が頼み込んで貸してもらい、ここで葵と鈴音は模擬戦をするようになった。いつの間にか。

「なんでDS対戦のはずがISになったんだ？」

「どっちも似たようなものでしょ！」

鈴音がヤケクソぎみに叫ぶ。どうやら彼女もなんでこうなったのかわかっていない様子だ。

人間、頭に血が上ると行動に統一性が持てないようだ。

「確かにそつくりだがな・・・」

「もういいでしょ！ と・に・か・く。この甲龍であんたを倒す

わ！」

「・・・仕方ない。自分が言ったことへの責任は取る！」

こうして2人の戦いは始まった。

「（先制する！）」

葵はスナイパーライフルを呼び出し、射撃を行う。狙撃と即座射撃が得意な葵の得意攻撃パターンの1つだ。

「甘いわ！」

葵の攻撃を予測していた鈴音は、弾丸をかわし葵に接近する。

しかし、葵も慌てずにわずかな動作でスナイパーライフルを動かし、照準を鈴音から外さずに攻撃を続ける。

どちらもDSとはいえ、何度も戦った仲である。初期行動は予測済みだ。

しかし、そうすると鈴音のIS：甲龍の情報を持たない葵が不利だった。

「（甲龍の固定武装は背中の大型実体剣のみ。鳳さんの戦闘スタイルを考えても近接仕様だとは思うが・・・）」

そう半場結論を出しながらも、葵は自信が持てない。理由は甲龍の肩のアーマーにあるパーツ。少なくともバーニアや拡張領域拡大装備などではない。それが何なのか分からない。

「相変わらず正確な射撃ね。このあたしが近づけないなんて」

「そっちは成長したな。スナイパーライフルとはいえ、直撃させられないとは思わなかったよ」

「驚いた？」

「ああ」

「・・・あんまり驚いてないわね。なら、これならどう！」

瞬間、鈴音の肩のアーマーがスライドする。そしてそれが光を放つより先に葵は回避行動を取った。

回避した葵の横を突風を伴った何かが通り過ぎる。

「見えない弾丸？　・・・いや、違う。衝撃波か！」

「あたり。その名も衝撃砲『龍咆』っていうのよ」

突風を伴った何かではなく、衝撃によって突風が作られていたようだ。

さすがに不可視の攻撃なんて規格外武装はDSには存在していない。葵にとってこれは初めて目にするISの知らない武装だった。

普通に考えれば葵が不利な状況。しかし――。

「ふっ・・・面白い！」

葵は似合わない不敵な笑みを浮かべていた。

その日、一夏は箒やセシリアと共に近日に控えたクラス対抗戦に備え第3アリーナで訓練をしていた。

「なあ、箒。これっていったいどうやるんだ？」

「・・・くいつて感じた」

「だから、それがわからないって」

相変わらず要領の得ない箒の説明に一夏はうんざりしていた。かといって、セシリアに聞けば細かすぎてわけの分らない答えが返ってくる。正直、どちらのコーチも悪い意味で甲乙付け難い。

「一夏さん、真面目にやって下さい。もうクラス対抗戦まで日はないんですよ?」

「わかつちやいるけどさ・・・」

「けど、どうしましたの?」

「・・・いや、なんでもない」

セシリアに対し、一夏は何も言えない。さすがにコーチをしてもらっている手前、正直に「2人の説明は全く分からない」とは言い辛かったのだ。

「あれ？」

そのとき、一夏は気付いた。いつの間にかアリーナにいた生徒の数が減っている。つい先ほどまでは、ところ狭しと生徒がいたはずだ。

「どうした、一夏？」

「いや、人が減ったな、と思ってさ」

「そう言われれば、そうですね」

一夏に続いて、箒とセシリアも周りの様子に気付く。そして、今もまた何人かの生徒がアリーナを出て行くのが見えた。

「ちょっとよろしくて？」

その一団を、セシリアが髪を後ろに梳きながら弾く仕草をしながら近づく。相変わらず気取ったポーズである。

「ここいた皆さんがどちらへ行ったのかご存知かしら？」

「えっ、知らないの？ 第2アリーナで中国の代表候補生が模擬戦をしてるんだって。みんなそれを見に行ってるんだよ」

「鈴が？」

それを聞いていた一夏が思わず呟く。鈴音とは、先日にも昔の約束を忘れていると怒られ、少々疎遠ぎみとなっている。

しかし、当の一夏は未だになんで怒られたのか分かっていなかった。約束は覚えていたのに。

「えっ、織斑君！？ ね、ねえ、よかったら、わたしと一緒に第2アリーナにそれを見に行かない？」

「えっと、そうだ「結構だ」「間に合ってますわ」・・・」

一夏が答えるのを遮って箒とセシリアが答える。なぜ俺に答えさせてくれないのか、と一夏は思ったが、反論はしないほうがいいだろう。今までの経験から。

「それより、鳳さんのお相手は誰ですか？」

「友達が言うには、悪いほうの男の子だって」

IS学園に男は2人いる。そこに悪いほうと付けば、それは一夏

ではなく、もう1人のほうである。ちなみに一夏の場合がかっこいいほうと付くだろう。

「立花が鈴と？」

2人の接点が分からずに一夏は首を傾げる。とは考えるものの、そもそも葵の交友関係を一夏は全く知らないのだが。

「とりあえず、行ってみるか？」

「私はかまわん」

「わたくしもよろしくてよ。一度立花さんの戦いを客観的に見てみたかったですし」

一夏に箒とセシリアはそう答える。

「（そういえば、俺って立花の戦い見たことないや）」

クラス代表決定戦のときは、対戦の公平さを保つため、一夏はセシリア・葵戦を見ていない。

第3アリーナへ向かいつつ、一夏はそう思っていた。

第7話 リベンジ（後書き）

今回は葵以外の視点を多く入れてみました。

理由としては、他の小説を読むとそうした方が面白いと思ったからなんです、読み辛かったでしょうか？

感想お待ちしております。では。

第8話 再戦の果てに（前書き）

祝！ お気に入り登録数50突破！！

みなさんに、飽きられないよう今後も頑張ります。

第8話 再戦の果てに

鈴音はここぞとばかりに葵に猛攻を仕掛けていた。彼女は知っている。DSに甲龍の龍咆と類似する武器は存在していない。つまり、葵はこの武器に対しての対抗・対策手段を知らないはずだ。攻めるなら今を置いて他にない。

「ほら、堕ちなさいよ！」

龍咆の連射が葵を襲う。

「ぐう・・・！」

葵が苦悶の声を出す。直撃だけは避けているものの、過半数の衝撃波が彼の身体のだこかしらにかすり、ラファール・リヴァイヴのシールド残量を削っていく。

ただ、葵も黙ってやられているわけではない。

「あぐっ・・・！」

鈴音も苦悶の声を上げる。

葵は鈴音が龍咆を発射するときに行う僅かな静止動作を見逃さず、そのタイミングでスナイパーライフルを撃ち込んでいるのだ。ただし、こちらにも直撃は少なく、ほとんどがかすっているくらいである。

「龍咆を掻い潜ってよく攻撃できるわね。でも、それじゃあたしに勝てないわよ！」

確かに。威力はスナイパーライフルの方が高いが、当たっている弾数が違いすぎる。今のところ、鈴音より葵のシールドエネルギー残量の方が低かった。

しかし……。

「……」

葵は鈴音の挑発に反応せずに、ずっと鈴音を見ていた。普段、女子と目を合わせない葵から考えると、ある意味異常な行動である。

「な、なによ？」

葵の鋭い眼光、鈴音は戸惑う。その目は、普段のものとも、怒った時のものとも違う。鈴音の一挙一動を見逃さないような突き刺す

視線だった。

「何だかよく分からないけど、これで終わりよ!」

葵の眼光におされて鈴音は再び龍咆を発射する。

「えっ、うそ!？」

鈴音は驚きの声を上げた。さきほどまでは龍咆を回避すべくあちらこちらに動き回っていた葵が動かない。

ドン!!

当然の事ながら、龍咆の直撃を受けた葵はその後方へ吹き飛ばされていった。

「戦っている最中にボケっとしてるから——」

「いいのか？」

「えっ？」

「この距離。凰さんにとってはいいのか？」

葵の言葉で、やっと鈴音は気付いた。

まず、葵が吹き飛ばされた距離だが、龍咆の直撃を受けたにしても長すぎる。さらに、吹き飛ばされたはずなのに、葵の体勢は地面にISの脚部を着けたしつかりしたものだっただ。

「まさか・・・ワザと当たって!？」

「ターゲット、インサイト」

抑揚なく呟く葵に鈴音の背筋が凍る。

葵のスナイパーライフルから、正確無比な弾丸が火を噴いた。

「こんのー!」

動揺しながらも、鈴音は自分のど真ん中に向かってきた弾丸を右へ回避する。

しかし、鈴音はそこで驚くべきものを目にする。

回避した先に、すでに放たれた弾丸を甲龍のハイパーセンサーが探知したのだ。

「初弾回避行動は右側が高確率」

そう呟く葵だが、それを唯一聞ける相手はスナイパーライフルの弾丸に直撃し、吹き飛ばされていた。

「ま、まだ！」

「直撃後の移動先は基本上方」

体勢を立て直すため、上方へ移動した鈴音に待っていたのは、弾丸の雨。葵はいつの間にかスナイパーライフルをしまい、両手にアサルトライフルを構えていた。

「だったら！」

「足止めを食らうと、特攻。そのとき回避は考慮しない」

次に行うはずだった行動を先に言い当てられて、鈴音はその場に止まる。

「・・・違ったか」

「あってるわよ!!」

残念そうに呟く葵に、鈴音もついツツコミを入れた。

そう、これが本来の葵の戦い方だ。相手の動きやクセ、武器の情報収集をしつつ、同時進行でそれを解析し、理詰めで相手を封じ込める。

前回のセシリア戦では、それをする間もなく、圧倒的な技量差で勝ってしまったが、それは本来の葵の戦い方ではなく、単純に同じ遠距離型とのセシリアは葵にとって相性がよかっただけに過ぎない。

そもそも、DS内で葵と同じくらい操縦技量を持つプレイヤーは実は多い。この戦い方を獲得しなければ、葵も今頃は世界大会3連覇なんてできていなかっただろう。

「相変わらず嫌な戦い方をしてくるわね」

「褒め言葉として受け取るよ」

「いいわ。でも、今日勝つのはあたしよ!」

鈴音は、2本ある青龍刀『双天牙月』を連結し手に持つと、葵へ猛加速して突っ込んでいった。

「あれが立花か・・・」

観客席に着いた一夏はアリーナでの戦いに目を向けていた。

当初こそ、鈴音が葵を押しているように見えたが、今は一転して葵が鈴音を押している姿が見える。

「やはり強いですね。とても量産機を使っているようには見えませんわ」

唯一葵との戦闘経験があるセシリアも改めて葵の強さを実感していた。

「ああ。まるで鈴が弱いように見えるくらいだ」

一夏はそう言ったものの、そうではないことは誰の目にも分かる。

鈴音は強い。機動・射撃・近接攻撃など高い技量で習得しているのが、直接戦っていない一夏でも簡単に把握できる。

ただ、それでも葵には及ばない。それだけである。

一夏は拳をぎゅっと握る。

学園での葵の悪い評判は一夏も耳にしている。それに自分の評判もだ。比べるまでもなく一夏の方がいい評判である。

前々からその評判に疑問を持っていた一夏だが、目の前の戦いをみてさらに疑問を深めた。それは、自分は皆がいいと言うほどに葵に勝っている部分があるのか、ということ。

別に一夏は周りの評価が気になるということではない。けれど、勉強・ISの操縦技術において劣る自分が、勝っている葵より評判がいいという事実には、理不尽さを感じていた。

そして、それ以外に一夏の胸に宿る気持ちがあった。

それは一夏にとって、羨望とも嫉妬とも区別がつかないものだ。

「俺は・・・いつか立花に勝てるかな？」

その呟きは小さすぎて誰にも聞こえない。

一夏はまだ気付いていない。

それは、彼が人生で初めて感じたライバルライバルだということを。

「いやあああ!!」

双天牙月を振りかぶりながら突っ込む鈴音。

葵はアサルトライフルで応戦するが、鈴音のスピードは止まらない。

「特攻。無謀・・・ともいえないか！」

葵は左手のアサルトライフルを投げ捨て、同時にショートブレイドを取り出し、それで鈴音の斬撃を受け止め――

「その程度じゃ。あたしを止められないわよ!!」

「! 重い!」

ショートブレイドが断ち切られ、双天牙月が葵を切り裂く。斬り飛ばされ、大きくシールドエネルギーを削られながらも葵は体勢を

崩さず、持ちこたえる。

「これが、第三世代型の武器の切れ味か・・・」

「そうよ。量産機の短剣なんて双天牙月の前じゃ粘土も同然よ」

何でもないように装っているが、今の一撃は葵にとってかなりマズい。最初の方に蓄積されたダメージと相まって、葵の残りエネルギーは半分を切っていた。

「（・・・油断した。まさかブレイドごと斬られるとは・・・）」

そう内心で焦る葵だったが、実は鈴音も見た目ほど余裕はなかった。

「（今の一撃。最高の出来だったのに、完全に見切られていた。もし、短剣の強度がもう少し高かったら、右手のライフルでカウンターを食らって終わってた）」

機体ダメージも心的ダメージも両者五分と五分。しかし、両者の距離は鈴音向きだ。

「「ここで決める！」」

きしくも、2人とも同じ言葉を叫ぶ。

鈴音は龍咆を発射する。これは、まだ葵には見切られていないという意識が鈴音にあったからだ。

葵は突っ込む。次の鈴音の手は龍咆だと確信していたからだ。

この2人の考えの違いが勝負の命運を分けた。

「その武器の見切り方はもう考え付いている！」

葵は鈴音に向かって突っ込みながらも、グレネードを地面に投擲。爆煙が上がる。

「何を考えているの？」

「龍咆が見えないのは、空気が無色だからだ。だったら、黒い煙の色づけをしてやれば・・・」

「あっ！」

鈴音もようやく葵の意図に気付く。アリーナ内に広まった煙。そこに龍咆を撃つと、衝撃波によってその煙がなびく。衝撃波の形に。

放たれた龍咆を目で確認し、葵は難なくそれを避ける。

「これで終わりだ」

葵の放った右手のアサルトライフル、左手のグレネードが吸い込まれるように鈴音に命中した。

これは約1年前の話である。

当時、帰国したばかりの鈴音は、現地の学校へ転入すると同時に政府が定めたIS適正検査を受けた。

結果は陽性。つまりは、適正ありだ。

しかし、それは鈴音にとって決していいことにはなりえなかった。

その時の鈴音は、両親が離婚。帰国したことにより好意を寄せていた一夏とも離ればなれなり、心が追い詰められていた。そこにきて、政府に要望により、ほぼ強制的にISの訓練を受けることとな

り、1ヶ月も経たない内に心身ともにボロボロな状態に陥っていた。

当然、そんな状態でISの訓練が実に入るわけもなく、毎日教官に怒られる日々だ。

ある日のことだ。家に帰っても離婚したばかりの母親とはうまくいかず、鈴音は自暴自棄になり家を飛び出した。

行く当てもなく、ネオン街をふらふらと歩いていた鈴音は、ふと目の前にある建物に気付いた。

「ゲーセンか・・・」

特にやりたいゲームがあつたわけではないが、あまりふらふらしていて変な男に声をかけられても厄介だ。そう思って、鈴音はゲーセンに入った。

店内のゲームを呆然とみて回る。

きらびやかな光や騒々しい音楽は今の自分には合わない。

そう感じて、やはり出ようと思った鈴音が見たものは、最近訓練でよく見る機体と似たような機械であつた。

「Dream Soldier・・・？」

訳せば夢の兵士。

その名前をみた瞬間、鈴音は怒りを覚えた。

「夢の兵士なんて、ばっかみたい」

毎日毎日自分の身体に負担しかかけないIS。それと似たものにそんな綺麗な名前がついていることが鈴音は許せなかった。

鈴音はDSをプレイすることにした。1度やってみて、その後にこのゲームをボロクソに貶してやろうと考えたのだ。

最初の相手は簡単に倒せた。たぶん初心者だったのだろう。それに加えてDSがISとかなり似ていたため、操縦がスムーズに行えた。

「ほら、やっぱりばかみたい」

鈴音は悪態をつく。訓練では全然倒せないISがDSでは簡単に倒せる。所詮ゲームは、ゲームである。

眩いた直後に、鈴音のDSに対戦が申し込まれ、対戦相手のプレイヤー名が表示される。

「AOI・・・」

エーオーアイと呼んだがしっくりこない。ふと、相手のプレイ場所が『j a p a n』と表示されているのに鈴音は気付いた。

「A O I・・・アオイでいいのかな？」

まあ、名前なんてどうでもいいか。そう思って、鈴音は1度だけと決めたはずのDSをもう1度プレイした。

『Y O U L O S S』

数分後に表示された画面を鈴音は信じられない様子で見つめた。

「う、うそ。あたしがこんなに簡単に・・・」

呆然と呟く鈴音だったが、次に表示された文字に目を見張った。

『もう1度対戦しよう』

DSには簡易ながらチャット機能が存在する。これは今のA O Iという対戦相手からのメッセージだった。

「バカにして！」

相手からしてはそういう意味で送ったメッセージではなかったのだが、その時の鈴音にはそう感じられた。

鈴音は即座に再戦を選んだ。

連続して5回ほど戦い、その全てで鈴音はAOIというプレイヤーに惨敗した。

「なんで、なんで！」

鈴音は叫ぶ。感情はぐちゃぐちゃとして、もう自分でもわけが分からなかった。

ISでも勝てず、DSでも勝てず、鈴音はもう自分がどうでもよくなっていた。

「あたし・・・あたしは・・・」

ピコーン！

俯いていた鈴音はその音に反応して顔を上げた。

『君強いな』

「えっ？」

それは、またもやAOIからのチャットメッセージだった。

『そして、もっと強くなるよ』

次々に流されるメッセージに鈴音は目を離せない。

『またいつか、戦おう』

「うつ・・・」

鈴音は目頭が熱くなるのを感じた。

『またな』

「うつ、うわあああああんんん！！」

鈴音は大声で、ただ見つともなく泣いた。

帰国してから辛かった。

父親のいない家。

一夏のいない学校。

ただ辛いだけのIS訓練。

誰も認めてくれる人がいない。

さみしくて、むなしくて、かなしかった。

それでもずっと我慢した。

けれど、今。

自分を認めてくれる人が現れた。

顔も知らない。声も知らない。どんな人物なのか分からない。

けれど、確かに今。

鈴音は確かに救われた。

ゴールデンウィークが終わった次の日。

その昼休みもやはり葵は校門近くのベンチにいた。

「平和だな・・・」

数週間前と同じ。というよりも、ここに来るたびに毎回言っている言葉を今日も吐きながら、葵はパンを口に運ぶ。

なんだかんだで、葵は休み中にDSをプレイすることはできず、昨晩にそれについてマイクに小言を言われていた。

それが、いつの間にか娘への小言から相談、果ては小さなころは素直で可愛かったなどとの内容に変わっていき、電話が終わったころには日付が変わってから3時間が経っていた。

つまりは、葵は眠い。

「ふわああ」

大きな欠伸をして、葵はパンを食べるのを止める。

食事よりも、今は睡眠の方が身体が求めている。というか、とにかく眠い。

葵はベンチに横になった。

昼休みが終わるまで後数十分。それまで寝ていようと葵は考える。

5月の暖かな日差しは、即座に葵を夢の世界へ誘った。

「こちよ、こちよ。」

「（ん？）」

眠っていた葵は、その中で鼻元に違和感を覚えた。

それは、どんどん強くなっていき……。

「へっくしゅん！」

自身のくしゃみで葵は飛び起きた。

「な、なんだ？」

「あ、目が覚めた？」

重いまぶたを必死に開けた葵が目にしたものは、先日の騒動の張本人である鈴音だった。手には何故かねこじやらしが・・・。

「それが寝ている人間にすることか？」

「だって、アンタ無防備過ぎるんだもん。まるでやって下さいって言ってるみたいだったわよ」

それは言い訳にもならない、と葵は思ったが、言うだけ無駄と自分で自分の意見を切り捨てる。

葵は無言でベンチから起き上がり、そのまま鈴音の横を通り過ぎる。

昨日（といっても数日前）の今日である。さすがに葵も今は、いや今も今後も鈴音と係わり合いになりたくなかった。騒動はもう十分です。

「って、ちよつとどこ行くのよ？」

「教室」

振り向くことなく淡々と葵は答えた。無視してもよかったが、それで突つかかられても嫌なための措置だ。

「ねえ、アンタ。今日の放課後はヒマ？」

葵の隣に並んできた鈴音がそう聞く。ちなみに隣に並んだ瞬間、葵はその距離を大きく一步取った。

「ヒマじゃない」

嘘で――

「嘘ね」

葵が心で思うより先に、鈴音がそれを口にする。なぜ、バレるのか？

「ヒマだとして、俺に何の用だ？」

「再戦」

葵は自身の耳を疑った。それはこの前やったはずだ。

「もうやったよ」

「あたしは勝ってないわ」

「・・・」

もしかして・・・勝つまでやるつもりだろうか。葵は絶望に包まれた。

「不戦敗で」

「イヤ」

「・・・・・・・・・・」

この調子だと、わざと負けても鈴音は文句を言いそうだ。

仕方なく、葵は最終手段を取ることに決めた。

それは――

「あ！」

隣で声を上げる鈴音を置いて、葵は走り出す。最終手段、それは逃げることである。

「ちょっと！ 待ちなさいよ！！」

遠ざかる鈴音の声を耳にしながら、葵はさらにスピードを上げた。

今日も、葵が求める日常は遠かった。

第8話 再戦の果てに（後書き）

作者の行動。

・ ・ ・ ・ ・ 。 ↑ できた小説を読んでいる

・ ・ ・ ・ ・ 。 ↑ できた小説を読んでいる

・ ・ ・ ・ ・ ? ↑ できた小説を読み直す

・ ・ ・ （汗） ↑ できた小説を見て冷や汗をかく

や ・ つ ・ ち ・ つ ・ ま ・ つ ・ た ・ ! ! !

というわけで、6 / 7話に引き続き、今回も鈴の話。

・ ・ ・ なんですが、これは ・ ・ ・ （汗）

俺って、こういうこと書く作者じゃない。てか、この作品こんな
じゃなかったはず。

まあ、これはこれでいいのかなと投稿します。

感想・誤字脱字報告・批判もお待ちしております。

第9話 クラス対抗戦 そして・・・

ゴールデンウィークから数日後。

この日は先日から告知されていたクラス対抗戦である。

第2アリーナの第一試合は、1年1組代表織斑一夏と2組代表の
凰鈴音。

噂の新生同士の対決とあって観客席は立ち見も含めて満員となり、生徒で埋め尽くされていた。

その大多数の視線を気にすることなく、アリーナ中央に位置する一夏は向かい側で静かに待っている鈴音を見つめる。

「（これが鈴か）」

数日前に葵との戦いで見た姿と少しも変わらないISを纏った鈴音は、一夏のよく知る無邪気な雰囲気と感じたことのない鋭い刃のような雰囲気混ぜ合わせた不思議な空気を漂わせていた。

「（強い）」

一夏は無意識にそう思う。

そして、それは間違っていない。葵との戦いで、彼女は確かに強かった。

「（立花か・・・）」

鈴音と相対しているのに、一夏に浮かんだのはIS学園にいるもう1人の男だ。数日前の自分なら、鈴音のことをもっとよく考えただろう。何せ彼女の転校初日にケンカ別れして以来まともに会ってもいないのだ。

しかし、今の一夏は違う。

葵と鈴音の戦いを見てから、一夏には鈴音とのケンカよりも気になることが心を占めていた。

「（越えてみたい）」

一夏の人生において、友人——葵は認めないが——、いや、誰に対してもそのような思いを抱いたのは初めてだった。

一夏は、自分よりも何かに秀でた同年代と出会うことが稀であった。元々器用で要領がよく、運動も勉強も決定的に劣るということがなかったためだ。さらに、自分より何かに秀でた同年代に会っても素直に賞賛できる性格でもあった。

だから、なかったのだ。越えたい、などと思うことが。

しかし、数日前の葵の戦いを見てから一夏の何かが変わった。

「ちょっと、一夏。何ボーっとしてるの!？」

オープンチャンネル
開放回線で、鈴音が一夏に話しかけてくる。

「しっかりしてよね。柔な試合なんてしたら、絶対に許さないわよ!」

鈴音は、転校初日の一夏とのケンカを忘れていない。半ばプロポーズに近い約束を忘れられていたのだ。乙女の心はひどく傷ついている。この試合で憂さを晴らす気満々だ。

「大丈夫だ。全力できてくれ」

「いいの? 今謝れば、痛めつけるレベルを下げてもいいわよ」

人の多くは鈴音の発言を相手を馬鹿にしたものと取るだろう。

しかし、一夏はそうは取らない。鈴音が一夏にそう言うだけの実

力差が両者には確かにあるからだ。

「いや、全力で頼む。俺は全力の鈴を倒してみたい」

そして、何よりも、葵が倒した鈴音を自分も倒さなければ。一夏はそう考えていた。

「へえ、言うじゃないの。でも、そういうのを――」

鈴音の声を遮って、試合開始の合図が鳴る。

「蛮勇って言うのよ!!」

鈴音は、一夏へ突撃をかけた。

一夏と鈴音の試合が始まった、ちょうどそのころ。

葵はアリーナから遠く離れたベンチに座っていた。手には、今時珍しい両手大のモニターを持っている。

「これ、いつの骨董品だ？ 画面が見づらくて仕方ない」

ブツブツと文句を言いながら葵は持っているモニターを見ていた。

そこに映っているには、一夏と鈴音が現在進行で行っている試合である。

当初試合を見るためにアリーナまで足を運んだ葵だが、途中で諦めた。というより、諦めざるを得なかった。

アリーナの観客席は学生でいっぱいに埋まっている。

つまり、葵の周りは、女子、女子、女子ばかりだ。教室や寮より密度の濃い視線が葵に突き刺さり、さすがに冷や汗が出たので退散。

次いで葵が向かったのは、観客席に入らなかった生徒のための大型モニタールームだ。こちらは、人数が少なかったため、視線は大丈夫だったが、狭い部屋に女子が所狭しとしているのだ。そんな空間にいられるはずもなく、葵はそこも退散した。

ならば、サボってしまおうかと葵は考えた。授業の一環として、試合は見なければならぬことになっていたが、個人的に言えば、別に一夏と鈴音の戦いなど見たくはない。

しかし、現実には葵に優しくなかった。

葵はIS学園において悪い方面で有名な人だ。本人はこっそりとアリーナを出たつもりだったが、その姿をしつかりと目撃され、報告を受けた真耶が葵のもとにやってきた。

数十分の説教の後、葵の事情を聞いた真耶が持ってきたのが、この10年以上前の携帯モニターである。

葵は真耶に試合の感想を提出して下さいと言われていた。しかし、そのために必要なこのモニター。どこにあったのかは知らないけど、こんな中途半端なもの操作方法など知らない。

操作に悪戦苦闘しながら、葵はモニターを見ていた。

「でやあああー!!」

「くっ!!」

鈴音の双天牙月の一撃を、一夏は瞬時に展開した雪片式型で受ける。重い衝撃が一夏の身体に響いた。

「ふうん。初撃を受けるなんてやるじゃない」

鈴音は不敵な笑みを崩さずに一夏に賞賛を贈る。

「鈴の攻撃は前に見たことがあるからな」

「前？　もしかしてゴールデンウィークのときの？」

見てたの？　と聞く鈴音に一夏は頷く。

「そう。じゃあ、この武装も知っているわね！」

鈴音の両肩の武装：龍咆が、スライドして開き、中心の球体が光を放つ。ほぼ同時に一夏の身体は見えない何か、いや衝撃波に殴り飛ばされた。

「ぐあっ！　くそ、本当に見えない！」

「今のはジャブだからね」

ジャブ
ストレート
牽制の次は総じて本命がくると決まっている。

一夏は身構えて次の攻撃に備えた。

「次は避ける！」

「無理ね」

鈴音は、一夏の決意の一言をそう切り捨て、次々に龍咆を放つ。

一夏は見えない攻撃を必死に避けようとする。しかし、その意に反して次々と衝撃が一夏を襲った。

龍咆の衝撃を殴ると表現するなら、今の状態はまさにタコ殴りである。

まさに一方的な展開だ。

「こんなに厄介な武器だったなんて」

以前、葵との試合で傍目に見たものと、今実際に受ける龍咆の印象の違いに、一夏は自分でも無意識に弱音を吐いた。

「この前の試合を見てたなら勘違いしてるかもしれないけど、龍咆はそう簡単に回避できるものじゃないのよ」

鈴音が言う通り、普通は不可視の攻撃を初見でほとんど回避するなんてことは普通できない。だが、この前は鈴音の相手がそれ以上に普通じゃなかっただけである。

「だが、俺だつて！」

——俺だつて、立花のようにできるはずだ！

そう奮い立つ一夏に応えるように白式のスピードが上がり、その通った後を衝撃波が突き刺さってゆく。

「思ったよりかわすじゃない。でも、甘いよ！」

「な、なに！？」

鈴音は龍咆をやや拡散させるように射撃方法を変える。これは集中したダメージは与えられないが、小回りが利く相手には有効な攻撃手段だ。

「だが、まだまだ！」

一夏は叫び、さらに自分を奮い立たせる。白式も一夏に応え、さらに速度を上げた。

「まだスピードが上がるの!？」

鈴音は驚愕の声を上げる。

白式のスピードは彼女の知る既存のISの最高速度を凌駕しつつあった。その機体とて、高機動装備を着けた上でのスピードだ。だが、白式は通常形態でそれほどのスピードを出している。なんというデタラメスペックな機体なのだろうか。

「いける!」

一夏は白式の圧倒的なスピードを体感すると確信した。

今、このままの速度を維持しながら鈴音に接近すれば、雪片式型の一撃を入れられるはずだ。

自分を信じて一夏は高速で鈴音に接近する。

「そんな直線的な動きじゃ、あたしの攻撃は避けられないわよ!」

「承知の上だ!」

真っ直ぐ突っ込んでくる一夏に鈴音は龍咆で応える。

一夏はその衝撃を両手をクロスさせて防御しながら、白式のワンオフ・アビリティー：零落白夜を発動させた。雪片式型がエネルギー刃を発現させ、シールドエネルギーを犠牲にしながらもバリア無効化という絶対的な能力が宿る。

「っ！」

急接近する一夏が持つ雪片式型のエネルギー刃の光を見て、鈴音は息をのむ。

彼女も確信する。

双天牙月で受けようにももう間に合わない。この一夏の一撃は間違いない自分を捉えると。

「うおおおお！！！」

——当たる！

一夏の思いとともに、刃が鈴音を捉えようとした瞬間。

ズドオオオオン！！！！

巨大な衝撃がアリーナ全体を走った。

「な、なに？」

「これは、いったい・・・？」

鈴音と一夏は同時に眩き、アリーナ中央を見る。

そこは巨大なクレータができ、真っ黒い煙がもくもくと上がっていた。

次いで走る光と2人のISから鳴る警告音。

「「！！」」

黒い煙の中から放たれた太いビームを2人は寸前で回避した。

「所属不明の機体？ いきなり攻撃するなんて・・・」

白式から送られてくる情報を一夏は今一飲み込めない。それほど彼は混乱していた。

『織斑！ 凰！ 試合は中止だ。ただちに退避しろ！』

千冬からの音声通信が入る。その緊迫した声が一夏に届く。

「一夏、聞いたわね。今すぐピットに戻りなさい」

「戻れって・・・鈴はどうするんだ！」

「あたしは時間を稼ぐわ」

「俺も残る。鈴だけ置いて俺だけ逃げられるか！」

「弱いあんたがいても邪魔になるのよ！ 早く行って！」

「だが――」

一夏は言葉を止めた。煙の中からゆっくり浮上してくるものが見える。

「鈴！」

「来た！」

双天牙月を構えて戦闘態勢をとる鈴音。一夏もそれに倣った。

煙から浮上してきたものが、その姿を現す。

異形な姿だった。全身深い灰色で統一されたそれは、一応人型だった。しかし、その全長は2mを越え、手足は異様に長く、首から上がない。さらに頭部の不規則に並ぶセンサーレンズと身体のいたるところに目立つ姿勢制御スラスタが不気味だ。

「あれはISなのか？」

その姿を見た一夏が思わず呟く。

「さあね。相手に聞いてみるわ。・・・これでね！」

双天牙月を振り回し、なにやら物騒なことを言う鈴音に、一夏は一瞬、状況も忘れて笑みを浮かべこう思った。

自分の幼馴染は全く臆していない。なんて頼もしい奴なんだろうと。

『ふ、2人とも、何をやっているんですか！ 今すぐ戻って下さい！』

2人に真耶の通信が入る。かなり慌てた声だ。

『すぐ先生たちがISで制圧に行きます』

「それまで俺たちが食い止めます。それより、早くみんなを脱出させてください」

まだアリーナの観客席には退避できない生徒が多数残っている。今、一夏たちが脱出すれば、観客席の生徒に犠牲が出る可能性が高くなるだろう。

『観客席の皆さんのことも先生たちに任せてください。ですから、織斑君と鳳さんも――』

「一夏！」

「おう！」

浮遊してきた敵ISが突如身体を傾けて2人に突進してくる。

全体的に大きいため、ゆっくりとした動作に見えるが、その加速と速度はかなりのものだ。

「鈴。やるぞ！」

「しょうがないわね。あたしの足を引っ張るんじゃないわよ！」

2人は己の武器を携えて、敵ISと交戦を始めた。

「もしもし。織斑君！？ 凰さん！？ 聞こえますか！？」

ピットの真耶が必死に一夏と鈴音に呼びかけるが、2人が敵I Sに接近した瞬間、通信が切れてしまった。

「やはりジャミングが働いているな」

その様子を見ながら千冬はブック型端末の画面を数回叩き、モニターの表示を切り替える。このアリーナのステータスチェックだ。

「遮断シールドがレベル4に設定、扉もロックされ、外部への通信もできん。これでは救助に向かうことも退避することもできないな」

「何のん気に言っているんですか、織斑先生！」

珍しく、イラついたように叫ぶ真耶。

「落ち着け。こういつときこそ冷静に対処すべきだ。まあ、コーヒーでも飲め」

「あ、ありがとうございます。って、しよっぱい！ 織斑先生！これ塩じゃ……」

「……。さて、敵のISだが――」

「誤魔化した！？ 織斑先生、今誤魔化してますよね！？」

「敵のISだが、かなり高度なジャミングとハッキング能力を持っているようだ。しかし、奴が戦闘を行っている今ならコントロールを取り戻すことができるやもしれん。さあ、山田先生。仕事は山ほどあるぞ」

「……。もういいです」

理不尽な上司にうなだれながら、真耶は手早くコンソールをたたき始めるのだった。

最後は和んだピット内だったが、それでも千冬も真耶も内心に焦りを感じていた。

アリーナは大変な激闘の最中である。

大切な生徒、或いは弟が危険な目に合っているのだ。冷静なはずがない。

だから気付かなかった。

アリーナの外では、別の戦闘が始まっていたことに。

第9話 クラス対抗戦 そして・・・（後書き）

更新が遅れました。

なのに短くてごめんなさい

第10話 守るための誓いと越えるための覚悟（前書き）

お気に入り登録者数100名手前になりました。

登録してくださったみなさん、ありがとうございます。

第10話 守るための誓いと越えるための覚悟

アリーナに謎のISが進入する直前のことである。

外にいた葵はその光景を見ていた。

「・・・なんだ？」

風きり音に葵が空へ目を向けると、2つの物体がどんどん近づいてくるのが見えた。

片方は首のない巨人である。巨人が腕をアリーナへ向けると、眩い光を放ち、巨大なビームがアリーナの遮断シールドを貫く。そのまま、巨人はアリーナへ消えた。

しかし、それに気を取られてる余裕が葵にはない。

「何!？」

なにせ飛来したもう一体の方が、葵の目の前に落ちてきたのだから。

「くっ・・・！」

落ちた衝撃で勢いよく吹き付ける埃と風を腕で制しながら、葵は落ちてきた物体を見た。

さきほどアリーナへ向かったほうもだが、こちらはそれに輪をかけた異形の形をしている。

葵が最初に目にしたのは、その下半分。一对のハサミの付いた触肢、四対の歩脚、長い先端の尖った尾。一言で言えばサソリの形そのものだ。ただ、ハサミの刃と刃の間と尾の先端に砲身がついていたりと細かな違いがある。

上半分は、上半身だけが人の形をしていた。その上半分も首はなく、腕代わりのマニピュレーターも肘までしかない。ただし、その肘から先は、馬鹿みたいに巨大なガトリング砲を付けており、肘そのものも、よく見ると関節稼動域がかなり広い。また、胸部に開閉可能な巨大なトビラのようなものがうつすら見える。

一言で説明すれば、葵の目の前にいるのは、上半身は人型、下半身はサソリ型のある意味ケンタウロスみたいな機械だった。全長は3、4、いや5mを越えている。

「これは、いったい何なんだ？」

おそらく、目の前のこれを見ても誰もがそう言うであろうことを葵も言った。

そして気付いた。

その頭部にある物体に。

「ハイパーセンサー!？」

センサーの類はこの世界でも多く開発されているが、ハイパーセンサーを付けた兵器というのは現存ただ一種。

「これでもISだと言っのか!？」

葵がそう叫んだ瞬間。異形のISもどきのガトリング砲が葵に向けられる。

「っ!!!」

心臓を締め付けられるような感覚を必死に抑え、葵は自身の力が許す限りの勢いで横に飛ぶ。

着地も考えない飛び方をしたため、転がるような状態になった。

転がりつつも葵が見たのは、先ほどまでいたベンチがガトリング砲によって蜂の巣、いや、跡形もなくなった光景だ。

「う……あ……」

死の恐怖が葵を襲う。ISがあれば戦うこともできたろうが、専用機持ちではない葵は常時ISをもっているわけではない。

つまり、今の葵は完全な無力であった。

「（落ち着け！ 震えるな！ 動け！ そして、考えろ！）」

恐怖に支配された葵だが、自身に残った冷静な部分が必死に身体に働きかける。

震える足を必死に抑え、葵は走り出した。

アリーナとは逆の方向へ。

アリーナの戦いは、一夏と鈴音の必死な攻勢にも関わらず、劣勢な状態だった。

「くっ・・・！」

一撃必殺の間合い。その攻撃をかわされて一夏は苦悶の声を出す。

「一夏！ ちゃんと狙いなさいよ！」

「狙ってるっつーの！」

これで4度目。一夏は必中の攻撃を仕掛けてきたが、敵のISの機動性は尋常ではなく、その全てをかわされていた。

「一夏！ 来るわ、右から！」

「あつと！ すまない鈴」

「お礼はいいから、次いくわよ！」

一夏の攻撃が当たらないにも関わらず、二人が圧倒的な劣勢に陥らないのは、一夏の想像以上に鈴音の技量と援護力が高かったためだ。

先ほどのように、時々相手の動きを完全に見切った助言をくれることが少ないがあった。

その戦い方はどことなく葵を連想させる。

「一夏！ 今よ！」

「うおおおおお！！！」

鈴音が作ってくれた大きなチャンスに、一夏は5度目の攻撃を仕掛けた。

しかし、さも当然のごとく、敵ISは紙一重でかわす。

「くっ・・・また——」

「一夏どいて！」

一夏の斬り込んだ後に、今まで龍砲の援護射撃しかしていなかった鈴音が双天牙月を振りかぶり突進してきていた。

「ちょ・・・鈴！」

「頭下げなさい！」

一夏が慌てて頭を引っ込めると、そのちょっと上を双天牙月の巨大な刃が通り過ぎる。

敵ISも不意を突かれたのか、戦って初めての一撃が綺麗に入っ
た。

斬り飛ばされた敵ISがアリーナの地面に突き刺さる。

「あぶないだろ！」

「でも、手応えはあったわ」

「なら、やったか？」

その問いに鈴音は答えず、煙の舞う地面を見つめる。

その瞳が煙の中に動くものを捉えた。

むっくりと何事もなかったかのように、敵ISが立ち上がる。胸の部分には大きな傷ができていた。

「無傷じゃないが、まだまだ動けそうだな」

「ああもうっ、めんどくさいわねコイツ！ 動きが機械染みていて気持ち悪いのよ！」

鈴音が焦れたように叫びを上げる。

「機械か……。なあ、鈴。あれって本当に人が乗っているのか？」

「何言ってるのよ？ ISは人が乗らないと動かないじゃない」

「そうなんだが、仮に無人だしたらどうだ？」

「どうって……。無人だしたら何？ 勝てるっていつの？」

「ああ」

一夏は鈴音に見せるように雪片式型を掲げる。

「無人機なら全力の零落白夜を叩き込める」

「全力も何も、その攻撃自体が当たらないじゃない」

「うつ……。」

うまく反論できずに一夏は言葉が詰まる。

「まあいいわ。あたしが何とかしてあげる」

「鈴・・・」

「そのかわり！ 次は絶対当てるのよ、いいわね！」

「ああ、任せろ！」

2人の最後の反撃が始まろうとしていた。

アリーナの反対方向へ走り出した葵だが、それは考えなしの結果ではない。

「（こいつをアリーナへ連れ込んだら大惨事になる）」

葵がまだ混乱した頭でその考えを浮かべられたのは一種の奇跡だった。

アリーナには葵の目の前のISと一緒にいた機体がすでに乱入している。中がどういう状況か分からないが、新たな混乱の火種を入

れるわけにはいかない。

それに、アリーナへ向かわないのはそれだけが理由でもない。

「（グラウンドまで辿り着ければISがある!）」

IS学園において授業で使うISを保管してある場所が数箇所あるが、その1つはグラウンド脇の倉庫である。

葵の記憶が正しければ、数機の打鉄とラファール・リヴァイヴがあったはずだ。

クラス対抗戦で混雑したアリーナに入り、ピットまで行く手間を考えれば、少し遠いがグラウンドまで行った方が時間がかからないはずだ。

しかし、それも葵の後ろに迫る謎のISから逃げられればの話である。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

葵は後ろを何度も振り返りながら走り続ける。

すでに何度も転び、坂道を転げ降りた身体はかすり傷がいたるところにでき、制服もボロボロだ。

後ろに迫る謎のISのハサミについた砲身が眩く光る。

「ハア・・・くそおおお！」

それを確認した葵は叫びながらヘッドスライディングの要領で、道脇の草むらへ頭から突っ込む。

その直後、葵がいた道路はビームによって長い溝が生まれた。

「ハア・・・ハア・・・」

葵は再び走り出す。

IS学園に着てから1ヶ月。そこから授業で続けられた基礎体力増強訓練が意外なところで役に立っていた。

そんな考えが出るほどに、葵の頭は冷静さを少しだけ取り戻しつつあった。

走りすぎて変な脳内麻薬が出ているのだろう。それが死の恐怖を薄めていると葵は推察する。

そして、同時にいくつかの疑問が葵に浮かんた。

身体を止めず、後ろに迫るISへの注意を怠らずに、葵は頭の隅で疑問を整理する。

まず1つ目だが、なんで後ろのISは葵を追ってきているのか。

これは今考えることじゃない、と葵は思ったが、彼の頭はすぐに答えを出す。

それは、ただの偶然か葵だからかのどちらかだ。

「ちっ・・・！」

葵は自分の考えの甘さに舌を打つ。

偶然なわけではないか。葵は世界でたった2人のISを使える男。それだけでも追われる理由は十分にある。

謎のISが再びガトリング砲を放つ。

葵の行く手にある植木が粉々になり、大小様々な破片が葵に降りかかる。

その1つが葵の左腕を斬りつけた。

「っ！」

若干の痛みとともに赤い体液が葵の手をつたう。出血は多いが、見た目ほど大した傷ではないようだ。

「（・・・こいつ、なんでだ？）」

自分の血を確認しながら、葵は第2の疑問を頭に浮かべる。

「（こいつ、なんで俺を殺さないんだ？）」

謎のISは葵を執拗に追い掛け回し、時には攻撃してくるにも関わらず、まだ葵自身を直撃するような攻撃は1度も行っていないかった。

ISという兵器は現状世界最強である。ISを使えない男性が女性と戦争をすれば3日どころか3時間もたないとすら言われている。

つまり、ISを使えば、生身の人間を殺すことなど赤子の手を捻ることよりも簡単に行える。

なのに、謎のISは葵を追いかければかりで、殺すどころか捕らえようとしてもこない。人間の走る速度よりも遅いということは考えられないため、実に不可解な行動だ。

しかし、理由はどうあれ。その不可解な行動のために葵は生き残っていられるのだ。贅沢は言っていない。

そうこうしている内に、葵の視界にはISが格納されている倉庫が入る。

心身ともに疲労は溜まっていたが、葵は最後の踏ん張りをかけた。

走る速度を上げ、倉庫を目指す。

後、30m

20

10

3

2

1

0

「よし！」

葵の手が倉庫のドアにかかる。

後はこれを開ければISがあるはずだ。

しかし――

「!？」

葵が力を入れても引き戸のドアはビクとしなかった。

「あ・・・鍵か！」

当たり前といえば、当たり前である。兵器を格納している場所が鍵をつけないなんてことはありえない。

普通に考えれば、分かることを葵は気付けていなかった。

そう。

葵は全く冷静などにはなっていなかった。

倉庫前でうなだれる葵に影がさす。

振り返るまでもなく、葵はそれが何の影なのか分かった。

ゆっくり葵が振り返ると、謎のISがハサミの付いた触肢を振り上げている。

その刃が葵に向かって振り下ろされた。

敵ISは明らかに動きが鈍っていた。

間違いなく、先ほどの鈴音の一撃のためである。

「いつけえええ!!」

その隙を逃さず、鈴音は龍砲を放つ。

今までは回避されていた攻撃だが、敵ISは先よりも初動が遅れ、衝撃波に重い身体が吹き飛ばされた。

「頼むぞ、鈴」

一夏はその光景をじっと待って見ていた。

白式のシールドエネルギーは残り僅か。零落白夜を使用できるのは後1回が限度である。

次の一撃を必ず当てるため、一夏は鈴音の指示があるときまで動くことができずにいた。

鈴音が敵ISと距離を詰める。

双天牙月を連結させ、風車にも似た連続回転攻撃が敵ISを襲う。
敵ISは太い左腕で鈴音の攻撃を防ぎながら、右腕を大きく振りかぶる。

「動きが大きすぎるわ！」

上から振り下ろされる敵ISの拳を鈴音はさらに下へ潜り込み、接近しながらかわす。

同時に双天牙月の連結を解き、両手に逆手で持ち変えた。

「これで、どうだああ!!」

鈴音は両手の双天牙月を全力で振り上げる。

激しい金属摩擦音とともに敵ISは両肩に新たに2つの傷を作り、上空に無防備な格好で斬り上げられた。

「よし、これなら！」

そんな敵ISの姿を見て、一夏は零落白夜を発動させようとする。

「一夏！ まだ待って！」

「え……。おい、鈴。何を――」

一夏を止めた鈴音は、無防備な敵ISの背後に回りこみ羽交い絞めにする。ただし、両者の大きさの違いから、鈴音は敵ISの後ろにくっ付いているようにしか見えない。

「今よ！ 今なら間違いなく当てられるわ！」

「待て、鈴！ それじゃおまえが危険すぎる。早くどくんだ！」

零落白夜の威力は折り紙つきである。もし、一夏が少しでも斬りつける度合いを測り間違えば、鈴音は敵ISごと切り裂かれえることは想像に容易い。

「いいから、やりなさい！ あたしも長くは持たないわ！」

敵ISが鈴音を振り落とすべく、デタラメに動き始める。鈴音はそれに抗うのに必死だ。

「（俺に……。俺にできるのか？ 鈴を傷つけずに敵だけを斬る

なんてこと）」

一夏は躊躇っていた。

もし失敗すれば、鈴音はただではすまない。

だが、やらなければ、一夏自身も鈴音も敵ISにやられてしまうだろう。

やることはもうすでに決定的だ。

だが、一夏は自信が持てない。

「・・・あ」

ふと、一夏は自分の持つ雪片式型が視界に入った。

自身の姉と同じ武器。

それを見た瞬間。一夏の心に何かがスンと落ちてきた。

「（そうだ。俺は千冬姉とおなじ武器を使っているんだ）」

以前セシリアと戦ったとき、一夏はこう思った。

——千冬姉の名前を守る

何年も自分を守ってきた姉。その関係を終わりにしたくて、一夏はそう誓ったはずだ。

今の自分はどうか。これでその誓いが守れるなんて到底一夏には思えない。

そして千冬とは別にもう1人、一夏は頭に浮ぶ。

それは、越えてみたいと思った葵だ。

もし、今の状況が一夏自身じゃなくて立花だったらどうか。彼がそのときどう思つかは一夏には分からない。けれど、葵は必ず今の状況を打開すると一夏は思った。

「こんなことで戸惑っていたら、あいつに追いつくなんてできないな」

一夏は覚悟を決めた。

「鈴。いくぞー!!」

一夏の叫びと同時に零落白夜が発動し、雪片式型が変形してエネルギーの刃を形成する。

「いいから、早く。あたしもそんなに持たない」

敵ISに振り回されている鈴音が苦しそうに声を出す。

「あと少しでもいい。踏ん張ってくれ」

爆発させるようなイメージを持って、一夏は瞬間加速を発動させる。

その名の通り、白式の速度が一瞬で最高速度まで跳ね上がった。

高速接近しながら、一夏は雪片式型を上段に構える。

そして敵ISの手前で、ジャンプするようになり白式で跳ねた。

「——オオオッ！——！」

叫びを上げながら一夏は雪片式型を振り下ろし、敵ISをから竹割りにした。

瞬時、一夏は敵ISから距離をとる。

シールドエネルギーが切れ、零落白夜が消えると同時に敵ISは眩い光を放ち、爆散した。

「これで・・・少しは誓いを守れたかな・・・？」

一夏は呆然と呟く。上空には、五体満足な鈴音の姿が見て取れた。

第10話 守るための誓いと越えるための覚悟（後書き）

ちよつと鈴が強すぎたかな？

原作ではこの戦いであまり活躍していなかったし、いいですよね？

・・・やっぱりダメ？

第11話 恐怖を乗り越え、強さを見せつける 前編

謎のISが振り下ろした一撃は、葵の左横を通り過ぎIS倉庫に巨大な亀裂を開けた。

「な、なんで？」

この距離で攻撃を外すことなどありえない。

先ほどから謎のISの行動に葵は戸惑いを隠せなかった。

「え？」

戸惑いつつ、葵が呆然と謎のISを見上げていると、下半身部のさそりの目と思われる部分がチカチカとランダムに発光した。

「・・・これ、モールス信号・・・か？」

ランダムと思われた長い光と短い光は葵が以前授業で習ったモールス信号に似ている。

通信技術が向上した今となつては廃れかけているが、それでも野戦などで軍が使うことがままあり、IS学園ではそれを生徒たちに教えていた。

葵はまだ冷静になりきれない頭でそれを解読する。

——ミ・セ・テ・ミ・ロ

見逃してしまい後ろ半分くらいしか分からなかったが、解読すると欧文ではなく和文符号であるらしい。

「ミセテミロ？・・・見せてみる、か？」

葵はなんとか解読したが、これでは意味が今一掴みかねる。前半部分を見逃したことが悔やまれた。

だが、そのような些細なことに構っていることはできず、葵は次の行動に備え謎のISに対して身構える。

しかし、謎のISは動かなかった。

「・・・？」

30秒が過ぎたあたりで葵もその異変に気付く。

先ほどまでは謎のISはネズミを追う猫みたいに葵を執拗に追いかけてきたのに、今はまるで奇怪なオブジェのように全くの不動だ。その意味は分からない。だが、葵はこの隙に逃げるべく、ゆっくりと謎のISを向いたまま後ずさる。

1m移動するのに30秒かった。

今の葵にとって1mは月よりも遠く、30秒は刹那よりも短く感じられた。

謎のISがゆっくりと再び動き出す。

その瞬間。葵は身体をビクリと震わせ、心臓は早鐘のように早くなった。

「（次の行動はなんだ？ ガトリングか？ それともまたハサミか？）」

謎のISのわずかな動きを見逃さないように、その全体に葵は視線をくまなく向ける。

すると、再びさそりの目がチカチカと点滅した。

「！」

2度目の発光があったことに葵は驚いたが、同時に今度は見逃さないようにそれを注視する。

——オ・マ・エ・ノ

「（おまえの）」

——ツ・ヨ・サ・ヲ

「（強さを）」

——ミ・セ・テ・ミ・ロ

「（見せてみる）」

解読した瞬間。葵は早くなった心臓が止まるように感じられた。

意識が混濁する。見ている光景がどこか遠くに感じられ、耳に入る音も消えた。

「たつた・・・たつたそれだけの」

葵は謎のISの不可解な行動、その全てを瞬時に理解した。自分に攻撃を当てなかったのも、自分が逃げられるくらいの速度で追

かけてきたのも、IS倉庫に追い込まれたのもこれで説明がつく。

「たったそれだけのために・・・」

葵の視界に自分の逃げてきた後が見える。綺麗だった通路は穴だらけになり、美しかった並木や花壇も今や見る影もなく吹き飛ばされていた。

「俺の・・・」

葵の心臓が早くなる。その意味は先ほどまでの恐怖とは違う。

「俺の日常を壊したっていうのか・・・っ」

ギロリと葵は以前セシリアにした猛禽類のような鋭い目つきで謎のISを睨む。ただし、その鋭さはセシリアに向けたものの比ではない。

「おまえっ・・・ふざけんじゃねえええ!!!」

普段の葵からすれば決してあり得ない。それほどの形相と声の音量だ。

葵にとって、日常とはそれほど大切なものである。何せ、IS学園では唯一の味方となりえる男の一夏も普通の生活を送るためという理由で極力関わらないようにしてきたくらいだ。

今までに葵が受けた恐怖・困惑・絶望。その全てが怒りにベクトルを変えた。

「分かった。見せてやるよ。俺の強さって奴をな！」

謎のISが開けた亀裂から、葵はIS倉庫へ入り込む。

それを謎のISは当然のように佇んで見ていた。

アリーナのピットでは、真耶が今も尚ハッキングされたセキュリティを奪還べくコンソールに向かって奮闘していた。

しかし、それは傍目には順調とは言い難い。

「・・・おかしいです」

なんと試してみても、そのたびに書き換えられるハッキングウィルスに真耶は困惑する。

「千冬姉、これって——イタッ！」

「織斑先生だ。いい加減に覚えろ馬鹿者が」

戦闘を終え、現状を知るために一夏と鈴音はピットへ戻ってきていた。そこには箒とセシリアの姿もある。そして一夏は千冬を名前で呼んだため出席簿で叩かれていた。

「・・・間違いないです。まだどこかにハッキングを仕掛けているものがあります」

「それって・・・」

一夏はアリーナ内が映るモニターに目を向ける。先ほどまで自分が交戦していた敵ISはアリーナの中央で間違はなく真つ二つになっている。先ほど聞いたところ、アリーナ全域にハッキングを仕掛けていたのはあの機体だったようだ。しかし、いくらなんでも、あれがまだ動いているとは思えなかった。

「別にもう一体がいる・・・」

「そうとしか考えられませんか」

箒とセシリアの発言通りとしか考えられない。

「もう一体がこの中にいるっていうのか!？」

「落ち着け織斑。アリーナに入ったきたアンノウンはおまえが倒した一体のみだ」

「そうです。それはこちらで確認しました」

一夏を安心させるように、真耶がモニターにピット内の映像を次々と映し出させる。

「ってことは、もう一体は外にいるってこと?」

中にいなければ、外しかない。その当然の答えを言ったのは鈴音だ。

「外・・・あ!」

何か思い出したように真耶が声を上げる。同時に先ほど以上の速度でコンソールを動かした。

「山田先生、どうしたんですか？」

「ねえ、織斑君。あのISがなんであなたと凰さんの試合中に乱入してきたのか。そのタイミングの意味が分かりますか？」

「タイミングの意味？」

判断材料が少なすぎて一夏は考えが浮かばない。

「すみません。言い方が悪かったです。あのISはなんで試合直後を狙わなかったと思いますか？」

「あ」

そう真耶に言われ、一夏にも理解できた。

あのISの目的はさっぱり分からないが、戦う準備ができている戦闘中に仕掛けてくるメリットはあまりに少ない。むしろ全試合が終えた後、生徒のISが消耗したときに乱入してくれば何をやるにしても都合がいい。特にこれは生徒でも指折りの実力者ばかりが出るクラス対抗戦だ。

そのメリットを捨てても試合中に乱入したISの目的は想像すれ

ば難くない。

「戦うことそのものが目的・・・」

「そうです。そして、試合をしていたのは織斑君と凰さんです。凰さんは代表候補生ですが、彼女自身や専用機にあんな強引な介入をするほどほしい情報はないでしょう」

「・・・まさか」

千冬を除く面子が息を飲む。鈴音でなければ必然的にもう1人である一夏が狙いに決まっている。

「あのISの狙いは——」

話の途中で真耶の目が見開く。

「見つけました！」

「メインモニターに」

「はい！」

千冬の指示をすぐに真耶は行った。

IS倉庫に入った葵はいつもの通りラファール・リヴァイヴを選ぶ。

男性用ISスーツの予備がないため制服のままだ。本来なら規定違反だが、今は緊急事態であるから仕方がない。

いつもならそんな些細な事にも一応留意する葵だが、今の彼にそんな心の余裕がなかった。

「武装選択・・・システムオールグリーン」

葵は手馴れた手つきで操作する。表情は険しいままに。

IS起動直後。謎のISはそれまでの沈黙を破り、IS倉庫をこじ開けるように進入してくる。

「やってやる!」

それは普段の葵が言うはずもない攻撃性を含んだ声だった。

両手にアサルトライフルを呼び出し、量子変換が終わると同時にフルオート射撃を行う。相手がなまじ大きいだけに、ほぼ外すことなく弾の雨を浴びせる。

しかし、謎のISの進攻は止まらない。葵は相手と同じ速度で後退しながらも射撃を続ける。

1マガジン使い尽くし、射撃が止んだ。謎のISはところどころに装甲がへこんでいるようだが、致命傷といえるものは負っていないかった。

「どういう装甲しているんだ？」

アサルトライフル2丁のフルオート射撃を余すことなく浴びれば、防御力に定評のある打鉄でもそのシールドを貫かれダメージを負う――どこるか撃墜できる。どうやら謎のISはその大きさに見合うだけのシールドエネルギーと厚い装甲を持っているようだ。

謎のISが両腕のガトリング・ハサミと尾のビーム砲門、計5つの全てを葵に向ける。その動きは先ほどまでのゆっくりしたもの違う。機体そのものに負担をかけるギリギリの早い動作だ。

5つの砲門が一斉に葵に放たれた。

狭い倉庫内での射撃だ。上は天井であり左右は物が乱雑し、後ろ

は壁である。回避場所はないに等しい。

葵は一瞬で判断した。回避先は前方しかない。

スライディングするような体勢で地面スレスレを滑空し、射撃をギリギリ避けながら葵は謎のISの真横を通る。

「――！？」

謎のISは葵が真横に到達したと同時に片側4本の歩脚で踏みつけにかかる。

否。先の尖った歩脚のそれは踏みつけとはいえない。完全に突きだ。

それらを転がるように葵は回避する。後には、直径数十cmは下らないほどの大きな穴が開いた。

葵は謎のISがこじ開けた穴からIS倉庫を出て、振り向きざまにグレネードは3発撃ち込む。謎のISの射撃によって脆くなっていた倉庫はそのグレネードの爆発に耐え切れず、謎のISを中に残したまま一気に崩壊した。

「次はどう来る？」

葵はゆっくりと上空へ距離をとりながらスナイパーライフルを構

える。建物の崩壊に巻き込まれたくらいで謎のISの装甲が破壊できるとは思えなかったからだ。

——高エネルギーを感知。注意せよ

ラファール・リヴァイヴの発する警告に葵は身を引き締める。

次の瞬間。瓦礫となったIS倉庫が爆発し、葵の目に映ったのは迫る光の津波だった。

「なっ!?!」

驚愕しつつも葵はそれが何なのかすぐに理解した。

高出力、いや超高出力の荷電粒子砲だ。

「くっ!」

ギリギリではあったが葵は回避に成功する。だがそれは完璧とはいえず、避けきれなかった十八番であるスナイパーライフルは粒子の中に消えていった。

光が収まった後には、上半身人型の胸部ハッチが開いた謎のISがいた。

「・・・規格外過ぎるだろ」
チート

今さらではあるが、逃げているときは違い本当に殺しにきているようだと葵は思った。

謎のISが飛び上がってくる。図体の割りに速い。

サソリ型の腹部を葵に向けてくる。生物のサソリはそこが弱点だが、謎のISにとっては違う。

先ほどと同じように歩脚の鋭い突きが葵を襲う。今度は片側だけでなく、両側の8足に触肢も加わった合計10本の突きと斬撃だ。

「まだ、遅い！」

これも葵は避けてみせた。が、1つ見逃したものがある。

謎のISの長い尾が葵に鞭のように振り下ろされ、葵は地面に叩きつけられた。

第11話 恐怖を乗り越え、強さを見せつける 前編（後書き）

長くなったので初の前後分けです。

第12話 恐怖を乗り越え、強さを見せつける 後編

一夏は駆けた。ピットから出るために。

しかし、それは僅か数歩で止められた。千冬の足掛けによって。

「何をするんだ、千冬姉！」

転んだ体勢のまま、一夏は千冬を睨んだ。

「どこに行くつもりだ？」

「決まっているだろ！ 立花を助けに行く！」

ピット内で葵と謎のISの戦いを見た一夏はいてもたってもいられなかった。

「千冬姉だつて見ただろ。あのISは俺と鈴が戦った奴とは全然違う」

一夏の言うことはピット内にいた全員が分かっていたことだ。大きさは元より、総合的な戦闘力も一夏の戦った敵ISより、葵が戦っている謎のISの方が数倍勝っている。

「立花が強いつてことは俺も分かっている。けど、このままじゃあいつは殺されてしまう！」

「だが、貴様が行って何になる？ 先の戦闘で白式の残りエネルギーはごく僅か。たとえ行ったとしても数秒の戦闘もできん」

「じゃあ、このまま立花を見殺しにしろって言つのか！？」

「そうは言わん。だが、何よりも外に出る手段がない。まずはそれを見つける必要がある」

全くの正論を言われ、一夏は苦虫を嚙んだような表情で千冬から視線を外す。

視線を移した一夏が見たのは、まだ真剣にモニターを見つめる鈴音の姿だった。

「鈴」

「変ね」

「え、何が変なんだ？」

一夏は鈴音と同じモニターを見た。そこには劣勢に戦う葵の姿があるだけだ。

「あいつの動きが鈍い」

「立花の？」

再び一夏はモニターを見る。

「劣勢だけど、鈍いつてわけじゃないだろ」

「一夏は知らないだろうけど、あたしはあいつと何度もDSで戦ったことがあるのよ。この前はISでも戦ったけど、それに比べて何か、こう・・・変なの！」

上手く言葉にできなくて、最後はイラついたように鈴音は吐き捨てる。

「それは、たぶん緊張しているからです」

2人の話を聞いていた真耶が言葉を挟む。

「緊張している？・・・とてもそうは見えませんか？」

こう言うっては立つ瀬がないが、モニター内の葵は、近接・射撃・機動・判断速度のどれをとっても一夏の数段上だ。とても信じられない。

「元々立花君の技量は、全生徒から数えてもかなり高いです。多少調子が出なくてもそれは変わりありません」

真耶のそのつもりはないのだろうが、遠まわしに調子が出ない葵の方が自分よりも強いと言われているようで、一夏は微妙に傷ついた。

「でも、立花君はほんの1ヶ月前までただの一般人でした。たったそれだけの期間で実戦を行えば、緊張するなと言う方が無理です」

「え？　でも、俺はそんな緊張しませんでしたよ？」

真耶の論理で言えば、同じく1ヶ月前まで一般人だった一夏も緊張して動きが悪くなるという事態が起こるはずだ。しかし、一夏はそんな実感はなく、むしろいつもより動けたくらいだ。

「ええ」と、それはですね・・・」

「あんたが鈍感なだけよ」

言いよどむ真耶に代わり鈴音が答える。

「鈴・・・そりゃないぜ」

「事実を言っただまですよ」

「織斑」

一夏がうなだれていると、先ほどまでコンソールで何かしていた千冬が声をかけてきた。

「不本意だが・・・立花を救援するためにおまえの力が必要となった」

「千冬姉、一言余計・・・ってイタア!!」

転ばされた時は見逃されたが、今度はそうはいかないとばかりに千冬は一夏を出席簿で叩いた。

「織斑先生だ。いいから黙って付いてこい。それからオルコット。」

おまえもだ」

「わたくしも？　わかりましたわ」

2人を伴い、千冬はピットから出て行った。

「・・・ねえ、山田先生。今は通信って使えますか？」

3人を見送ると、鈴音はすぐに真耶に声をかける。

「ええ、なんとか。どうやらハッキング能力は立花君の戦っているISの方が悪いみたいです」

「ならお願いが——」

「——ええ、まあそれくらいでしたら・・・」

再びコンソールを忙しく動かす真耶から目を離し、鈴音もまたモニターへ視線を向けた。

地面に叩き付けられた葵だが、即座に起き上がる。ISの絶対防御はかなりのものだ。数十メートル上空から地面に落ちてもダメージはかなり軽減されている。シールドエネルギーは激減であるが。

しかし、そこでのんびりしてはいられない。

上空にいる謎のISのガトリング砲が、葵に向かって火を噴いた。

「くっ！」

葵はそれを地面を滑空しながら回避しつつ、効かないと分かっているアサルトライフルで謎のISを攻撃した。攻撃は面白いように当たるが、やはりダメージはない。

「くそっ！ いったいどこを攻撃すればいいんだ!？」

葵は焦っていた。

それは、ピット内で真耶が言った通り、緊張とそれに伴う興奮によるものだが、葵本人は気付いていない。

まあ、それでも。攻撃が当たっていないのならともかく、当たっても効いていないという事実はベテラン軍人でもキツイものがある

ので、仕方のない部分はあるのだが。

謎のISの攻撃にハサミと尾のビーム砲も加わった。

葵は攻撃を止め、回避に専念する。彼がそうしなければならないほどの弾幕の雨だ。

無意識に、葵は謎のISの真下を取る。何となく、そこが一番射撃しづらい場所だと直感したからだが、その判断は正解と同時に大きな間違いだ。

謎のISは射撃を止めると、即座に自身を降下し始める。しかし、その速度が半端ない。その様はまるで隕石である。しかも、鋭い歩脚を葵に向けて。

葵はそれに気付き、紙一重で横に飛ぶ。聞いたこともないような轟音が当たりに響いた。

そして、再び謎のISの鞭のような尾が葵に向けられる。

「しまっ！——」

紙一重で避けた直後にさらに回避行動を取る余力はなく、葵は再び吹き飛ばされた。

蹴られたサッカーボールのように、葵は数回跳ねながらグラウンドを転がる。

転がり止った葵が見たものは、人型部の胸部ハッチを開き、超高出力荷電粒子砲の発射体勢をとる謎のISの姿。

「ぐっ……あ……」

葵は必死に立ち上がろうとするものの、ラファール・リヴァイヴのフィールドバックを超えるほどの衝撃で平衡感覚が麻痺し、上手く立てない。

「（早く……立たないと）」

葵の頭はそう判断するが、身体はいうことを聞かず、謎のISがゆっくりと荷電粒子砲を発射する――

――キュインッ！！

発射する直前に、耳をつんざくような独特な音。それと同時に走った閃光が刹那に謎のISの上半身に直撃し、その巨体をのけぞらせた。

発射角をずらされた荷電粒子砲は空高く放たれ、光の粒子は青い彼方へ消えていく。

「・・・今は、確か」

『わたくしですわ』

どこかで聞いたことのある独特な声に葵が顔を上げると、ブルー・ティアーズを纏いスターライトmk?を持ったセシリアがゆっくりと彼の隣に降り立った。

「その様子。アリーナの方は大丈夫なようだな」

『他の方の心配をなさっている場合ではないでしょう!』

セシリアが心配の裏返したる大声を上げてしまうように、傍目には葵の姿はかなり酷い。

身体は生身で逃げる途中で負った左腕の傷を除けば大きなものはないが、擦り傷・切り傷のない肌を見つけるのが難しいほど全身傷だらけであり、制服もボロボロ。ラファール・リヴァイヴもその特徴的だった多方向加速推進翼4枚の内2枚はすでになく、1枚は半壊している。
マルチ・スラスト

満身創痍という表現がこれほどよく合う姿は皮肉ながら珍しい。

『一夏さんの白式でアリーナの壁をなんとか壊して、唯一無傷な専用機持ちだったわたくしだけここに來ることができましたけど、もう少し早く來るべきでしたわ』

「・・・いや、いいタイミングじゃないかな？」

ワザとじゃないと分かっているが、まるで狙ったかのように絶妙なタイミングだ。ある意味これ以上のものはない。

『とにかく。立花さんは下がってください。後はわたくしが引き受けますわ』

「あ、ちよつと・・・！」

葵の静止を聞くことなく、セシリアは謎のISに向かって飛翔した。

しかし、助かったのは事実。葵はまだ平衡感覚の戻らない身体を引きずって、少しだけ戦場から離れる。

少しだけ離れたところで、葵はセシリアと謎のISの戦いを見る。先の自分と同じ厚い装甲を貫徹せずに苦戦しているのが分かった。

「・・・戻らないとマズイかな。これは」

もし、セシリアが敗れば、あの謎のISは目標である葵を追いかけてくることは間違いない。それにセシリアが万が一死ぬようなことにでもなれば目覚めが悪すぎる。それを考えれば、今のうち戻ってセシリアと戦った方が勝機があるように葵には感じられた。

「だが、どうすれば勝てる？」

勝機がないのに、戦いに挑むのは自殺行為だ。

しかし、消耗しきった葵の頭は何も浮かばない。

すると、ラファール・リヴァイヴにオープンチャンネル開放回線が入ってきた。葵の目の前に小さなウィンドウが表示され、そこに映し出されたのは鈴音だ。

「凰さんか・・・」

『「凰さんか」、じゃないわよ！ あんた。今の戦いどういうつもり！」

「いきなりなんだ？」

何やら怒り心頭な鈴音に葵は困惑する。

『初めての实战で緊張してるかどうか知らないけど、あんたの戦い方はあんなんじゃないでしょう!』

「緊張・・・戦い方・・・」

鈴音の言葉に葵は冷や水を被ったように感じた。今までの何か噛み合わない戦闘の違和感が分かったような気がする。

『いい! あんたは曲がりなりにもあたしに勝ち続けているんだからね。あんなワケの分からないものに負けるなんて承知しないわよ!』

「そうか・・・うん。そうだな」

バラけていた心のピースが次々と合わさっていくような感覚が葵を占める。

「凰さん」

『なによ?』

「その・・・ありがとな」

それは葵が教師を除けば数年ぶり言った女性への単純な感謝の気持ちだった。それは、葵が現在普通な状態でないために言ったことではあったが、それでもかなり珍しいことだ。

『い、いいわよ、そんなこと。．．．それより、必ず勝ちなさいよ！』

「そうするよ」

どこか照れたように早口に喋る鈴音をかえりみず、葵は再び謎のISへ向かう。もう平衡感覚は治っていた。

謎のISはセシリアのブルー・ティアーズと比べても射程距離は見送りしないどころか、勝っている。さらに、火力は質・量ともに言うまでもなく、相手の勝ちだ。

この雨のような砲撃の前では、多大な集中力を必要とするビットは使えず、セシリアは苦戦していた。

『立花さんが苦戦していたのも頷けますわ』

むしろ初実戦で緊張していたのに、このような相手に劣勢だったとはいえ長時間持ちこたえていたというのは、賞賛に値するとセシリアは思う。

セシリア自身、実戦経験が多いわけではないが、もし自身の初実戦の相手がこのような相手だったら彼女はこの世にいなかったかもしれない。

「オルコットさん」

『立花さん！？ そんな状態で戻ってきたんですの！？』

「大丈夫。まだ戦えるよ」

セシリアは二重の意味で葵に驚いていた。

1つは満身創痍で戻ってきたこと。2つは葵が先ほどに比べてどこか落ち着いていることだ。その状態は、かつてセシリア自身と戦ったときの様子と重なる。

相対していると怖いが、味方にいると実に頼もしくセシリアには感じられた。

『勝機はございますの?』

「ないよ」

『な、ないんですの!?』

「ああ。ないから強引に勝機を作る」

葵の言っていることは矛盾しているが、1度は自分を圧倒した人物である。そのためセシリアには信じられてた。

「俺が近接攻撃を仕掛けるから、オルコットさんには援護射撃を頼みたいけど・・・」

言いよどむ葵にセシリアは彼がなんと言いたいのかピンときた。

『お任せ下さい。立花さんに当てるようなことはございませんわ』

「いや、当ててもかまわないつもりで、全力射撃してほしい」

『・・・正気ですの?』

「大丈夫。当たらないよ。じゃあ、頼む!」

言葉少なめに切り上げ、葵は謎のISへ突っ込んでいった。

『もう！ どうなっても知りませんわよ！』

葵の後ろ姿を見ながら、セシリアはスターライトmk?で援護射撃を開始する。

「（オルコットさんの最初の射撃は高確率で左肩から）」

葵本来の戦い方が発揮する。

前回の戦いから、葵はセシリアの戦いのクセやパターンを把握済みだ。それを踏まえれば、セシリアが謎のISのどこに何で攻撃してくるかなど知るのは容易い。逆に無理に葵に気を使って今まで違う攻撃パターンをされる方が葵にとって嫌だったのだ。

セシリアの狙撃を受けてのけぞる謎のIS。葵は左手にショートブレイド、右手にハンドガンを呼び出し、謎のISに取り付いた。

どちらの武装も謎のISの装甲を削るほどの威力はない。

「（だが、用は使い方と使い様だ）」

葵は謎のISの左ガトリングの砲身にショートブレイドを差し込

む。ガトリングは構造上、リング状の砲身を回転できなければ射撃できない。

謎のISが取り付いた葵を振り払うべく、ハサミと尾と振りかざす。

「（尾は止め用だ。最初の攻撃は必ずハサミから！）」

ハサミを飛び越え、尾を潜り抜け、葵は謎のISから一旦距離をとる。

「（たぶん、このタイミングで・・・）」

『お行きなさい！！』

葵の推測通り、セシリアがビットを射出し、高次元機動をとるそれらが、360度至る角度で謎のISを襲う。

「（やはり、リヴァイヴよりも火力がある。右側ハサミの触肢と歩脚3本にでかい亀裂ができた）」

葵は左手に持っていたハンドガンを右手に持ちかえ、右側ハサミの触肢に正確無比な射撃を撃ち込む。今までビクともしなかった装甲が弾けとび、触肢はそこから分離した。

『すごいですわ・・・』

葵の猛攻にセシリアは感嘆な声を上げる。同時に、神がかりというのはこういうことを言うのかと思った。

残りの亀裂のできた歩脚にも葵は同じ行動をとる。これで右側1番目と左側3番目と4番目の歩脚がなくなった。

歩脚が少なくなったためか、バランスを崩し、謎のISが動きを止める。

『動きが止まりましたわ。どうします?』

「・・・なあ、オルコットさん。聞き忘れたんだけど、あれって無人機か?」

『え? ええ、たぶん。少なくともアリーナに入ってきたISは無人機でしたわ』

「そうか——オルコットさん!」

『わかってますわ!』

謎のISが残った火器で2人に攻撃を再開する。どことなくだが、それが慌てたように見えるのは2人の心境の変化だろう。

『この・・・いい加減になさい!』

セシリアはスターライトmk?を撃ちながら距離を取る。謎のI
Sは仰け反るだけでダメージはあまりないようだった。

セシリアと謎のISの距離が更に遠くなる。

それがある一定を過ぎた瞬間。謎のISの胸部ハッチが開いた。
光が集束し、輝きを増す。

『撃たせま——』

「ゲームの話だけどさ・・・」

急に割り込んできた葵にセシリアは言葉を止める。

「シューティングゲームとかで装甲の厚い中ボスの弱点がそいつ
の最大の武器を撃つ瞬間って、よくあるパターンだ」

葵は光を放つ謎のISの目の前に堂々と立ちはだかる。右手には
いつの間にかグレネードを持っていた。

「無人機なら、躊躇はしない。——ターゲット、インサイト!」

照準の合ったグレネードが謎のISの発光する胸部に吸い込まれる。

まずは胸部が爆発し、連鎖的な小爆が謎のISに広がり、最後には大きな花火はグラウンドに上がった。

その爆発を見終えると、葵の視界が急激に歪む。

「あ……れ？」

急に何かに引き込まれるように、葵に意識はブラックアウトした。

「……？」

葵が目覚めると知らない天井が視界に映った。

左には白いカーテンがあり、右には――

「おっ、目が覚めたか？」

この世で最も会いたくない奴の顔があった。一夏である。

「目覚めはどうだ？」

「・・・最悪」

理由は言うまでもない。

「な、なに！？ 待っててくれ。急いで保険医の先生を呼んでくる」

「・・・頼む」

これでいい。これで一夏は自分の前からいなくなる。戻ってきて
も保険医の先生がいるようだし、2人きりよりはずっといい、と葵
は考えた。

一夏はすぐさま部屋を出て行く。

「保険医・・・ということはここは保健室か？」

葵がベッドから起き上がると、左腕に鈍い痛みを感じた。

包帯の巻かれたそれを見ると、葵はなんで自分がここで寝ていたのか思い出す。

「・・・」

葵はポンポンと自分の左胸：心臓の上当たりを軽く叩く。

初めての实战、殺されかけたわりに自分の心臓は実に平穏に動いていた。

IS学園入学当初は、このような事態になることに危機感を覚えていたが、実際体験してみると戦闘最中とはともかく、今は何ともない。

「意外に凶太いのかもな」

後はこれが未だに实战の实感が持てないためでないことを葵は祈る。

「そういえば・・・」

戦闘で葵は思い出した。セシリアと鈴音のことである。

あの戦闘は鈴音の激励とセシリアの援護がなければ、勝てなかっただろう。そうなると、礼を言いに行くのが礼儀なのだが――

「・・・マジか？」

礼を言いに行くには、こちらから女の子に話しかけに行かなければならないことに葵は気付いた。

「はぁ・・・。頑張ろ・・・。」

それを想像すると、先の戦闘以上の疲れが葵を襲った。

後日。

頑張つて2人に礼を言いに行った後の葵が疲れ果てていたのは、これも言うまでもなかった。

第12話 恐怖を乗り越え、強さを見せつける 後編（後書き）

戦闘描写がくどいと思った読者の皆様。申し訳ございません。作者はまた何かのストッパーをかけ忘れしました。

批判は覚悟の上ですが、感想もよろしく願います。

後、余談ですが、このたびお気に入りの登録者数が160名を越えました。ありがとうございます。

けれど、10話投稿まで100名到達していなかったのに、たった数日で160名越え。・・・いったい何があったのか気になるところです。

第13話 とある日常の1ページ

クラス対抗戦。

葵にとっては、人生で初めて『半殺し』にされた日から1週間以上が経過した5月中旬。

謹慎という名前を付けた療養生活を終えた葵は今日から再び学園に通っていた。

謹慎。

これには深いような深くないような微妙な理由がある。

それは、先日の人型と奇形型の2体のISがアリーナの内外で破壊活動をした事件である。緘口令が敷かれ、対抗戦そのものがなかったことにされているが、実はこの事件。アリーナの中と外で対応

に大きな違いができることとなった。

その理由は目撃者の数だ。

一夏と鈴音が人型ISとアリーナ内で戦ったことは観客席にいた大勢の生徒が目撃している。一方、アリーナの外で戦った葵と奇形型ISについては学園の教師を除けば、知っているのは一夏・篤・セシリア・鈴音くらいなものだった。

緘口令を敷いてでもこの事件を広めたくない学園だったが、アリーナ内のことは目撃者が多すぎてそれは不可能に近い。ならばもう片方だけでも、と考えるのはある意味自然な流れだった。

ただし、問題だったのはその方法だ。

アリーナ外の惨状は誤魔化しのきくものではなかったが、幸いにして目撃者はないに等しい。そういうわけで、学園側はその惨状の内容についてある偽情報を流した。

それは、『惨状の原因はグラウンド倉庫にあったIS武装に使用する火薬の爆発事故にある』というものだけだった。最初は。

それが校内に広まる内に噂の尾びれを付けて行き、『事故には誰かが関わっている』『それは生徒』『その生徒は謹慎中』と、どんどん膨れていく。

怪我のため、一週間の自室療養をしていた葵の存在はその噂に、実にはまり役だった。

元々学内で嫌われていたこともあり、噂が流れて3日が過ぎたこ

ろには『アリーナ外の惨状を作った犯人は立花葵』というニアミスであり、その実全く異なる真相が公然の事実となっていた。

教師たちがそれに気付き、慌てて噂の撤回に動いたが、それはすでに後の祭り。

療養生活4日目を経過していた葵の部屋に訪れた千冬と真耶は、

「・・・すまん」

「ぐすっ・・・立花君。無力な先生を許してください・・・ぐすっ」

という、実に申し訳なさそうな言葉とともに、事の真相を葵に教えてくれた。

5日目には学年主任、6日目午前には教頭、午後には校長と謝りに尋ねてくる人物のグレードが上がるたびに葵の胃痛がひどくなっていく。

そんなこんなで7日目。

午前中に診断を受け、次の日から通常授業を受ける許可を得た葵だったが、再び現れた千冬と真耶に内心で溜息をついた。

「もういいですよ。今更校内にどんな悪評が流れようが以前と全く変わらないですし・・・」

葵自身が言っているにしても全然虚しくならないくらいにそれは事実だ。むしろこれ以上評判が下がったらどうなるのか、と葵は他人事のように気になる。

「それとこれとは違います。私たちの失態なんですから、誠意を見せるのは当然です！」

そう熱弁する真耶。しかし、先の悪評が変わらないという葵の言葉を否定はしない。

「……まあ、それに付け込むわけではないですが、先生方に頼みがあります」

「なんだ？」

「ラファール・リヴァイヴの無期限貸し出し。できますか？」

「……なるほどな」

葵は理由を説明しなかったが、千冬は感づいたようだ。

そもそも今回葵の怪我は、大半がIS装着前によるものだ。専用機持ち達のように、常時ISを待機状態で所持していれば、ここま

での怪我を負うこともなかったはず。

マイクの葵専用機開発の目処が立っていない今。今後と同じことがあったときに備えるのは当然である。

できれば、同じことがないようにと思いたいが、この何があっても不思議じゃない世界で油断することは葵にはできない。

「分かった。いいだろう」

「断言していいんですか？」

普通こういった特例事項は教師全員の意見を聞き、それから校長かもっと上あたりが判断するものだ。それをいきなり断言した千冬に葵は内心で驚く。

「実は、学園ではすでにその方向へ話が進んでいる」

「先日の襲撃が何を目的にしたものが不明な以上。襲われた立花君にはできるだけ身の安全を確保するように学園側でも努力します。けれど、それも限界があります。その次善策として、立花君にISを常備していただくことが昨日の職員会議で決定しました」

さすがに一学生である葵が考える程度のことは学園側も考慮していたようだ。

付け加えれば、襲撃の際に救出が遅れた件と今回の学園内の噂の件の罪滅ぼしも兼ねている、と葵は思った。

「ほら。今日からそれを必ず身につけるように」

そう言った千冬に手渡されたラファール・リヴァイヴの待機状態であるネックレスを葵は早速首につける。

余談だが、リヴァイヴ系ISの待機状態は全てネックレスらしい。

「必要な書類は後日書いてもらう。・・・だが、今日のところはゆっくり休み、明日に備えろ」

「・・・!」

言葉遣いはともかく、初めて聞いた千冬の気遣いの言葉に、今度は葵も驚きを隠せない。

「・・・」

「あ、あの織斑先生！ 相手は怪我人ですからね！」

葵の表情を見て腕と眉毛が震え始めた千冬を真耶は必死に抑える。

「そ、それじゃ立花君。明日は教室でお会いしましょう。ほら、織斑先生早く行きましょう」

「ああ・・・」

真耶に引きづられるように千冬は葵の部屋から出て行く。

2人がいなくなると、葵は身に着けたネックレスを弄り始める。

「・・・授業以外で使わないことを祈りたいな」

そう呟き、ベッドに身を投げ出すのだった。

そんな事情があり、葵は登校から学園女子の暗い視線にさらされていた。

しかし――

「（意外とこんなものか）」

IS学園を入学してから、女子達の不快な視線にさらされ続けていた葵は、すっかりそれに慣れていた。

自分を見ながらひそひそ話をする女子達の横を通り抜け、葵は教室に入る。

「「「・・・」」」

葵が入ったと同時に教室の喧騒がピタリと止む。

それを気にしないように努め、葵は最前列にある自分の席に着いた。意識しなくても自身の背中に視線が集まっているのが分かった。

「（まあ、しばらくすればほとぼりも冷めるだろ）」

そう今後の方針を葵が定めていると――

「よう！ 立花、ひさしぶり」

空気を読まない馬鹿が葵に声をかけてきた。背中への平手打ちと

ともに。

——ガンッ!!

不意の一撃に葵は顔面から机に突っ込んだ。

「~~~~っ!!」

顔面を走る激痛を両手で覆いながら、葵は机で悶える。

「わ、悪い。大丈夫か？」

「大丈夫じ……大丈夫だ」

大丈夫じゃない、と言いつつになったのを必死に抑え、葵は一夏に目を向ける。

「今日から復帰だったんだな。よかった」

「（俺はよくない!）」

さすがに復帰早々に机に顔面を突っ込ませる事態になるうとは思

いもよらなかった葵だった。

さらに――

「あら、立花さん。おはようございます」

「一夏いる？ あれ、立花。あんたもういいの？」

「・・・」

なぜか集まってくる一夏ヒロインズ。ちなみに声をかけてきたのはセシリア、鈴音、箒の順である。箒に関しては声かけというより、いつの間にか一夏のそばにいた。

「（なんでこいつらは俺に近寄ってくるんだ・・・！）」

学園生徒のほぼ全てが嫌っている葵を構ってくる一夏たち。

普通なら嬉しい場面かもしれないが、葵にとっては完全にありがた迷惑だった。

午後になった。

今日のこの時間はIS操縦訓練の時間である。

「今日は射撃訓練だ。射撃順位の高い者と低い者が組み、教え合え。最後に2人総合のテストをする。気を抜かないで取り組むように」

千冬の言葉に従い、クラスの面々がそれぞれペアを組み始める。

ちなみに射撃順位とはクラス対抗戦直前に測ったものだ。そのときの総合1位は葵、2位はセシリアである。

「（あの時はオルコットさんに追いかけて大変だった）」

ちよつと昔の苦い思い出が葵をよぎる。

近距離・中距離射撃はともかく、遠距離射撃でも葵に敗れたセシリアは、プライドを折られ悲しみにくれる——ことはなく、クラス代表戦直後のように葵に再戦を迫った。

もちろん、葵は逃げたが。

「お？」

次々にクラスメイトがペアを組んでいく中に一夏とセシリアの姿があることに葵は気付く。射撃順位最高位と最下位のペアだ。バランスは取れている。

数分の後にはクラスメイトのほとんどはペアを決めた。

「さてと・・・」

それを見て葵も動き始める。

1組は偶数人数だ。必ず余っているクラスメイトがどこかにいる。その子には悪いが、授業中の間だけ悪名高い自分と組んで貰おう、と葵が視線を彷徨わせて探すと――

「え」

「あ」

葵とそのクラスメイトの目が合う。

「立花！ 篠ノ之！ 後はおまえたちだけだ。さっさとしろ！」

千冬の怒鳴り声に紛れて、葵はこっそりと溜息をつくしかなかった。

篠ノ之 箒

葵が一夏を含めた関わり合いになりたくないメンバーの1人ではあるが、実のところ葵は彼女をほかのメンバーほど疎ましく思っていない。ある意味では好意すら抱いていた。

なぜなら、彼女だけは葵に全く関わってこないからだ。

事実。葵が箒とともに話すのはこれが最初である。

「さて、どうするか・・・」

「・・・」

「（やりづらいな・・・）」

互いに話を振ることに慣れていない2人は、最初の会話すらままならない。

というより、箒は葵の方を向いていなかった。

「いいですか、一夏さん。射撃の避け方はまず相手の武装を確認

しつつ、思考の先読みが――」

「お、おう」

白式が射撃武装を使うことができないため、一夏はセシリアの座学を聞いていた。理解しているかは怪しいが。

「・・・む」

そんな様子を箒は口惜しそうに見ている。

「（無愛想だけど、感情は駄々漏れだな）」

葵はそんな様子の箒に呆れていた。ついでに箒の感情に気付いてないだろう一夏にも。

ふと、葵は遠くでこちらで見ている千冬の視線に気付く。間違はなく沸点手前の表情だ。

「篠ノ之さん。訓練を始めよう！ 今すぐに！」

「あ、ああ」

呆ける筈を引きずって、葵はいそいそと準備にかかった。

葵と筈はISを起動させる。

ちなみに筈のISは打鉄だ。射撃訓練をするならラファール・リヴァイヴの方が都合がいいのだが、これは単純に数が足りないためである。

「とりあえず腕を見せてくれ」

「ああ」

葵はアサルトライフルを使用^{アンロック}許諾で筈に手渡す。そもそも余り者同士で組んだため、葵は筈の射撃の腕を知らなかった。

「（意外に射撃の腕がいいかもしれないしな）」

本来なら喋れば済む話なのだが、話のきっかけを掴むことが葵に

はできなかった。基本女子との会話に葵は慣れていない。

——パン！　パン！　パン！

遠くにある射撃用的に簞の撃った弾丸がいくつか当たる。ただし当たった場所はかなりバラバラだ。

「（・・・下手じゃないな）」

上手いとはいえないが、下手でもない。簞の腕は中の下といったところだろう。

撃ち終わった簞が葵にアサルトライフルを返す。

「次はおまえが腕をみせろ」

「ん？　ああ」

アサルトライフルを受け取りながら、葵は素直に頷く。

葵から見て簞の腕が分からなかったように、簞から見ても葵の腕が分からないというのは、すぐに想像できた。

——パン！　パン！　パン！

葵が放った弾丸が的の中心に吸い込まれる。

「何・・・だと!？」

箒は信じられないものを見た。葵が撃った射撃の的はその穴を1つしか開けていなかったのだ。

つまり、全弾ほぼど真ん中に命中している。

「まあ、これくらいはね」

高機動状態のISにも、正確無比な射撃を撃ち込める葵としてはこのくらいは簡単だ。

「なあ」

「ん？」

「どうすれば、そこまで射撃が上手くなる？」

自分から話始めた箒に、葵は驚く。練習熱心なのは結構なことだ

が、同時に困った。

「どうするって・・・練習あるのみ？」

そもそも葵のIS操縦技量の高さはDSをやっていたことによる。師がいたとか、正規の訓練を受けてきたわけではないのだ。効率のいい訓練など知るはずもない。

「・・・おまえはどのくらい練習したんだ？」

「そうだな・・・的当てなら10万回はやったな」

「じゅ、10万回!？」

ただし、この回数はアサルトライフルだけでなく、ハンドガン、ショットガン、スナイパーライフル、レールガンなど多種の銃器練習を総合した数だ。種類1つにすれば数千から1万回くらいの練習量となる。もちろんこれはDSでだ。

「意外だな」

「意外？」

「おまえはもっと、ゲームばかりやっている軟弱な男だと思っていた」

「・・・（否定できない！ てか、もしかしてゲームが訓練代わりだったって気付いてないのか？）」

その事実を暴露するべきか否か葵は悩みつつも、当初から考えれば意外なほど順調に2人の訓練時間は過ぎていった。

夜になった。

しかし、だからといって葵がやることは何もない。

せいぜい、夕食を食べてシャワーを浴び、明日の予習をするくらいだろうか。

「終わった」

予習も終わり、することのなくなった葵はそのままベッドに身を

投げる。

「・・・普通な1日だったな」

柔らかなベッドに沈みながら、葵は今日を振り返る

正直言えば、葵は今日1日不安だった。1週間前の襲撃事件で、どうしようもない非日常に踏み入ってしまったのではないのかと。

しかし、今日はIS学園の生活と考えれば至って普通だった。そしてそれも、もう数時間で終わろうとしている。

「・・・やっぱり日常がいいな」

そう呟いたのを最後に、久しぶりの学園生活で疲れた葵は夢の奥へ入っていった。

クラス対抗戦の襲撃事件。

葵が本当の意味で、事件に終わりをつけたのはこの日だった。

しかし、葵は予想もしていなかった。

この半月後に、再び彼の日常が壊される事件が起きようとは。

第13話 とある日常の1ページ（後書き）

最後の葵の心情を書きたかっただけの話です。

そのためかそれ以外がグダグダ。

失敗したかな・・・これ。

第14話 2人の転入生（前書き）

第14話 2人の転入生

6月初頭

葵はその日、朝から憂鬱だった。

なぜなら、朝起きて、部屋のカーテンを開けると、窓の外にはガラスの死骸がおちていた。

さらに、食堂では朝食を受け取った瞬間、ご飯茶碗と味噌汁の茶碗が同時に割れたし、登校中には目の前を黒猫の団体が横切った。

「何かの暗示か？」

迷信を信じない葵だったが、さすがに朝だけでここまで続けば信じる材料は十分すぎる。

そして、それが現実になるのは、やはり早かった。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしく願いします」

目の前でそう自己紹介するシャルルに、葵は暗示の意味を悟った気がした。

朝のHR。

いきなり転校生が来たとの真耶が話し出したとき、葵は背中に漬物石でも乗せられるような重い絶望感を覚えた。

転校生。つまり女子が増える。しかも、2名らしい。

容姿がどうか、性格がどうなど関係なく、葵にとってはそれだけで憂鬱だ。

そう思っていたら現れた転校生の片方は男子だった。葵は一瞬喜び、一瞬でへこんだ。

「（男ってことは織斑と同じじゃん・・・）」

葵が一夏を遠ざける理由はこの世界の主人公だからだ。その理由

は彼が自分を除けばISを使える唯一の男というもの。

それに当てはめれば、葵の目の前にいるシャルルという男子も主人公。最悪、間違ってもモブキャラではない。

「（けど、こいつ。本当に男か？）」

葵はシャルルの上から下をゆっくりと観察する。

人懐っこい顔。礼儀正しい立ち振る舞いと中世的に整った顔立ち。色の濃い金髪は長く、首の後ろで丁寧に束ねている。身体はスマートで脚もしゅっと伸びている。

しかし、背が低いのはいいとして、喉仏はないし、撫肩。胸はないが、すらりとした体型のわりに腰周りが豊かに見える。

クラス中がきゃあきゃあと男子の出現に騒ぐ中、葵1人は首を傾げていた。

ちなみに葵は聞いてなかったが、クラス女子たちの発言はこうだ。

「男子！ 3人——（ちらりと葵を見て）——いや、2人目！」

「あれ（葵のこと）と違って美形！」

「（ちらりと葵を見て）この世には悪魔がいたけど、やっぱり天

使もいたのね〜〜!!」

葵は聞いていて気にする性質じゃないが、聞かなくて正解な女子の発言だった。

ふと、シャルルと彼をじっと見ていた葵の視線が交差する。

——ニコリ

視線に気付いたシャルルが葵に向かってとびきりの笑顔を見せる。それはまるで天使のようだ。

その笑顔に葵の心臓ははねた。

ただし、そのはね方は『ドキリ』というよりは『ビクリ』といった類のものだったが。

「（・・・女子にしても男子にしても笑顔向けられるには何か嫌だ）」

男子に意味もなく微笑まれても気持ち悪いだけだし、女子にやられても葵にとってはドン引きものだ。その証拠に葵の背中には冷や汗が流れた。

仕方なく、葵は視線をシャルルの隣に向ける。

向けた先にいるのはもう1人の転校生。

長い銀髪、医療用とはおもえないゴツイ眼帯、絶対零度ともいえる紅い瞳。

シャルルを陽とすれば、彼女は陰のイメージがある。

かといって、それは暗いという表現よりも、恐ろしく冷たいナイフという表現が正しいだろう。

「それじゃあ、ボーデヴィツヒさん。自己紹介をどうぞ」

「・・・」

「あの・・・ボーデヴィツヒさん？」

真耶が何度声をかけてもボーデヴィツヒと呼ばれた転校生は微動だにもせず、腕組をした状態で目をつぶっていた。

無視され続け、だんだん真耶の瞳に涙が集まってくる。

すると、ボーデヴィツヒはすっと目を開いて真耶を見る。

さすがに哀れに思ったのだろうと葵が思っていると。

「（視線が違うな。山田先生じゃない。その先の織斑先生を見て

いる)」

おそらく間違いない。

なぜならボーデヴィツヒは、視線に気付いてぱつと表情の明るくした真耶に全く気付いていないのだから。

「ボーデヴィツヒさん。では、自己紹介を」

「・・・」

しかし、ボーデヴィツヒは動かない。

再び真耶の肩が、がくつと落ちた。

「（・・・哀れだ）」

そんな様子の真耶にさすがに葵も同情を禁じえない。

「・・・ラウラ。挨拶をしろ」

千冬が面倒臭そうに声を出す。たぶん、内心では、真耶とボーデヴィツヒの両方に対して溜息をついていることだろう。

「はい、教官」

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

初めて響くボーデヴィツヒの声は見た目の印象と同じくナイフのような鋭いものだった。さらに軍人めいた口調はそれを増長させている。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「・・・」

クラス全員が沈黙し、続くラウラの言葉を待つ。

しかし、沈黙が続き、終わる様相をみせない。

「あ、あの、以上　　ですか？」

「以上だ」

沈黙に耐えかねて、真耶ができる限りの笑顔で聞くが、返ってきたのは実に無慈悲な即答だった。

「！ 貴様が――」

何かに気付いたラウラがズカズカと歩いていく。

葵の方に。

――バシンッ！

「！？」

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

痛みが葵を駆け巡る。

頭が混乱しつつも葵が言うべきことはただ1つ。

「なあ」

「なんだ！？」

「君、人違いをしてないか？」

「何？ おまえは織斑教官の弟だろ？」

「・・・そいつは隣の男だ」

殴られた頬を手でさすりながら、もう片方の手で葵は隣を指差す。

「・・・」

「・・・」

葵とラウラ。

両者の間に微妙な空気が流れる。

「・・・東洋人の見分けは利きづらい」

ぼそりと呟くラウラの言葉を聞き取れたのはおそらく葵だけだった。ついでにその頬がうつすら赤くなっているのは絶対に見間違いないではない。

まあ、確かに西洋人から見れば東洋人の区別はしづらいと聞く。

しかし、だからといって、会ってすぐに平手打ちをするほど憎い相手を見間違えたりはするだろうか？

「（・・・ドジなのか？）」

そう葵が思ってしまったのも仕方ない。

それほどのラウラの失態だった。

「（この状況。いったいどう収めるつもりだ？）」

葵とラウラの間にあった微妙な空気は、すでにクラス全体まで広がっている。

殴られた頬は痛むが、ここで怒鳴るなど行動を起こすことは下策と考え、葵は黙っていた。

すると、ラウラはつかつかと葵の前を通り過ぎ、一夏の元へ。

そして――

――バシンッ！

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

先ほどの葵と全く同じことを一夏にも行っただ。

「（こ、こいつ。今までの全部スルーしやがった!）」

空気が読めないのか、読むつもりがないのか分からないが、ラウの行動はあまりにあり得ない。

現に、殴られた一夏すらどう反応すればいいのか分からなくてボロっとしてる。

そうしている間にも、ラウはまたつかつか歩いてゆき、空いている席に座る。そして、腕を組んで目を閉じ、微動だにしくなっただ。

「（あれと織斑が関係あるとか、ないとかどうでもいい。普通に近づくべきじゃないな、変人すぎる・・・）」

こうして、葵のブラックリストの中に新たに転校生2人が加わっただ。

「あー　ゴホンゴホン！　ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散!」

千冬がクラスの微妙な空気を吹き飛ばすべく、声を上げ生徒の行動を促す。それによってようやくクラスの空気が元に戻り、生徒が各々に動き始めた。

ふと、千冬の視線が葵を捉える。

「（嫌な予感がする）」

とりあえず、葵は首を横に振った。理由はなく、ただの直感だ。

その葵の様子を見て、千冬は諦めるようにため息をつき、視線を一夏へ移した。

「おい織斑。デユノアの面倒を見てやれ。同じ男だろ」

葵は内心でガッツポーズをした。直感は大当たり。もう少しで葵自身がシャルルの面倒を見る羽目になっていただろう。

「君が織斑君？ はじめまして。僕は――」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから」

一夏はシャルルの手を取って教室を出る。しかし、その直前に立

ち止まり、葵に目を向けた。

「おい、立花。早く行くぞ」

「・・・先に行っていてくれ」

顰めそうになる表情を抑え、葵は一夏にそう返事をする。せっかく、シャルルの世話係を免れたのに、一緒に行動しては意味がない。

そして何より、一夏と行動する気が葵にはない。

「なんでだ？ 行き先は同じなんだから、一緒に行こうぜ」

「トイレだ」

もちろん、葵のでまかせである。

しかし、一夏はそれを信じたようだ。

「そうか。早めに来いよ」

そう言って、一夏は顔が赤くなったシャルルと手をつないだまま、早々と教室を出て行った。

すると、すぐに廊下で何か騒ぐような声が響いてくる。まず間違はなく、一夏とシャルルが原因だろう。

「よし」

葵はまたもや当たった自分の直感に満足しながら、教室を出た。

「（朝は変な暗示があったが、それのおかげで対応がスムーズにできたな）」

朝とは一転し、鼻歌でも歌いそうなほど葵は機嫌をよくしていた。しかし、その機嫌も長くは続かない。

一夏とその周りのメンバーを避けるという葵のいつもの行動。

いつもはそこそこうまくいていたが、今回に至ってはそれが完全に裏目に出ることになるうとは、まだ彼は知らない。

第二アリーナ更衣室。

教室では女子が着替えるため、男子である一夏と葵はここ他数箇所を日ごとで変え、使用していた。

更衣室に入った葵が耳にしたのは、一夏とシャルルの話し声。

「（また、途中で女子に捕まっていたな）」

葵は静かにため息をついた。

前々からだが、移動教室で先に教室を出た一夏と後に出た葵がほぼ同時に到着することがよくある。

これは、一夏が集まってくる女子を振り払うため、あちこち遠回りしてることが理由だが、すでにそれが2ヶ月。いい加減に上手い対処法でも思いつかないものかと、葵は思っていた。

「早く着替えないと遅れるぞ。シャルルは知らないかもしれないが、うちの担任はそりゃあうるさい人で——」

上半身の衣類を脱いだ一夏が思いつめるような口調でシャルルに話す。

「う、うんっ！き、着替えるよ？」

教室を出たときよりも顔を赤くしたシャルルが一夏をチラチラ見ている。

2人とも、葵が更衣室に入ってきたことに気付いていないようだ。

「（話しかけられても面倒だし、このままこっさり着替えてよう）」

「

葵の判断はいつもと変わらない。

そして、それがこの日続いた葵の判断ミスあやまちを正す機会を永遠に奪った。

シャルルが一夏を気にしながらも、目にも留まらぬ早さで制服を脱ぐ。

葵の目の前で

「は？」

「え？」

声を出したのはどちらが先だっただろうか？

驚いた表情のシャルルの視線が葵を離さない。

そして、葵もシャルルの姿に視線を外せない。

制服を脱いだシャルルの胸部にはコルセットのようなものを着けていた。コルセットと肌の隙間に双丘が柔らかそうに潰れているのが見える。腹部はくびれ、下半身を覆う唯一の布は逆三角形——
ウエスト
いわゆる女性下着というものだった。

「・・・おん——」

シャルルの行動は早かった。

葵が『おんな』という言葉を言い終わる前に上下に分かれたISスーツを即座に着て、飛び掛るような勢いで、右手で葵の口を塞ぎ、左手で葵の身体をロッカーに押し付けた。

まさに、神速と呼ぶに相応しい。

——ガタンッ——！！

葵がロッカーにぶつかった音が更衣室に響く。

「な、なんだ？　って、シャルル、立花。2人して何やってる？」

驚いた一夏の声。どうやら、彼は着替え中のシャルルの姿は見えないようだ。

「な、なんでもないよ一夏。ね、立花君？」

シャルルは口ではそう語るものの、目では『黙って』と言っているようにしか葵には見えない。

そして、葵は確かに見た。笑顔のシャルルの背後に般若の姿があったことを。

それを見ては首を縦に振るしかない。

シャルルがゆっくりと葵から身体を離す。

「そうか。ん？　シャルルのスーツ着やすそうだな」

「あ、うん。これはデュノア社製のフルオーダーで・・・」

一夏と離しながらも、シャルルはちらちらと葵を見る。

本当なら、今すぐにも葵を連れ出したいところなのだろうが、一夏がいる手前それはできない。

葵もシャルルの視線を気にしないようにしつつ着替えるが、先のことも含めて全く気にしないというのは無理そうだ。

「デユノア？」

「うん。僕の家だよ。父がね、社長をしてるんだ。一応フランスで一番大きいIS関係の企業だと思う」

聞き耳を立てながらも、葵は黙々と着替える。

「ってヤバイ！ シャルル、時間がない。早くグラウンドへ行くぞ」

時計を確認した一夏が、着替え終わったシャルルの手を教室のときと同じように引く。しかし、今度はシャルルが一夏を引きとめた。

「ま、待って一夏！ 立花君も一緒に――」

「2人とも。遅刻するから先に行っていてくれ」

シャルルを遮って、葵が言葉を繋ぐ。

「そうか？　じゃあ、悪い立花。先に行くよ」

「い、一夏！　ま——」

シャルルは一夏に引きずられ、2人そろってドアの向こうへ消えていった。

「・・・はあ」

2人の姿が見えなくなると、葵は身体の中の空気を全て吐き出すように大きな溜息をつく。

そして、葵はシャルルを連れて行った一夏に初めて感謝した。

「・・・本当に女の子だったとは」

先ほどのシャルルの姿を思い出しそうになり、葵は頭を振る。

「展開早すぎるだろ・・・」

シャルルと教室で会ってからまだ30分も経っていない。あまりの展開の早さに葵は頭痛を覚えた。

「（デュノア社、その社長子息。いや、令嬢か……。いったい何がどうなっているんだ？）」

葵の非日常が再び始まった。

第14話 2人の転入生（後書き）

5日の日間ランキングで1位を取ることができました。

これも皆様の応援があつてこそ。

ありがとうございます。

第15話 変わり始めた日常

「遅い！」

第二グラウンドに到着した葵に待っていたのは、千冬の怒鳴り声といつもの出席簿の一撃だった。

すでに授業開始から5分過ぎている。

更衣室で悶々と考え過ぎた葵は、甘んじて出席簿の一撃を受けた。

「時間が押している。さっさと列に並べ！」

「はい！」

ここでのんびり動くわけにはいかず、駆け足早に、葵は列に加わる。

「ふう・・・」

葵は列に並ぶと、今日何度目か分からない溜息を再びつく。

「あんた、なにやってんの？ ちふ——織斑先生の授業に遅れ

てくるなんていい度胸ね」

「（げっ！？）」

1組最後列に並んだ葵に声を掛けてきたのは、2組最前列にいた鈴だ。

いつもは鈴を始め、一夏たちの近くにならないように葵は注意していたが、今日は授業に遅れたために、回避することができなかった。

「・・・まあ、色々あつてね」

あまりに近くにいるため、鈴を無視することができず、葵は仕方なく鈴の会話にのつた。

「ふーん。ところで」

「ん？」

「アレは何？」

葵が鈴の目線の先を追うと、こちらを向いていたシャルルと視線がぶつかった。

直後。シャルルは慌てたように視線を違うほうへ向けたが。

「聞いたわよ。あいつが例の3人目の男子でしょ。何、知り合いだったの？」

「・・・いや」

むしろ本当に男子で、知り合いだったらどんなによかったかと葵は思う。

「だったら、なんであいつはこっちを見ていたわけ？」

「さあ・・・」

まさか、本当は女子で着替えを見たから、と言う事もできず、葵は言い訳を考える。

「俺じゃなくて、凰さんを見ていたとか」

「なんでよ？ あたしはあいつを知らないわよ」

「一目ぼれでもしたんじゃない？」

口ではそう言いつつも、我ながら非常に苦しい言い訳だ、と葵は

思った。

「・・・ねえ。それ、あんた本当だと思う？」

「・・・？」

葵は、今一鈴が聞いてくる意味が分からなかったが、彼女を見ながら思考を巡らす。

葵自身の感情を抜きに、客観的にみれば鈴は紛れもない美少女だ。性格だって活発的だし、彼女を一目ぼれする男は1人や2人どころか10や20はいても何も不思議じゃない。

「ありえる、としか言えないけど・・・」

「・・・そう」

「??？」

葵は鈴の反応に腑に落ちないものを感じた。

普通、他人に一目ぼれをされていると言われれば、照れるとか、恥ずかしがるとか、気持ち悪がるとか、そういう反応をするものだ。

だが、鈴の反応はそうではない。強いていうなら――

「（イラついている？　でも、何に対して？）」

考えてもその答えに辿り着くことは葵にはできそうになかった。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

そんな千冬の話シャルル・デュノア・・・いや、シャルロット・デュノアは、どこか遠いところの話のように聞こえていた。

彼女が今気になるのは、ただ1人。自身の後方にいる自分の正体を知っている男子だ。

その男子——葵は、先ほどまで近くにいた女子と話していた。

「（何の話をしていたんだろう？）」

まさか、自分の正体の事ではない、とシャルロットは思いたい。

しかし、2人の声はシャルロットには聞こえず、不安は募るばかりだ。

「今日は戦闘を実演してもらおう。——凰！　オルコット！」

「「はい」」

「専用機持ちならすぐに始められるだろ。前に出る」

シャルルの前方にいたセシリアは、しょうがないといった感情を顔に出しながら歩いてゆく。

一方、後ろにいた鈴は——

「うわ……」

小声だったが、シャルロットが思わず声が出るほどに彼女が見た鈴の表情は際立っていた。

「（な、なんか、すごくご機嫌ナメだ）」

鈴が表情を変えないまま、シャルロットの隣に差し掛かる。

「・・・あゝ、ムカムカする。なんなのよ、これ」

辛うじて、そう鈴が呟いているのが聞こえたシャルロットだが、鈴の剣幕を見る限り、今は葵との会話については聞けそうになかった。

「それで、相手はどちらに？ わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「あたしは、誰とでもいいわ」

「？ 鈴さん、どうかなさいましたの？」

いつもならもっと反論してくるであろう鈴のいつもと違う対応に、セシリアは訝しげな視線を向ける。

「なんでもないわよ」

「静まれバカども。対戦相手が来たぞ」

キィィィン

「あああーっ！ ど、どいてくださいっ！」

そんな風きり音と声とともに、高速飛行物体が上空から飛来――
――否、落ちてくる。

葵の方に。

「ん？」

それを確認した葵は、慌てることなく、胸元のネックレスに触れ、待機状態だったラファール・リヴァイヴを起動させる。

「（展開速度が早い）」

同じラファール・リヴァイヴを使うシャルロットをして、目を見張るほど、葵のIS展開は早かった。

ISの起動と武装の展開。この2つの原理は同じである。2つとも、慣れと明確なイメージを確立できれば、展開を早めることが可能だ。他にも展開を早める方法はあるが、それは機体性能によるものなので割愛する。

ISを纏った葵は、ゆっくり斜め後ろ上空へ飛翔。

直後に、葵のいた場所に高速飛行物体が突っ込んできた。

「あいたたた……。み、みなさん怪我はありませんか？」

ずれたメガネを直しながらそう喋る真耶。落ちた衝撃でできたクレーターの中で起き上がる姿は、お世辞にも教師らしいとはいいいない。

「……さて、さっさとはじめるぞ」

そんな真耶を擁護する言葉が見つからなかったらしい千冬は、言葉早に喋る。

「えっと、二対一で……。？」

「いや、さすがにそれは……」

未だに倒れこんだままの真耶を見るセシリアと鈴。全てを語らないが、2人の言いたい事はよく分かる。

「……む」

上手く説得しようにも、千冬はまたもや上手い言葉が見つからない。ふと、上空に逃げた葵と目が合う。

「立花！ おまえも加われ！」

「げっ……」

「遅刻した罰だ。反論は認めん」

「はぁ……わかりました」

面倒臭そうな顔を微妙に見せつつ、葵は鈴とセシリアの近くに着地する。

「それで、どういう組み合わせにするんですか？」

「分かりやすくするために、量産機同士と専用機同士でいいだろう。では、はじめ！」

4機のISが同時に飛翔する。

「ふふふ……。変則的ですが、これで2ヶ月前のリベンジを果たせますわ」

「……まだ気にしていたのか？ それに2ヶ月前勝ったのはオ

ルコットさんだよ」

「そう思っているのは立花さんだけですわ」

飛びながら話す葵とセシリアの後ろ付く鈴は、そんな2人の様子をじっと見ていた。

「凰さん。どうかしましたか？」

「・・・いえ、なんでもありません」

「そうですか？　ならいいんですが・・・」

そんな、4人をシャルルは見つめる。すると、一夏が近づき隣に並んだ。

「シャルル。転校初日から立花の戦闘が見られるなんて、運がいいな」

「立花君って強いの？」

葵の情報を知りたいシャルロットは、これ幸いと、一夏の話に耳を傾ける。

「すごく、な。代表候補のセシリアや鈴に勝っているし、クラス対抗戦の——あ、いや、これは聞かなかったことにしてくれ」

一夏は話している途中で、クラス対抗戦の襲撃事件は緘口令が敷かれたことを思い出し、口を閉ざす。幸いにして、シャルロットはそれを気にすることもなく、話を続ける。

「じゃあ、一夏は立花君と仲いいんだ」

どこか誇らしげに話す一夏に、シャルロットはそう判断する。学園でたった2人の男同士だし、間違っていないだろうと思っていた。

「うーん・・・微妙か？ 悪くはないとは思うんだが・・・」

「そうなの？ ちょっと意外かな」

「あいつ、人付き合い苦手みたいでな。俺に限らず、学園で仲がいい奴なんていないんじゃないか？」

一夏がそう言うと、シャルロットは気付かれないように安堵の息を出した。葵と仲がいい人物がいないということは、自分の正体を誰かに話す確率がぐっと減るということだ。本来、シャルロットはそんな他人の不幸みたいなことを喜ぶたちではないが、今回限りは嬉しかった。

しかし、この一夏の考えは間違っている。

葵が苦手なのは、年齢の近い女性と一夏である。IS学園での構成員が女性と一夏しかないなので勘違いしても仕方ないが、マイクなど年の離れた友人もあり、葵は決して人付き合いが苦手なわけではない。

「お」

そう声を出す一夏に倣って、シャルロットも上空へ視線を向ける。

上空では、セシリアが葵に、鈴が真耶に撃墜され、地面に落下してくる最中だった。

「はあ・・・」

5時間目の休み時間。

葵は1日でした溜息数の人生新記録をまた更新していた。

理由は朝から変わらず、シャルルだ。更衣室の一件から彼、いや彼女の視線が葵を離れた時間は少ない。

IS学園に入学して以来、女子の視線には慣れたつもりだったが、今日1日でその自信は崩れそうになっている。

今までも葵は悪意ある女子の視線を浴び続けてきたが、ここまで長時間に渡るものは初めてだ。しかも、シャルルの視線は悪意というよりも、葵の一挙一動を監視するものだ。気疲れが半端ない。

「（でも、もうすぐ授業も終わる）」

後1時間、授業とSHRを耐え切れば、部屋に逃げ帰れる。さすがにシャルルも部屋まで押しかけてくることはないだろう、と葵は高をくくっていた。

まあ、部屋に押しかけられても入れなければいいだけの話。どちらの転んでも葵は構わなかった。

「（・・・だが、不安が取れない。これはいったい何なんだ？）」

普通なら気にしない、未知への不安。だが、連続した不幸の続いた今日に至っては、その感覚を無視することが葵にはできなかった。

「（考える。これから起こりえる、俺の最悪なパターンは何だ？）

葵は思考する。

「（デュノアさんが部屋に押しかけることは想定済み。これに部屋に帰る前に捕まることも想定しよう。・・・逃げればいい。後は何だ？ ん？ そういえば、あいつは転校生・・・まさか！）」

思考の完結した葵はいても立つてもいられず、教室を飛び出した。

教室を出た葵は職員室を目指す。

その途中に、真耶に出会えたことは、葵にとって本日唯一の幸運だった。

「た、立花君！？ そんなに慌ててどうしたんですか？」

「山田先生。聞きたいことがあります」

「は、はい。なんでしょう？」

「デュノアの寮室は決まっていますか？」

これが、葵の考え得る最悪のパターンだ。

寮は基本1部屋2人。葵はそんな部屋を1人で使っている。もし、男の転校生が来るのなら、葵の部屋に割り当てられる可能性はかなり高い。

「デユノア君ですか？ 彼なら、織斑君の部屋に入る予定になつてますが・・・」

「（よし！ セーフだ！）」

ふう、と一息を付いて、葵は額に流れた汗を腕で拭く。空調の効いた学園内にも関わらず、腕に付いた汗の量は多かった。

「もしかして、デユノア君と同じ部屋がよかったですか？ なんなら、今からでも学園長と相談して・・・」

「いえ、大丈夫です。学園の指示に従います！」

「そ、そうですか」

普段よりもハキハキと喋る葵に、真耶は気後れする。葵自身も、今日は色々追詰められていて、そんな自分の変化を気にする余裕はない。

だから気付かなかった。葵と真耶を見る金髪貴公子の視線があったことを。

「・・・というわけで、今日からデュノア君は立花君と同じ部屋になります」

放課後。

部屋に戻ってきた葵に掛けた真耶の言葉は死刑執行に近かった。

葵はゆっくり立ち上がると、真耶と一緒に来ていた「今日からよろしくね」と言うシャルルの横を通り過ぎ、真耶を引き連れ自室を出る。

「・・・説明を要求します」

先ほど確認したときは、シャルルは一夏の部屋に入る予定だったはずだ。このわずかな時間の間に何があったのか、葵は真耶に聞かずにはいらなかった。

「実は放課後に、デュノア君から立花君と同じ部屋になりたいという希望がありました。立花君も気にしていたようですし、私から学園長に話して、急遽変更してもらいました」

さも、自分は良いことをしました、というような表情をする真耶に、葵は一瞬殺意が沸いた。

「（そついうのを、余計なお世話って言っんだああああー！ー！ー！ー！）」

そつ、声に出して言えればどんなに楽かと葵は思う。

いつそ真耶にシャルルの正体を言ってしまうのか、と葵は考えたが、そのぼやぼや顔を見ると言うのを堪えた。言っても信じてもらえそうにないし、信じてもらえても余計話が拗れる気がしてならない。

「じゃあ、しっかりデュノア君の面倒を見てあげて下さい」

「・・・はい」

結局のところ、葵はそつ返事をするしかなかった。

去る真耶を見送ると、葵は自室のドアノブに手を掛ける。

手が震える。先ほどまで自分がいた部屋だというのに、今の葵にとって自室は、虎穴か、人外の魔境か、とにかく自発的に入りたくない場所のように感じられた。

「（だ、大丈夫。部屋にいるのは虎でも魔物でもない。たかだか女の子1人。そう、女の子が・・・）」

——自室に年頃の女の子が待っている

手の震えが余計に酷くなった。思春期男子にとっては夢のようなシュチエーションだが、葵には該当しない。

しかし、ずっと寮の廊下にいるわけにもいかず、意を決して葵は自室へ入る。

「お、おかえり立花君」

「あ、ああ」

ベッドに座りながら出迎えてくれたシャルルに対して腰が引けながら、葵も自分のベッドに腰掛ける。

「朝から話せる機会を窺っていたんだけど、立花君は休み時間のたびにいなくなるから、結局放課後になっちゃった」

「そ、そうか。それは悪かった」

シャルルと向かい合いながらも、葵の視線は明後日の方向を向いたままだ。しかし、シャルルがそれに気付いた様子はない。一瞬だけ葵がシャルルを見ると、シャルルも視線が明後日の方向を向いていた。

ふと、葵がシャルルの手元を確認すると、その小さな手が震えているのに気付く。

「（緊張している？）」

人間不思議なもので、相手が緊張していることに気付くと、途端に自分の緊張が緩和していく。今まさに葵がその状態だ。

「（・・・そうか）」

冷静になった頭で考えた葵は、シャルルが緊張している理由を自分なりに察した。

1つは、女性なのに男装していること。男装の理由は分からないが、葵に糾弾されるところにいるのかもしれない。

2つは、葵と同じ部屋割りになったこと。女性の心境など葵は把

握しきれないが、年頃の女の子が同じ年頃の男子と同じ部屋になつて不安にならないわけがない。しかも、男装しているときならともかく、葵には正体がバレているのだ。

「（ある意味、この子も犠牲者なのかもな・・・）」

先ほどまで自分だけが犠牲者のような考えをしていた葵は、そんな自分を恥じた。

「ね、ねえ、立花君。更衣室のことだけ——」

「待った」

「え？」

意を決して喋り始めたシャルルを、葵は遮る。

「俺が見たのは男の着替えだ」

「立花君？ 何を・・・」

「俺が見たのは男の着替えだ」

「・・・あ！」

2度繰り返すことにより、シャルルも葵に意図に気付いたようだ。

それは、更衣室の件をなかったことにすること。

葵の余計な事に巻き込まれたくないという願望と、シャルルの不安要素、その両者を考慮した、葵ギリギリの妥協案だった。

「いいの？」

「何が？」

とぼける葵。彼的には、更衣室の一件はこれで終わりだ。

シャルルにしてみれば、葵が自分の正体を喋らない保障がないためまだ不安かもしれないが、正直これ以上葵はシャルルに構いたくない。

「そう・・・うん、わかった。じゃあ、改めてこれからよろしくね、立花君」

「・・・」

葵はシャルルに返事をせず、小さく頷くだけに留めた。

深夜。

シャルロットは眠れぬ夜を過ごしていた。

「どうなることかと思ったけど・・・」

シャルロットはそつと隣のベッドで寝る葵を見る。こちらに背を向けて寝る葵の表情は窺えない。

「クラスで聞いた評判とは全然違ったな・・・」

実は、シャルロットが無理やり部屋変えを希望するといった大胆な行動をとったのは、クラスで聞いた葵の評判が元だ。

曰く、『恐喝をする男』

曰く、『無愛想な男』

曰く、『ただのゲームバカ』などなど……。

多数の証言があつたが、授業のとき聞いた一夏や、その後で聞いたセシリアの『すごく強い』という言葉以外、葵を良く言うクラスメイトは皆無だった。

「……信じていいんだよね？」

葵を見ながらシャルロットの脳裏に浮かぶのは自身の父親。

2年前まで会つたことはなく、母親が亡くなつたのを機に会つてみれば、その人は世界有数企業デュノア社の社長だった。その人に引き取られた後、ほとんどは別宅に閉じ込められ、会つた回数はずつたの2回。話した言葉は数回あるかないか。愛人だった母の代わりに、本妻の人には『泥棒猫の娘が！』と殴られ、IS適性があると分かつてからは訓練と試作機テストの連続。終いには、男装をさせられIS学園で男という特異ケースのデータ取りだ。

その父親と葵を比べるのは大変失礼ではあるが、男という括りですべても比べてしまう。

「確かに無愛想、でも優しい……のかな？」

色々聞きたいことがあつたはずなのに、葵はシャルロットに何も聞かなかった。

葵の真意はシャルロットには分からない。もしかしたら、男装している女子が気持ち悪くて関わろうとしなかったただけかもしれないが、それでもシャルロットは葵に感謝していた。

「ありがとう・・・立花君・・・」

その眩きを最後に、シャルロットは夢の中へ旅立った。

「・・・（聞こえてるよ）」

シャルロットの眩きは、同じく眠れぬ夜を過ごしていた葵の耳にしっかり届いていた。

「（これは、思った以上に複雑な事情があるな）」

葵が下した、真実をなかったことにする、という判断。それが正しかったのかは今分らないが、少なくとも事情を聞くことはし

ばらく、あるいはずっと止そうと葵は思った。

「（しかし・・・寝れねえな・・・）」

そんな葵を他所に、夜は今も確実に更けていった。

しかし、このとき葵が探ろうとしなかったシャルロットの事情。

それがわずか数日後に、意外な形で知ることになるうとは、葵は思いもよらなかった。

第15話 変わり始めた日常（後書き）

いろんな意味でやってしまった今回の話。

どこに向かって飛んでいくのかは、作者にも分からなくなってきました。

それにしても、葵以外の視点で物語を書くのって、すごい難しいと実感です。・・・疲れた。

第16話 不幸は加速して（前書き）

また、グダグダです。

第16話 不幸は加速して

シャルルとラウラが転校してきて5日。

その間に、葵の体重は2キロ減った。

理由は考えるまでもなく、シャルルとの相部屋が原因だ。彼女と一緒に部屋になって以降、苦手な女子と同じ空間にいるおかげで、葵の睡眠時間は極限にまで少なくなり、それに伴う食欲不振が葵に深刻なダメージを与えている。

「今だけが唯一の安寧な時間だ・・・」

最近お友達になった栄養ドリンクを片手に、葵は放課後の時間を自室のベッドの上で過ごしていた。

朝から晩までシャルルと一緒に過ごしている葵だが、この時間だけは、シャルルが一夏たちと訓練に行ってくれるため、何者にも犯されない自由な時間を満喫できていた。

葵はベッドに身を投げながら、今日1日を回想してみる。

朝。しかも、日の出前。

葵はベッドの上をゴロゴロ転がっていた。

別に寝苦しいとか、寝相が悪いとかではなく耳に入ってくる音を必死に防ごうとしているためだ。

その音とは――

「ん・・・うん・・・」

隣のベッドから聞こえてくる艶のあるシャルルの吐息だ。

本人に自覚はないのだろうが、実に色気のある声である。

「（眠れるか！！）」

耳を手で塞ぐという行為はすでに行っている。しかし音がない静かな朝では、小さな吐息ですらも部屋に響き、葵の手は防音という

機能を満たしていなかった。

「ん・・・あっ・・・」

「（うがあああ——！！！！）」

葵が若干性格を崩壊させつつも、シャルルの吐息は彼女が起床するまで途切れることはなかった。

朝。シャルル起床後。

「おはよう、立花君」

「・・・ああ」

起きたシャルルの挨拶を葵はぶっきら棒に返す。

「？　どうしたの、顔が引きつっているけど・・・」

「・・・低血圧でな」

幸か不幸か、顔に昨晚の疲れがでない葵は、お得意の軽い嘘をつく。知らない振りというのは、言葉以上に労力を消費すると、5日間で葵は十分すぎるほどに身にしみていた。

諸々の支度の後に葵はシャルルを伴って寮食堂へ向かう。

シャルル転校2日目。葵はシャルルを置いて、とつと一人で寮食堂に向かったのだが、部屋から食堂まではわずか1分足らず。即座に追いつかれ、人生で初めて女の子と2人で朝食を取る羽目になった。

ならばと、3日目はシャルルが準備中に葵は部屋を出た。女子という生き物は、出かける前の準備に時間がかかるものらしい。そんな知識を元にした行動だが、葵の期待は早々に裏切られた。シャルルは葵が予想した時間を大幅に下回って葵に追いついてきたのだ。よく考えれば、シャルルは男装のため、ナチュラルメイクすらしていない。その時間の差し引き計算に気付かなかった葵のミスだった。

4日目は、そもそも何で一緒に朝食を取らなければならないのか、と葵はシャルルに聞いてみた。返ってきた返答は「えっ！？　男の子ってそれが普通じゃないの？」とかいう微妙に的の外れたものだ。確かに同室の男子であれば、それが普通なのかもしれないが、それを自分にも当てはめないでほしい、と葵は思う。付け加えると、その日も葵はシャルルとテーブルを共にした。

そして、本日4日目。葵は諦めた。少なくとも次の作戦を思いつくまでは、無理はできないとの判断だ。主に精神的な問題として、葵のライフはゼロに近かった。

「みなさん、おはようございます。今日の連絡事項は――」

S H Rの時間、真耶が教壇で話す言葉に葵は集中しきれない。

何せ――

じーっ……。

という、シャルルの視線が、最前列にいる葵の背中に時折突き刺さっているのだから。

5日前、葵とシャルルは遠まわしながら、お互い何もなかったという約束染みたことをしたのだが、実はこれでは事態が好転も悪化もしていない。少なくともシャルルからすれば、葵が自分の正体をバラさないという裏付けをされていないのだ。

確かに以前ほどではないが、それでも葵への注視はなくなっていない。

もちろん、それは授業中にも該当する。

「（眠気覚ましになっていいんだけど、もう少し何とかならにものかな・・・）」

授業が始まり、欠伸をかみ殺しながら、葵はノートをとる。

「・・・立花。大丈夫か？」

隣の一夏が葵に声を掛ける。どうやら、一夏から見ても今の葵の状態はひどいものなようだ。

しかし、一夏のタイミングはかなり悪い。

「じゃあ、次の問題を・・・織斑君、答えて下さい」

「げっ！ いや、ええと、その・・・」

「分かりませんか？」

真耶の問いに、一夏が冷や汗をたらしながら、しどろもどろになる。短い時間とはいえ、授業を聞き逃した一夏は、問題に答えられそうにない。

チラリ、と一夏は助けを求め、葵に視線を向ける。

カリカリカリ、と葵は一心不乱にノートを取っていた。無視してるといふよりも、最初の一夏の声掛けから、眠気の強い葵は気付いていない。

「えっと・・・聞いてませんでした！ イタッ！」

パン！ と千冬お馴染みの出席簿叩きの軽快な音が教室に響く。

「（騒がしいクラスだな）」

原因に気付いていない葵は、何とも平和なことを考えていた。

昼休み。ただし、今日は土曜日のため、実質的にこれで放課後である。

S H Rが終わってすぐに葵は席を立つ。

これから、学園生徒の大半は、食堂や教室で食事を取るのだが、葵にゆっくり行動している余裕はない。

2日目と3日目は、またもや監視目的であろうシャルルと一緒に昼食を取る羽目になった。しかも、一夏+αのおまけつきで。

4日目は、何とか逃げ切れたのだが、いつも昼食を取っているベンチに到着した瞬間、気が抜けて眠りに入ってしまった。さらに間抜けなことに、授業開始時間ギリギリまで寝入ってしまったため、昼食は食べ損ねるわ、授業には遅れるわで悪いことばかりだ。

「（だが、今日はもう授業はない。とっとと部屋に帰って寝よう）」

再び感じ始めたシャルルの視線を振り切って、葵は教室のドアを開けるが――

ドンッ。

軽い衝撃が葵の胸の辺りに走る。

何かがぶつかった、と葵が認識したのは、ぶつかった人物が床に

尻餅をついたのとほぼ同時だった。

「あいたたた……。ちょっとあんた、どこ見てんのよ！」

ぶつかつた人物は、運の悪いことに葵のブラックリストに載っている1人である鈴音だった。彼女はほぼ毎日一夏と共に昼食を取っている。今日ここに來たのも同じ理由だろう。

「わ、悪い……。大丈夫？」

自分の非を認め、鈴音に手を差し出した葵だが、同時にそれが失策だったことに気付いた。

「まったく、もう……」

そう言つて、鈴音が葵の手を借りる。

瞬間。葵の手が鈴音の手の柔らかさとか、温もりを感じる前に、背筋に風邪の症状にも似た悪寒が走った。

離しそうになる手を、ぐっと葵は堪える。

数年前に葵自身が女子を苦手と自覺してからというもの、意識的に女子と触れ合うと背中にゾクゾクとした震えを感じていた。クラ

ス代表決定戦で葵がセシリアとの握手を拒んだのも、実はこれが理由である。堪えることはできるが、あまり経験したくない感覚だ。

鈴音を立ち上がらせると、葵は気付かれないよう努めながら、すばやく彼女と手を離す。

「（ふう・・・）」

葵が内心で安堵の溜息をついていると、目の前の鈴音は、じっと先ほどまで葵と繋いでいた自分の掌を覗き込んでいた。

「？」

その鈴音の様子が気になり、葵も自分の掌を覗き込む。汚れてはいないし、汗ばんでもいない。

「手。汚れたか？」

「ううん。そうじゃないけど・・・」

なぜか鈴音の歯切れが悪い。戸惑っている。まるで、何で自分がそのように掌を見ていた行動を取っていたのか分っていないかのようだ。

「いつまでも入り口に立たれると通行の邪魔ですわ」

葵の後ろに来ていたセシリアによって、停滞していた葵と鈴音の空気が動き出す。

「立花、今日も一緒に食べようぜ。お、鈴じゃん。おまえもどうだ？」

「立花君、今日も一緒しよう」

さらにセシリアの後ろから一夏とシャルルも現れる。発言していないが、箒も一緒だ。

「（ああ・・・また、今日も逃げられないのね・・・）」

葵はがつくりと肩を落とすのだった。

半日の回想が終わった時点で、葵は憂鬱な気分に陥っていた。

どうにもシャルルが来て以降、葵が維持してきた生活リズムが乱れまくりである。入学当初、学園生活は地獄と比喻したが、その地獄はまだ浅かったらしい。

「どうにかしないと、マジで倒れるかもしれないな・・・」

葵は残った栄養ドリンクを胃へ流し込む。

♪！　　♪　　♪　　♪！

葵が飲み終わると、またもや状況を見ていたかのようなタイミングで携帯電話が鳴る。このような電話の掛け方をしてくる相手など、葵は1人しか知らない。

『ハロー、アオイ！　ハッスルしてるかい？』

「相変わらずネジ飛んでるな、マイク」

『ありがとう』

「褒めてないよ！！」

電話の相手は葵の予想通り、DK社長のマイクだった。

「それでどうした？ 今度こそIS開発に進展があったのか？」

『いや、ないよ』

「・・・せめて堂々と言うのはやめよう」

『私に日本人のように謙虚になれと？ 無理無理、できるわけない』

なぜか、葵はそのマイクの言葉に妙に納得してしまった。確かに彼には似合わない。

「じゃあ、今日は何のようだ？ またDS？ まさか、用事がないわけじゃないだろ」

『そうなんだよ。実はアオイの声が聞きたくて・・・』

「寝言は寝て言え！」

『・・・アオイ。なんか今日はご機嫌ナナメじゃない？』

葵は息が詰まった。確かに今の自分はシャルルの一件で機嫌が良くない。だが、それは自分の問題だ。そんな理由で友人に当たるなんて、間違っている。

「・・・すまん」

葵は素直にマイクに謝った。どう考えても自分が悪い。

しかし、次のマイクの一言が葵を凍りづかせた。

『まあ、仕方ない。何せ苦手な女の子と同室になったんだもんね』

「・・・なに？」

シャルルと同室になってから今まで、葵はマイクと連絡を取っていない。なんでマイクが葵に同居者ができたのを知っているのか、葵は分からなかった。

「マイク。なんで俺にルームメイトができたって知っているんだ？」

『・・・ちょっとしたスジがあつてね』

どうやら、詳しく教えてくれる気はないらしい。マイクの態度が腑に落ちないが、葵は諦めて訂正を図る。

「・・・そうか。だが、ルームメイトが女の子っていうのは間違いだ。俺のルームメイトは男だよ」

葵にとって、マイクは大切な友人ではあるが、それとシャルルの正体をバラさないというのは完全な別物だ。嘘をついてでも、それは守らないといけない。

『いや、違う。アオイのルームメイトは、デュノア社のご令嬢だろ？』

「・・・（バカな！　なんでマイクがそれを知っている？）」

マイクの強烈な告白に、葵は驚きのあまり絶句してしまう。

『・・・その反応。アオイ、君はその子が女の子って気付いてるね？』

「ち、違う！」

『アオイ。それじゃ肯定してるのと一緒にだよ』

「っ！」

葵は自分の反応の迂闊さを呪った。

「（マズいマズいマズい！！）」

葵は必死に弁解を考えるが、混乱をきたし始めた頭では妙案が浮かばない。

『けど、よかった。これで、説明する手間が少し省ける』

マイクのその一言によって、葵の混乱した頭が一気に冷やされる。同時にマイクへの疑問が沸く。

「・・・説明って何のことだ？」

『アオイ。今、電話しているのはどこ？』

「・・・部屋だけだ」

『なら、かち合う危険があるな。悪いけど、移動してくれ。君のルームメイトが来ない場所まで』

「・・・マイク、何事だ？ 何を説明しようとしてるんだ？」

『後で全部説明する。とにかく、15分で別の場所に移動してくれ』

そうマイクが一方的に話した直後に、ブツリと携帯電話の通話が切れる。

「いったい、どうしたって言うんだ？」

普段と様子の違うマイク。通話の切れた電話を見つめながら、葵は彼への不信任を強めるのだった。

「大変だったね、一夏」

「まっただ」

アリーナから寮への帰り道。シャルロットと一夏は、先ほどアリーナで起きた出来事に肩を竦めていた。

シャルロットたちの訓練中に、突然ラウラが襲撃し、途中で担当教員が止めなければ、今頃一触即発していただろう。

ラウラがそのような行動をとった理由は、どうやら千冬と一夏に

原因があるようだが、詳しい理由をシャルロットは知らない。

「シャルルには迷惑を掛けたな」

「ううん。そんなことないよ」

「しかし、訓練にまで付き合ってもらっているのに・・・」

「一夏、気にしないで」

そこまでシャルロットに言われては、一夏も黙るしかない。

「・・・しかし、シャルルが着てから訓練が充実しているよ」

話題を変えるように一夏が話し出す。

「そう？　一夏には、他にも教えてくれる人がたくさんいるみたいけど」

「あいつらはな・・・」

一夏の脳裏に浮かぶのは、箒・セシリア・鈴音の3人。3人とも別々の理由で教える側には向かない性格であり、3人の教えが一夏の為になったかは非常に怪しい。

「立花君は？」

「あいつとは、教えられる以前に、一緒に訓練したことすらないぜ。そういえば、シャルルにはそのことにも感謝している」

「え？」

「最近、いつも食事にあいつを連れてきてくれるだろ？ 以前はぜんぜん捕まらなかったから、大助かりだ」

今度は、シャルロットもそんなことない、とは言えなかった。

シャルロットが葵を食事に付き添っているのは、やはり、自分の正体を言うかもしれないと、邪推してしまっているためだ。いや、たぶん葵は誰にも言わないだろうとシャルロットは思っているのだが、心の奥底にいる別の自分がそれを否定する。その不安が行動に表れているのだ。

葵からすれば、完全に他人事で振り回されているのだ。シャルロットは申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

「おっと、ここでお別れだな」

寮と校舎への分かれ道。先ほど一夏は、真耶に書いてほしい書類があるから職員室に来てほしいとの伝達を受けていた。そのため、まっすぐ寮へ帰るシャルロットとはここで別れなければならない。

「じゃあな、シャルル。夕飯はまた一緒に食おうぜ」

「うん。またね」

そうして、シャルロットは一夏と別れ、自室へ帰った。

しかし、部屋に葵の姿はなかった。

「・・・で、今度はしっかり説明してくれるんだよね？」

寮の屋上へ移動した葵は、再びマイクに連絡を入れていた。

しかし、今度の連絡手段は携帯電話ではない。ラファール・リヴ
アイヴのプライベート・チャンネルを使用している。葵はリヴアイ
ヴのヘッドギアのみを展開し、そこから出された空中投影ディスプレイには、彫りの深いアメリカ人であるマイクが映っていた。

『実は、もう1人この話に加わるんだ。そいつの連絡が入るまで、もう少し待ってくれ』

マイクのその一言によって、葵はなんでISで連絡を取るのか悟る。複数人で話し合うのなら、確かに電話よりもこちらの方がやりやすい。

しかし、それによって、葵のマイクへの疑問がますます深まる。連絡が来るといふ人物に対して、葵は心当たりがない。

「その人って誰だ？」

『それは、連絡が入ってからのお楽しみということだ』

マイクが話をはぐらかすというのは、珍しいことではない。しかし、今回に限って、葵はその意図を看破できなかった。

「・・・マイク。念を押しておくけど、待ったはこれが最後だよ」

『分かってる』

それを最後に2人の間に沈黙が下りる。

いつもなら、マイクとのそんな沈黙も心地良いのだが、今回は逆に居心地が悪いように葵には感じられた。

その沈黙の間に葵は思考する。

「（マイクがこれから話すのは、おそらくデュノアさんの事情）」

なんで、マイクがそれを知っているかは葵は分からない。けれど、それはシャルルに対する裏切りのように葵には感じられた。

「（それも含めてちゃんと説明してくれるんだろうな）」

画面に映ったマイクを見ながら、葵は待つ。

——ピコン

そんな機械音と共に葵のディスプレイに新たなウィンドウが表示される。

映し出されたのは金髪の男性。線が細いが端正な顔立ちで、おそらく中年くらいなのだろう雰囲気があるが、20代くらいで通りそうだ。その男性は葵に気付くと、ぱあと花が開いたような優しい微笑みを向ける。

その表情を葵はどこかで見覚えがあった。

『遅いぞ、マティ。私を待たせるなんていい度胸じゃないか』

『マイク先輩がせっかち過ぎるんですよ。僕は遅れるって連絡していたじゃないですか』

2人の会話を見るにかなり親しい間柄のようだ。同時に、そんなフランクな雰囲気にも、葵が先ほどまで感じていたマイクへの不信感が少しだけ薄れる。

『そんな細かいことは忘れた。それよりも、話を始めよう』

「いや、自己紹介をしてもらわないと困るんだけど・・・」

マイクの相変わらずな、会話の独走状態に葵は待ったを入れる。

『すまないね、タチバナ・・・君でいいのかな？先輩に振り回されて大変でしょ？』

「はあ・・・まあ」

否定することができず、葵は曖昧に返事をする。

『おっと、すまない。それよりも僕の紹介だったね。初めまして、

僕はマティウス・“デュノア”」

「へ？」

予想外の自己紹介を受けた葵の表情は、傍目にも間抜け面だった。

『ファミリーネームで分かるだろ？ こいつはおまえのルームメイトの父親で、ついでに言えばデュノア社の社長だよ』

目が点になった葵に、マイクが補足の説明を入れる。

それで葵は思い出した。マティウスの微笑み、それは5日前、シヤルルがした微笑みとそっくりだったことに。

「はあ！！？？」

状況が掴めず葵は絶叫する。

それは誰もいない屋上に木霊した。

第16話 不幸は加速して（後書き）

おかしい。最近、葵の不幸話しか書いてない。

そして、葵、マイクに続くオリキャラ3人目の登場です。これも使い古されてネタですが。

第17話 デュノアの真実（前書き）

まさかの原作キャラ登場なし

第17話 デュノアの真実

「・・・取り乱しました」

絶叫の後、葵は自身の失態に頬を赤くしながら、マイクとマティウスに謝罪する。

『まあ、そうだな。年頃の男女が同じ部屋に数日2人きり。その親御さんが目の前にいれば、絶叫の1つや2つ・・・』

『ほう・・・。タチバナ君、まさか君、僕のシャルロットに如何わしいことを・・・』

笑顔が怖くなりはじめたマティウスに、葵は切れそうな勢いで、首を横に振る。

「そんな事実はありません！」

『本当に・・・？』

「絶対にです！」

『マティ、信じてやれ。アオイはそんなことしないよ』

「マイク・・・」

自分を庇ってくれたマイクに、葵は感動を覚えた。

次の瞬間までは。

『この女性嫌いのヘタレにそんな度胸はない。だから安心しろ』

「・・・」

喉まで出掛かったツツコミを葵は何とか飲み込んだ。確かに女性は苦手だし、変なことをしていないのだが、それを“ヘタレ”で済まされるのは、納得がいかない。しかし、ここでそれを指摘すれば、話が拗れる。ここは我慢だ。

「・・・あの、念のため聞きたいんですけど、シャルロットっていうのは、デュノアさんの——『うん？』——いや、デュノア社長ではなくて、シャルルさんのことでもいいんですか？」

『僕のことはマティウスで構わないよ。そうだ、あの子の本名はシャルロット・デュノア。・・・知らなかったのかい？』

「ええ、まあ」

『というか、アオイ。おまえは、シャルロットちゃんが女の子ってどうやって知ったんだ？』

マイクに言われて、葵は更衣室での一件を思い出す。脳裏に映るシャルロットの姿は、白い肌とコルセットの隙間から覗く谷間、ヒップに女性下着を身に着けた魅惑的な姿だった。

今度は別の意味で頬が赤くなった葵の姿を社長2人組は見逃さない。

『・・・タチバナ君。本当に何もなかったんだよね?』

『あゝあ、私は知らないぞ』

「俺は、無実です!!」

2人を説得するのに、葵は数分の時間を要した。

『さて、ではどこから話そうか・・・』

説得が済んだ後、改めてマティウスが話を始めようとする。しかし、出だしをどうすればいいのか悩んでいるようだ。

「じゃあ、俺が質問するんで、答えていただきたんですが・・・」

『僕は構わないよ。先輩は?』

『私もいいよ』

画面の2人は頷き合った。

「まず、マイクとマティウスさん。2人はどういった関係ですか？」

『学生時代の先輩後輩の間柄だね。そこから今日までお付き合いをさせていただいている』

『腐れ縁って奴だな』

最初にマティウスが答え、それをマイクが補足する。

「え？ でも、マイクはアメリカ人で、マティウスさんはフランス人……ですよね？」

『僕がアメリカに留学したんだ。そこで一期上だったマイク先輩と会ったんだよ』

当時を懐かしんでいるのか、マティウスの視線が遠くなる。

『最初はどこの道楽貴族が来たののかと思ったが、いやはや何がついて、人は見た目じゃ分からんよ』

『よく言いますよ。当時、どの大学教授も先輩の機械工学に付いていけなかったじゃないですか』

『唯一付いてきた男がよく言う』

どうやら、2人の関係はただの大学時代の先輩後輩の間柄などではなく、親友同士のようなのだ。笑い合う2人を見て、葵はそう思った。

「2人の関係は分かりました。それで、マティウスさんの話って言うのは、やはりシャルル・・・いや、シャルロットさんの事でしよつか？」

『そうだよ。シャルロットと同室になったタチバナ君が、マイク先輩の知り合いだったのは、僕にとってはありがたかった。まあ、すでにシャルロットの正体が割れていたのは予想外だったけどね』

「やはり、あの男装はマティウスさんが？」

『そうだよ。僕が命じたことだ』

マティウスの言葉を聞いた葵は、少しだけ彼と心の距離を取る。シャルロットが葵と同室になっても隠そうとした男装の秘密。その元凶を目の前にし、葵は警戒を持たざるを得なかった。

それに――

「（やはり、聞くべきじゃない）」

遠まわしとはいえ、葵はシャルロットに男装の秘密を探らないと言ったのだ。先ほどまではマティウスが通信に入るまでは聞きたいと思っていたが、ここでそれを聞いたら、シャルロットに対する裏切りとなる。

——「……信じていいんだよね？」

葵の頭には、同じ部屋になった晩のシャルロットの呟きがリフレインした。辛そうであり、苦しそうでもある、あの呟き聞いて尚、シャルロットの意思を無視して真相を聞くことは葵にはできない。

「悪いですけど、俺は真相を聞くつもりはありません」

『なぜだい？ 君はシャルロットが男装をしている理由を知らないのだろう？』

「知りません。だけど、シャルロットさんには事情を探らないと遠まわしながら約束したんです。それを破ってまで知ろうとは思いません」

『父親の僕が言ってもかい？』

「そうです」

葵の背中に冷や汗が流れる。言葉遣いはともかく、これでは無礼にも天下のデユノア社のトップに啖呵を切ったようなものだ。

事実。場の空気がどことなく悪くなったように葵には感じられた。

『ふふ・・・』

クスリと笑うマティウスを見て、怒らせてしまったものか、と葵は更に冷や汗をかく。

『なあ、言ったとおりだっただろ、マティ』

『そうですね。確かに先輩の言ったとおりだ』

「あの・・・話が見えないんですけど？」

悪いと思っていた空気が2人の会話によって吹き飛んだ。しかし、目の前で主語のない会話をされても、葵は意味が分からない。

『そのタチバナ君の律儀さ。苦手な女性が相手でも変わらないよ
うだね。前に先輩に聞いた通りだよ』

「えっと・・・それは、まあ・・・」

ストレートに褒められて、つい葵は恥ずかしさを覚えた。

『そんなタチバナ君だから、ぜひシャルロットの事情を聞いてほしい。頼む、お願いだ』

葵は困惑する。

マティウスはシャルロットに命令したと言っていたのだから、無意識に葵はマティウスが悪のような印象を抱いていた。だが、目の前で明らかに格下の自分を相手に頭を下げるマティウスを見ると、それは葵の勘違いのようだ。

『私からも頼むよアオイ。それに、これはシャルロットちゃんのためでもある』

「……どういうことだ？」

本人が隠そうとしていたことが、なぜその人のためになるのか。葵はその予想ができない。

『聞く気になってくれた。そう思っていんだね？』

マティウスの言葉に葵は躊躇した。聞くべきか、聞かないか。先ほどもからグルグルと変わる答えが再び頭を回る。おそらくどちらを選んでも正解はないだろう。聞けばシャルロットに対する裏切り。聞かなければマティウスの願いを退けることになる。どちらを選んでもすすきりすることはない。

だが、しばらく、思考した後。葵はしっかりと、マティウスに頷いた。

聞かずに後悔するよりも、聞いて後悔する。最悪の場合は、墓前で秘密を持って行くようにしようと葵は思った。

『ありがとう。少し長くなるけど、構わないかい？』

葵は再びマティウスに頷く。

『まず、あの子だけど・・・僕の妻の子じゃないんだ』

場が凍る。創作物ではよく聞く設定だが、現実には聞くところも重いものだったとは、葵は初めて知った。

「愛人の子・・・ですか？」

『ううん。そうじゃないんだ』

「……どういことですか？」

苦しそくに話すマティウスに、葵は恐る恐る疑問を投げかける。

『シャルロットは、僕と婚約者だった女性との子どもなんだ』

「その婚約者とは結婚しないで、別の女性と結婚したんですか？」

『……そうだよ』

「いったい、どうして……」

『それについては私が答えよう』

表情に苦しさが隠れなくなったマティウスに変わり、マイクが引き継ぐ。

『アオイはさ。フィリドルって名前を聞いたことないかい？』

「……ないと思う」

『フィリドルっていうのは、フランスの政界と経済界に多数の人材を置く一族のことだ。あまり表に出てくることはないけど、裏では政界と経済界の手綱を握って操っていると、もっぱらの噂さ』

まあ、その噂はほとんどブラックなグレーだが、とマイクは続けた。

『マティは大学在学中からIT事業を起こしていてな。15年前にはすでにフランス一流企業として、デュノア社を経営していたんだ』

『・・・そこをフィリドール族に目をつけられてね。一族の女性と結婚しなければ、会社を潰すと脅されて・・・』

再びマティウスに会話のバトンが渡る。

「婚約者を捨てた・・・いや、捨てざるを得なかったというところですか？」

『アオイ。勘違いされる前に言っておくけど、そうしなければ会社以上にマティの婚約者の方が危なかったんだ』

マイクに言われるまでもなく、葵はマティウスの苦悶に満ちた顔を見て、ある程度のことは察していた。

おそらくマティウスは、最初はフィリドール一族の警告を断ったのだ。強情なマティウスに業を煮やし、フィリドール一族が変えた攻撃対象が彼の婚約者だったのだろう。

『僕が婚約者を捨てたことに変わりはないよ。とにかく、フィリドール一族には、彼女に金銭的補助をするという条件を結んで彼女と分かれ、今のフィリドールだった妻と結婚したんだ』

愛した女性を守るため、愛した女性を捨てなければならない。そのマティウスの苦悩は葵が想像できないほど辛かっただろう。

『けれど、2年前。彼女がシャルロットを残して亡くなってしまったね。僕は居ても立ってもいられずに、強引にシャルロットを引き取ったんだ。けど、それは間違いだってすぐに気付いたよ』

どこか自虐的な笑みを浮かべながら、マティウスは話を続ける。

『シャルロットが来てすぐに、あの子はフィリドール、いや、妻に殺されかけた』

「え！」

つい、葵は驚きの声を上げた。

『いや、未遂で終わったんだよ。だから、あの子は自分が殺されかけたなんて、全く知らないはずさ』

「けど、どうして奥さんはそんなことを・・・」

婚約者のときのフィリドールの狙いは葵にも分かる。おそらく、マティウスに一族の女性を妻として入れることによって、親戚という形でどんと内部に入り込み、デユノア社の乗っ取りを図ったのだろう。

だが、シャルロットが狙われる件についてはよく分からない。別に会社が社長の子どもに継承さえるわけでもないし、そもそも葵の予想が正しければ、会社の中核はすでにフィリドール一族が掌握しているはずだ。意味もなければ、メリットも、葵には思いつかない。

『そこは、ほれ。マティの奥さんも、女だったってことだ』

「・・・ああ」

マイクの言葉に、葵は溜息をつくように呟き、納得する。

マティウスは、男装したシャルロットをさらに輪に掛けた素敵紳士だ。いくら、最初は気がなかったとしても、10年以上一緒に生活していれば、大抵の女性は無条件で彼に惚れるだろう。そこに、旦那の昔の女性の忘れ形見が出てくれば、それはさぞ、面白くないに違いない。

葵が分からなかったのも、無理はない。利益不利益ではなく、感情で動いているのだ。問題は、その嫉妬による嫌がらせの実行度が、一般の女性より逸脱しているところだ。さすがに、引き取ってすぐに殺人未遂は度が過ぎている。

「もしかして、シャルロットさんがIS学園に入学したのは・・・」

『そうだよ。IS学園の生徒は、本人が承諾しない限り、あらゆる国家・組織・団体に帰属しないし、それらの介入も許可されていない。あの子を妻から・・・フィリドール一族から守るためには、それしか方法がなかった』

「そういうことですか・・・」

これで、葵は大体のことに合点がいった。おそらく、シャルロットの男装も、フィリドールに対する言い訳が、“男のIS操縦者のデータ取りのため、男装してIS学園に転入する”くらいしか妥当なものかなかったためだろう。

「マティウスさんの事情は分かりました。けれど、その事情、シャルロットさんはどこまで知っているんですか？」

『・・・シャルロットは、ほとんど何も知らないよ。監視が厳しくて、あの子とまともに会ったのは、たった2回。会話だってわずか数回だ。あの子にとって僕は、企業のために母親を捨て、利益のために自分の娘を捨て駒のように扱う卑劣な奴しか思っていないはずだよ』

あまりに悲痛な顔になったマティウスに対して、葵は顔を背けた

い欲求に襲われる。けれど、それはできない。もし、顔を背けてしまえば、自分の恥ずべき過去を話してくれるマティウスに対して、失礼以上の行動になる。葵はぐっと我慢した。

「最後に聞きます。マティウスさん。あなたは、俺に何を望んでいるのですか？」

まさか、ここまでの話をただ話したいだけで話したわけではないはずだ。話した以上、それを対価に自分に何かをさせる気だと、葵が思ったのは当然な思考の帰路だ。

『あの子を守ってほしい』

予想しなかったわけではないが、実際に聞くと、葵は意外な感じがした。

「まだ、フィリドル、いやあなたの奥さんからの介入があるのでしょうか？ それなら俺には荷が重過ぎます。それこそ、学園に事情を説明して、守ってもらえばいいじゃないですか？」

もしも、マティウスの奥さんが、スパイ映画さんからの工作を行えば、素人の葵には防ぎようがない。ならば、組織であるIS学園そのもので守ってもらった方が確実だ。

『それはできない。一応、妻が搦め手でくれば押さえられるように手は打ってあるけど、学園に事情を教えれば、遅かれ早かれフィリドールに僕の行動がバレて身動きが取れなくなる。できるだけ、この事情を知る人間は少なくしたい』

「なら、別に俺が特別何かする必要はないでしょう。搦め手ができなければ、この学園は安全なはずです。いったい何を危惧しているのですか？」

『もし・・・もしだよ。妻が実力行使に出てきた場合は、止めてもらいたい』

「・・・まさか！ それはさすがにないでしょう」

実力行使。それはIS学園を直接攻撃してくるということだ。あらゆる国の淑女が通うIS学園にそんなことを行えば、どうなるかなどバカな奴でも分かる。

まず間違はなく、世界有数国家全てを敵に回す。

それは愚者にも劣る行為と言えよう。もしも、それを行う奴がいれば、そいつはよほどの馬鹿と天才紙一重な奴が、反国主義の集まりに違いない。

『そうだよ。普通なら、あり得ない。おそらく、万分の一あるかないかの話だ。だけど、打てる手を全てやっておきたいんだ』

「それは・・・わかります。けど・・・」

『アオイ。私からも頼む』

らしからず、真面目に話すマイクに、葵は反論することもできずいた。

頷くのは簡単だが、それは同時に、もしもの場合、あのデュノア社を相手にすること同義だ。簡単に頷けるはずもない。

「・・・少しだけ、返事を待ってください」

やや時間を置いて、葵はそう呟いた。

『・・・そうだね。急にこんな話をされても、すぐに判断はつかない。今日のところは、これで失礼するよ』

「・・・すみません」

『謝ることはない。こちらも、すまなかった。そして、きちんと話を聞いてくれてありがとう』

ディスプレイからマティウスが消える。残されたマイクと葵の目が合った。

『それで、どうするつもりだ？』

「考え中。・・・マイクは、さ。俺がデュノア社と戦うことになっても勝てると思うか？」

『勝てる』

あつさり答えるマイクに、葵は毒気が抜かれる思いだった。

「・・・簡単に言うね」

『言うさ。何せアオイは、私が知る中で最強の男だからな』

確かに、マイクが知るISが使える男は葵だけなのだから、その言葉は間違っていない。しかし、マイクが言いたいのはそういうことではないだろう。

『真面目な話。アオイには、マティを助けてもらいたい。あいつはさ、婚約者と別れてからずっと苦しんでいたんだ。その人が亡くなり、シャルロットちゃんまでいなくなったら、もう立ち直れないだろう』

「分かる・・・つもりだ」

大切な人を亡くした経験のない葵は、間違っても分かると断言はできなかった。

『今はそれでいい。でも、よく考えてほしい』

それを最後にマイクも立ち去るように、ディスプレイから消える。

日が沈み、星の始めた空を、葵は見上げる。いつの間にか握っていた手に、気持ち悪いほどの汗を握っていた。

第17話 デュノアの真実（後書き）

たぶん、読者の皆様方からの指摘が多くなりそうな今回の話。

どんと来いです。待っております。

後、お気に入り登録者数が、ついに1,000名を越えました。
このような駄文に付き合ってくださり、読者の皆様には、感謝が絶えません。

ありがとうございます。

第18話 限界突破（前書き）

更新遅くなりました。

第18話 限界突破

マティウスの独白から2日たった月曜日。

放課後になった学園を葵はフラフラと当てもなく歩いていた。

普段なら直結で部屋に戻る葵にしては珍しい。まあ、それもそのはず、歩く葵の頭を占めるのは、先日のマティウスとの会話。すなわち、彼の頼みをきくか、きかないかである。

初めて会ったとはいえ、真剣に頼み込んできたマティウスの頼みをきくのはやぶさかでもない。しかし、一人の少女の命、世界有数の大企業との対立。どちらだけでも、今まで極々普通な一般人であった葵にとっては、あまりにも重い内容だ。簡単には決められない。

「ふう・・・」

自動販売機でスポーツドリンクを買い、近くにあったベンチに葵は腰をかける。六月初夏の不快感を含んだ生温い風が、葵の身体を撫でた。

「あら？」

「ん？」

葵がしばらく空を眺めていると、少し離れた場所から聞き慣れてきた声が聞こえ、そちらに顔を向ける。

「こんなところにいらっしやるなんて、珍しいですね」

葵に声をかけてきたのは、セシリアだった。相変わらずだが、歩き方やその他細かな仕草一つ一つが妙に芝居掛かっている。

セシリアに言われて、葵は自分がいる場所を改めて認識する。ここは校舎とアリーナのちょうど中間に位置する所だ。普段なら、こんな一夏たちと遭遇しやすい場所には決して近づかないのだが、今日の葵は相当に危機感が足りていないらしい。

「まあ、たまにはね・・・」

「もしかして、お暇なんですか？」

確かに予定がないという意味では葵はヒマではあるが、重要な考え事のあるため、明確な意味ではヒマではない。

問いの答えに躊躇した葵を、セシリアは肯定と受け取ったようだ。

「お暇なのでしたら、訓練にお付き合いいただけませんか？ わたくしは、今度の学年別トーナメントに、何としても優勝せねばなりませんの！」

気合一杯に喋るセシリアの背中には炎が見えるようだ。

葵は、セシリアの気合の入りようの理由に心当たりがある。今朝方のことだが、食堂やクラスで女子たちが、“今月末に行われる学年別トーナメントに優勝すると、織斑一夏と付き合える”という、やや信じがたい話をしていたのを、あちらこちらで聞いた。セシリアはそれを信じているのだろう。

意味もなく、こんな噂が流れるわけもない。おそらく、一夏が元となる迂闊な発言でもしたのだろうが、この学園は葵の悪評の件を考えても、まともな噂の流れ方をしない。そのため、それがどこまで真実なのか信憑性が薄いと葵は考えていた。

「ヒマじゃ——」

ヒマじゃない、と答えようとした葵だが、途中で留まった。

ある意味これはいい機会なのかもしれない。マティウスの願いをどうするか決め兼ねているが、もしもきく場合は、今までやってきた1人きりの訓練では足りないだろう。セシリアは代表候補生。共に訓練をする相手としては、これ以上の人選は中々ない。さらにいえば、先月のクラス対抗戦の時、助けてもらった恩義もある。セシリアと関わるのはこれまでの葵の方針に反するが、今回だけはセシリアの頼みを聞いてもいいだろう、と葵は結論づけた。

「いや、ヒマだな。付き合っよ」

「ほ、本当ですよ?」

誘ったのはセシリア自身のはずだが、葵の返答に信じられない様子。まあ、今まで逃げ続けてきた葵の行動を考えれば当然の反応か。

「本当だつて」

「なら、急ぎましょう。この時間なら、まだアリーナには誰もいないはずですね。そこで、模擬戦を――」

「ふん。面白そうな話してるじゃない」

喋るセシリアを遮ったのは、いつの間にか2人の後ろにいた鈴音だ。

「珍しい2人組が、何を話しているのかと思ったら、二人で模擬戦? あたしとの再戦は断ってばかりなのに、ずいぶん気前がいいじゃない」

「いや、まあ・・・」

ずっと近づき見上げる鈴音に、葵は半歩下がりながら視線を逸らす。後ろめたさもあるが、女子に近づかれるのはやはり苦手な葵

だった。

「決めた。あたしも訓練に参加するわ！」

「ちょっと、凰さん！ 何を勝手に——」

「いいわよね、立花」

抗議するセシリアを無視して、鈴音は葵に尋ねる。

「ああ・・・うん」

鈴音にもクラス対抗戦で励ましてもらった恩のある葵は、それを断ることができず、結果として、3人で訓練することがなし崩し的に決まってしまった。

「（1人でも手に余るのに、2人も一緒・・・。普段と違うことをすると、ろくな事がないな・・・）」

内心で溜息をつきながら、葵はセシリアと鈴音と共にアリーナへ向かうのだった。

第三アリーナは、セシリアが言った通りまだ生徒の姿はなく、模擬戦をするには最適な状態だった。

しかし、アリーナに着いた3人はすぐに模擬戦を始めない。

なぜなら――

「先約はわたくしなのですから、先に立花さんと戦うのはわたくしですわ!」

「最初に戦うって約束したわけじゃないでしょ! だったら、あたしが先でも構わないわよね!」

戦う順番をめぐって、セシリアと鈴音が絶賛口論中であるためだ。

「なあ、どっちでもいいから、早く決め――」

「立花(さん)は、黙ってて(ください)!!」

「……はい」

一応、葵をめぐつての争いのはずなのだが、当人が一番蔑ろにされていた。

「（失敗だったか・・・？）」

訓練を始める前から、葵は訓練に了承したことに後悔し始めていた。

ふと、葵が反対側のピット出入り口に目を向けると、ちょうど誰かが出てくるところだった。

「あれは・・・」

遠目だが、葵はその特徴的な銀色の髪から、出てきた相手が誰だか把握する。

ラウラ・ボーデヴィツヒ。

漆黒のＩＳを纏ったラウラと葵の視線が交錯する。その表情がニヤリと歪む様を、葵は確かに見た。

ゾクリという背筋の嫌な感覚と共に、ラウラの左肩の砲身が葵を捉える。

「！！ 2人とも、伏せろ！！」

「「え？」」

葵は、ラウラと自身の延長戦上にいるセシリアと鈴音に叫ぶと同時に、近寄り叩きつける勢いで、地面に押し付ける。

次の瞬間。

葵たちのはるか上を、ラウラから放たれた実弾砲が通り過ぎる。

「・・・所詮は素人か。威嚇も分かんとはな」

葵がゆっくり立ち上がると、つまらなそうな表情をしたラウラが3人の近くに降り立つ。

「（神経質になりすぎた・・・）」

実のところ、葵はラウラの構えた砲身の照準が自分からズレているのに、気付いていた。もし、葵が普段通りであったなら、もっと冷静に対応できたはずだ。しかし、今の葵はマティウスの件で神経質になっている。その心情の差が、行動にも表れてしまっていた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ・・・」

「・・・どういづつもり？ いきなりぶつ放すなんていい度胸してるじゃない」

ISを展開させ、メインウェポンをとり準戦闘態勢をとったセシリアと鈴音がラウラを睨む。

「中国の『シンロン甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か・・・ふん、データで見た時の方がまだ強そうではあったな」

ラウラのいきなりの挑発的な物言いに、鈴音とセシリアの両方が口元を引きつかせる。

「何？ やるの？ わざわざドイツくんだりからやってきてボコられたいなんて大したマゾっぷりね。それともジャガイモ農場じゃそっくりなのが流行ってんの？」

「あらあら鈴さん、こちらの方はどうも言語をお持ちでないようですから、あまりいじめるのはかわいそうですね？ 犬だってまだワンと言いますのに」

ラウラのすべてを見下すかのような目つきに並々ならぬ不快感を抱いた二人は、それでもどうにか怒りのはけ口を言葉に見いだそうとする。

「はっ 同数同士の戦いとはいえ、量産機に負ける程度の力量しか持たぬものが私と同じ専用機持ちとはな。よほど人材不足と見える。数くらいしか能のない国と、古いだけが取り柄の国はな」

——ぶちっ！

鈴音とセシリアから何かが切れる音がした。

「怒ったか？ だったら来い。あの下らん愚図な男だけでは飽き足らず、そのISを遊戯と勘違いしている木偶を取り合っている者たちに私が負けるものか」

愚図というのは、察するに一夏の事だろう。そして、木偶というのは——

「木偶とは、俺の事か？」

そう問う葵に、ラウラは不適な笑みを返してきた。まるで『他に誰が居る？』と口に出さずに言っているようだ。

今まで、散々陰口を言われてきたが、眼前でここまで真っ直ぐに言われるといっそ清々しいくらいだ、と葵は思った。

「アンタにこいつの何が分かるって言うのよ！」

言い返さない葵に変わり、鈴音がラウラに反論する。

「DSの世界チャンピオンなどと、大層大げさな称号を持っているようだが、くだらんゲーム如きで威張っているような奴など、木偶で十分だ」

「「あ」」

ラウラの言葉に、鈴音とセシリアが同時に声を上げた。2人とも、以前に葵に同じことを言ったことがある。その禁句を言った後、葵がどうなったか、2人とも身をもって知っていた。

「ほう・・・」

葵の声が急に低くなる。

鈴音もセシリアも、前方にいる葵の表情を窺えないが、想像に難くない。

「言うじゃないか。他人を言い負かすことでしか、自分の価値を見出せない子どもが！」

怒気混じりの声で喋りながら、葵はラファール・リヴァイヴを起動させる。右手には彼の十八番のスナイパーライフルを持っていた。

「貴様——！」

ラウラも不適な笑みが消え、火山の噴火前にも似た激情が表情に滲み出る。

数瞬の間。

されど、それは当然停滞の前触れに在らず——

葵とラウラが同時に飛翔する。

「殺す——！」「墜とす——！」

——激戦の前触れに他ならなかった。

——同刻 学園校舎1F廊下

「一夏、今日も放課後特訓するよね？」

「ああ、もちろんだ。トーナメントまで日がないからな。今日使えるのは、ええと——」

「第三アリーナだ」

「わあっ!？」

廊下をシャルルと歩いていた一夏は、いきなり現れた筈の声に揃って声を上げた。

「・・・そんなに驚くほどのことか。失礼だぞ」

「お、おう。すまん」

「ごめんなさい。いきなりのことですみくりしちゃって」

拗ねたように呟く筈に、一夏とシャルルは申し訳なさそうに謝った。

「なんだ？」

一夏たちが、アリーナに近づくと何やら慌しい。どうやら、アリーナ内で何か騒ぎが起こっているようだ、と一夏は感じた。

「何かあったのかな？　こっちで様子を見ていく？」

観客席の扉を指差すシャルルに、一夏は頷いた。アリーナの様子を見るには、ピットから中に入るより、観客席で見た方が早く済む。

観客席は、すでに大勢の生徒に埋め尽くされていた。その中で、唯一制服ではなく、ISスーツを着ている2人が一夏の目に止まる。

「鈴。セシリア」

「一夏さん……」

「アンタも来てたのね」

上空を見上げていた視線を一夏に向け、2人が近寄ってくる。

「この騒ぎは何事だ？」

「アリーナを見れば分かるわよ」

そう言う鈴音に倣い、一夏はアリーナの上空に目を向ける。

放課後にも関わらず、アリーナ内を使用しているのはわずか2人。その他の生徒はいない。その2人がISを纏い、戦火を交えている。

「あれは・・・シュヴァルツエア・レーゲンとラファール・リヴアイヴ？」

遠目に映る漆黒と深緑の機体を、シャルルが正確に把握する。

「ラウラと・・・あの動きはもしかして立花か？」

「そうよ」

今度は上空に視線を向けたまま、鈴音が肯定する。

「何がどうなって、あの2人が戦うことになったんだ？」

「ボーデヴィツヒさんが、わたくしと同じ轍を踏んだだけですわ」

簡潔だったが、セシリアの言葉で一夏は理解した。

どうやら、ラウラは葵の数少ない逆鱗に触れたらしい。セシリアとの一件のこともあるって、学園で葵の陰口を叩く女子ですら、DS関連のことは絶対に言わないというのに。

「馬鹿者共め」

「のわぁ!？」

いきなり真後ろから聞き覚えのある声が聞こえ、一夏は奇声を上げる。

「ち、千冬姉!？ いつの間に・・・」

「織斑先生と呼べ。今来たばかりだ」

振り向いた一夏が見たのは、担任であり自身の姉である千冬とその隣にいる副担任の真耶だった。

「なんで2人がここに？」

「アリーナの使用人数が多くなったと聞いて、監督補佐に来たんです」

「まったく。どこの馬鹿が騒いでいるかと来て見れば、どちらも私のクラスだとはな」

心底面倒くさそうに、千冬が溜息をついた。

「あの・・・止めなくていいんですか？」

シャルルがアリーナ内を指差しながら、教師2人に言う。戦闘は傍目に見ても、かなりの激闘である。その心配は分からなくもない。

「別にかまわん」

「規定違反をしているわけではないですからね」

教師2人の返答はあっさりしたものだった。

「でも・・・」

「無駄口を叩かずに、戦闘をよく見ておけ。特に、月末の学年別トーナメントを勝ち抜く気があるのならな」

千冬の一言に、一夏ははっとなる。

アリーナで激闘を続ける2人。トーナメントで勝ち抜くにあたって、必ずどちらか、あるいはどちらともぶつかるだろう。特にラウ

ラとは、土曜の一件から、戦って勝ちたいと一夏は思っていた。

一夏は、アリーナ内の戦闘に意識を集中させた。

ラウラの両肩から射出されたワイヤーブレードが、左右から葵を襲う。葵は、両手にハンドガンを構え迎撃射撃を行うが、それらは複雑な軌道でぐぐり抜ける。

「ちっ・・・！」

珍しく舌打ちをしつつも、葵は片方のワイヤーブレードをかわし、その隙に襲いかかってきたもう片方を、切り替えたショートブレードで切っ先を弾き飛ばす。

弾いたワイヤーブレードが、ラウラに戻るタイミングを狙って、葵はハンドガンを数発撃つ。しかし、弾丸はラウラに当たることなく、彼女が構えた右手数十センチ手前で完全に停止していた。

「・・・これもダメか」

スナイパーライフル、アサルトライフル、グレネード、ショットガン、そして今撃ったハンドガン。これで、葵のISが搭載している射撃武装を全て使用したことになるが、その全てがラウラに届くことはなかった。

「どうした、もう終わりか？」

構えた右手を解きつつ、ラウラがまた不敵な笑みを浮かべる。構えを解くと同時に、空中に静止していた弾丸が、糸が切れたように地面に落下した。

「（機体性能差以上に、機体の相性が悪いな・・・）」

ラウラのシュヴァルツェア・レーゲンが使う停止結界は、授業で習ったISのPICを応用或いは発展したものだ、と、葵は察しがついていた。そして、それが正しければ、おそらく実弾兵器が効かないということも。

付け加えれば、甲龍やブルー・ティアーズ以上に、ラファール・リヴァイヴと基本性能に開きがある。

「（愚直に攻撃しても当たらない。少し変則で攻めつつ、動きを捉えてみるか・・・）」

葵がラウラに向かって加速する。

「ふん！」

またも、ラウラがワイヤーブレードを使い、葵を迎撃してくる。ただし、今度の数は4つだ。しかし――

「甘い！」

葵がバレルロールで、上手くワイヤーブレードの間をくぐり抜ける。ラウラ自身は気付いてないかもしれないが、葵を侮っているのか、1つのワイヤーブレードの動きが先ほどの軌道と変わっていなかった。

迎撃がかわされ、接近を許したというのに、ラウラは不敵な表情を崩さない。近接戦闘でも高い技量を持つラウラは、葵と接近戦になろうとも、自分の優位が崩れることはないと確信していた。

葵は、武装をアサルトライフルに切り替え、近距離でラウラに弾幕の雨を浴びせる。

「近くで撃てば、当たるとでも思ったか？」

ラウラを避けることなく、またもや右手を構え、A I Cを発動させた。

「いや、別に」

ラウラの技量を把握しつつある葵は、それが効かないことは百も承知だ。狙いはそれではなく――

「（予想通り、また停止結界を発動させたな）」

葵は、A I Cを発動させたラウラにグレネードを3発放つ。その後、両手に構えたアサルトライフルで先ほど以上の弾幕をしかける。

「効かないと、まだ分から――」

ラウラの言葉は、突然目の前で起きた爆発に遮られた。

ラウラは後に気付いたが、それは停止結界に捕まったグレネードがアサルトライフルの弾丸によって炸裂したことによる現象だった。だが、この一瞬では、ラウラは何が起こったのか理解できない。

ラウラの左側前方からA I Cを回り込み、爆煙を切り裂くように

影が飛び出してくる。もちろん、それは葵以外にはいない。

「捉えた！」

「ちっ！！」

戦闘開始してから、初めてラウラの表情が崩れる。

両手にシヨードブレードを持った葵が、息もつかない連続斬撃を仕掛ける。ラウラもプラズマ手刀で応戦するが、攻撃の速さに加え、時々シヨートブレードを逆手に持ち替える葵の変則的な攻撃に、受けるだけで手一杯だ。

「この……！」

攻撃の苛烈さに耐えかねて、ラウラは後退すると同時にワイヤーブレードで葵に牽制をかける。葵も、まるでバック転するかのよう大きく一回転しながらワイヤーブレードを避けた。

「なんていうレベルの高い戦いをしてるんだ、あいつらは・・・」

一夏は呆れと感嘆が混じった声で呟く。

「すごい・・・。相性は最悪なはずなのに、あそこまでボーデヴィッヒさんと対当に戦えるなんて・・・」

カスタム機とはいえ同じ機体を使うシャルルだが、仮に自分がラウラと一対一で当たっても、あそこまで対等に戦える自信はない。

「それにしても、近接戦闘でも、あいつはあそこまで動けるのか・・・」

一夏は、今までの見た葵の戦闘から、葵もセシリアと同じように近接に弱いタイプだと思い込んでいた。しかし、今の戦闘を見るに、葵が近接が弱いとはとても言えない。

「隙がないな」

「まったくですわ」

一夏の呟きに菊とセシリアも肯定する。

「ふむ。やはり、ボーデヴィツヒでも立花を制しきれないか」

何事でもないような千冬の一言だが、それは紛れもなく葵に対する賞賛を含んだ一言だった。機体性能に差がある以上、それを埋めるのは操縦者の技量くらいしかない。つまり、ラウラですら葵には技量において及ばないことは、これで明白となった。

葵とラウラの技量差。

それを明確に感じ取っているのは、戦っている当のラウラだった。機体性能の差に相性の良さ。それにも関わらず攻防が一進一退なのは、葵の技量がラウラ自身よりも高いためだ。

しかし、それをラウラは認めるわけにはいかない。

「貴様!!」

激高したラウラは今度は全6つのワイヤーブレードで葵に襲い掛かる。しかし、その選択は誤り。激高した時の攻撃ほど読まれやすいものなどない。

「（両手の武装を狙うのが1つずつ。後は、上空から頭、後方から両足。残る1つは真っ直ぐ胴体……）」

これまで何度もワイヤーブレードを使ったため、ラウラの攻撃パターンは葵に読まれていた。

葵は、最小限の動きでそれらを紙一重でかわすと、今までワイヤーブレードを弾くために使っていたショートブレイドでワイヤーを切断する。

4つのワイヤーが切られ、本体との接続を失ったブレードが各々明後日の方向へ飛んでいった。

「この……雑魚がよくも!」

「なら、その雑魚にやられる君は、なんて言われるのかな?」

葵がまたラウラに加速をかける。しかも今度は『イグニッション・ブースト瞬時加速』だ。

反射的にAICを発動させようとしたラウラだが、先の展開を思い出し止まった。変わりにプラズマ手刀を前もって展開させる。

「2度も奇襲は効かん！」

「だったら、正攻法でやるだけだ！」

葵が再び斬撃を仕掛ける。今度は奇襲ではないため、ラウラも先ほどより、硬い守りを見せた。

だが――

「！ 速い！」

ラウラは驚きの声を上げる。葵の斬撃速度は先ほどよりも数段上だ。

葵の正攻法。それは、ラウラの反応を超える速度で攻撃を決める簡単なもの。

葵の予想外の攻撃速度に驚くラウラだが、葵とて余裕ではない。

「（ここで決めきれないと、泥沼になる）」

アリーナの観客席で見ている面々が言うとおり、近接戦闘もこなせる葵だが、射撃戦と違い、攻撃パターンがそう多いわけではない。

もし、これで決めきれず射撃戦になれば、A I Cを突破する武装を持たない葵の圧倒的不利となる。

ここが戦いの分け目。葵は一層の気合を入れた。

「くっ・・・！」

数十度に渡る斬撃の交差。その末にラウラが苦悶の表情を浮かべた。

「（今——！！）」

葵はそれを見逃さず、最高速度の一撃をラウラに仕掛ける。

だが——

「！！！？？」

その遅い一撃をラウラがプラズマ手刀で受け止める。同時に、葵はそれまでの有利をかなぐり捨てて、ラウラから距離を取った。

「（今は・・・なんだ？）」

今、葵が行ったのは最速の一撃だったはずだ。しかし、実際の一撃はあまりに遅い。そうなってしまうほどに、先の一撃の時、葵は機体が重いように感じていた。

「（機体の故障？ だけど、エラーメッセージは出てない……。壊れたのは基礎システムか？）」

技術に明るいわけではない葵がいくら考えても、答えは出ない。唯一分かることは、このまま戦闘を続けるのはかなりマズいということだけだ。

「……なあ、ボーデヴィツヒさん」

「……なんだ？」

肩で息をするラウラがイラついた態度を隠さずに、葵に応える。

「模擬戦を始めてもう60分を超えている。この続きは月末のトナメントで……ということにしない？」

「何を——！」

そう口に発したラウラだが、その途中で口を噤む。葵に言われて

戦闘を止めることは癪だが、このまま続けても自分の優位に働かないということを理解したのだろう。

「・・・いいだろう」

しぶしぶ、まるで自分を納得させるかのように、ラウラが小さくそう答えた。

2人は地面に降り立つと、同時にISを待機状態へ移行させる。

睨むラウラの視線を避けるように、葵は彼女に背を向け、ピットへ向かう。

「待て」

後ろから聞こえる鋭い声に、葵は振り向いた。

「何？」

「貴様・・・名はなんと言ったか？」

「・・・立花葵」

「立花葵・・・」

自分に覚えこませるように、ラウラが葵の名を復唱する。

「立花葵。覚えておけ、貴様はこの私が必ず倒す」

「え？」

呆気にとられる葵を他所に、今度はラウラが葵に背を向けて反対側のピットへ戻っていった。

そしてそれは、ラウラが葵を認めた瞬間でもあった。

第19話 動き出す悪意（前書き）

更新遅れました。

第19話 動き出す悪意

「結論から言いますと、異常はありません」

ラウラとの戦いの後、葵はピットにて真耶にラファール・リヴァイヴの状態を見てもらっていた。

最後の一撃での機体の異常。それを調べるため、隅々まで検索したが結果はオールグリーン。つまりは異常なしだ。

「・・・ということは、あれは俺の勘違いか・・・」

60分を超える激戦である。アドレナリンの過剰分泌により、戦っている最中はあまり疲れを感じなかった葵だったが、今は身体がやや重い。本能的に身体が自身の動きにストップをかけたとしても不思議ではない、と葵は思った。

「そうではない」

葵の呟きに答えたのは、千冬だ。

「あのリヴァイブの動作不良は、おまえの反応速度がリヴァイブの追従性能を上回ったことによるフリーズ現象だ」

フリーズ現象でよく聞くのは主にパソコンだ。その原因は様々だが、その1つとして言われているのは、処理すべき情報量がパソコンの性能を上回って起こるものがあるが、今回のリヴァイブの不調もそれが原因であるらしい。

「パソコンなら分かりますけど、ISでそんなことが起こるんですか？」

「過去の事例がないわけではありませんけど、学生で起こったのは立花君が初めてです」

興奮したように、真耶がやや長舌に喋る。

「そもそも、リヴァイブや打鉄は訓練機として使用されるくらい安定した操縦性を重視した機体だ。そのため、操縦者への追従性能に関しては正直低いと言わざるを得ない」

「それでも、十分な機能を持っているはずなんですけど・・・」

2人の視線が葵に集中し、葵は居心地の悪さを感じた。

「まったく、非常識な奴だ」

千冬の言葉に真耶が頷く。

非常識さで言えば、目の前の人物が一番非常識な存在だと思う葵だが、そんなこと言えばクラスで恒例と化している出席簿攻撃が炸裂するに違いない。反論せずに、痛くなってきた頭を抑えた。

「まったく。なんで、急にこんなことに・・・」

愚痴るように葵は呟く。

マティウスの件が控えている手前で、本気で戦うことができない状態に陥ってしまった。これはいよいよ断るべきか、と葵は考え始めていた。

「ようやく、おまえの身体ができてきたということだ」

再び葵の呟きに千冬が答える。

「？ どういうことです？」

「4月の時点で、おまえの操縦技量は新入生の中でも抜きん出ていた。だが、それに比べて体力は並以下。立花、おまえはまともに運動をした経験はなかっただろう？」

千冬の言葉に葵は自身の過去を振り返る。小学生の頃はともかく、中学生時代は放課後になると直行でゲーセンまでDSをやる毎日だったため、毎年帰宅部。確かに運動とは無縁な生活をずっと送ってきた。

体力など、あるはずもない。

「ゆえに、おまえには授業で“特別カリキュラム”を受けてもらった」

響きだけ聞けばとてもいい意味に聞こえるが、実際はそんなことない。

「もしかして、ISの実施授業で妙に基礎トレーニング時間が多かったのは・・・」

すでに周知なことだが、IS学園といえども訓練機には限りがあり、生徒1人当たりが1回の実施授業でISに触れられる時間はあまり多くない。ISが使えない時間、生徒たちが何をやるかといえば、ISを動かしている生徒を見ているか、基礎訓練を行うかのど

ちらとなる。

事、葵に関して言えば、基礎訓練の割合が異様に多かった。葵自身は、それは千冬が女子が苦手な葵に配慮しての処置か、授業を円滑に進めるためにワザと葵とクラスの間を開けているものかと思っていたが、そういった事情があったようだ。

「体力は付いただろう？」

「ええ、まあ・・・」

葵の歯切れは悪い。確かに体力は付いた。もやしみたいだった身体もがっちりしてきたし、入学からの3ヶ月で2cmも背が伸びた。しかし、そのために行ってきたことは1周5キロのグラウンドを2周し、短距離持久走を50回、筋トレ数種類を3セット、などを授業時間の決して長くもない間に葵はやらされていた。

運動経験ゼロの人間にいきなりこれだけの運動をさせたのである。慣れた今はともかく、当初は死に物狂いだったことを思い出し、葵は千冬の気遣いに素直に喜べない。

「身体が鍛えられたことで、体力だけでなく反射神経も上がったんですね」

しみじみと言う真耶。だが、教師がしみじみと言うものではない。

「原因は分かったんですが、リヴァイヴはどうにかならないのですか？」

葵にとって、重要な問題はそれである。

「ふむ・・・」

千冬が考え込む。技術畑出ではない千冬にとって、この手の問題は即解決しづらい事柄の1つだ。

「少し考えてみよう」

「よろしくお願いします」

入学して以降、数度とないほど真剣に葵は千冬に頼みこむ。

ふと、千冬が観察するような視線を向けていることに葵は気付く。

「・・・立花。おまえ、何か悩み事でもあるのか？」

「え!？」

千冬の一言に葵は鼓動が跳ね上がった。

心当たりはありすぎるが、それを表には出してはいないはず。もしや先日のマイクやマティウスとの通信でも目撃されたのではないかと葵は冷や汗を流す。

目撃され、しかも会話を聞かれているならかなりマズイ。千冬の人間性は疑う必要はないが、情報というものはどこから漏れるのか分からない。これが元でマティウスの真意がデュノア社のフィリドールに伝わるようなことがあれば、シャルロットの身に起こる危険が跳ね上がるだろう。

「・・・」

「・・・」

肯定と否定。どちらの言葉を発することもできずに、葵は千冬から目を離せない。

「話す気があるなら聞いてやる。いつでも来るがいい」

千冬の態度は普段通りだ。どうやら、葵の杞憂らしい。

「・・・ありがとうございます」

葵は千冬に礼を述べると、不自然にならないように装いながら、素早くピットから出て行った。

「やはり、気のせいではないでしょうか？」

ピットから出て行った葵の背を見送った真耶が千冬に話しかける。

真耶は、千冬から葵の様子がどこかおかしいことを聞かされていたのだが、それでも葵の様子の変化に気付けずにいた。それは、真耶の観察眼が悪いというよりも、葵自身がクラスに打ち解けず、ほとんど自分の内をさらけ出すことがないため、判断がつけられなかったためだ。

「なら、いいのだな」

一方千冬も、葵がおかしいことに明確な判断材料があつたわけで

はない。厳しい性格と世界最強のIS操縦者という肩書きから神格化されてしまっているが、千冬の教師としての能力はギリギリでいい先生に入るくらいでしかない。もっとも、それは千冬に教師としての適性がないというわけではなく、彼女自身がまだ24という若い年齢で、教師としての任期がまだ短い“新人”であるためだ。

結果として、2人は葵の様子がおかしかったことを、自分の勘違いかもしれないとして、この場を収めてしまった。

「それにしても、立花君のリヴァイヴはどうでしょうか？」

「整備課の連中に任せることも考えたが、それでは一時しのぎにすぎない。多少の調整を加えた程度では、また同じことの繰り返しだ。何せ、あいつは体力だけでなく、“技量の向上”も見せているのだからな」

真耶は千冬の言葉を否定しなかった。

つまりは事実である。もっとも、模擬戦をほとんどしない葵自身は、その事実に気づいていないのだが、優秀なIS操縦者である教師2人はしっかり把握していた。

「まだ、伸びているんですね・・・」

驚きを通り越して、呆れたように真耶が呟く。それほどに、4月の時点で葵の操縦技量は高かった。

「まだ15だからな。成長期も終わりに差し掛かっている今が、一番伸びてくる時期だろう」

「はぁ・・・」

「またもや真耶は呆れたようにため息を吐いた。今の時点では学年最強の葵である。今後3年、いや後1年学園で訓練を続けていけばどこまで伸びるのか想像がつかない。」

「それでは、どうしますか？」

「DK社の立花専用機開発が滞っている今、リヴァイブの開発元であるデュノア社に意見を求めるしかないだろう」

「分かりました。データをまとめて、私がお伺いをたててみます」

「頼む」

「真耶はデータをまとめるために、コンソールへ向き合った。」

2人が葵のために行ったこの行為。これが、ある事件の発端になることなど、千冬も真耶も想像すらしていなかった。

ピットから出た葵が目にしたのは、金髪同居人がピット入り口そばの壁に背を預けている姿だった。

「おかえり立花君。どうだった？」

屈託のない笑顔で葵に近づくシャルロットの後ろには、一夏、箒、セシリア、鈴音の姿もある。

実のところ、最初この面子は葵のことを心配してピットの中にいたのだが、騒がしかったため千冬が追い出したのだった。

てつきり、先に寮へ帰ったものと思っていた葵は、全員残っている姿を確認して、内心で溜息をついた。無論、嬉しいわけではない。

「異常なし」

素っ気無く答えた葵は、そのままスタスタと歩き出す。残った5人も葵の後ろからついてきた。

「異常がないって、それこそ異常じゃないのか？」

「原因が分からないのでしたら、もっと念入りに調査しませんと」

一夏とセシリアが心配そうにするが、葵にしてみれば大きなお世話である。

ピット内の話を隅から隅まで説明すれば納得するだろうが、自分の能力が上がったことを葵は話す気になれない。基本的に葵は、自分の強さに対して誇示するような真似は好まない。

「なんとかなる」

葵のそれは、どちらかといえば自分自身に向けた言葉だった。

「ま、何かあったら迷わず頼りなさいよ」

「・・・何かあれば、ね」

鈴音の言葉に葵は自虐的な笑み浮かべる。すでに“何か”が足音を立てて迫っていることを承知していたからだ。

ドドドドドドッ・・・！

「ん？」

「な、なんだ？ 何の音だ？」

突然聞こえてきた地鳴りの方向へ葵は目を向ける。だんだん近づいてくる音と共に、土煙が葵の目に入った。

嫌な予感を察し、葵は一夏から距離を取る。

そして、案の定。洪水のように流れ込んできた女子の一団に一夏とシャルロットが飲み込まれ、逆に鈴音とセシリアが弾き出された。箒は葵と同様に危機を察したらしく、退避済みだ。

「今度は何だ？」

女子の一団が一夏とシャルロットに対して口々に何か言っているが、これだけの大人数が好き勝手に言い合えば、1人1人が何を言

っているのか聞くのは容易ではない。

ふと、葵の頭上から一枚の紙が舞い降りる。どうやら、女子の一団の誰かが持っていた物らしい。葵はそれを掴み取ると、それに目を通す。

「えっと・・・『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦を行うため、二人一組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは今週末まで』」

どうやら、目の前の一団はトーナメントのペアを数少ない男子と組むため押しかけてきたようだ。なんともアグレッシブな性格の女子が多い学園である、と葵は思った。

「み、みんな聞いてくれ!!」

一団の中心から一夏の声が響き、喧騒がピタリと止む。人数が多すぎて、葵からは姿が見えないが。

「俺はシャルルと組むから諦めてくれ!」

「ええっ!?!」

葵にきつぱりと答える一夏と驚きの声を上げるシャルロットの声が聞こえる。一夏からすれば、女子と組むより同じ男同士がいいと考えてのことだろう。

「いいだろ、シャルル？」

「えつと・・・」

シャルロットの戸惑う声が葵に届く。

「（何を迷っているんだ？）」

シャルロットの戸惑いを、葵は意外に思った。いつも一夏と訓練しているのだし、面目上は男同士ということもあってクラスで一番シャルロットと仲が良さそうなのも一夏だ。ペアを戸惑う理由はないはずだが・・・。

「・・・うん。僕は一夏と組むよ」

若干遅れてシャルロットが一夏に承諾した。

女子の一団から多少のブーイングが出たものの、すぐに納得したのか、一団から1人、また1人と去っていく。

「やれやれ・・・」

目の前の騒動の終わりが見え、葵は呆れを伴った溜息を吐いた。

「うん？」

ふと、まだいる女子の一団の中にこちらに視線を向けている3人組がいることに葵は気づいた。3人はこちらを見ながらも何かこそ話合っている。

どうせ、またもや自分の悪口でも言っているのだろう、と葵が考えていると、人数が少なくなったことにより、3人組の会話が聞えてきた。

「——どうしようか？」

「——優勝を目指すなら、ペアを頼んでみようかな」

「——ん・・・。いいと思うよ」

何やら3人組の毛色がおかしい。いつもは侮蔑を含んだ視線を葵に向けてくる女子とは違い、この3人組はどことなく葵に好意的だ。

葵は3人組を見る。さきほどはしっかり見ていなかったため分か

らなかったが、改めて見ればその3人組はクラスメイトだ。確か、相川と谷本と布仏だっただろうか。少なくとも、布仏に関してはそのだぶだぶの服装にしても、間延びした口調にしても、特徴的過ぎるため間違いようがない。

学園生徒の葵に対する見方には大きく3つに分けられる。1つ目は、学園生徒の過半数が属する葵に嫌悪を抱くグループ。2つ目は、一夏などの極々少数しかない葵に好意的なグループ。3つ目は、どちらにも属さない葵に関心がないグループだ。1つ目と3つ目の区別がなかった葵だが、クラスでいつも陰口を叩く女子と全く叩かない女子がいるのに、最近ようやく気づいた。

相川と谷本と布仏は、3つ目のグループに属する女子だったはずだ。

「——期限はまだあるし・・・」

「——もう少し考えようか？」

「——・・・分かった」

3人は、葵が視線を向けていることに気づかないまま、他の女子と一緒にこの場を離れていった。

「どっしたの？」

葵は3人を信じられないような目で見送っていると、ようやく一団から抜け出せたシャルロットに声をかけられた。

「いや、何も・・・」

「そう？ それにしても、ゴメンね」

「？ 何を謝る？」

「トーナメントがタッグマッチで行われるなら、立花君と組んでみたかったんだけど・・・」

ちらりと、シャルロットは一夏の方へ首を向ける。視線の先では、一夏が箒とセシリアに、なんでシャルロットと組むことになったのか責められている最中だった。

「別にかまわないよ」

約束をしていたわけでもない上に、あの状況で葵と組みたいなどとシャルロットが言えば暴動が起きている。

「なら、アタシと組んでもいいわよね」

ひょっこり現れた鈴音が、薄い胸を張って自身を指差す。

「鳳さんと・・・？」

「な、何よ。アタシじゃ不服だって言うの！」

不服か不服じゃないかでいえば、不服な葵である。まあ、別にそれは鈴音が嫌いというわけではなく、彼女とペアを組めば今日のラウラのような面倒な出来事に巻き込まれそうで嫌なだけだ。

そも、葵がトーナメントの優勝を目指すなら、おそらく鈴音と組むのが一番勝率が高い。近距離指向の鈴音と遠距離指向の葵なら相性もいいし、何よりも葵は鈴音とタッグ戦の経験がある。無論、D Sでの話になるが。

トーナメントにあまり興味のない葵にとって、鈴音と組むことはメリット以上にデメリットがあるようにしか思えなかった。

「不服じゃないけど・・・。まあ、要検討ということだ」

「また、はぐらかそうとしても、そうはいかないわよ！」

鈴音の言う、“また”とは再戦のことを言っているのだろう。結局、ゴールデンウィークのあの日以来、今日の気まぐれに至るまで、葵は鈴音をはぐらかしてばかりだ。

大変だね、と目で語るシャルロットを片目で捉えつつ、葵は鈴音

に対してどうやってはぐらかすべきか、溜息をつきながら考えるのだった。

その日、マティウス・デュノアはデュノア本社の社長室で、顧客対応部から送られてきたデータを見ていた。

普通なら顧客対応部から社長であるマティウスにデータが送られてくることなど滅多にない。しかし、シャルロットがIS学園に転校して以来、IS学園から送られてくる情報を数少ない信頼できる部下に頼んでマティウスはかき集めていた。

IS学園で何が起こっても、その直前で対応できるように。

「これは・・・」

データを見て、マティウスは驚きの声を上げる。そのデータはIS学園から送られてきたもので、要約するとある学生の使うレビューが、その学生の反応速度のついてこれないから、どうにかしてほしいというものだ。

上手く誤魔化してあるが、このデータに表記されている学生が、少し前マイクに見せてもらった葵のデータと酷似していることにマティウスは気づいた。コンソールを動かし、細かく調べると、どうも間違いないようだ。

「（すごいな）」

マティウスは素直に賞賛する。

データにある葵は確実にラファール・リヴァイヴの限界性能を超える技量を持っている。自身の傑作であるISが、ただかか学生に超えられるなど、製作者として残念に思うプライドはあるものの、それが葵だと別の感情に変わる。

「（嬉しい誤算だな）」

まだ返事をもらっていないとはいえ、シャルロットを守る立場になるかもしれない人間が自分の予想以上の能力を有していることがマティウスは嬉しかった。

しかし、嬉しがってばかりはいられない。

データ通りなら、今の葵はISの性能のせいで満足に戦えない状態にあるということだ。どうにかせねばならない。改良できないわけではないが、そのためにはどんな手段をとっても、葵からISを

数日預かることとなる。

もし、その期間にシャルロットが襲われでもすれば、どうにもならない。とすれば、改良以外の別の方法をとる必要がある。

マティウスは新しいデータをディスプレイに表示させた。

そのデータの題名はこう記されている。

『デュノア社 第3世代IS開発計画』

数年前から開発を始め、今や実機の完成度は80%を超えているが、未だに完成の目処は立っていないISの計画書である。

完成の足踏みをしている理由は、第3世代型特有のイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵装が、技術不足の問題上遅々として開発されていないためだ。

今のままでは、このISは第3世代の名を冠する第2世代型ISではない。

だが、このISは基本性能だけでも、ラファール・リヴァイヴを上回っている。これを葵に渡すことができれば、この問題は解決するだろう。

だが、問題は渡す理由。どのような理由を付ければ会社内のフィリドール一派が納得するのだろうか。

マティウスが思案に深けていると、ディスプレイの映像がフツと消える。ついで、社長室の電灯も消えていった。

「停電じゃないね」

マティウスが冷静に物事を捉える。

デュノア社には発電機が完備している。例え、フランス中の発電所が止まったとしてもデュノア社の電気が途絶えることはない。

「いつたい、何事が・・・」

「あなた」

暗い部屋の中から聞き覚えのある声が響く。この15年余りで幾度も聞いたその声色は、今のマティウスの最も聞きたくないものだ。

「カティアか？」

「そうよ」

薄暗闇から姿を現したのは妖麗な女性だ。シャルロットのような自然体な綺麗さではなく、どこことなく作られたような印象を受けるが、美女であることに疑いの余地はない。

彼女こそ、マティウスの妻。デュノア婦人こと、カティア・デュノアである。旧姓はカティア・フィリドールという。

つまり、今現在マティウスと葵が抱える悩みの大元である存在だ。

「何用だい？」

「それは、あなた自身が一番ご存知ではなくて？」

「……この停電は君の仕業か」

艶やかな微笑みで浮かべるカティアにマティウスは寒気を感じた。

「あなたが、こっそり動いているの、私が気づかないとも思っていない？」

「ふむ。誤魔化しは効かないようだね」

ポーカーフエースで装いつつ、マティウスはカティアの死角で携帯端末をいじり始める。

「あら、意外。誤魔化さないのね」

「君のことだ。もう決定的な証拠を掴んでいるのだろう？」

「ふふふ。さすが、私の旦那様ね」

本当に嬉しそうに微笑むカティア。だが、それは氷のように冷たい。

カティアが指を鳴らす。すると、消えていた電灯が再び点き、コンピュータのディスプレイも再起動する。そこには、先ほどマティウスが見ていたものと違うデータが表示されていた。

「アオイ・タチバナ。あなたが、あの泥棒猫の娘の護衛に選んだにしては、大分お粗末ね」

「タチバナ君を調べたのかい？」

「ただのISが使える男でしょう？ 興味ないわ、あなた以外の男なんて」

携帯端末の操作が終わり、マティウスは全神経をカティアに向ける。

「・・・ねえ、あなた。お願い、あの子は私たち夫婦には必要ないわ。忘れてくれない？」

「それは・・・」

当たり前だが、シャルロットがいない子どもなんてマティウスは少しも思っていない。しかし、ここでそう素直に口にするのは悪手。そう分かっているのに、マティウスはそれでも嘘を言うのに若干の躊躇をした。

「そう・・・わかったわ」

さすがに夫婦である。カティアは、そんなマティウスの躊躇を敏感に感じ取った。

「やはり、あの子・・・生かしておくわけにはいかないわね」

カティアの言葉に、マティウスは戦慄する。一般人であればそんなことは冗談か妄言の類であるが、彼女はすでに前科がある。

つまり、まず間違いなく行動に移す。

「おい、カティア！」

マティウスがカティアに詰め寄る。

カティアはまた微笑みながら、今度は2度指を鳴らす。

すると、強面黒服の男たちが社長室に一斉に入り込み、マティウスを押さえ込む。

「社長を自宅へお連れして。3日は外に出さないように」

「了解！」「」

「カティア！！」

屈強な男たちに羽交い絞めにされながらも、マティウスは必死に叫ぶ。

カティアは、そんなマティウスに近づき、愛おしそうに頬に手を添える。

「心配しないで。そんな時間はかけない。明日で全てを終わらすわ」

マティウスの表情が絶望に変わる。

予想していたよりもあまりにも早いカティアの行動。こちらの対応策はほとんどできていないというのに。

「待てカティア！ 頼む！ 待ってくれえー！！」

マティウスの叫びも空しく響く中、カティアは社長室から出て行った。

社長室から出たカティアは、歩きつつ携帯電話を取り出す。

「準備はどう？」

『カスタム？を除くデュノア社のISは我が部隊が掌握しました』

「せっかくだからフランス軍にあるISも数機使いましょう」

『・・・そんなことができますのですか？』

「フィリドールの力を甘くみないことね。あなたは余計な気を使わず準備を進めて。明日の夜には全て終わらすわ」

『了解』

通話が終わり、デュノア社の通路には、カティアの薄気味悪い笑

い声が木霊した。

第20話 シャルロット抹殺計画 前編 く闇夜の防衛戦く（前書き）

また、更新遅れました。申し訳ありません。

第20話 シャルロット抹殺計画 前編 〱闇夜の防衛戦〱

葵とラウラの戦いの次の日。その早朝。

「えっと・・・」

目を覚ましたシャルロットは、意外なものを目にしていた。

「・・・」

それは、寝ている葵である。

シャルロットが葵と同室になってから早1週間余り。その期間、シャルロットは葵が寝ている姿を見たことがなかった。

その理由は葵がシャルロットと一緒に寝食を共にするというストレスから軽い不眠症になり、彼女より寝るのは遅く、起きるのは早かったためだ。

が、今日に至っては昨日のラウラ戦の疲れが溜まっている葵は、普段よりも眠りが深かった。

「・・・どうしようかな？」

シャルロットは葵を起こすべきか迷った。すでに、いつもなら2人とも起きている時間である。だが、後15分くらい寝ていてもギリギリ朝食には間に合うだろう。起こすべきか、このまま寝させておくべきか。

数十秒ほど思案した後、シャルロットはもうしばらく葵を起こさないことに決めた。葵はここ最近眠たそうにしていることが多いため、少しでも多めに睡眠を取ったほうがいい。

そう決めると、シャルロットは葵のはだけていた布団をそつと直し、部屋の中をふと見回した。

この1週間余りでの、シャルロットの葵に対する印象をまとめると、良いところが普通ではなく、悪いところが普通の男子であるということだ。

良いところは、まずISの操縦技量の高さ。昨日のラウラ戦はとにかくすごかった。それに、未だに自分が女子であることを周りに黙っていてくれることにはシャルロットは感謝に絶えない。

だが、悪いところもある。それは、部屋を見渡せば一目瞭然だ。葵の机を見れば、彼の使った教科書がそのまま平積みになっているし、ベッドを見れば脱いだ制服が乱雑に放置されている。ゴミはちゃんと捨てるし、洗濯もきちんと行うのだが、どうやら整理整頓が葵は苦手らしい。

1度、整理整頓するようにシャルロットは葵に言ったことがある。葵は迷惑そうな表情をしたものの、自分に非があるのを認めているのかしぶしぶ整理していた。そんな葵を見て、シャルロットは弟で

もいれば自分はこんな生活をしていたかもしれないと思ったものだ。

「（そういえば・・・）」

良いか悪いかは分からないが、葵について気になることがあることをシャルロットは思い出す。母親が亡くなるまで、シャルロットは地方の共学校に通っていたのだが、10歳辺りからクラス男子のいやらしい視線を受けていた。それは、身体が女性らしい丸みを帯びてきたことに起因し、男子がそれを気にするのが普通ということ。シャルロットは理解していたのだが、それでも気持ちのいいものではない。

しかし、葵に関して言えば、シャルロットは彼からそのような視線を受けたことがなかった。唯一例外は、一番始めに着替えを見られた時、胸元に視線を向けられた気がするが、その時は気が動転していてあまり覚えていない。

というよりも、やらしいやらしくない以前に、葵はシャルロットに視線を全く向けてこない。それは、比較的彼と話す鈴音やセシリアに対してでも例外ではないようだった。

「（どうしてなんだろう?）」

繰り返すこととなるが、男子が女子にやらしい視線を向けるのは普通である。あの爽やかなイメージの強い一夏ですら、ISの実施授業のとき、たまに真耶の豊かな胸元に視線を向けていることから

間違いない。

そう考えると、普段の葵の態度は、一般男子と比べてどこかおかしいということにシャルロットは思い至っていた。

「ん・・・？」

葵が小さな声を出し、ゆっくり目を開ける。どうやら目を覚ましたようだ。ここでシャルロットの現在位置を説明すると、葵の布団を直したところから全く動いておらず、2人の距離はとても近かった。

そして、今回に限っては悪いことに葵の寝起きは途轍もなく良い。目を開けて5秒くらいで頭が正常稼動するくらいに。

「おわっ！！」

至近距離にいたシャルロットに驚いた葵は、とっさに距離をとる。しかし、今彼がいるのは狭いベッドの上。少し下がったところでベッドの端に到達し、そこからさらに下がろうとしてベッドから落ちた。

シャルロットの視界から葵が消えたのと同時に、鈍い音とカエルを踏んだような低い呻き声が響く。

「だ、大丈夫？」

「・・・なんとか」

ぶつけた頭をさする葵にシャルロットは近づく。

「頭、痛くない？」

葵の頭にシャルロットは手を伸ばす。それは、シャルロットからすれば、何気ない行動だったが、葵にとってはとんでもない行動だ。

——ビクリ！

葵の身体が大きく跳ね、身構えるように硬直する。

「？」

そんな様子の葵を見て、シャルロットは伸ばしかけた手を止めた。葵の様子を一言で説明すれば、何かに怯えている。しかし、葵を驚かすようなものなど、部屋にはないはずだ。

ふと、葵の視線が自身の手に向けられていることにシャルロットは気づいた。

「（もしかして・・・僕？）」

どうやら、葵が怯えているのはシャルロット自身らしいことに彼女は気づいた。そういえば、起きた時の反応も妙に過剰だったし、間違いないようだ。

「（そうか・・・そうだよな）」

思い返せば、葵がシャルロットを嫌う理由は事を欠かない。むしろ、これで好かれようと思うほうが無理な話だ。

そう考えると、シャルロットは悲しくなった。

自分自身が悪いとはいえ、ルームメイトに嫌われるのは、心が痛む。

こちらに手を伸ばした体勢で動きを止めたシャルロットを不思議

に思った葵は、拒否する身体を強引に制し、彼女へ視線を向ける。

「（げっ！）」

なぜだか分からないが、シャルロットが悲しそうな表情で葵を見ている。

「デュ、デュノア？ どうしたんだ？」

今まで女子と関わってこなかった葵は、このような時の対応が分からず、慌てた。とにかく、今はなんで悲しそうにしているのかシャルロットに聞くべきだ。

「そっだよね……。僕、迷惑かけてばかりだし、嫌われて当然だよね……」

どうやらシャルロットは、先ほどの態度から自分がシャルロットを嫌っていると勘違いしているようだ、と葵は理解した。

「う……。いや、その」

葵は必死に言い訳を考える。もし、勘違いしている相手がシャル

ロットじゃなければ悲しまれようが嫌われようが構わないため放置する。だが、了承していないとはいえマティウスの頼みが控えている手前、今シャルロットに距離を置かれるのは大変マズイ。無論、お近づきになりたいわけでは、決してないのだが。

「（ど、どうする？）」

女子との交友不足が災いし、葵の頭は真っ白だ。

言い訳は思い浮かばない。そうになると、残された手段は1つしか葵にはなかった。

葵は、深く大きな溜息をつく。正直、これをシャルロットに伝えるには気が重い。

「デュノア。その・・・俺はさ。女子って苦手なんだ」

「え？」

その時のシャルロットの表情はまさに素っ頓狂だった。

「目を合わせるなんて難しいし、触られるのはもつと無理。だから、別にデュノアだからこんな態度を取っているわけじゃない」

シャルロットに説明すればするほど、葵の顔は赤くなっていく。当たり前だ。好き好んで自分の弱点と言ってもいいほど苦手なものを暴露する奴など、普通はいない。

「・・・そうなの？」

葵が恥を忍んで話しているのに、シャルロットの反応が薄い。まだ理解が追いついていないようだ。

「じゃあ――」

そう呟くと、シャルロットは何を思ったのか、葵の手を掴む。

「いつすると、どうなるの？」

おそらくシャルロットからすれば、ほんの些細な好奇心から起こした行動だ。しかし、対する葵は些細ではすまなかったりする。

「~~~~っ!~!~!」

背筋に悪寒を感じるのとほぼ同時に、葵の言葉にならない悲鳴が部屋に響いた。

――数分後

「おまえ・・・最悪だ」

未だ動悸の収まらない胸を押さえながら、葵は恨みがましい目でシャルロットを見る。いや、正確には直視ができないので、微妙に視線がズレているが。

「ご、ごめん。そんなに嫌がるとは思わなくて・・・」

シャルロットは素直に謝るが、現在葵のシャルロットへの評価は急降下中だ。

「でも、よかった。立花君に嫌われてなくて」

「そうか？」

「そつだよ。せっかくのルームメイトなんだし」

どうやら、恥を忍んだ甲斐があったようだ。葵は安堵が少量、疲れが多量に混じった溜息を吐いた。

「でも、なんで女の子が苦手なの？ 嫌なことでもあった？」

「なんでって・・・」

ふと、葵は自分の女性への苦手意識の理由が思い当たらないことに気づいた。別に女子に酷いことをされた事も、手酷く振られた事もない。物心ついた時から、妙齡の女性が苦手という明確な意識が心の中に根付いていた。

まるで、自分の生まれた時。或いは生まれる前からそうであったかのように。

「なんでだろうな？」

葵の小さな呟きは、シャルロットに届くことなく霧散した。

その日は、朝シャルロットに葵は女性が苦手という事がバレるという顛末があったものの、個人の些細な変化に関係なくIS学園はいつも通りの1日を過ごし、日が暮れ、いつも通りの1日が終わるはずであった。

夕食後

食堂も閉まり、多くの学生が寮の自室や談話室で過ごしている最中。葵は寮を出て、近くのベンチで星空を眺めていた。

とはいっても、葵に夜の散歩や天体観測をする趣味があるわけではなく、現在自室にてシャルロットがシャワー中であるため、逃げてきただけである。

「（鉢合わせは1回で十分だしな）」

できることなら1度もなかった方がよかった、とは葵は思わないようにしている。思えば、思った回数だけ胃が痛くなることを経験

済みだ。

♪！　　♪♪♪　　♪！

葵のポケットにある携帯電話が鳴る。ディスプレイを見ると、マイクのようなのだ。

友人とはいえ、大企業の社長であるマイクが一学生である葵に連絡を入れてくるのは月に1度あるか、ないかくらいである。それが、前回から数えてわずか3日。珍しいこともあるものだ、と葵は思った。

だが、ちょどいい。マティウスへの相談と学園での苦勞の愚痴をたまには聞いてもらおうと考えつつ、葵は電話に出る。

『アオイ、大変だ!!』

いつもの飄々とした口調をどこかに放り捨てたマイクに、葵は驚いた。

「マイク？　いったい、どうし——」

『マティが拘束された!!』

「——なんだって!?!」

葵は思わず、ベンチから立ち上がる。

「間違いないのか!？」

『もしもの時用に用意していた端末にマティからSOSが入っていたんだ。それに、マティに信用厚いデュノア社員に確認を取った。間違いない』

「そう……。でも、なんでそんなことに？」

『アオイ、落ち着いて聞いてくれ。昨日フランスからIS実働部隊が日本に向けて出発した』

葵は足元が崩れ落ちるような感覚に陥った。マイクの言葉を受け入れられない自分とその意味を察する冷静な自分が心の中でせめぎ合う。

「な……。に？」

『おそらく、マティはそれを止めようとして捕まったんだ』

「馬鹿な! デュノア1人を殺すために、本当にIS部隊を動かしたのか!？ 学園を襲撃すればどうなるか、分からないわけではないだろうに!」

『そこまで頭が回っていないのだろうさ。それより、アオイ。襲撃は今夜だ』

「くっ・・・！」

葵は呻き声を出すと、意を決し歩き出す。状況は悪い。だが、まだ最悪の手前はずだ。

「学園に話そう。教師全員で防衛体制を取れば、十分に守りきれるはずだ」

『やめろ、アオイ』

「なぜだ！ まさかこの状況に及んでも、マティウスさんの地位を守るべきなんて言うじゃないだろうな！」

『そうじゃない。例え話をしたとして、それをどうやって証明する？』

葵は歩みを止めた。

「どうやってって・・・」

『マティが捕まった今、デュノア社からの証言は得られん。フランズとて、何も言わないだろう。分かったか？ 時間があるならともかく、今こちらに揃えられる証拠はない』

「だ、だけど、信じてくれる可能性にかけて、話してみても無駄じ

やないはずだ」

『無駄になるだけなら、まだいい。だが、信じてもらえず、アオイが言動不振として捕まるような事態になれば、もう何もできなくなるぞ』

視界が急に狭くなったように、葵は錯覚した。マイクの説明を聞けば聞くほど、状況の悪さを明確に認識できる。

『……アオイ。無理は承知している。でも、君しかないんだ』

悲痛なマイクの声が葵の耳に届く。

マイクとて苦しい立場に居る。大学以来の友人のために、自分とは親子ほど年の離れた友人に命をかけると言う。苦しくないわけがない。

葵は、自身の胸に手を置く。心臓は恐怖と緊張で早鐘の如く動いている。それを葵は必死に押さえ、覚悟を決めた。

「わかった。俺がどうにかする」

『すまん、アオイ』

「それで敵はどのくらい来ているか分かる？」

『正確な数は不明だが、7か8機だ』

「8機!？」

覚悟を決めたはずなのに、葵は敵の数を聞いて驚きを抑えられなかった。

各国のISの配備数は軍事機密のため一般に公開されていないが、先進国でいたい10機前後というのが公然の事実として広まっている。大国であるアメリカ、ロシア、中国やISの開発国である日本はさらに多く、デユノア社という世界有数のIS企業を持つフランスも他国よりも5機前後多いはずだ。

仮に、国家の軍事力をISのみで例えるならば、8機というのはフランスの軍事力の約半数がそれ以上ということになる。驚くなどというのが、無理だ。

「だが・・・やるしかないか」

『私もサポートする。頼むぞ、アオイ』

日付変更をまもなく迎える深夜の時間。

IS学園の敷地内に2機のISが侵入を果たしていた。

『こちら、R - 4。先行分隊両機はプランA成功、Bへ移行します』

2機内の1人。自身をR - 4と呼んだ女性が後方にいる本隊へ
定時報告を入れる。

『R - 1了解。抜からないように』

『R - 4了解。作戦を続行します』

この女性たちがフランス軍のIS部隊の一角を担うラファール・
リヴァイヴ部隊、通称『R部隊』と呼ばれる者たちだ。R - 1と呼
ばれる隊長率いる全員が、部隊名が示す通りラファール・リヴァイ
ヴを使用する。

『聞いたねR - 7。プランBへ移行するよ』

『了解ですR - 4。しかし、天下のIS学園がこつも簡単に侵入を
許すとは・・・』

『私たちの手腕が上等だった・・・と言いたいところだけど、学園

からすれば実働部隊が堂々と進入してくるなんて、予想すらしていなかったんだろうさ』

R - 4は堂々と言うが、ISはジャミングモードだし、IS学園のレーダーを無効化する工作も行っている。まあ、それでもあからさまな行動であることに違いはないのだが。

『さ、無駄話はここまでだ』

『はい。では、今度は私が先行して――』

R - 7が言い終わる前に、R - 4の視界からR - 7が消えた。否、R - 7は衝撃によって吹き飛ばされ、空を舞っている。

『R - 7!?!』

『これは、超長距離からの狙撃!? でも、ロックアラートは何も――
——きゃあ!』

R - 7が体勢を立て直す前に、次弾・次々弾が彼女を的確に捉える。これでは、回避どころか防御することすらかなわない。

『敵襲!? しかも、マニュアル操作での長距離狙撃だ!?!』

R - 4が驚愕する。ロックアライトが鳴らないということは、相手は機械の補助抜きでリーダーと目視のみで狙撃を行っているということだ。奇襲には良い手段ではあるが、だからといってそれができる者がいるなんてR - 4は予想すらしていなかった。

『あ、R - 4、援護を！』

R - 4が思考している間も、R - 7への連続狙撃は止まらない。弾数は7つに達し、その全ては直撃している。後2発も直撃させられれば、シールドエネルギーは底に達する。

R - 4はラファール・リヴァイヴのシールドを展開し、R - 7の前に立つ。

『R - 7。今のうちに体勢を！』

『りよ、了か——』

R - 7が返事をする前に、わずかな隙間を抜け、R - 4の頭の横を2発の弾丸が通り過ぎる。

『R - 7！』

振り向き叫ぶR - 4が見たのは、シールドエネルギーが尽き、強制的にISを解除されたR - 7。

同時にレーダー反応を示す警報。

R - 4が見たのは、自分と同じラファール・リヴァイヴを纏う男子。カティアからの情報にあった立花葵。

『貴様！』

「今度は人間だ。軍人といえど、このまえクラス対抗戦のバケモノに比べれば！」

激高するR - 4がアサルトカノン『ガラム』を葵に向けて発射する。葵は四方八方に回避行動を取り、捉えることができない。

『お、同じ機体なのに、この差は何だ？』

「（相手の動きが鈍い？）　なら、これで！」

葵は両手にアサルトライフルを構え、R - 4を中心とした円軌道と取りながら射撃を始める。

狙撃と同じく正確無比、そして圧倒的な弾幕。それを一身に受けるR - 4のシールドエネルギーが瞬く間に減少してゆく。

『くっ……これ以上は……』

苛烈極める葵の攻撃を何とか掻い潜り、R - 4は気絶しているR - 7を抱きかかえる。

R - 7を回収したR - 4は葵を捉えたままゆっくりと後退し、ある程度距離を取ると、葵に背を向けて学園の外へ飛翔していった。

「退いてくれたのか？」

数秒前まで戦っていた女性の背を、葵は見えなくなるまで見えた。

『そのようだな。それにしても、さすがだアオイ』

空中投影ディスプレイに映るマイクが葵の戦いを賞賛する。

「マイクのおかげで敵の位置が知れたからね」

マイクは、遠いアメリカの地にしながら、ネットワークを介してIS学園のコンピュータにハッキングをしかけ、リーダーが不自然に解除されている地区を葵に教えることによって、彼を助けていた。

「でも、大丈夫か？　もし、これがバレたら・・・」

無論、IS学園へのハッキングは犯罪行為だ。大企業の社長が進んでそんなことをしたと世間に知られれば、マイクの名声は地に落ちるだろう。

『アオイにばかり負担を掛けられないよ。まあ、大丈夫さ。私のハッキングを看破することができるとすれば、あの篠ノ之博士くらいの能力が必要だ。世界にそれほどの天才は何人も存在せん』

「そ、そうか」

時々だが、次元の違う天才のマイクに度肝を抜かれることのある葵であった。

「（奇襲は成功したけど、問題は次からだな）」

今の戦いは相手の不意を突くことにより、葵は一方的に戦うことができたが、次からはそういうわけにもいかない。おそらく、今逃げていった相手が残った味方に葵の存在を教えるはずだ。

「戦いは、これからが本番だ」

『そうだな』

葵の漏らした呟きに、マイクも深く頷いた。

『隊長。申し訳ございません』

R部隊の隊長R-1は、帰還したR-4から敗戦の報告を受けていた。

『謝罪は不要ですR-4。この敗戦は情報収集を怠った隊長である私のミスです。むしろ、私が謝らなければなりません』

頭を下げるR - 1にR - 4は慌てて駆け寄る。

『そ、そんな隊長のせいではありません。そもそも、この作戦自体が雑すぎるんです』

『黙りなさいR - 4。余計な口は身を滅ぼしますよ』

『は、はい。隊長』

R - 4を嗜めたR - 1だったが、内心ではR - 4の言葉に共感を覚えていた。

この作戦は、昨日カティア・デュノアから軍上層部を通じて突然立案されたもので、情報収集を含めて後方支援部隊の編成すらできない内に始まった超電撃作戦だ。

上層部からの命令に逆らえないため、この馬鹿みたいな作戦にも文句を言わなかったR - 1だが、もし本音が言える立場であったなら、こんな母国になんの利益も生み出さない作戦行動など、拒否していたに違いない。

『（今更、詮無きことですな）』

『隊長？』

諦めたように苦笑するR - 1にR - 4は心配そうに声を掛ける。

『何でもありません。それよりも、アオイ・タチバナの戦い方。その詳しい情報を――』

『た、隊長――！』

R - 1の言葉を遮って、R - 3から緊急通信が入った。

今通信をしてきたR - 3ともう1人R - 5も、R - 4や7と同じく本隊を離れて分隊として先行していた。そう、IS学園のリーダーを無効化していたのはこのR - 3と5の工作分隊である。

『落ち着きなさいR - 3。何事ですか？』

『で、敵です。我が分隊は敵襲を受けています――！』

慌てふためくR - 3に、R - 1はイラついたように顔をしかめた。軍人と正規の訓練を受けてきたはずの自分の部下が、素人のように慌てる醜態は聞くに耐えない。

『ならば、尚のこと冷静に対処なさい！　それで敵はISを使っているのですか？　使っているなら人数は？　1つずつ正確に報告するのです――！』

『敵はIS1機です。ですが——くそっ！　なんで“水”がこんな動きを！』

通信の向こう側は相当な激戦らしく、R-1にはR-3が何を言っているのかよく聞こえない。

『R-3！？　よく聞こえません。もう1度報告を！』

事態の緊迫が伝わり、冷静にと言ったR-1自身が大きめに叫ぶ。

『な、なんだ？　急に視界が……これは“霧”？』

『退避だR-3！　やっと機体の判別がついた！　コイツは確か“ロシア”の——』

R-5の叫んだ声が聞こえた直後、巨大な爆発音とともに通信が切れ、R-3と5の反応がR-1のラファール・リヴァイヴから消えた。

『隊長。R-3と5は……』

事の顛末を聞いていたR - 4が恐る恐るR - 1に声を掛ける。

『・・・やられたようですね。この作戦、少女1人屠るだけとはいえ、簡単には終わりませんか・・・』

R - 1の呟きが夜空に消えた。

シャルロットを巡る葵とR部隊の戦い。

両者ともに状況の厳しさを捉えながらも、緒戦を終えた。

しかし、夜明けはまだ遠く、IS学園は暗闇に包まれていた。

第20話 シャルロット抹殺計画 前編 〱闇夜の防衛戦〱（後書き）

やばい。原作キャラが全く目立っていない。
二次創作なのに、マズイですねこれは。

第21話 シャルロット抹殺計画 中編 〱 混乱なる戦場 〱

更識。

IS学園において、その名で呼ばれる者は2名いるが、大多数が連想するのは生徒会長の方だろう。自他ともに認める『学園最強』のIS操縦者であり、容姿端麗、文武両道。教師から信用、生徒の人気ともに高い彼女の名前は楯無という。

そんな楯無だが、今はその表の顔とは違う様相の表情を見せていた。

すなわち裏。対暗部用暗部『更識家』17代当主『楯無』としての表情である。

「（やはり、身分を明かす者は持ってないわね）」

気絶している2人の欧州系女性の持ち物を物色し終わると、楯無は先ほどまで彼女たちが操作していたレーダー施設の端末を、今度は自分が操作してみた。

ここは、傍目にはただの倉庫である。しかし、その実態は一般に

は非公開にされているIS学園の防衛レーダー施設の1つだ。

昨晚遅く、楯無は自分の友人であり従者でもある少女からレーダー施設の一部が動作不良を起こしているとの連絡を受けた。普通に考えれば友人が言ったとおり、ただの動作不良なのだろうが、妙に嫌な感覚がした楯無は念のため現場に赴くと、ビンゴ。ラファール・リヴァイヴを纏った2人組と遭遇し、なし崩し的に戦闘状態に陥り、相手を圧倒した。

しかし、相手を2人とも気絶させてしまったため、詳しい話が聞けない。仕方なく、持ち物から2人の情報を探ろうとしたが荷物らしい荷物はどちらも持っていなかった。

「（ラファール・リヴァイヴを使っていたけれど、それでフランスと関わりがあると考えるのは、早計よね・・・）」

端末を操作する手を緩めることなく、楯無はそう考える。ラファール・リヴァイヴは、7カ国でライセンス生産、12カ国で制式採用されている機体である。パッと見て、それがどこの国の機体なのか判別するのは容易ではない。おまけに今は待機状態に戻っているため、それを解析するのも難しい。

そう楯無が考えている内に、施設のモニターにレーダーが解除されている箇所のデータが表示された。レーダーが解除されている箇所は、学園の敷地外から学生寮への最短距離の途中にあるものばかりだ。

「（レーダー解除の分布域から考えると・・・狙いは学園生かしら？ 目的は、要人の誘拐か、それとも別に何か・・・）」

どちらにしても、情報の少ない現状では明確な判断が下せない。ただ、レーダー施設に工作活動を行っていたこの2人が潜入部隊の総数ではないだろう。そう考えた楯無は、レーダーの解除された箇所へ赴くべく、施設の外へ出る。

そして、施設を出た瞬間。一発の弾丸が彼女を襲った。

遡ること数分前。

フランスの先遣分隊を撃退した葵はマイクの助言により、次に敵がいるであろうポイントへISで飛びながら移動していた。

「雲が出てきたな」

葵の瞳に映る空は徐々に星光が消え、辺りを漆黒に染めつつあった。

『予報によると、IS学園のあたりは夜明けにかけて雨が降るらしいぞ』

「・・・そうか」

マイクの返答に、葵は素っ気無く答える。しかし、言葉とは裏腹に、彼の頭ではこの状況における思考で一杯だ。

ただでさえ、深夜という索敵には不適切な環境。なのに、残っていたわずかな明かりも消えようとしている。この状況は間違いなくフランス軍に利があり、葵には不利だ。

「（無論、相手はそれを狙って夜間襲撃をしているんだろうけどさ・・・）」

そう分かっていても、葵は理不尽さを感じずにはいられない。

『アオイ。そろそろポイントに着くぞ』

「分かった」

葵はゆっくりと着地し、物陰からポイントである倉庫を覗き見る。

マイクによると、その倉庫はIS学園が隠しているレーダー施設の1つらしい。在学生である葵すら知らない情報をマイクが知っているのは、またもやハッキングしたからだ。

『レーダーを無力化している敵がいるはずだが、どうだ？』

「・・・ダメだ。ここからじゃ索敵できない」

葵と倉庫の距離はそれなりに近いが、敵のISがステルスモードになっていたとしたらレーダーで掴めない距離でもある。ここからでは、中に誰かいるのかいないのか不明と言わざるを得ない。

「（踏み込むしかないか・・・？）」

そう考える葵だが、できればそれは回避したい。敵がいらないのなら問題ないが、もし倉庫内という閉鎖空間で敵と戦闘状態に陥れば、射撃戦を得意とする葵の長所を生かせず苦戦するだろう。しかし、敵の本隊が見つからない今、ここで時間をかけるのも愚策。そのため、不利と分かっているにも踏み込む必要がある。

「（——行くか！）」

——ピッ

葵が内心で気合を入れ、動き出そうとした瞬間。電子音が鳴り、レーダーにISを示す反応が出る。

『やはり、いたようだな』

「ああ。でもステルスモードを使っているね。機種の特定ができない」

普通、ISは敵のISを察知すると、ハイパーセンサーが自動で相手のIS名、操縦者名、戦闘タイプを操縦者の網膜モニターへ表示してくれるのだが、今葵に表示されている情報は“unknown”という文字のみ。これは、相手の情報がISにない場合、または相手と自分の距離が遠すぎる場合を除けば、相手がステルスモードになっているときしか表示されない。

『悪い。私が入手した情報にはIS機種は入っていない』

「ということは、リヴァイヴ以外の可能性もあるか・・・」

いくらフランスの国産ISがラファール・リヴァイヴのみとはいえ、軍が自分の最大戦力を1種のみで揃えるとは考えにくい。一昔前の活躍した戦闘機を例に挙げても、用途に合わせて数種類の機種を揃えるのが普通だ。それに基づけば、このunknownがラファール・リヴァイヴではない可能性もある、と葵は考えていた。

「でも、やることは変わらないな」

葵はぼつりと呟く。

正直、今大事なのは相手の機種ではない。今大事なのは、時間と敵が分散していて各個撃破できるこの状態だ。それに比べれば相手の機種確認程度、無視すべき問題である。

葵はスナイパーライフルを取り出し、倉庫から出てくる敵ISの備える。夜空は雲で厚く覆われ、暗がり光学カメラはあまり役に立たない。頼れるのはレーダーのみだ。

『狙撃は敵にバレているんじゃないのか？』

「たぶん、ね。でも、倉庫まで遮蔽物がない以上、俺には狙撃^{これ}しか手はない。当たればよし、当たらなくて当たり前だと思ってけば問題ないよ」

葵はそう割り切って、“判別できていない敵”に対し狙撃を行った。

レーダー施設が無力化されている今、葵にはこの襲撃は学園側にまだ知られていないはずという認識違いがあった。また、敵が工作を行っている場所にいる人物は敵に違いないという先入観。また、1対8という圧倒的な戦力差と少しでも早く敵を制圧せねばならないという焦り。さらに、互いのISがステスルモードになっている状態。

様々な要因や実戦経験の少なさ。それらは一般人の葵のせいではない。

だが、それでも。同じ学園を守る者同士の無駄でしかない戦いは、葵のミスによって起こされた。

葵に放った弾丸は、相手を捉えたはずである。少なくとも、ハイパーセンサーはそう感知している。

「（でも、手ごたえを感じない・・・）」

実戦経験は少なくとも、DSでの戦闘経験は数千回を優に超す葵は、感覚的に自身の攻撃が失敗したこと察した。しかし、そこで呆けることなく、葵はスナイパーライフルからアサルトライフルへ切り替え、識別不明な敵に強襲をかける。

しかし、遮蔽物の陰から出た瞬間。警告音と共に無数の弾丸が葵に飛来する。

「なにっ!？」

相手に強襲するのと同様の射撃を受けては、回避することができない。葵は急いでシールドを展開するものの、そのわずかな時間に数十発の弾丸が葵を捉えた。

自身に走る衝撃を無視するように努め、葵は地面に倒れこむように身体を相手の射線からズラしながら、同時にアサルトライフルを放ち、相手の攻撃を止めさせる。しかし、射撃を止めることには成功したものの、葵の攻撃は相手のヴェールのようなシールドに阻まれて届いていない。

『へえ・・・』

どこか関心したような声が、オープンチャンネルを通して葵に届く。

どうやら、戦っている相手からのようだが、葵は無視して体勢を

整える。

「（コイツ——強い）」

このわずかな応酬で葵は相手の力量をある程度、理解していた。狙撃後の即座反撃の判断力といい、葵が苦し紛れに返した射撃を苦もなく受け止めたことといい、只者じゃない。

「（この視界の効かない状況で勝てるか？ いや、それよりも残りの襲撃部隊もコイツ並だとしたら・・・）」

『あら？ こんな時に考え事なんて、余裕ね』

余裕に満ちた声が聞こえたかと思うと、識別不明なISは手に巨大なランスを持って葵に突貫してきた。

自分に向けられたランスを、葵はわずかに身体を逸らしシールドで螺旋状の刃を横ばいから弾き飛ばそうとする。

しかし、シールドがランスの刃に触れると、ぶつかる衝撃以外のわずかな別振動が葵の腕を伝わる。同時にシールドが粉々に砕け散った。

「（これは・・・高周波振動の刃か！？）」

驚愕しつつも、葵は回避行動を取る。だが、すでに敵の間合いの中では満足な動きは取れず、左肩にランスの強力な突きを食らってしまった。絶対防御が働き、機体ダメージは軽減されたものの、シールドエネルギーが大きく減少する。

「（くっ……。いいのをもらってしまったな）」

葵は間合いを取りながら、シールド残量を確認する。残りはだいたい7割弱。敵が最大8機だとしたら、2機倒したため、目の前の敵を含め残り6機のはず。それら全てを相手にするのなら、これ以上シールド残量が減らされるとジリ貧である。

「（時間をかけたくなかったけど……）」

葵は目の前の強敵に短期戦を諦め、時間をかけシールドエネルギーを減らさない戦い方へ移行していった。

『それは、間違いないのですか？』

R - 1はある報告をしてきた部下のR - 2を若干訝しんだ視線で見つめていた。

『はい。間違いございません。例の2機ですが、どういうわけか交戦状態に入っています』

ある報告とは、自分の分隊を各個撃破してきた敵IS2機がなぜか交戦しているというものだ。

『（どういうことでしょうか？ 我々に対する罾や陽動にしても、こんなあからさまな対応は不自然すぎます。・・・いや、そう思わせて我々の行動を遅延させることが目的でしょうか？）』

顔に出さないようにしているが、R - 1は戸惑っていた。座学を怠っていたわけではないが、こんな事例は聞き覚えがない。ゆえにどう判断すればいいのか即決できなかった。

『・・・隊長』

長考していたところをR - 2に声をかけられ、R - 1ははっと顔を上げる。R - 2は何でもないような顔でR - 1を見つめているが、

部隊内でも最も長い付き合いの彼女が気遣っているのを、R - 1は気づいていた。

『いけませんね。隊長の私がこの体たらくでは、敵の意図は見えませんが、あまり時間をかけて、あのブリュンヒルデが出てくるようなことになれば手に負えません。よって、我々は行動を開始します』

『大丈夫でしょうか？』

R 部隊最年少であるR - 6がやや不安げな声でそう質問する。すでに部隊の過半数が行動不能状態では不安がるのも分からなくはないが、軍人としては失格だ。

『大丈夫かどうかは分かりません。ですが、我々もプロです。退くわけにはいきません』

『それはそうですが・・・』

普通なら叱責すべき場面だが、R - 1はR - 6の頬を母親が娘にするように優しく撫でる。

『心配いりません。我々はチームです。私があなたを守りますし、あなたも私を守ってくれる・・・そうでしょう？』

『は、はい!』

こうしてR - 1は軍人らしからぬ方法で、部下の不安を取ること
に成功した。

『お見事です、隊長。・・・ですが、いつからレズビアンの毛をお
持ちになったのですか?』

人の悪そうな表情で話すR - 2の言葉を聞いたR - 6は、それま
でうつとりしていた顔からどこか怯えるようにR - 1から離れ、自
身の身体を隠すように抱きとめる。

『た、隊長、すみません……。私、女の人はずっと……。』

『私だって、そうですよ!』

なんとも仲の良いフランス精鋭IS部隊であった。

シールドエネルギーを減らさない、いわゆる負けない戦い方へ移行した葵だったが、不利な事態は一向に改善せず、むしろ新たな不安要素に襲われていた。

負けない戦い方とは、相手の懐には決して近づかず、付かず離れずの距離で射撃戦を仕掛けることだった。が、この戦い方では弾の消費が激しすぎるデメリットがある。そう、葵の新たな不安要素とは、弾切れの不安だ。

葵のISラファール・リヴァイヴは、ISきつての積載量を誇る。そのため、すぐには弾切れになることはないだろうが、残りの戦闘を考えるとそろそろマズイ。

「（押してもダメ。退いてもダメ。なら、次は・・・）」

この時、葵はまだ平静を保っていた。実戦と暗闇の中という環境によって緊張はしていたものの、それはむしろ適度に葵に冷静さを保たせる要因ともなり、一概に悪いわけではない。

しかし、マイクからの通信がその均衡を崩した。

『アオイ！ 新たなIS反応を補足したぞ』

『何！？ どこだ！？』

『マズイぞ、アオイの位置より学生寮に近い！』

場の流れは、葵が予想する悪い方へ流れつつあるようだった。葵の当初の予定は、潜入部隊が学園内の深く入り込む前に水際で塞き止め、可能ならそこで撃退、不可能でも過半数は倒しておきたかったのだ。

だが、葵が撃退したISは2機。まだ過半数に届いていない。

「（くそっ！ やはり、1人で8機も倒すというのは、無謀だったか）」

軽い自己嫌悪にかられる葵だったが、『アオイ！』と叫ぶマイクの声聞き、首を大きく横に振ってネガティブな思考を飛ばす。今はそんなことを考えている場合ではない。一刻も早く新たな敵機を迎撃しなければ、シャルロットを死なせることになってしまう。

「（・・・いや、そうだった）」

葵は自分が思い違いをしていたことに気づいた。

敵を倒すことばかりに気を取られていたが、葵の目的はシャルロットを守ることである。自己嫌悪になる必要などない。目的が達成されれば、途中経過がどんなに自分の思惑から外れようと関係ないではないか。

そう考えると、葵は即座に次の行動に移れた。

それは、目の前の敵を引き連れて、新たな敵機の元へ向かうことだ。できることなら敵を合流させることは避けたいが、仕方がない。

「付いて来い！」

それは愚行だった。

葵は思わず敵に対してそう言い放ったが、敵について来いなんて言われて素直について行く奴はよほどのバカである。

まだ葵は、冷静さを取り戻せていなかった。

しかし、この時ばかりはその失敗が意外な成果を上げることとなる。

『男の子の声・・・？』

相手の若干戸惑いを含んだ声が葵に届いた。まるで、戦っていた相手が葵だったと初めて知ったようである。

「（なんだ？）」

そんな相手の態度に葵は何かひっかかりを感じた。葵の存在は先の交戦によって潜入部隊にバレているはずである。今更、声を聞いただけで驚くのは何かおかしい。

しかし、その疑問を解決する時間を取ることなく、葵は眼前の敵に警戒しながら新たな敵の元へ急いで移動を開始した。

10分足らずの移動によって、葵は新たな敵機の交戦可能距離まで追いついていた。敵部隊の侵攻速度が思いのほか遅かったのが幸いしたが、それは相手が警戒を怠らずに行動していたことが原因だろう。さらに、思惑通りとはいえ、先ほどまで交戦していた1機も葵はこの場に引き連れてしまっていた。やはり、状況は悪い。

しかし、良いこともある。現在地は、ちょうど潜入部隊の進入地と学生寮の中間に位置する場所だ。ここは、先ほどまでの敷地外れの場所と違い外灯が多く、視界が通る。先のリーダーだけが頼りの手探り戦闘をせずには済みそうだが、問題は相手も同じ条件なため、葵だけに利があるわけではない。

「（前方に3機。後方に1機。どう戦うべきか・・・）」

そう思考するものの、葵に許された時間はない。相手も自分も同じ機体だ。ということは、こちらの交戦可能距離は、あちらの交戦可能距離でもある。前方3機のISは移動方向を葵に変えた。

3機のISはアサルトライフルを放ちながら、その陣形を葵を囲むように変形させてゆく。葵は前左右の弾幕を回避しながら、自身もアサルトライフルで迎え撃つ。狙いは中央にいたIS。予想の域を出ないが、たぶんそいつが敵部隊の指揮官機。数で劣る以上、敵の頭を潰すことで葵は状況の打開を図ることにした。

さらに葵は、ライフル撃ち続けながら指揮官機に近接してゆく。近づいてしまえば、残りの2機もフレンドリーファイアを恐れて射撃を緩まざるを得ないはず。

しかし、葵の思惑は外れた。

左右を囲んでいた2機が、葵を通り過ぎて後方にいたISに攻撃を始めたのだ。

「なんだと!？」

前方と後方のISは味方同士だと思っていた葵は、驚愕の余りつい後ろへ振り向きた衝動にかれる。それを強引に抑えた。目の前に敵がいる状況でそんなことを行えば自殺行為にも等しい。

『む・・・』

一瞬だが、目の前の相手の視線が葵から離れる。

「（後ろに気を取られている？）」

その隙を逃さず、葵は武装をショットガンに高速で切り替えた。それを至近距離でぶっ放す。

それはまさに必中の一撃。

しかし――

『ラビット・スイッチ
高速切替。やりますね』

目の前の相手は、葵を賞賛しながら、自身も高速切替で取り出した盾でショットガンの弾丸を防ぐ。

「（コイツも、並の相手じゃない）」

相手は盾を構えながら、葵に当身を仕掛けてくる。葵は相手に合わせて後ろへ下がりがつつ、ショットガンを投げ捨てた。そして盾を掴み、巴投げに似た要領で相手を投げ飛ばす。

それは、葵にとつても初めての試みだった。DSの時ですら、対戦相手に柔道技を決めたことはない。にも関わらず、巴投げは綺麗に決まった。

しかし、これは生身の戦いではない。相手は慣性の法則に従って地面にたたきつけられる前にラファール・リヴァイヴのPICを調整して難を逃れた。

『お見事。ですが、体勢が悪いですよ』

相手の言うとおり、巴投げの後のため葵は仰向けの体勢だった。相手はアサルトライフルを葵に向けている。

葵は覚悟を決めた。この攻撃は避けられない。ならば攻撃を受けた後、どう反撃しようか、と思考を始めていた。

しかし、またもや葵の思惑が外れる。

ライフルを構えていた相手は、後ろから来た激流に飲まれ葵の前から流されていった。

「水？」

『そう。私の『ミステリアス・レイディ』は水を操ることができるの』

起き上がった葵の隣に1人の少女が舞い降りる。

蛇腹剣を右手に持つ彼女は、そのISと相まってどこか神秘的と思える雰囲気をもし出しているが、イタズラ小僧のような無邪気な笑顔がそれを相殺している奇妙な人物、と葵は思った。

シルエットから察するに、先ほど暗闇の中で葵と戦っていたのも彼女のようだ。しかし、ISスーツから見える豊満なプロポーションこそ日本人離れしているが、顔の造詣は間違いなく日本人。間違ってもフランス人ではない。

同時に小さな電子音が響き、葵のISの情報が更新される。先ほどまで“unknown”としか表示されなかった網膜モニターにIS名と操縦者名を映し出す。

IS：ミステリアス・レイディ霧纏の淑女

操縦者：更識 楯無

「・・・？」

あまりに見慣れぬ苗字と名前のため、葵はその漢字が読めなかった。しかし、読めないながらもその名前に葵は見覚えがある。確か、学園の掲示板にあった生徒会からのお知らせにこんな名前があった。

「あ！」

そして同時に葵は思い出す。その名前の横に顔写真と役員名が載っていたことを。

「生徒会長……」

楯無を認識すると、葵は冷や汗をかき始めた。

先ほどはいくら視界が効かなかったからとはいえ、敵でもない相手に攻撃を仕掛けてしまったと分かったからだ。

そんな葵を知ってか知らずか、楯無は蛇腹剣を葵に向ける。

『それで、あなた——立花葵君。君は学園の敵、それとも味方かしら？』

葵は答えに詰まった。当たり前だが、葵は学園の敵ではない。しかし、先ほど交戦した手前、楯無に違うと言っても信じてもらえる自信が葵にはなかった。

『まあ、いいわ』

しかし、葵が答える前に楯無は蛇腹剣の切っ先を先ほど葵と戦っていた相手に向ける。

『でも、あなた達は敵よね。フランス軍特務IS部隊『R部隊』隊長のR-1さん』

『・・・』

楯無にR-1と呼ばれた女性は何も答えない。

『それとも・・・元フランス代表イヴェット・ベラーさんと呼んだ方がよかつたかしら？』

ピクリ、とR-1——イヴェットが動いたのを葵は見逃さなかった。

『やれやれ・・・やはりロシア代表であるあなたの目は誤魔化せませんか、楯無』

『1年前。あなたが国家代表として最後に戦ったのは私だもの。忘れるわけないわ』

まるで旧友と話すような穏やかさで喋る2人だが、両者の雰囲気はピリピリとしている。

『それで、何で学園潜入なんて味な真似をしているのか、教えてくれるわよね?』

『答える義務はありませんね。その少年に尋ねた方が早いですよ』

『もちろん、立花君にも聞くわよ。でも、情報源が1つだけだと頼りないと思わない?』

『道理ですね。——で、そろそろこの茶番を終わらせてもよろしいですか?』

楯無と対を成すように、イヴェットも銃先を彼女へ向ける。

『あなた達のおかげでこちらは4機も失っているんです。さらに、時間稼ぎなど付き合っていられません』

「（4機・・・）」

イヴェットの言葉を聞いて、葵は何か思考に引っかかるものを感じた。

現在この場にいるフランス軍ISは3機。イヴェットの言葉を信じるなら、葵と楯無によって4機のISが行動不能状態らしい。それらを合計すると7機。

「（1機足りない・・・?）」

マイクの前情報によると、敵のISは7機か8機ということだった。8機が間違いだとすれば、この場にいる部隊でフランスのISは全部ということになる。しかし、何か嫌な予感にかられた葵は、会話に夢中な楯無とイヴェットに気付かれないように、こっそりマイクにプライベート・チャンネルで通信を入れた。

「なあ、マイク。敵ISは7機か8機ってことだったけど、正確な数は分らないのか？」

『アオイ？ この状況で何を・・・』

「いいから！」

葵の緊迫した態度に、マイクを重々しく口を開く。

『実はな。私が調べた限りでは、昨晚フランスから消えたISは8機だったんだ』

「なら、潜入部隊は8機じゃないのか？」

『いや。確かに消えたISは“8”機だったが、それを運用しているR部隊の構成人数は“7”人。数が合わない。だから、明確な数をアオイに言えなかったんだ』

マイクの言葉を聞いた葵は、再び思考を始める。そしてある結論に達した。

「まさか・・・！」

『アオイ？』

葵は思い違いをしていた。

この戦いにおけるR部隊の目的はシャルロットの抹殺。それは間違いない。だから、R部隊を倒せば全てかたがつくと思っていた。しかし、この目的の本質は私怨事である。それを踏まえればある可能性があることを完全に思考の外に置いていた。

「マズイ!!」

『ちよつと、立花君!？』

呼び止める楯無に目もくれず、葵は“ある場所”へと可能なかぎりの速度で飛行した。

ある場所の近くでは、1機のISが音を立てないように慎重に動いていた。

そこは朝になれば学園の生徒が起きだして賑やかになる場所——
——学生寮である。

そのある場所のある箇所を、ISの操縦者は慣れない手付きで、爆発物の弾頭が付いたスナイパーライフルの照準を合わせていた。

『これで、全てが……』

不気味に笑うせいで震える声が、闇夜に小さく響く。彼女の目は血走っており、元来の妖麗な美しさが見る影もない。

その顔はまさしく狂気。その一言に尽きた。

『ここから、私の新たな人生が始まるのよ』

「——いや、ここで終わるの間違いだ」

そんな言葉と共に、ライフルの射線——の先にある葵とシャルロットの部屋——を遮って1機のISが舞い降りた。

少し息を切らしながらも、覚悟に満ちた彼——葵の視線が突き刺さる。

「……一応聞く」

口を動かしながら、葵は右手に構えたハンドガンの照準を相手の額に合わせる。

「あなたは、デュノア夫人で間違いないか？」

狂人——カティア・デュノアは肯定するように、不気味な笑顔を見せた。

第21話 シャルロット抹殺計画 中編 く混迷なる戦場く（後書き）

今回の反省点。

場面の移り変わりが激しすぎてしまいました。読みづらいかもしれません。本当、申し訳ないです・・・。

第22話 シャルロット抹殺計画 後編 〱狂気終焉〱

「・・・まだ、帰ってこない」

目を覚ましたシャルロットは、空いている隣のベッドを見ながらそう呟いた。

消灯時間はとうに過ぎ、日付が変わってから数時間経過しているが、隣のベッドの主は未だ戻ってくる気配がない。

始めはあまり気にならなかったシャルロットだが、さすがに日付を超えた辺りから心配になり浅い眠りの夜を過ごしていた。

本来なら、早々に寮長である千冬に報告すべきである。だが、もし葵が自分の意思で――心配させておいて許せないことであるが、遊んでいたりなど――帰ってきていないのならば黙っていておいた方がいいのかな？　とも考えるシャルロットだった。

しかし、時間がさすがに度を過ぎている。これは千冬に報告した方がいい。そう考えたシャルロットは、部屋を出ようとドアへ近づく。

「うん？」

ドアに近づくと、防音に秀でたドアの向こう側から、かすかに人が通る足音が聞こえてきた。しかも、どこことなく慌てた様子である。

シャルロットは慎重にドアを開け、わずかな隙間から廊下を覗き見る。隣の寮長室の前では真耶、さらに名前は知らないが数人の学園教師が千冬を囲んで何か話している。

「侵入した3機のISと更識さんが交戦中です。ですが、侵入機の目標が見えません。いったいどこを守れば・・・」

「第一防衛目標は学生寮だ。混乱を避けるためにも、学生連中には知らせるな。纏まっていたくれた方が守りやすい」

教師たちは小声で話しているため、シャルロットには所々しか聞き取ることができず内容は分からない。しかし、遠目でも緊迫した様子が伝わってくる。

「（何があつたんだろう？）」

もしかして葵の事だろうか、と一瞬シャルロットは思ったが、一生徒が何かしたにしては、教師たちの態度がおかし過ぎる。そもそも、こんな深夜に各学年の寮長以外の教師が揃っているのも妙だ。

しかし、これでは千冬と話をすることは難しい。少なくとも今は

ドアを閉じ、部屋の中へ戻ったシャルロットは、窓の外を見る。

「（こんなことなら、立花君の連絡先を聞いておくべきだった）」

互いに不干渉を貫いてしまったために、シャルロットは葵の携帯番号を知らない。

「（・・・いや、それはただの言い訳にしかないよね）」

不干渉といっても、それはシャルロットの家庭事情だけだ。それ以外は素っ気無い態度だったとはいえ、葵がシャルロットを明確に拒絶したことなどほとんどなかった。それに素っ気無かった理由はもう知っている。彼が女性の事を苦手だったからだ。

「（僕、甘えすぎていたんだ）」

女性が苦手な葵からすれば、シャルロットと寝食を共にすることは相当な苦痛だったはずだ。今ならばシャルロットも分かる。葵が妙に寝不足気味だったのは自分が原因だったことに。それでも葵は文句1つ言ってきたことはなかった。

「（このままじゃいけないよね）」

シャルロットは決意する。

「（立花君が帰ってきたら、今晚の事を叱ろう。でも、すぐには許してあげない。許す代わりに・・・）」

——友達になってもらおう

葵は迷惑に思つかもしれない。それでもシャルロットはそう願わずにはいらなかった。

『退きなさい』

「断る」

カティアの射線を遮ったまま、葵は断固とした態度で答える。

「あんたの狙いの先は俺の部屋でもあるんでね。吹き飛ばされちゃかなわない」

それは葵にとってついでの理由でしかなかった。しかし、最後の最後までマティウスの頼みを承諾できなかった葵は、口に出してシヤルロットを守るためと言うことに抵抗を感じていた。

『そう・・・』

そんな葵の葛藤が分かるはずもないカティアは、興味なさげに、まるで葵がいないかのように、淡々とスナイパーライフルの引き金に手を掛ける。

「っ！」

カティアの行動に一瞬驚いた葵だが、即座に瞬時加速で彼女に近接し、スナイパーライフルを蹴り飛ばす。

「（分かっていたけど・・・本当にデュノアを殺すことに躊躇いがない）」

葵に嫌な汗が流れた。カティアからすれば何ともない行動である。しかし、一般人として育ってきた葵からすれば、その行動と態度は狂気にしか映らない。

『あなた・・・邪魔ね』

先ほどまでは会話しながらも、どこか虚ろだったカティアの視線が初めて葵を捉える。少なくとも葵本人をそう感じていた。それほどまでに、カティアは周りが見えていない。

『——《ガルム》』

カティアがそう呟く。すると、ワンテンポ遅れて光の粒子が彼女の手を集まりアサルトカノンを形成した。

しかし、それはあまりにも遅い。それに、ここまで近接した状態でアサルトカノンのような中距離仕様の武器を取り出すのは誤りだ。

葵はアサルトカノンを持ったカティアの腕を捻り上げる。と同時に、ハンドガンで彼女の腹部を容赦なく超至近距離射撃した。

『ぐう！！』

カティアはその衝撃に苦悶の声を上げ、葵を振り払おうと蹴りを入れる。

しかし、軸がなければ勢いもない蹴りでは、防ぐまでもなく葵のリヴァイヴにダメージ1つ与えることはできない。

「（・・・なんだこの人）」

蹴られる僅かな衝撃を身に受けながら、葵はようやく気付いた。

「（弱過ぎる・・・）」

先ほどまで楯無やイヴェットなど国家代表クラスのIS操縦者と立て続けに戦っていた葵は、それらの相手と今日の前の相手の技量差に気付くのが遅れた。

よく考えれば最初のスナイパーライフルを発射する遅さといい、武装を取り出すのにわざわざその名前を呼ぶことといい、今の効果のない蹴りといい、その行動のほとんどが初心者のようなのだ。

「（・・・そうか。この人、ISで戦った経験がほとんどないんだ）」

激戦続きだったため、葵はついカティアも強いIS操縦者と無意識に決め付けていた。しかし、彼女はIS開発者の妻。開発者ではない。そこそこ動かしていることから全くの未経験者ではないのだろうが、少なくとも戦闘経験はあまりないとみて間違いない。

「（だったら・・・）」

葵は、弾切れになったハンドガンを納めると、新たな武器を展開せずにカティアの顔を掴みかかる。

「悪いが——いや、問答無用で付き合ってもらおう！」

カティアを押さえつけながら、葵はリヴァイヴのPICを最大加速へ切り替える。ISのGキャンセラーが相殺できない振動を2人はその身に受けつつ、学生寮から離れた。

カティアを掴み連れた葵が到着した場所は、グラウンド。正確には頭に第二と付く。

ここは先月クラス対抗戦の折、葵が奇形型ISと死闘を繰り広げた因縁の場所でもある。

葵が強引に戦闘場所を変えた理由は2つ。

1つ目は、カティアが弱いことが分かり、押さえつけても大した反撃はないと確信したため。

2つ目——というよりこれが主な理由だが、先ほどの場所があまりに学生寮が近すぎたためだ。葵の予想であるが、カティアが戦闘しながら狙撃を成功させることはまずない。とはいえ、長距離射撃をされて、その流れ弾が学生寮のどこかの部屋に直撃することは十分にありえる。

もつとも、あの武装展開速度の遅さを見る限り、長距離射撃をされる前にカティアを無力化することも葵にはできただろう。しかし、これはゲームではない。万が一の事態に備えることは葵には当然の選択だった。

葵はカティアを連れてきた速度をそのままに、彼女をグラウンドの地面に叩きつける。普段の葵の戦い方を踏まえても、かなり乱暴なやり方だ。しかし、この事件の首謀者に気を使うほど、葵は博愛主義者でなければ能天気野郎でもない。

『ぐっ！』

叩きつけられ苦悶の表情を浮かべるカティアの額に、葵はハンドガンを押し付ける。

「これで詰みだ。降伏してISを解除してくれ」

葵は確信していた。これでこの一連の戦闘は終わりである。

この状況で逆撃される可能性は低い。それにカティア程度の腕ならば抵抗されても、強引に制圧できる。

後は、カティアから現在戦闘を行っているR部隊の戦闘行動を停止するよう命令させればよし。カティアがそれを拒否するならば――葵はやりたくないが――彼女の身柄を盾にしてもR部隊を止める。カティアがフィリドール一族という背景を踏まえれば、その身柄の安全を確保するためR部隊が戦闘を停止する可能性は極めて高いだろう。

しかし、その葵の確信もカティアの瞳を見て砕け散った。

「……っ」

葵は息を呑む。ハンドガンを額に押し付けられても、表情どころか瞳にも何の陰りも見せないカティアに恐怖を覚えたからだ。

葵が殺したいと考えるほど誰かを憎んでいる人を見たのはカティアが初めてである。だから確証があるわけではないが、ドラマや小説などで知る限り、誰かを憎んでいる人はもつと感情が激しいはずだ。しかし、目の前の女性は激情どころ、別の感情すら見えない。なまじ容姿が整っているせいで、人形のような印象を葵は抱いた。

そのカティアがゆつくりと、笑顔を作る。それは、恐怖を感じていた葵の身体を動かすのに十分な威力を持つ。

気が付けば、葵は自分で全く意識しないうちにカティアから距離を取っていた。

カティアがゆっくりと立ち上がる。

『・・・あなた、甘いわね』

流し目で見るカティアに葵は背筋に寒気を覚えた。

『そんな半端な覚悟で私を止めようだなんて——ナメんじゃないわよ——！』

その言葉を吐いた瞬間。今まで何の感情も見せなかったカティアの瞳に殺気が宿る。

それと同時に、眩い閃光と激しい怒号が辺りを占めた。

カティアの攻撃と思い、反射的に腕を交差させ防御の姿勢を取った葵だが、すぐに自分の勘違いに気付く。

「（雷！？）」

暗い夜だとは思っていたが、どうやら雷雲が発生していたらしい。そつえば、夜明けにかけて雨が降るとマイクが言っていたことを

葵は思い出す。

いきなりの怒号に驚きはしたものの、カティアの殺気に圧されかけていた葵は、それによって冷静さを取り戻した。

「・・・半端で結構」

元々なし崩し的にこの戦闘に参加した葵は、カティアの言つとおり覚悟は中途半端だ。だから、再三間違いを起こしているし、今も自分より格下の技量であるカティアに恐怖し怯えている。

しかし――

「だけど、結果は取らせてもらう」

それだけは譲るつもりはなかった。

だが――そんな葵の半端な覚悟も、2度目の雷が打ち崩す。

轟音と同時に、辺りが真っ暗になる。グラウンドを照らしていた外灯が1つ残らず消えていた。

「停電!?!」

葵は思わず叫んだ。学園のどこかに落雷したらしい。

IS学園は世界から見ても重要な研究機関である。例えば外部電気が何らかの理由で停止しても、内部の発電機で主要機関は維持できるシステムとなっている。しかし、その発電力は高くなく、グラウンド外灯のようなどうでもいい場所までカバーはできない。

『・・・運命は私に味方したようね』

「何を・・・？」

カティアの呟きを葵は理解できなかった。確かに再び戦闘の困難な暗闇になってしまったが、それはお互い様である。操縦技量の差を考えても、未だに葵の有利は覆っていないはずだ。

『私の“リヴァイヴ・カスタム”には、この方がやりやすい』

「!？」

葵は、またもや自分が思い違いをしていたことに気付いた。シャルロットのラファール・リヴァイヴ・カスタム？ほど、外見に相違点がなかったため分からなかったが、カティアのISはただのラファール・リヴァイヴではない。

「これは・・・！」

レーダーの異変に葵は息を呑む。

葵が見たレーダーには、目の前にいるカティアが映っていない。それだけならまだしも、レーダーを見る限りこの場に“5機”のISがいることとなっている。現物がいないにも関わらず。

「デコイ——ジャミングECM機、だと!？」

驚愕が葵を占める。そういえば、先ほどからマイクの通信が入ってきていない。今の今まで気にならなかったが、カティア機が原因のようだ。

『ふん……。理解力は悪くはないようね』

「（マズイ!）」

葵は瞬時に把握する。視界が効かないこの状況で、カティアのラファール・リヴァイヴ・カスタムのジャミングシステムは最大限の効果を発揮するだろう。

だが、不幸中の幸い。カティアはまだ葵の視界範囲内にいる。ならば、範囲外に出られる前に決着をつければいい。

—— 後方。敵性ロック確認！

突然のハイパーセンサーの警告に、葵は思わず後ろを振り向く。

しかし、振り向いた先には何も無い。

『やはり、甘いわね』

「（しまった！ これもジャミング——！）」

葵が前に向き直すと、そこにカティアの姿はなかった。

「ちっ……！」

舌打ちすると同時に、葵の右側から衝撃。無数の弾丸——おそろく、ショットガン——が葵を襲い、その直後に発破音が届く。

やはりではあるが、その攻撃に対してのロック警告も、その方向からのレーダー反応もなかった。

「（どうする？ “目”は完全にダメだ。かと言って、音は……）」

ショットガンは元より、銃器は基本的程度の差はあれ弾速より音速が早いということはまずない。発破音を聞いてから相手の攻撃を避けることは不可能だ。

「（でも、相手の位置を特定するくらいなら・・・）」

葵は耳を研ぎ澄ます。いくらISの飛行・移動が戦闘機のようなエンジン推力ではなくPIC頼りとはいえ、全くの無音ではない。少なくともハイパーセンサーの感度を上げればISでの音の感知は可能はずだ。

だが――

――ぴちゃ

葵の頬に水滴が当たる。

頬に手をあて、それを確認した葵に2つ目の水滴。3つ、4つと続き、数秒経たずに無数の水滴が降り注ぐ。

嵐のような雨と雷によって、葵に届く音が完全にかき消された。

「（いくら俺に運がないといっても、これはないだろう・・・）」

視界・音・レーダー。戦闘時における情報を司る、重要な役割を持つそれらが効かない今、葵の命運は空の雷雲と同じくらい暗くなりつつあった。

楯無とR部隊は激戦を繰り広げていた。

R - 1ことイヴェットは、R - 2とR - 6を上手く指揮し、囲い込むように楯無を追い込む。

3方向からの重圧砲火が楯無を襲うが、彼女は水のヴェールを上手く用い、自分に向かってくる弾丸だけを裁く。

『さすがですな楯無。1年前のあの時も、あなたはすでに強かったけれど、今はより強い』

『ありがとう。あなたも――』

楯無の後ろから、ショートブレイドを振りかざしたR - 6が迫る。楯無は、その攻撃を蛇腹剣『ラスティ・ネイル』で受け流すと、R - 6の横っ腹を蹴り飛ばした。

『――隊長姿が板についているわよ』

3対1という状況ながら、イヴェットは楯無を甘く見てはいない。
“ たったその程度 ” の数で圧倒できるほど、自分を含め国家代表と
呼ばれる者たちの実力は低くない。さらに、楯無のISは1年前使
っていた『モスクワの深い霧』グストイ・トウマン・モスクヴエの発展機。

実力云々は負けるつもりがないイヴェットだが、ISの性能差は
やはり大きい。甘くみていないというよりも、甘くみれるはずもな
いというのが本音である。

そうになると、実力・機体性能以外の部分でアドバンテージを得た
ところだ。イヴェットは楯無に揺さぶりをかけることにした。

『埒が明きませんね。これではいつになったら決着が付くのか分か
りません』

『そうね。でも、それで困るのは私よりもあなたたちでしょう？』

確かに、とイヴェットは思う。

レーダーを無効化しているとはいえ、IS学園に潜入してすでに
6時間を越えている。さすがに学園が未だに自分たちの存在に気付
いていないはずがない。今、楯無と葵以外の防衛行動を受けていな
いのは、おそらくこちらの情報が学園側にほとんどないからだ。そ

のため、学園側も主要機関の防衛以上の積極的な行動が取れないが、そろそろ夜明けである。その前には、さすがに学園側もある程度被害を受ける覚悟でR部隊を殲滅にかかってくるだろう。

追い込まれているのは間違いなくイヴェットたちだ。

しかし、それはイヴェットも承知である。その上で、イヴェットは更なる言葉を重ねる。

『その通りです。でも、彼を放置していてもよろしいのですか？』

その言葉を聞いて楯無がピクリと身体を動かす。

葵の情報は持たないイヴェットだが、楯無の情報は違う。前回戦ってから1年経つが、今の楯無の役所をイヴェットは把握していた。

IS学園生徒会長。

それ自体は、ただの学園最強の称号に過ぎないが、それに楯無の性格が加わると話が違ふ。パツと見、飄々としている楯無だが、その実、真面目で思いやりがある少女であることをイヴェットは知っている。

葵の情報をあまり持たないイヴェットであるが、それでも、彼が4月にIS学園に入学したばかりの数少ない男性IS操縦者であることをニュースで見っていた。

つまり葵は実戦においては素人同然。

葵が向かった方向的に、おそらく葵はカティアと相対しているはず。カティアの実力はともかく彼女のIS『ラファール・リヴァイヴ・カスタム』は特殊なジャミングシステムを搭載した準第3世代型。夜間戦闘においては並みの第3世代型よりも厄介なものである。

そんな葵を楯無は見捨てられるはずがない。イヴェットはそう判断していた。

『・・・なるほど。お互いに時間をかけていられないということね』

『（む・・・）』

予想よりも楯無の動揺が誘えなかったことに、イヴェットは落胆する。

『（ポーカーフェイス・・・？ まあ、何にしてもこれで事態は動きますね）』

——後はどう動くか・・・。

イヴェットがそう思考していると、彼女の頬に水滴が当たる。そして数秒経たずして豪雨となった。

『んふふ』

楯無がイタズラ小僧のような笑みを浮かべる。

『ねえ、知ってる？ 私の『ミステリアス・レイディ』が操れる水は有限なの』

『・・・？』

楯無の突然の暴露にイヴェットの思考は追いつかない。彼女の暴露は自身のISのいわば欠点。それをなぜわざわざ言うのか。

『でもね。それは『アクア・クリスタル』に搭載できる水の量に限りがあるから。つまり——』

『まさか——！』

言い終わる前に、イヴェットは楯無が言わんとすることに気付いた。

『全機散開！ 急いで楯無から離れなさい——！』

『了か』遅いわよ——』

楯無は蛇腹剣を掲げるように上へ向ける。

その剣先を中心に、今まさに降り注いでいる大量の雨——水が渦巻状に形成された。

『『メイルストロムモスケンの渦潮』。・・・安易なネーミングでごめんなさいね』

謝罪する楯無だが、それを聞いている暇がR部隊にはない。ミステリアス・レイディの搭載水量を圧倒的に上回る水が彼女らを襲っているのだから。

ミステリアス・レイディは、搭載水量よりも操れる水量は上であった。水を操るために必要なナノマシンを分散させてしまうため、細かい操作はできなくなってしまうが、このような大味な技なら別だ。

渦潮が解かれると、洪水の後の川辺に取り残された魚のように、力なく横たわるR部隊の姿があった。3人とも意識はまだある。されど、与えられたダメージは甚大だ。

『くっ・・・』

苦悶の表情を浮かべつつ、イヴェットは何とか立ち上がる。他のR-2、6もそれに続く。

『——2人とも、大丈夫ですか？』

プライベート・チャンネルに切り替え、イヴェットが2人に尋ねる。

『——損傷は軽微ですが、もうシールドエネルギーが・・・』

『——こちらもです。隊長、これ以上の戦闘を行うとISを強制解除されてしまう危険が大です』

機体の報告しかしてこないR-2、6だが、自身の疲労を隠している事にイヴェットは気付いていた。つまり、これ以上の戦闘は無謀の域に達する。しかし、現場の軍人であるイヴェットたちに自発的撤退などできるはずもない。

そう考えているイヴェットのラファール・リヴァイヴに通信が入る。

それは、母国——フランスからの緊急通信であった。

土砂降りの雨を背に受けながら、葵は倒れこんだグラウンドの水溜りから必死に起き上がろうとしていた。

重く感じる身体を誤魔化しながら、片膝をつく。しかし、その立ち上がる寸前。真正面から来た弾丸をまともに受け、葵は吹き飛ばされ、今度は仰向けに倒れこんだ。

「（くっ・・・）」

葵は内心で苦悶の声を出す。雷雨が降り始めてから葵とカティアの戦いは一変していた。

相手の居場所を特定することのできない葵はカティアの拙い射撃を読むことができず、一方的な攻撃を受けている。どうやら、カティアのラファール・リヴァイヴ・カスタムにはジャミングシステムの他に、高性能な暗視装備もあるらしい。

ならば、動き回っていればいい。そうすれば操縦技量の低いカティアは葵を捉えることができないはず。だが、それができない事情が葵にはあった。

それは疲労。

戦闘開始からすでに6時間余り。葵の連続戦闘時間は、先のラウラ戦の約1時間が最長である。6時間ずっと戦っていたわけではないが、慣れぬ実戦と夜間戦、そして楯無、イヴェットといった各国代表クラスとの戦いで、葵は肉体・精神ともに蝕まれていた。

だが、そう泣き言を言っていられないのが実戦だ。

葵は重い身体を引きずって、再び起き上がろうとする。しかし、その葵の背中へまたもやカティアの攻撃——グレネードが炸裂した。

「ぐあっ・・・！」

爆発によって大きく吹き飛ばされた葵は、グラウンドに2、3転がり、うつ伏せの状態で止まる。

「（また、か・・・）」

口に入った鉄の味混じりの泥水を吐き出しながら、葵は先ほどから続くカティアの弄るような攻撃に悪態をついた。

だが、おそらくカティアは葵を弄っているつもりはない、と葵は予想する。

再三いつている通り、カティアの操縦技量は低い。そのため、武器を構える、相手を捉える、引き金を引く、など葵が一瞬できる動作が少々遅いのだ。それが結果的に葵を弄るような攻撃になっているのだろう。

そうでなければ、雷雨が降り始めてから5分・・・いや3分いら

ずにカティアは葵を撃墜できていたはずなのだから。

「——ねえ。あなたは何で戦っているの？」

雷雨が降り始めてから一言も話さなかったカティアの声が通信から葵に届く。

疲労とダメージにより葵は何も返事をしなかったが、それを聞く体勢と受け取ったのか、カティアが話を続ける。

「マテイウスに頼まれたからといって、こんなボロボロになるまで、あなたに戦う理由はないはず……」

それは、カティアからすれば当然の疑問。自身が優勢な今だから、聞きたいという欲求にカティアは抗えなかった。

「それとも、あの泥棒猫の娘に惚れた——いえ、誑かされでもしたかしら？」

「——は？ あはは！」

自分が劣勢ということも忘れ、葵は思わず場違いな笑い声を出す。

カティアのあまりにカティアらしい勘違いが葵の笑いのツボを突

く。軽く笑った後、葵はカティアの言を訂正する。

「別に、そんなんじゃないさ」

シャルロットの容姿がいい——可愛いことは葵も認めるところである。性格だっていいし、スタイルだって・・・いい、と葵は彼女の着替え姿を思い出しながらそう思う。

しかし、それは他のクラスメイトの女子への思いと大差ない。

葵はシャルロットに惚れていない。恋愛感情どころか友愛感情すら持ち合わせていない。

クラスメイトとルームメイト。その2つのカテゴリを除けば、葵にとってシャルロットは“他人”でしかなかった。

「でもな——」

葵は言葉を続ける。

確かにマティウスに頼まれただけ、マティウスがマイクの友人なだけが理由にしては自分は頑張りすぎだと葵も思う。

なぜそんなに頑張るのか？ 戦う前までは分からなかったが、今になってようやく葵自身も分かった。

「あいつはクラスメイトでルームメイトだしな。いなくなれると困る」

クラスメイトとルームメイト。その2つを加えればシャルロットは葵にとってただの“他人ではない！”。すでにシャルロットは、葵の日常を構成する重要な人物となっていた。

「そう——。暗殺なんて非日常で人の日常を壊すんじゃない！！」

情けは人の為ならず。

ことわざとしての意味とは違うが、葵の行動理由はその一言に集約される。

シャルロットのためではなく、マティウスのためでもなく、マイクのためでもない。

全ては自分の為でしかなかった。

葵の答えはカティアを怒らすのに十分な内容だった。

『そんな・・・たったそれだけのために——オマエはああ！！！』

自分のことは棚に上げ、カティアはそんな自分よがりな葵に激高する。

立ち上がった葵の右斜め後ろから、カティアはアサルトカノン『ガラム』の照準を合わせる。これまでの戦闘を踏まえると、後数発くらいで葵のISは機能停止に追い込まれるはず。

つまり詰み。

後は、急いでシャルロットの部屋を強襲すれば、カティアの狙いは“全て”達成される。

引き金を引けば全ての終わりを迎えることができる。そうして引き金に手を掛けたカティアに思いもよらぬ事態が起こった。

カティアを捉えられないはずの葵。その視線が間違いなくこちらを捉えている。

『なっ！？』

驚いたカティアは急ぎ自身のISを確認する。しかし、ジャミン

グシステムは正常稼動中。つまり、今も尚、葵のISのレーダーはカティアを捉えることはできず、ロック警告音もデタラメに出ているはずだ。

それは正解。

今も尚、葵のISはカティアを捉えられていない。

『な、なぜ？』

カティアは状況を理解できない。それは彼女が勘違いしていたからだ。

カティアが知りえている葵の情報はR部隊より少し多い。それは、葵がIS学園に入学してからすでにセシリアと鈴音、2人の代表候補生を倒した“天才”であること。

それがカティアの間違った認識だ。

もし、カティアが葵の学園入学以前の情報を調べていたら、あるいは、DSについて少しでも詳しい知識があれば、間違いに気付いただろう。

確かに葵は天才かもしれない。だがその強さの大半は、DSによって軍人並みに擬似IS稼動時間があることと、数千人以上にもおよぶ対人戦闘経験によるものが理由だ。

つまり、葵には経験の浅い天才にはできないことができる。

それは、数千人以上との戦闘によって得た経験。それを踏まえた未来予測。さらに、見えないとはいえ、すでに10度以上も力ティアに攻撃を受けている葵は、それらも踏まえて次に力ティアが攻撃を仕掛けてくるであろう方向を予測し、完全に的中させていた。

「——捉えた！」

自身の予測を確信していた葵は、瞬時加速で力ティアに近接する。

葵が力ティアを倒す最後のチャンス。しかし、葵のラファール・リヴァイヴにはシャルロットのカスタム？の灰色の鱗殻グレー・スケールのような、強力な近接武装はない。

だから、それは技量で補う。今までそうしてきたように。

葵は右手にハンドガン、左手にショートブレイドを構えている。

初手はショートブレイドの一撃だった。素早い攻撃だが、ラウラ戦での失敗を踏まえてある程度力を抑えてある。

その後はまさに怒涛。一挙一動は、ただ斬って撃って蹴りを入れているだけ。だが、それを高速で同じ部位に連続で叩き込めばどうなるか？

叩き込まれた力ティアの胸部にある装甲は弾けとび、それによって働いた絶対防御がガリガリとリヴァイヴ・カスタムのシールドエネルギーを削ってゆく。

この技を葵が最初に見せたのは第3回DS世界大会。その後、葵の真似をするDSユーザーが続出したが、葵と同じことができるユーザーは10人と出ず、いつしかこの技は大会会場近くにあった世界的に有名な滝に例えられ、こう呼ばれるようになった。

ナイアガラ
——止まらぬ激流

26 撃目の蹴りでカティアを蹴り飛ばした葵は、両手の武装を投げ捨て、スナイパーライフルを構える。

「終われ。ターゲット・インサイト！」

27 撃目の弾丸が、カティアの装甲の剥がれた胸部に吸い込まれる。吹き飛ばされたカティアは、グラウンド横にあったIS格納倉庫の壁に激突した。

「おのれ・・・！」

ISを強制解除されたカティアは、途切れそうになる意識を繋ぎながら葵を睨みつける。

そんな狂気に満ちたカティアを視線を見続ける度胸を持ってない葵は、視線を合わせないようにして彼女へ近づく。

「殺人が絶対悪とは言わない。けど、俺と俺の周りを巻き込むな」

最後まで自分勝手を貫く葵にカティアはきょとした表情となる。それは、まるで自分と同じようであったからとようやく気付いたためだ。

「・・・あなたと私は同じね。なら、あなたと私の違いはなんだったの・・・？」

何が敗因だったのか？ カティアの呟く問いに、その答えを持たない葵は詰まった。

『強いて言えば、壊す強さと守る強さの違いではないでしょうか？』

突然聞こえた声に、葵とカティアは同時に空を見上げる。

そこにいたにはボロボロのラファール・リヴァイヴを纏ったイヴエットだった。

葵は敵の出現に、スナイパーライフルを構える。

「（こいつがここにいるってことは、もしかして生徒会長は・・・）
」

イヴェットの出現は、葵に嫌な予想を抱かせていた。しかし、イヴェットは武装を展開するもなく、手で葵を制する。

『よしなさいアオイ・タチバナ。もう私たちは撤退します。これ以上戦う理由はないでしょう』

「その私たちの中にその人が入っていないければな・・・」

葵はカティアを指差しながらそう言う。

もし、ここでカティアを逃してしまえば今回の戦闘は無意味。また同じ事が繰り返される。葵はR部隊は逃しても、カティアだけは逃がすつもりは毛頭なかった。

『・・・なるほど。あなたの心配は分かりましたが、その心配は無

用です』

「何を根拠に……!？」

『この人……いえ、フィリドールがこのような独断をすることは2度とできません。そうですね、カティア様?』

カティアは頷くこともなく、イヴェットを見つめている。それは、ほぼ肯定しているのと同じだ。

「そう……。どうやら、事は上手くいったみたいね」

『あなたにとって、こちらと“あちら”。どちらが本命だったんですか?』

「もちろん、両方よ」

カティアとイヴェット。2人の会話の意味が分からず、葵は困惑する。

『……まあ、何してもあなたを学園に拘束させるわけにはいきません。一緒に戻っていただきます』

「……いいわ。もうこちらを果たすことは不可能ね。片方だけでもいいとするわ」

「それを聞いて、俺が逃がすと思っているのか？」

2人の会話は全然分からないが、少なくとも逃げようとしていることだけは葵にも分かった。

『強がりはやしなさい。あなたの身体はもう限界でしょう。それでも、戦うのなら容赦はしませんか？』

葵の身体が畏縮する。

イヴェットの言うとおり、葵の身体もついでに機体ももう限界だ。それで元国家代表と戦うのはリスクがあり過ぎる。

『・・・別に嘆く必要はありません。この戦いはあなたの勝利です。むしろ誇りなさい。あなたはフランスのIS半数と楯無を相手にして生き残り、自分の防衛目標をも守ったのですから』

イヴェットがカティアを抱えてゆっくり飛翔する。しかし、ふと何か思い出したかのように動きを止め、葵へ向き直す。

『ああ・・・それと、これは軍人としてではなく、一個人としての発言ですが・・・』

「・・・何だ？」

『私と私の部隊に『少女殺し』の汚名を着させずにさせてくれて、感謝しています。もう2度と会うこともないでしょうが、壮健でいて下さい。』

葵にそう微笑んだイヴェットは、今度こそ止まらずに空の彼方へ消えていった。

葵は動くことができずに、それを見届けると、糸が切れた人形のように倒れこむ。

「（さすがに、もう限界だ・・・）」

疲労のピークに達した葵は、ISを解除し、IS格納倉庫に背を預ける。

ふと、葵の瞳に7色の光が映った。いつの間にか雨は上がり、夜明けの赤い太陽が辺りを照らし、虹を作っている。

その光の間から、数機のISが見えた。学園教師たちである。その内の1人は真耶だ。さらに、違う方向へ目を向けるとISを纏ったままの楯無の姿を見つけた。

「・・・遅いよ」

今更出てきた学園教師たちに穏やかに愚痴ると、葵は意識を手放し、深い意識の底へ沈んでいった。

こうして、7時間に及んだ葵の戦いは終わりを迎える。

しかし、葵はイヴェットの言葉をちゃんと理解していなかった。

カティア、R部隊、そして楯無。9機の内、実際戦ったのは7機。撃墜2機、戦闘不能1機。

1度の補給もなしに、そのスコアをたたき出したのが、どれだけの偉業であったのかを。

終ぞ、理解することはなかった。

第22話 シャルロット抹殺計画 後編 〱狂気終焉〱（後書き）

どうも、紅だった人です。

またもや亀更新でもうしわけありません。

しかも、今回は厨二病みたいな技名と2つも作ってしまい、恥ずかしいかぎりです。

それは兎も角

このDream Soldierオリジナルのシャルロット編はもう少し続きます。シャルロット編なのに、肝心のシャルロットの活躍が全くありませんが、次回もよろしく願いします。

第23話 事件の後

朝。シャルロットは昨晚戻ってこなかった葵のことを報告すべく、隣の寮長室——千冬の部屋を訪れていた。

「織斑先生、ちょっといいですか？」

しかし、返事がない。

「織斑先生、いないんですか？」

今度はノックを加えるが、やはり返事がない。寝ているのかな？と思ったシャルロットだが、何となく部屋に人の気配がないように感じる。

「（おかしいな。こんな朝からどこに行っただろう？）」

現在時刻は午前6時10分。

どちらかといえば、早い時間である。しかし、出勤に数時間かか

るならサラリーマンとかならともかく、職場が歩いて数分の千冬がこんな時間に出かけているとは、シャルロットは思っていなかった。

そこでシャルロットは思い出す。昨晚、千冬たち教師が何やら深刻な表情で何か話していた事を。

「（職員室かな？）」

昨晚何かあったと仮定して、千冬が未だにその対応をこなしていることは考えられる。そう判断したシャルロットは、すぐさま職員室へ向う。

だが、それでも千冬を見つけることはできず、それどころかしばらく待っても副担任の真耶すら職員室へ姿を現さなかった。

S H R。

いつもならそれを行っている時間だが、IS学園1年1組には、それを執り行う教師が2人ともまだ来ていない。

普段から千冬の出席簿攻撃を恐れる生徒たちは、SHR開始時間が近づくと自然に席に着いて静かに待っている。だが、今日ばかりは疑問のざわめきが広がっていた。

何せ彼女らにとって千冬とは、5分遅れれば怒鳴られ、10分遅れれば出席簿による頭部攻撃、15分遅れればフルマラソン、という罰を課す時間厳守の鬼。そんな彼女が連絡もなしに自ら遅れるなんてただ事ではない。

どこことなく、クラスの空気が『誰か呼びに行った方がいいじゃないの?』となりかけた時、廊下の奥からバタバタと駆ける音が聞こえてくる。その音が教室の前で止まり、控えめながらも勢いよくドアが開く。

「す、すみません! 遅れましたがすぐにSHRを始めますよ」

現れたのは真耶だ。走って乱れた息を整えながら、言葉早にそう話す。

「先生どうしたんですか?」

「寝坊でもしたの?」

千冬ではなく真耶が相手のためか、生徒たちは碎けた口調だ。だが、それは真耶を馬鹿にした態度というよりは、親睦の表れに近い。

「それは立たば——ああ！ い、いえ、皆さんの言うとおり、寝坊してしまいました・・・申し訳ございません」

途中で慌てたように言い直す真耶だが、寝坊したわりには走ってきた以上の髪や服装の乱れはなく、きちんとしたナチュラルメイクもしている。ただ寝坊したというにはどこか変である。

しかし、生徒の大半はそんな些細な事は気に留めず、別の事に心が勝った。

「先生、織斑先生はどうしたんですか？」

「今日は来ないの？」

入学して3ヶ月近いとはいえ、生徒たちにとって千冬ちふゆの存在は憧れのままである。その憧れの存在に比べれば、副担任の服装がきちんとしているしていいとかは間違いなく些細な問題だ。

「それを含めての連絡事項なんです、昨晚の雷雨によって一部施設・・・皆さんに直接関係あるのは第2グラウンドですね。それらが使えなくなっています。織斑先生はその対応に追われているため、本日はいらっしやいません」

真耶の説明に「織斑先生来ないのか・・・」とか「昨日の雷凄か

ったよね」とか「私、音で目が覚めちゃった」など教室のあちこちから話し声が出る。

「IS実習場所が急に変更になることもありますから、数日は移動前に実習先の再確認を徹底してください！」

教室のざわめきを遮るように、普段よりも大きめに喋る真耶。そのまま細かな連絡事項を伝え、SHRを終わりにしようとしたが――

「先生。立花が来ていないんですが？」

手を上げてそう発言したのは一夏だ。

「えっ、た、立花君ですか!？」

葵の席は一夏の隣、最前列の真ん中である。気付かないはずないだろうに、真耶は今初めて気付きました的な態度だ。しかも、何か言い訳を考えているかのように目が泳いでいる。

「? シャルル。何か知らないか？」

そんな真耶の態度を不信に感じつつも、一夏はそれをあまりに気にすることなく、葵の同室であるシャルロットに尋ねた。

一夏の席とシャルロットの席は遠い。しかもSHR中であつたため、シャルロットにクラス中の視線が集中する。

「（一夏のバカッ！）」

シャルロットは内心でそう毒づく。彼女は葵について、後でこそ真耶に報告するつもりであつた。

だが、一夏に問われればこの場——クラス全員が聞いている中で答えなければならない。黙っていることや嘘をつくこともできないが、シャルロット自身事情が分からないため、沈黙や嘘によつて後にどういった弊害が葵に起こるのか予想がつかなかった。

「実は・・・立花君は昨日から部屋に戻ってきてなくて・・・」

そう呟くように話した瞬間。教室の空気が悪くなったようにシャルロットは感じた。

しかし、それは彼女の感じ違い。変わったのは教室の空気ではなく、悪い予想が的中したシャルロットの内心である。

「・・・夜遊びしてて欠席なんて、これだから男は・・・」

「・・・学園の評判が落ちたらどうするつもりかしら・・・」

シャルロットが危惧していたのは、このクラスのところどころで聞こえる葵への悪言である。自身の発言が発端とはいえ、またこれで学園内における葵の評価が下がることは確実だろう。

「もしかして、何か事故に巻き込まれたか？」

そう唯一心配そうに呟いているのはもう1人の発端である一夏だ。発端ではあるが、それで一夏に非があるかといえ否である。むしろ彼の主観でいえばただ心配しただけであり、それでかえって葵に迷惑がかかっているのは皮肉としか言いようがない。

「あ、ああ！　そうです、思い出しました！」

クラスの喧騒を遮るよう、先ほどよりさらに大きな声を上げる真耶にクラスの視線が戻る。

「立花君は、身内の方が危篤状態になられたと昨晚ご家族から連絡がありました、数日学園に戻ってきません」

素人が台本を読むようなたとしきで、真耶はそう説明する。

葵への悪言を話していた一部女子も、その説明を受けると「なんだ・
・」とか「事実はあるものよね・」というように興味を失
っていく。

「（そういつた事情があつたんだ・」

シャルロットも真耶の説明に昨晚から悶々としていた気持ちが解
ける。

でも――、とシャルロットは違う疑問が湧く。いくら急いでい
たとはいえ、同室の自分に何の説明も抜きに出て行くなんてことが
あるだろうか？

しかし、それを否定する材料もない。それに真耶きょうじが嘘をつくこと
も考えられなかったため、多少の疑問を感じつつもシャルロットは
葵の不在に納得した。

それから2日後。

葵はIS学園内の校舎でも学生寮でもない建物の一室にいた。――

室はトイレや浴室を含め、生活する必要最低限のものはだいたい揃っていたが、この場を快適と思うことは葵にはできそうにない。

まずは窓。一見普通に見えるが、実はマジックミラーであり、外からの光は入るが、外からは窓があるなんて見えないという。さらにネット環境やテレビどころかラジオもない。

極めつけは、葵の腕にあるものだ。葵は学園指定のジャージをめぐり、左腕についたそれを見る。それは腕輪。近いものに例えると、一夏の白式の待機状態に近いが、デザインはいたってシンプルだ。無論、ただの腕輪ではない。この腕輪を解除しないままこの部屋を出れば警報がなり、建物を出れば人体に影響を残さないギリギリレベルの電流が流れる——葵にとっては迷惑な——優れものだ。

一言でいえば、拘束具の一種が葵に付けられていた。

「IS^{こみ}学園が治外法権じゃなければ、マスコミが大騒ぎだろうな・
」

葵は諦めにも似た境地でそう呟く。

2日前。眠ったまま——気絶に近かったらしい——学園に拘束された葵は、その日は目覚めることなく、次の日、つまり昨日、フランス部隊との戦闘のあらましを千冬に説明することとなった。

さすがにその場に至っては隠し事をすることはできず、葵はシャルロットの性別のこと、デュノア社のこと、カティアのこと、さらにはマイクが関わっていたことまで包み隠さず話した。

当然のことながら、10機ものISが行った大規模戦闘の事情を学園で唯一知っている葵を釈放することを学園側は良しとせず、事の真相がはつきりするまで軟禁されることとなった。まあ、それ以外にも葵は普通にISの無断起動や器物破損やら色々やらかしているの、それに対する罰も含まれているのだろう。

今頃、学園上層部が大慌てでフランス政府やデュノア社に事情の説明を要求しているだろうが、すでに葵にとってはどうでもいいことである。事が知れた以上、仮にもう1度フランスからの侵攻があったとしても、学園側がシャルロットを守ってくれるだろう。何よりISを取り上げられて、外部との連絡がとれない葵には何もできない。

そんな何もできない葵が直面している問題は1つ存在した。

「（ヒマだ・・・）」

情報機器が何1つないこの部屋では暇つぶしが効くものがほとんどない。唯一例外が机の上に積まれている真耶が持ってきた参考書の類だ。しかし、軟禁生活実質1日しか経っていない葵は、いまだにそれらを開く気にはなれなかった。

——ピッ

ドアの施錠が解かれる電子音が響き、葵は身支度を整える。

犯罪を起こしたつもりはないが、現在の環境は犯罪者のそれに近い。だらしな性格好で訪問者を待っているのはマズイだろうとの判断だ。

しかし、1分ほど待ってもドアが開かれない。

「？」

不思議に思った葵は、ドアに近づき手を掛ける。すると、当然のように開くことができた。

葵はドアを開けて腕輪が廊下にでないように気をつけながら顔を出して覗き見る。しかし、そこには誰もいない。

「（カギの故障・・・か？）」

このまま逃げられそうな状態である。しかし、ここで逃げたらそれこそ犯罪者だ。さらに拘束されていることを除けば葵に逃げる理由などない。

急なカギの故障は気になるが、千冬や真耶が来たら報告すればいいだろう。そう思って、葵が部屋に振り返ると――

「うん。逃げずにいるなんて、エライ」

「なあっ!？」

自分しかいないはずの部屋に沸いて出たように現れた女性に、葵は驚きの声を上げた。

外側にはねたセミロングの青い髪とイタズラ小僧のような表情がよく似合う。その女性はいき最近、葵がお世話になった人物である。

「まともに顔合わせするのは初めてだけど、自己紹介はいらわないわね、立花葵君？」

「大丈夫ですけど、いったいどこから入ってきたんですか、更識会長？」

「それは、ヒ・ミ・ツ」

そうウィンクしてきた楯無の視線を逸らすように、葵は少しだけ顔を横へ向けた。それは、楯無の笑顔が魅力的だった——のが理由ではなく、ただ単に葵が女性と視線を合わせたくなかっただけだ。

「ふん」

そんな葵の態度を見た楯無は興味深そうに彼に近づいてゆく。

嫌な予感を感じて逃げようとする葵だが、それに気がついたのか、楯無は音もなく、見逃していれば消えたかのように、素早く葵に近づき彼を見上げる。

葵の背に滝のような汗が流れ出た。女性が苦手な葵にとって、今の楯無との距離は近すぎる。何せ腕をまわせば抱きしめられそうなくらいなのだから。

「（うう・・・）」

接触していないにも関わらず、葵が背中に悪寒を感じ始めた直後、楯無はまたもや無邪気な笑顔を作って、葵から離れた。

「ふふふ。女性が苦手っていうのは本当みたいね」

「知っててやったんですか・・・」

なんと性質の悪い。そう頭の片隅で楯無へムツとした感情が芽生えるが、今の葵は離れてくれた安堵感の方が勝った。

「それで、何用ですか？ やっぱり一昨日のことを・・・」

葵の言葉が尻すばみになる。

先の戦いで葵は楯無を敵と誤認し攻撃を加えていた。あれは仕方なかったと思う一方で、楯無に誤って攻撃してしまったことへの罪悪感が葵の心をくすぶり続けている。

「あの時の事？ あんなのお互い様だし、気にしてないわよ」

「なら、なんですか・・・？」

「1つは、悪名高い噂の男子学生を見てみたかったから。2つは・・・そうね。これは一昨日の事と関係あるわ。あんな状況だったとはいえ、私に攻め切れさせなかった相手に興味があったから」

あの戦い。葵の主観では攻めきれない相手への畏怖があったが、実はそれは楯無も同じであった。葵は知らないが、IS学園の生徒会長である楯無は、毎日どんな時間にも関わらず、会長職を狙う学園生徒に襲撃される。頻度こそほとんどないが、ISで襲われることだってあるのだ。そして楯無はその全てを防ぎ、撃退してきた。

葵を除いては。

あの時、R部隊の侵攻という背景を除けば、状況はいつもの襲撃と変わらなかった。つまり初めてなのだ。楯無が倒せなかった学園生徒というのは。

そんな相手に興味を持つなど言うほうが、楯無にとっては無理からざる話である。

「まあ、それらはついで。織斑先生が呼んでるわ。一緒についてきて」

そう言つて、楯無は差し込み式のキーを取り出すと、それで葵の逃亡防止用腕輪を外す。

「なんで呼んでいるんですか？」

「さあ？ 聞いてないわ。でも、この前の事関連であることは間違いないと思うわよ」

確かに、と葵は思った。というか、それ以外で呼ばれるはずがないのだが。

楯無の後に付いて、葵が到着した場所はまたもや知らない場所だった。とはいふものの、室内の装備を見ればだいたいの検討がつく。巨大なモニターにそれを扱うコンソール、数十人は座れそうな巨大なテーブル。アリーナにある指令室に似たここは、やはり指令室かまたは通信室か会議室かのどれかだろう。

部屋にいたのは千冬の他、真耶も含めた数人の教師たちだ。

「あ！」

しかし、葵は教師たちには目もくれず、二分割された巨大モニターを見て驚いた。

『よう、息災かアオイ？』

『ひさしぶりだね、タチバナ君』

モニターにはいつもと変わらないマイクと、葵を見てどこか申し訳なさそうな表情を浮かべるマティウスが映っている。

「来たか立花。今、こちらの2人から話を聞き終えたところだ。フランス政府からの説明を含めて、おまえの話の裏づけが取れた」

「そうですか・・・」

葵は安堵の溜息をついた。これで葵のIS無断起動など校則及び国際法違反の理由がはっきりする。後は、これに基づいて学園が葵の厳罰を軽減してくればいいのだが、と葵は思った。

「ん？ それじゃあ、なんで俺は呼ばれたんですか？」

葵が疑問を口にする。

事の真相がはっきりしたのなら、ただそれだけを楯無から葵に伝言させれば済む。わざわざ連れてくる必要などない。

「お2人からの強い要望でな」

千冬がそう答えたため、葵は、そうなの？ という意味のこもった視線をマイクへ向ける。葵の視線の意味を的確に捉えたマイクは、頷くとすぐさま首を振った。

『私というよりも、マティからの要望だ。私はアオイの元気な顔を見られたから、十分だよ』

葵はマティウスへ視線を向ける。視線が合った瞬間、マティウスは頭を地に叩きつけるような速さで下げた。

『すまないタチバナ君。今回のことはなんて言えばいいのか・・・』

顔は見えないが、震える声が葵に届く。

『本当にすまない。本来なら僕自身が全て片付けなくてはならなかった問題なのに・・・僕の半分にも満たない年頃の君に頼るなんて自分が恥ずかしいよ』

「いや、俺は・・・」

マティウスの声の震えがさらに増す。おそらく泣いているのだろう。

『しかも、君はシャルロットを守るために、カティアに殺されそうになったそうじゃないか。本当になんて詫びたらいいか』

「いや、あの、ですから・・・」

葵は声をかけるが、泣いているマティウスには届いていないようだ。

『すまない。本当にすまな・・・』

「いいかげんに、俺の話を聞いてください!!」

叫んだ葵に驚いたマティウスは、腫らした眼をした顔を上げる。

「・・・怒鳴ってすみません。でももう終わった事を俺はそこまで気にしてません。それにR部隊をほとんど撃退したのは更識会長ですので」

そう言って視線を向けた葵に、楯無は少し意味ありげな微笑みを浮かべた。

『まったく・・・。マティ、私が昔からお前に言っているだろう。お前のいい所は真面目な所だけど、悪い所も真面目なところだ。深く考えすぎ』

マティウスの態度に、マイクは呆れたように口を挟んできた。

『ですが、先輩・・・』

『ですもナスもない！ お前、まだ葵に言っていないことあるだろ？それを言っでとつと会話が終わらせろ』

そう言われてマティウスはハツとなる。彼はまだ今一番言わなくてはならないことを言っていない。

『タチバナ君。シャルロットを守ってくれてありがとう』

「いえ・・・」

普段礼を言われなれていない葵は、恥ずかしさを覚えてつい素っ気無い返事となってしまい、それに気がついたマイクが笑い声を上げた。

「マイク、笑わない！ それより、今回の件は結局どうなったんだ？ マティウスさんが開放されているってことは、一応の決着は着いたんだろ？」

「ん？ ああ、まあな。そうだな、当事者だったお前には説明した方がいいだろう。でも、驚くなよ？」

驚くなと前うってマイクとマティウスから今回の事件、その全てが明かされることとなった。

今回の事件。葵はカティアというフィリドル一族が起こしたものだと思っていたが、実際にはカティア1人が起こしたものであった。R部隊やそこが扱うISを集めるためにフィリドルの名前を使ったものの、あまりの迅速な行動に他の一族たちはR部隊がフランスを出るまでまるで気付かず、そのためこの暴挙を止める者が誰1人いなかったようだ。

無論、これには弊害が発生しており、準備不足のR部隊は満足な装備を揃えることができずに、葵と楯無のたった2人に撃退される

こととなった。

と、ここまでなら先走り過ぎたカティアの失敗に終わるところだが、実はこれがカティアの計算の内に入っていたのが、真相を知った関係者たちが驚いたところだ。

暴走していたように見えたカティアだが、その実彼女はかなり計算高かった。

今回の件、シャルロット抹殺の成否がどうであれ、自身の破滅が確定していたことをカティアは承知していた。IS学園侵攻というのはそれほどの大事である。

カティアはこれを逆手に取った。彼女は、R部隊がフランスを出て数時間後に、自分がこれから起こすフィリドール一族の大スキヤンダルの事実と証拠をフランス中の非フィリドール派に属する政界や経済界の大物に送りつけた。

これは受けたフランスの政界や経済界は上へ下への大騒ぎだったらしい。何せ、この大スキヤンダルによって今までフランスの中核に担っていたフィリドール一族の発言・求心力がバブル崩壊並に下落してしまったのだ。さらにフィリドールの悪夢は続き、このスキヤンダルを機に各個人のスキヤンダルが芽づる式に発覚し、現在ではフィリドール一族の力は風前の灯。仮に盛り返すにしても最低でも世代が3つは変わらないと難しい状態である。

事実上、フランスにおけるフィリドールという一族は名前だけの存在に成り果てた。

「そ、そんな事になっていたの？」

前もって驚くと言われていた葵だが、さすがに驚かずにはいられない。

『ああ・・・たった2、3日でこの大混乱だ。数十年後、これが表舞台に発表されたら歴史に残るぞ』

一応、IS学園襲撃は、一般には秘匿されている。しかし公表されれば、さぞフランス国民にとっては恥ずべき歴史になりそうだと葵は思った。

「それにしても、なんでカティアさんはそんなことを？　いくらなんでもやりすぎ・・・」

カティアの愛国心がいかにほどあるかは分らないが、この件でフイリドルという中核を失ったフランスの政界と経済界は大打撃を受けている。フランスにとって国家にとっては致命的と言っても過言ではない。或いは本人にとっても予想外の展開だったのかもしれない、そう思った葵だが、次のマイクの言葉がそれを打ち消す。

『現在フランス政府に拘束されているカティア・デュノアの証言では、どうやら彼女は自分をただの政略結婚用の駒として育てた一族

を憎んでいたらしい』

マイクに変わり、マティウスが続ける。

『昔からその傾向があったのは知っていたけれど、自分とフランスを道連れにするほどだったとは思ってもよらなかったよ』

過去を振り返っているのか、マティウスの目が遠い。

「そこまでの胆力と先見の明がありながら、こんな馬鹿な事を犯すなんて……。他の方法なんていくらでも見つけられただろうに」

もし、を使うのは間違っているだろうが、もしカティアがもう少し冷静であつたのなら、シャルロットとその母親に対する嫉妬心を少しでも抑えられていたのなら、襲撃なんて手荒な真似を使わず、平和的な解決方法はいくらでも考えられたはずだ。

おいしい。あまりにおいしい、と思わずに葵はいられない。

『人間は、そこまで万能じゃないってことさ。どんな奴でも失敗することはあるし、感情に支配されることもある。天才がなんでもできるという幻想は、その頂を夢見る夢想家の勘違いにすぎないよ』

マイクの慰めに葵の感情の高ぶりが少しだけ下がる。どの道、もう終わってしまったことだ。今更、ああだこうだと思えるだけ無駄である。

「そういえば、R部隊ってどうなったんですか？」

今回の件でフランス側で一番被害を被っているのは間違いなくR部隊である。何せ、望まぬ戦いだった上に部隊はほぼ壊滅。

そんな事実を葵は知らないが、直接戦った間柄として彼女たちの処遇が気になっていた。

『彼女たちは厳罰に処されているよ。いくらきちんと上から来た命令だったとはいえ、実動部隊だしね』

「具体的には？」

『部隊は解散。部隊長だったイヴィット・ベラーは降格の上で左遷。残った部隊員もバラバラに別部隊へ振り分け配置される予定だよ』

マティウスの説明に哀れみを感じる葵だが、この処遇はかなり軽い。何せイヴィット以外は事実上のお咎めなし。破格の処遇と言えるだろう。

「そうですか……。しかし、この後のフランスは大変ですね。国内にしても国外に対しても」

葵が他人事のように呟く。というか、事実他人事である。

今後フランスは、IS学園を襲撃した国として国際的に非難されることは想像に難しくない。

『いや、そうはならん』

「なんでさ？」

否定したマイクに葵は問う。

マイクは肩をすかし、視線を片手で頭を抱えている千冬に向ける。

「……何かあったんですか、織斑先生」

「……先日の襲撃。この事実を学園は国際社会に公表するつもりはない」

不愉快さを全く隠そうともせず、千冬は重そうに口を開いた。そこから出た言葉を聞いた葵の度肝は再び抜かれる。

「はあ！？　なんでそんなことになっているんですか！？　隠蔽したって学園には何のメリットもないでしょう！？」

「ねえ、立花君。ちょっと聞いて」

半ば千冬を責め立てるように喋る葵を遮るように、楯無が口を挟む。

「この前の襲撃。学園を守ったのは誰？」

「それは、更識会長と・・・俺ですね」

最後は付け足すように話す葵。葵からすれば、先日の戦いはシャルロットを守る意味合いが強く、学園を守ったという認識は薄い。そのためだ。

「その間、学園は何をしていた？」

「何って・・・特に何も——っ！？」

そこでようやく葵も気付いた。葵は勢いよく千冬へ振り返る。

「まさか・・・それが理由ですか？」

「そうだ。学園は何もしていない。それどころか、進入されたことを察知することすらできなかった。そんな事を上げ公表できるはずもない」

奥歯を苦々しく噛みながら、千冬が告げた。

葵は愕然となる。まさかここまでの大事を、学園上層部は保身のために公表しないという現実には――

「で、ですが、これだけの事件、隠蔽し切れる筈が――」

『アオイ、悪い』

「――マイク。おまえ、まさか・・・」

ばつが悪そうに頬をかくマイクに、葵は嫌な予感が止められない。

『まさか、こんな事になるとは予想してなくてな。マティやアオイが不利にならないように、情報の伝達網をチョッキリと・・・』

手でハサミを切る仕草をしながら、マイクは言う。

だが、そんな簡単に世界に向かってサーバーかく乱しないでほしい、と葵は思った。

『だけど、それだけで情報を完全に隠蔽できるほど、各国の諜報機関は甘くないよ。まず間違いなく、世界は今回の事件を把握しているはずさ。公表はできないだろうけどね』

マティウスが補足する。

各国が公表できない理由は、情報を得た方法がかなり正道から離れた方法だからだろう。いくら、フランスを告訴したいとはいえ、自分の首を絞めてまではやりたくないはずだ。

それに、今回の事件はなんだかんだで、人的被害は双方出ていないのだ。フランスを攻撃する材料としては一押し足りないのも理由の1つに入るだろう。

「はぁ・・・」

葵は盛大に溜息をついた。何か色々馬鹿らしくなったためだ。後、カティアがどうなったとか聞きたいことがもう少しあった葵だが、それすらどうでもいい。

『ああ、そうだ。アオイ、今思い出したんだが』

「何？」

『近々別口で連絡があるかもしれないけど、アメリカ政府から自由

国籍権取得とアメリカ代表候補生を受けてくれるよう打診受けてるぞ」

「はぁ！！??？」

マイクの説明を聞き、葵は場所も忘れて驚きの大声を上げた。というか、声こそ上げないものの、その場にいる全員が驚いている。

「なんで、そんなことになってるんだ!？」

『今、マティが言っただろ。今回の件は各国政府が把握してるって。おまえ、何をやったのか自覚ないのか?』

今回の襲撃で自分が何かした自覚は葵には全くなかった。葵からすれば、この前の戦いは半端な覚悟で戦いを挑み、みつともなくロボロにされて、ギリギリ負けずに済んだ、という印象しかない。

しかし、それはあくまでも葵の主観。

表舞台に出る事はないものの、今回の事件を知る各国一部政府高官にとっては、葵はISを使える男という点を除いても、ほしくなる逸材に捉えられてしまっている。

マイクに打診が行ったのは、葵との関係性——友人同士であり、専用機を製作を請け負っている——を知っていたからだろう。

『で、受ける？』

「断るに決まってるだろ！」

日常生活をこよなく求める葵にとって、その選択肢はない。

『まあ、アオイならそう言うよな。だけど、断るのは少し待ってほしい』

「・・・何を企んでいる？」

『これを上手く利用すれば、ISコアの1つや2つ。分捕れそうだな。ふふふ、前は全く相手にされなかったから、今度は手加減しない。腕が鳴る』

マイクが腕を鳴らしながら、めちゃくちゃ悪そうな顔をしている。

「や、やりすぎるなよ？」

マイクがアメリカ政府にどういった脅しいっしを行うのか想像するのも恐ろしいが、それを止める術を葵は持ち合わせていなかった。止める理由もないが。

ここで、応酬のように続いて会話がピタリと止まる。

「デュノア社長。これからご令嬢についてはいかなさるつもりか？」

その隙を狙っていたかのように、千冬が口を開いた。葵も千冬に倣ってマティウスを見る。

シャルロットがIS学園に転入した理由はカティアから守るためだった。カティアが拘束され、フィリドールが力を失った今、シャルロットが在学し続ける理由はほとんどない。

在学か、帰国か。

最終的な決定権はシャルロットにあるとはいえ、父親のマティウスがどちらを望むのか、千冬は学園教師として聞かねばならなかった。

『僕は、あの子に戻ってきてほしいと思っている。父親として何一つやれていないからね。これからできるかぎりのことをしてやりたい』

「わかりました。ですが、ご令嬢の意見もあるでしょう。2人でよく話し合っていたきたい」

『お気遣いありがとう、織斑先生』

「マティウスさん、ちょっといいですか？」

マティウスと千冬の会話が終わったのを見計らって、葵が口を挟む。

『なんだい？』

「ちょっとマティウスさんに頼みがありまして」

『ああ、うん。僕にできることなら何でも言つてよ』

マティウスは快く答える。今回の件で、マティウスは葵に多大な負担を押し付けた。その彼の頼みならば、多少の無理でも聞くつもりだ。

「大した事じゃありません。それは――」

第23話 事件の後（後書き）

この話でシャルロット編終わらすつもりだったのに、終わらなかった。

そして、またもやツッコミどころ満載な展開に自己嫌悪しています。

第24話 男装麗人の行き着く先へ

葵がマイクやマティウスと事後報告を聞いた日の放課後。

シャルロットは千冬に呼ばれ、数時間前まで葵が居た同じ指令室を訪れた。

「え!？」

そして葵と同じく、巨大モニターに映る人物に驚き声が漏れ出た。

『・・・やあ、シャルロット。元気そうだね』

人生3回目に会った父親は以前の2回の時とは違い、シャルロットに優しく、しかしどこか居心地が悪そうに接してくる。

「お、織斑先生！ これはどういことですか？」

「デュノア。おまえの家庭事情はすでに承知している」

嘘がバレた。千冬の言葉に、シャルロットの身体はビクリとはねる。

「心配するな。それを咎めるつもりはない」

シャルロットの反応に気付いた千冬は、毅然とした態度を崩さずそう言った。

『天下のブリュンヒルデに私事でこんな雑用を頼んでしまつて申し訳ない』

「・・・デュノア社長、その呼び名はやめていただきたい。――デュノア」

「は、はい！」

「そう動揺するな。先ほど言ったように私はおまえの事情は承知している。デュノア社長の頼みで連れてきたが、おまえがここに居たくないというのなら、退室しても止めはせん。どうするんだ？」

千冬の気遣いの言葉に、シャルロットは元来早い思考を開始する。

経緯を踏まえれば当たり前の事ではあるが、シャルロットは父親のマティウスに対していい感情を抱いていない。しかし、だからといって憎いとか、大嫌いとかいう感情を抱いてもいなかった。

なぜなら、そこまでシャルロットはマティウスに関心を向け切れていないためだ。数年前に母親が亡くなってから引き取られたものの、わずか2回しか会うことのなかったマティウスに、シャルロッ

トは父親という印象よりも、大企業の社長という印象しか抱けなかった。

無論、自分の意向を無視し、男装を強要してES学園へ転入させたことへの反感がないとはいえないが、それも父親ではなく企業の社長がやらせたことと考えれば、ある程度の納得をシャルロットはしていた。

そのマティウスが自分に話があるらしい。気乗りはしないが、聞かないわけにもいかない。そうシャルロットは考え、

「いえ、大丈夫です」

と、千冬に答えた。

「そうか。ならば、私は職員室に戻っていよう。用が終わったら顔を出せ」

そう言っ、見送るシャルロットの視線を背に、千冬は退室していった。

誰もいなくなった指令室で、シャルロットはモニターのマティウスへ視線を移す。

「・・・それで、お話はなんでしょうか？」

シャルロットの言葉遣いは、とても肉親と話しているとは思えないほど、きちんとした敬語で固められていた。

そんな娘の姿をマティウスは複雑そうに見つめる。

『そんなに硬くならなくても大丈夫だよ。・・・と、僕が言っても説得力はないか』

苦笑するマティウスにシャルロットは疑問の表情を浮かべた。以前会ったマティウスと今のマティウスの態度が違いすぎる。別人と言われれば納得してしまいそうなくらいだ。

『さて、何から話そうか・・・』

マティウスは口元に右拳をあて、考え込むような姿勢をとる。もし、シャルロットがモニター越しでなければ、その右手が微妙に緊張で震えていることに気付いただろう。

『まずは——すまなかった』

「・・・えっ!?!」

シャルロットはマティウスが何を言っているのか理解できなかった。いや、すまないという言葉の意味は理解できるのだが、あのマティウスがその言葉を言うという事実を彼女の頭は処理仕切れないでいる。

「何を……ですか？」

処理落ちしている頭を何とか動かし、シャルロットはそう答える。

『母さんの事、君を引き取った後の事、IS学園に性別を偽らせて転入させた事……挙げれば切がないね』

「っ……今さら」

口を手で押さえ、そこから出そうになった激情の言葉をシャルロットは何とか押し留めた。

今までシャルロットがマティウスに対して高い反感を抱かなかったのは、先の記述の通り、マティウスを肉親だと思わなかったためだ。その彼が、肉親のように話す姿に、シャルロットの今まで封じていた感情に起爆の火を点されたように感じた。

『いや、今だからだよ。今なら全て話すことができる』

そうして、マティウスはシャルロットに今までの事を話した。

なぜ彼女の母親と結婚しなかったのか。

なぜ母親が亡くなったシャルロットを引き取ったのか。引き取ったのに、ほとんど会わなかったのか。

カティアの事、フィリドールの事、デュノア社の事、現在フランス内がどうなっているのか。

マティウスはほとんどシャルロットに話した。ある2点を除いては。

「そ、んな・・・」

話を聞き終えたシャルロットは愕然とした。

見捨てられたと思っていた。愛されてなどいないと思っていたのに、マティウスの行動は全部自分の身を案じての事だった。愛されていたのだ。彼女が生まれる前からずっと。

その事を聞かされたシャルロットは、一瞬力が抜け、足元がふらつく。心の奥から湧き上がるいくつもの感情を制御できない。

『カティアが拘束され、フィリドールが力を失った今、君の命を脅かす存在はもういない。シャルロット。事情があったとはいえ、今まで僕がやってきた事は許される事じゃない。それは分かっている。

「ただ、本当にすまなかった」

頭を下げるマティウスをシャルロットは呆然と眺める。先ほど以上止まってしまった頭の回転をなんとか再開し、シャルロットは口を開く。

「・・・頭を上げてください」

頭を上げたマティウスの表情は悲痛だった。先ほどの謝罪は本当に心からのものだったと、シャルロットは思い知らされる。

「えっと、その・・・」

沈黙してしまった場で、不思議と何か話さなくてはという思いに駆られ、シャルロットは言葉を搜す。

「ありがとうございます」

『え?』

シャルロットの口から出た言葉を聞いたマティウスは、まず自身の耳を疑った。彼からすれば、この場で罵倒されても当たり前であり、お礼を言われるなんて想定すらしていないことだったからだ。

対してシャルロットも、自身の口からで出た言葉に内心で驚いていた。何か話さなくてはと考えていたものの、混乱しっぱなしの頭は正常に働かず、半ば感覚任せで出た言葉がそれだったためだ。

しかし、言葉に出したからか、シャルロットは自身のよく分からない感情の正体をなんとなく悟ることができた。

「僕と、母さんを守っていてくれたことです」

シャルロットは笑顔で答える。

たぶん、自分は今嬉しいんだ。それがシャルロットが気付いた感情だ。無論、心から全てとは言いが、間違いはない。

他人だ他人と目を背けていたが、シャルロットは父親に相手にされなくて寂しかったのだ。しかし、真実を知って、彼女の心は暖かさに満たされて始めている。

『そんなの当たり前じゃないか』

照れもせずにそう断言するマティウスに嬉しさを感じ、シャルロットは、あははと軽く笑ってしまった。

娘に笑われたことに少し複雑そうな表情を一瞬だけ覗かせたマティウスは、軽く堰こみ、会話の修正を図る。

『それで、シャルロット。ここからが本題なんだけど。その・・・戻ってくる気はあるかい？』

シャルロットの表情を窺うように、マティウスが話す。

「え？ 会社は大丈夫なんですか？」

シャルロットがIS学園に来た理由は、デュノア社の広告塔としてや男性IS操縦者のデータ収集である。これはマティウスがフィリドルを欺くための建前だが、完全な建前というわけではなく、本当にデュノア社の経営が傾いているから行ったことだ。だからこそ、カティアを除くフィリドル一族を騙せるほどの真実味を持たせられたのである。

『心配ないよ。オフレコだけど、デュノア社は今後アメリカのDK社と協同経営を行うことを取り決めてある。社長のマイク先輩は信用に足る人物だし、あの人の協力が得られればうちで開発が止まっている新型ISも完成するだろう』

マティウスがそう説明する。

会社の経営は新型を発表すればおそらく問題ない。それに男性ISのデータもDK社が葵のデータを持っているので、無理にデータ

収集する意味がなくなった。

つまり、建前としても本当の理由としてもシャルロットがIS学園にいる理由はこれでない。

『シャルロットには辛い思いをさせ過ぎた。僕のワガママだけど、償いをさせてくれないか？』

真摯に訴えるマティウスだが、シャルロットはすぐに答えられない。当たり前だ。つい先ほどまでマティウスへの感情は他人かそれ以下だった。父親とはいえそう思っていた相手と住むというビジョンがシャルロットは浮かべられない。

だが、だからといって先ほどの話を聞いた以上、即決に嫌だということもシャルロットにはできなかった。

「・・・少し考えさせてくれませんか？」

そうシャルロットが答えるのを予想していたのだろう。マティウスはすぐに分かったと頷いた。

シャルロットとマティウスが話している同じ頃。葵は寮の屋上にいた。

拘束されたいはずの葵がなぜ自由に行動しているのかというと、学園側が今回のR部隊襲撃の件を隠蔽してしまったため、それに伴い葵のIS無断起動及び無断戦闘もなかったことにするしかなくなつたためだ。

拘束する理由が消滅した以上、葵をすぐに釈放するのは当然のことである。

解放された葵は、狭い部屋に閉じ込められていたことを発散すべく、広いが人気のない屋上に来たとわけだ。

『——それにしても勿体ないことしたな』

「何が？」

携帯電話越しに聞こえるマイクの呆れた声を、葵は鬱陶しそうな態度で答えた。

『何って、さっきのマティへの頼みごとしかないだろ？』

「そうか？ 俺としてはこれ以上の頼み事はなかったんだけど・・・」

「

葵がマティウスにした頼み事は2つ。あるいは1つにまとめてしまってもいいかもしれない。

それは、マティウスがシャルロットへ謝罪するに当たって、今回の件、そしてそれに葵が関わったことを絶対に言わないでほしいというものだった。

『シャルロットちゃんは写真でしか見た事ないけど、かなり可愛い娘だろ。今回の件をうまく利用すれば、もしかしたら惚れてくれたかもしれないのに』

「だからだよ」

『うん？』

「さすがに惚れられるとは思わないけど、デュノアあの性格を考えれば、俺があんな事をしたと知ったら変に気を使って構ってくるに決まっている。そんな事、俺は望んじやない」

短い期間とはいえ、同じ部屋で過ごした仲である。葵はシャルロットの性格の少なくとも表の部分は把握していた。

『欲がないな』

「生憎、女性は苦手でね。それについてを言えば、自分が殺されそうになっていたなんて知らない方がいいだろ」

葵はただ何となく言った言葉だったが、それを聞いたマイクは驚いていた。

葵が女性を苦手な事を昔から知っていたマイクだったが、葵はそれが高じて女性個人に対しては無関心な傾向が少なからずあった。そんな葵がついではいえ、シャルロットに気を使った物言いをしたのだ。

『（・・・少し変わったな、アオイ）』

葵本人は否定するかもしれないが、この変化が葵にとって良いものであると、マイクは確信していた。

マイクとの電話を終えた葵は、3日ぶりとなる自室へ戻ってきた。すると、ベッドには何やら考え事をしているシャルロットがいるのを見つける。

「あ、立花君。おかえりなさい」

「ああ」

3日ぶりとなる再会だったが、葵はそれ以上長い期間シャルロットと会っていないかのような錯覚に陥っていた。

「（それだけ、内容の濃かった3日間ということか・・・）」

自分の錯覚にそう結論付けると、葵は机に備え付けられている椅子に座る。本当ならベッドの方がいいのだが、隣のベッドにシャルロットが腰掛けているので、あまり近づきたくない。

「身内の人、大丈夫だったの？」

「え？・・・ああ、何とかな」

一瞬シャルロットに何を問われているのか分からなかった葵だが、すぐに思い出す。

今回の件では、葵は身内の不幸により外出、学園内に残る戦闘の傷跡は落雷による被災ということになっていたのだ。千冬と真耶が率先して対応に回ってくれたため、これが隠蔽工作ということは、

楯無を除けば学園生徒内で気付くものはいないだろう。

「よかった。でも、出かける前に一言かけてほしかったな。何も言わずにいなくなったから心配したよ」

「ああ、うん。あまりに急な出来事だったんで驚いていてな」

葵は嘘を言っていない。間違いなく急な襲撃に驚いて慌てていたのだから。

「分かるけど、次からは気をつけて・・・」

シャルロットの言葉が尻すぼみとなる。そのまま言葉を切ると、再び葵が部屋に戻ってきた直後のように何か悩むように視線を足元に向けた。

そんなシャルロットの態度を葵は気付いていたが、声をかける気はなく、そのまま微妙な沈黙が部屋の中を占める。

「・・・ねえ、立花君。ちょっと僕の話聞いてくれないかな？」

沈黙を破ってシャルロットが口を開く。

「何だ？」

「僕の家のこと」

葵は驚きはしなかった。マティウスがシャルロットに何を話したのか前もって知っていたからだ。

だけど、意外には思っている。シャルロットは、葵が自分のお家事情に関わっていたのは知らないはずだ。つまり、シャルロットからすれば葵は自分の本当の性別を知ってはいるが、ただそれだけの存在のみである。そんな相手に自分の秘密の話を持ちかけてくるなんて葵には予想外だ。

「（こういうのは織斑の役割じゃないかな・・・？）」

内心で葵はそう思う。少なくとも葵自身は、ただルームメイトなだけの自分よりは、毎日自主練習に付き合っている一夏の方がシャルロットは仲がよく、こういったことも話しやすいだろうと勝手な判断をしていた。

「それって、性別を偽っていることも関わっているのか？」

葵は、すでにシャルロットの事情を本人以上に知っているが、知らない振りをして話しにのる。

「うん」

「それは俺が聞いても問題ないのか？」

「ちよつと前までは問題があつたけど、今は大丈夫だよ。それに、その上で相談に乗ってほしいんだ」

「・・・わかつた」

本当なら断りたいところだが、さすがにそんな空気じゃない。少し悩みながらもそう判断して、葵はシャルロットの話を聞いた。

「——ということだったんだよ」

「・・・なるほどな」

シャルロットの話を聞き終え、葵は神妙そうに頷く。

やはりシャルロットの話は葵が知る範疇のことだった。そして先日 of 襲撃の件は話の欠片も出てこなかったことから、マティウスは葵との約束を守ったようだ。

しかし、全てを聞いて葵はまたもや意外に思う。

シャルロットが葵に話したのは、彼女が知りえる全ての情報だ。しかも、つい先ほど知りえたばかりのである。さわり程度だけ話す

と思っていた葵は、自分に包み隠さず話したシャルロットを不思議そうに見つめた。

そんな葵の視線に気付かず、シャルロットは話を続ける。

「僕、どうしたらいいのかな？」

シャルロットが言うのは、マティウスに戻ってきてほしいと言われた事である。

「どつて……。デュノアの好きにすればいいんじゃないか？」

マティウスをよく知る葵からすれば、帰ってもシャルロットが不幸になることはもうないと思う。しかし、それは葵の考えである。自身の考えをシャルロットに押し付けるつもりは葵には毛頭ない。

「……。なんだか冷たくない？」

少し拗ねたように呟くシャルロットに対して、葵は軽く溜息をつく。

「あのな……。じゃあデュノア。君は俺が帰った方がいいと言ったら帰って、残った方がいいと言ったら残るつもりか？ そうじゃ

ないだろ」

先ほどの物言いは、確かに冷たい言い方だったかもしれないが、葵にとつては誠心誠意で答えたものだ。他人の答えで意見をコロコロ変えるくらいなら、まだ分らないと思っていた方が賢いと葵は思う。

「自分で決めるべきだ。俺はそう思う」

「自分で……か」

葵の言葉を反芻するようにシャルロットは小さく呟く。

「そうか……うん、そうだよね。自分で決めなくちゃ」

シャルロットの顔から悩みで陰っていた暗い表情が取れた。

「ありがとう立花君。相談してよかったよ」

「……別に構わない」

礼を言われて照れてしまい、ぶっきら棒に返事をする葵に気付き、シャルロットは小さく笑う。

「——本当にありがとう」

笑いの隙間から、シャルロットは2度目の礼を言う。それはシャルロットが葵と出会ってから今までの事全てを含めてものだったが、それは余りに小さすぎ、葵の耳に届くことはなかった。

自分で決めろ、とシャルロットに言った葵ではあったが、彼自身はシャルロットはフランスに戻るものと信じていた。それは、マティウスとシャルロット。2人を知るが故に、両者ともにすれ違った時間を取り戻すようになるだろうと思っていたからだ。

しかし、葵は失念していた。

IS学園に入学して以来。自分の思い通りに行った事などほとんどないということに。

翌週の月曜日。

学年別トーナメントの初日である。

学園内がどこか緊張に包まれている今日。葵はSHRで顔を引き
つらせていた。

その理由は――

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしく願
います」

スカート姿のシャルロットが綺麗な礼をする。葵を除いたクラス
全員がぼかんとしていた。

「というわけで、デュノア君はデュノアさんでした、ということ
です。お家の事情でちょっと変わった転入になってしまいましたが、
皆さん、仲良くしてあげてくださいね」

テキパキと話を進める真耶だが、その表情は何かを悟ってしまっ
た人の顔である。これから起こるだろう色々な面倒事を全て諦めて

受け入れているようだ。千冬の表情は読み取れないが、おそらくこちらでも面倒だとも思っているのだろう。

「（確かに自分で決める、とは言ったが・・・）」

あまりの展開に葵は開いた口が塞がらない。

この数日前。シャルロットは、マティウスに自分はフランスに戻らない事を伝えていた。

真実を明かされて数日間、ずっとシャルロットは考えていたが、やはりどうしても自分が父親と暮らすイメージが沸かなかった。数日経っても戸惑ったままだったからだ。こんな状態で一緒に暮らしたとしても、お互いに悪い影響を与え合うかもしれない。シャルロットはそう考え、もう少し自分が落ち着くまで一緒に暮らすのは待つてほしいとマティウスに頼んだ。

マティウスはシャルロットの頼みを聞いた。実のところマティウスもこんなに早く娘と和解するとは想像していなかったため戸惑いを抱えたままだったからだ。すぐにシャルロットと暮らしたいという思いと同じくらい、こんなすぐに一緒に暮らしてシャルロットに負担を掛けないだろうか？ という不安をマティウスは持っていた。

変なところで妙に似ている親子だ。

そして、互いに互いの胸の内を打ち明けた結果が、現在に至る。つまり、もうしばらく、或いは卒業までシャルロットはIS学園に在学する。今度は性別を正して。

この事実を葵が知るのは、SHRの直後、マティウスに確認の電話を入れてからのこととなる。

今現在は、何が起っているのか分からずに、葵は混乱していた。

「急にこんな事になって驚いた？」

教室内の空気が固まったままな中、シャルロットが葵に近づく。

「そりゃあ、ね」

葵は素直に肯定する。

「ごめんね。でも、これが僕の決めた事だから」

「・・・そうか」

自分で決めると言った手前、シャルロットのそう言われては、葵としては何も言えない。

「今日からは女の子としてだけど、これからもよろしくね、“葵”」

シャルロットが学園に残るもう1つの理由はこれである。彼女は、学園内の嫌われ者、少し内向的でぶっきらぼうだが、優しさを感じさせる葵と友人となりたかった。

自分で決めると言われた。だから、少し強引かもしれないが、この場でシャルロットは葵に手を差し出す。

「・・・」

葵は差し出されたシャルロットの手を見つめる。

状況としては、クラス代表決定戦後のセシリアとのやり取りに似ている。ただし、その時と違い人がたくさんいる。

あの時と同じく、嫌だときっぱり言いたい葵だが、この場でそんな事を言えば、今日まで女の子と内緒に同じ部屋で過ごしていた変態野郎という汚名と、最悪の場合はそれを理由に物理的な制裁がクラスメイトから下されるかもしれない。

今までも精神的な制裁を下され、それに耐えてきた葵だが、さすがに物理的なものも加わると耐えることは難しい。

そういつわけで、葵としてはどちらを選んでも悪い選択だが、マシな方を選ぶしか道がなかった。

「よろしく、デュノア」

「シャルロット」

「……。よろしく、シャルロット」

拒否する身体を制して、葵はシャルロットの手を取る。

シャルロットは、葵に強引に名前を呼ばせたことに若干の後ろめたさを覚えたものの、その笑顔は、誰もを魅了するほど輝いていた。

第24話 男装麗人の行き着く先へ（後書き）

これにてDream Soldierオリジナルシャルロット編
完結です。

シャルロット転入話が14話だったため、実質10話もこの話を
書いていたことになりますね。長かった。

え？ フラグは立たなかったのかって？ 立ちましたよ、友情フ
ラグが。

期待していた読者様、申し訳ございません。当初プロットより、
葵とシャルロットが恋愛関係になるという話は考えていませんでし
た。少なくとも、この話では。

それでも、Dream Soldierを書き始める前のプロッ
トと、今日まで書いた話ではかなり差が出ているくらいです。

その違いは、？葵とシャルロットは同じ部屋にならない予定だっ
た、？R部隊と楯無の出番はなし、襲撃事件は葵とカティアの一騎
打ちだけ、？そもそも友情フラグすらなかった、シャルロットは原
作通り一夏とイチヤイチャさせ、その裏で葵が活躍するだけの短編
それがここまで変化したのですから、予定なんてあつてないよう
なものだと実感しました。

それにしても、シャルロット編の反省点というか、今後の展開に
おける唯一の悩みは、原作や数ある二次創作でも屈指の人気を誇る
彼女が、オリ主はおるか一夏ともフラグを立てていない……。マ
ジでヤバイ。

さて、では皆様お楽しみいただけたでしょうか？

もし、この後書きを読んで感想を書いてくださる読者様がいらっ
しゃいましたら、24話の感想ではなく、シャルロット編全部を読
んでの感想をくれると嬉しいです。

もちろん、『感想の要求どころか、内容まで要求すんじゃない！
この腐れ作者が！』というお叱りでもOKです。それでも、自分
のオリジナル話がどれくらいの出来だったのか知りたいので。どう
ぞ、よろしくお願いします。

というわけで、次から原作へ戻ってきます。といっても、また変
な展開になりそうですが・・・。

第25話 傍観と不理解（前書き）

注意書きです。

今回の話は、原作2巻を持っていないと分からないところがあるかもしれません。

第25話 傍観と不理解

シャルロットの性別暴露から数十分後。

葵と一夏は、学年別トーナメントの準備のため男子更衣室に来ている。

あの後、クラスは大変だった。

驚きの沈黙から一転。クラスの皆が一斉に動き出し、女性だと分かったシャルロットに葵に変な事されなかったあの、好き勝手な事を言い、それをシャルロットがやんわりと否定するということを6、7度ほど繰り返した後、千冬に1人残らず出席簿で黙らされるという大騒ぎ。

しかしそれも、葵は最初からシャルロットの性別やその事情を知っており、そのため同室になったという、葵も知らない裏設定が千冬たちにより勝手に作られており、それを発表することにより沈静化した。

さすがに今回は、以前から問題になっていた葵差別に学園側から手を打ってきたようだ。正確にいうのなら、前回のクラス対抗戦後に流れた誤った噂の時も学園側は手を打ったのだが、今回は学園側が葵に引け目を感じているため力の入れようが違う。

さらに今回決定的だったのが、葵とシャルロットが互いを名前で

呼び合い握手をしたところをクラスの全員が目撃したことだ。シャルロットからそれを行ったため、いくらなんでも変な事をした相手に親しげに握手はしないだろうし、おそらく何もなかったんじゃないの？ という結論に学園内は至ることとなる。

まあ、そんな些細な未来はともかく。

「まさか、シャルルが女の子だったなんてな」

一夏がさも意外だったといった口調で葵に話しかける。当たり前だが、シャルロットが女子更衣室に行ってしまったため、2人きりだ。

「意外だったか？」

「ああ。全然気付かなかった」

「・・・」

初めて見た時からシャルロットに違和感を覚えていた葵としては、自分の洞察力が鋭かったのか、一夏が鈍感なだけなのか、判断に迷うところである。ほぼ間違いなく後者であるが。

「女子だと、ペアとしてやりづらくなっただんじゃないか？」

半分以上皮肉を込めて葵は言う。

トーナメントにおける一夏のペアはシャルロットである。今まで
は男子として接してきた相手がいきなり女子だと分かつては色々
困る事も多いだろう。

「うん、そうか？ 女の子でもシャルルはシャルルだろう？」

一夏が当然のようにそう断言する。相手の容姿や表側の部分に捉
われず、内面は変わらないから問題ないと言う彼は良い性格をして
いると葵は思ったが、同時にこの言いようでは、男でも女でも対応
を変えないと言っているのと同じだ。

「（まあ、どちらの意味でもいいか）」

一瞬指摘しようかと思った葵だったが、別に一夏がどちらの意味
で言っているように自分には関係ない。

「そうか」そう言って葵は一夏との会話を切ると、更衣室に備え
られたモニターを見る。モニターに映し出されているのは観客席の
様子。しかし、見たいのは観客席ではない。

「（結局、俺のペアは誰になるんだ？）」

R部隊の襲撃やその後拘束によってトーナメントのペア申請期間を逃してしまっていたため、葵のペアは規定に従い同じく決まらなかった者同士との抽選となる。例年は前日に発表されるのだが、急遽タッグマッチとなったことによるシステムの不具合により当日の試合直前まで持ち越しとなっていた。

「（まあ、誰とでも変わらないか・・・）」

葵は小さく溜息をついた。

今回の学年別トーナメント。葵は勝ち抜けるなどと全く考えていなかった。理由は簡単。それは葵が学園内で嫌悪されている立場にあるからだ。いい腕の生徒とペアを組むことができたとしても、嫌悪している生徒は葵と連携をとってはくれないだろうし、仮に表面的に協調しているようにしていても、必ずどこかで歪が出る。

だったら、ペアの事を気にせずに1人で戦えばいいとも考えていたのだが、内外ともに観客の多いトーナメントでそんな良くも悪くも目立つ事を葵はしたくない。別に他の女子のように一夏と付き合うために優勝を目指しているわけでもないため、今回は適度に戦えばそれでいいだろう、と考えていた。

「お、対戦表が決まったみたいだな」

モニターが対戦表へと切り替わり、一夏が声を出した。

あまりやる気のない葵だったが、自分のペア、そして何試合目から戦うのかを確認するためモニターに目を通す。

「えっ・・・？」

一夏から驚いた声が聞こえ、葵は彼の視線の先を追う。

視線の先に書いてあったのは、1学年最初の試合が一夏とシャルロットのペアとラウラと箒のペアというもの。

「こいつは・・・なんていうか・・・」

シャルロットから一夏とラウラの因縁を聞いていた葵も、あまりの偶然に驚く。しかし、結局は他人事だ。驚きも長続きせず、自分の名前を探すため、再びトーナメント表に視線を配る。

Aブロック、Bブロック、Cブロック・・・。

「（ないな・・・）」

見逃したのかと思い、最初から見直そうかと葵が思った瞬間、
『立花葵』という文字を捉えた。場所は、Dブロックの一番最後。 □

「（ん？　なんだ、これは？）」

葵は首を傾げる。

トーナメント表を見る限り、葵の対戦数は他のペアより1試合少ない。これは、学生人数の都合上、バランスよくトーナメントを配置できなかったため試合数にバラつきがあるためであろう。そこに配置されているのが、IS実施授業で高成績を収めている葵なのは納得できる。

問題はそこではなく、葵の名前の横にあるべきものがない。

「（俺はペアなしか？）」

葵の名前の横には本来あるべきペアの名前が記載されていなかった。代わりにあるのは、？マークが3つ。

さすがにペアなしはないであろうと、葵は隅々までトーナメント表を眺める。すると、端のほうに書いてある注意事項、その最後にある文章が目にとまった。

——立花葵のペアは、1回戦敗退者から抽選で選ぶこととする。

葵は知らなかったが、どうやら1学年の総人数は奇数だったよう

だ。そんな状態でツーマンセル形式のトーナメントを組んだ学園上層部の短慮さに、葵は溜息をついた。

「（・・・とりあえず、1回戦が終わるまではペアが決まらないか）」

期待していたわけではないが、肩透かしを食らったように脱力した葵は、自分とは逆にやる気に満ちている一夏をどこか遠い目で見つめた。

「失礼します」

更衣室を後にした葵が向かったのは、教員だけが入ることを許されている観察室。

「来たか、立花」

「いらっしゃい、立花君」

千冬と真耶に迎えられた葵だが、入室するのに躊躇する。観察室と名づけられている部屋だが、学生の葵からすれば職員室の雰囲気に近い。学生の性が、職員室に入るのになぜか二の足を踏む葵だった。

「どうした？ 早く入って来い」

そんな葵の心情を知ってか、知らずか、千冬が催促する。

本来なら、葵のいるべき場所はピットか観客席になるのだが、前回のクラス対抗戦で1人きりでいたために、学園に侵入してきた奇形型I Sに殺されかけた前科がある。かと言って観客席に行くのは女性が苦手な葵にとっても、彼を嫌っている学生たちにとっても良いとはいえない。そういう理由で葵は、半ば強制的に千冬からこの場所へ来るように伝達を受けていた。

「空いている椅子に座っていいですからね」

「はい」

真耶の言葉に従い、葵は近くにあった椅子の1つを借りる。

観察室のモニターには、これから始まるAブロック第一試合、一夏とシャルロットのペア対ラウラと箒のペアが始まるうとしていた。

画面上でも、一夏のやる気に満ちた表情とラウラの悪意に染まった笑みが確認できる。

「偶然とはいえ、一試合目からすごい組み合わせになりましたね」

「ああ」

弟の試合にも関わらず、いつも通り素っ気無く答える千冬に真耶は苦笑した。

「立花君は、どちらが勝つと思いますか？」

「えっと・・・そうですね」

急に真耶から話を振られ、葵はモニターを見ながら考える。

「俺は、たぶん織斑とデユノアが勝つと思います」

もし、この場にシャルロットがいれば、名前で呼んでくれない葵を怒っただろうが、本人がいないことをいいことに、葵は彼女を苗字で呼ぶ。教室の出来事があったとはいえ、未だに葵は女子を名前で呼ぶ事に慣れていない。

「ほう、なぜだ？　ボーデヴィツヒの实力は、直接戦ったおまえはよくわかってるだろう」

素っ気無かった千冬が葵の答えに興味を引かれ、会話に参加してくる。

「確かに、ボーデヴィツヒさんは強いです。ですが、彼女もペアの篠ノ之さんも協調性が欠けすぎています。あれでは、タッグマッチで勝てません」

たぶんですけどね。そう付けて葵は説明した。クラス全員に言うことだが、葵がよく知っていると言える相手はいない。ギリギリでシャルロットが入るか入らないかだ。

「とは言っても、授業で見る限りデュノアの实力はともかく、織斑はみじゅ・・・いえ、未知数ですからね。正直どちらが勝っても驚きはしません」

未熟と言いつつになったのを、話している人物がその姉であったと思い出し、葵はとっさに言葉を変えた。

「ふつ、生意気な。だが、正しい」

返事に微妙なトゲがあったが、とりえず千冬が怒っていないことを確認し、葵は一息をついた。

補足しておくが、葵が若干一夏を見下すような言葉遣いをしたのを千冬が咎めなかったのは、千冬が葵の力を認めているからである。他の学生であれば、専用機持ちのメンバーでもその逆鱗に触れていただろう。

「お二人とも、試合が始まりますよ」

真耶が言うのと同時に、モニターに試合開始のカウントダウンが表示される。

五、四、三、二、一、——開始。

開始直後、一夏が瞬間加速を伴った最高速度でラウラに突っ込み、あっという間に彼女のA I Cに捕らえられてしまった。

「・・・何かの作戦ですか？」

考えなしにしか見えなかったが、葵が思いつかない奇策でもあるのかもしれない。そう思い、葵は千冬に聞く。

「いや、ただ単に先手を取れば有利になる、としか考えていないのだろう。馬鹿者め」

千冬の辛辣な言葉は、とても身内の事を話しているとは思えない。あまりにキツパリ言うものだから、弁護するつもりがなかった葵が、つい一夏の弁護をしようかと思っってしまったほどだ。もつとも、あまりの一夏の短絡さに弁護の言葉が見つからなかったが。

モニター上では、ラウラにレールカノンを向けられた一夏を、シャルロットが援護射撃し、その射線を外しているところだった。

「（さすがに上手いな）」

授業中でしかシャルロットの実力を見てこなかった葵だが、素直に賞賛した。他の専用機持ちほど機体に派手さがなかったため、パツと見では分かりづらいが、その実力の高さが窺える。

ラウラを追撃するシャルロットに箒が割り込み、打鉄の実弾シールドを張りながら、彼女に斬りかかった。

「（こいつは・・・）」

箒の動きを見て、葵は驚く。機体性能以上に、踏み込み速度が早い。それは、彼女の錬度によるものだ。しかし、距離を取られ射撃戦に移ると、とたんに動きが悪くなった。

どうにもちぐはぐさが目立つ動きだ。以前、葵と一緒に訓練した

時は分からなかったが、実際戦っているのを見ると、得意分野と不得意分野の差が激しく、未だISに慣れていないのがよく分かる。

「（まあ、専用機持ちじゃないしな）」

葵は筈の實力にそう結論付けた。むしろ、専用機持ちでもないのにここまで動けるのは賞賛に値するだろう。自分の事は棚に上げ、葵はそう思った。

「（それにしても、こっちは相変わらずメチャクチャだ）」

そう葵が称するのはラウラだ。

葵は先日戦ったばかりの間柄のためよく分かるが、やはりその實力は高い。もともと、葵がメチャクチャと比喻したのは、實力の高さよりもその戦い方である。ペアである筈を邪魔だと言わんばかりにワイヤーブレードで叩きつける姿は協調性がない以前の問題として、何かが間違っているように思えた。

叩きつけられた筈が、ラウラに対して何か叫んでいる。何を言っているかは葵からは分からないが、どう考えても叩きつけられた事へ文句だろう。その筈にシャルロットが間合いを詰めて攻勢をかける。どうやら一夏たちは先に筈を仕留める算段らしい。先的一幕を見ても、ラウラが筈を助ける可能性はまずなく、上手くいけば、一夏たちは二対一でラウラを追い込む事ができるだろう。

それにしても、シャルロットの戦い方は絶妙という一言に尽きる。箒に対して一定の距離とリズムを保ち、射撃と格闘をお得意の『高速切替』^{ソット・スイッチ}で使いまわす。これでは相手は攻めることも守ることも容易に選択できず、相当戦いにくいに違いない。

なお、この戦法は『砂漠の水』^{ミラーージュ・デ・デザート}と呼ばれる。葵の『止まらぬ激流』^{ナイアガラ}と戦法の分類は同じだが、方向性は全くの逆だ。相手に守らせる隙を与えず目にも止まらない連続攻撃を叩きつける『止まらぬ激流』^{ナイアガラ}を剛術と例えるならば、相手のリズムを崩して守らせない『砂漠の水』^{ミラーージュ・デ・デザート}は柔術といえる。

葵がそうこう考えている内に、シャルロットの射撃を受けていた箒が動きを止めた。シールドエネルギーがゼロになり、機体が停止したためだ。

「篠ノ之さん、あっさり負けてしまいましたね」

「専用機がなければあんなものだろう。それに射撃特性のデュノアとでは相性も悪い」

真耶と千冬の会話を葵は内心で頷く。せめて相手が同じ量産機だったのなら、箒はもう少し活躍できただろう。

モニターでは、二対一となりながらも互角に戦うラウラが映っていた。

「強いですね、ボーデヴィツヒさん」

「ふん……。変わらないな。強さを攻撃力と同一だと思っている。だから――」

千冬の視線がチラリと葵へ向けられる。

「――だから、立花に勝てなかった」

葵の前ということもあり、千冬は声には出さなかった。

本人が自覚しているかは分からないが、葵の強さはDSで培われた技量だけではないと千冬は考えている。ただか長時間ゲームをやっただけで軍人数人がかりと互角以上に戦えるほど実戦は甘くない。しかし、葵はそれをやったのけた。

「（おそらく、揺るがぬ何かを持っているのだろう）」

何かがどんなものかまでは千冬も分からない。もしかしたら、大多数の人間からすれば些細な事なのかもしれない。だが、それを貫くことができる強さが葵の本当の強さではないか、と千冬は推測する。あくまで推測であり、本当のところは、はっきりしないが。

ラウラも数年前から揺るがない千冬への信仰心を持っている。しかし、何かを盲目的に信じていることと、揺るがぬ信念を持つというのは、似ているようで根本的に全くの別物だ。

「（それが分からなければ一夏にも勝てないぞ、ボーデヴィット）」

「あの……。何でしょう？」

千冬の視線に気付いた葵が、恐る恐る声をかける。

「いや、なんでもない」

そう言つて、千冬は視線をモニターに戻す。葵はそんな千冬の手動を訝しむが、その理由を特に知りたいたとも思わなかったため、倣つてモニター見ることにした。

事態が動いたのは、それから10分も経たない内だった。

筈を欠いた当初は互角に戦っていたラウラだったが、AICの致命的な弱点——拘束する対象に意識を集中させなければ、効力が維持できない——が一夏たちに発覚してからには精彩をなくし、今

はシャルロットの『グレー・スケール灰色の鱗殻』の餌食となっている。

目新しさのないパイルバンカーという武装だが、それゆえに高い確実性を持つそれが、ラウラのシールドエネルギーを削ぐ。

それだけで終わるのならば、まだラウラにも逆転の目処があったかもしれない。だが、『グレー・スケール灰色の鱗殻』はリボルバー機構により連射が可能な代物だ。即座に2撃目、3撃目と決まってゆく。

「（決まっ たな）」

葵は確信した。これで、この試合は終わるだろうと。

あんな強烈な衝撃をその身に受けている状態では、ラウラに反撃する余裕はない。また、仮に『グレー・スケール灰色の鱗殻』の炸薬が今切れようと、シャルロットが『ラビット・スイッチ高速切替』で補填すれば、タイムラグはほとんど発生しないだろう。

試合に見切りをつけて、葵がモニターから目を離れたその時。異変は起こった。

『ああああっ！！！！！！！』

オープン・チャンネルいきなり開放回線が開き、観察室にラウラの絶叫が響き渡る。

複数の試合を同時に観察する都合、保存記録上はともかく、観察

室では映像のみが表示されていた。

そのため、静かだった部屋に響いたラウラの絶叫は、本来の音量以上に、在室していたメンバーの耳に強く反響した。

「なんだ？」

「ボーデヴィツヒさんのISが・・・」

葵が見ると、先ほどまでラウラがいた場所に別の何かがあった。泥状の物体がデフォルメされた少女の姿を形取っている。打鉄のアーマーを最小限に付けたような姿をしたそれは、不気味な赤い光を瞳のように顔面の部分で輝かせ、それでシャルロットを、次いで一夏を見つめていた。

「フルスキン全身装甲のIS？」

葵がその姿を見て呟く。

それで思い出されるのは、先月のクラス対抗戦でアリーナの方へ突っ込んでいった人型のIS。だが、モニターに映るそれとは似ても似つかない。

また、全体的にあやふやな形状にも関わらず、その手に持った刀だけは、隅々まで技巧が凝られた一品のように輝いていた。その形状を葵はどこかで見たことがある。

「雪片か」

「あ、確かに」

千冬がぼそりと呟いた言葉を聞いて、葵も思い出す。泥状のISが持つ刀は、白式の雪片式型と酷似している。

だが、そんなことよりも葵は千冬に聞きたいことがあった。

「織斑先生。あれは、シュヴァルツェア・レーゲンの能力なんですか？」

「違うな。ISは基本変形しない。したとしても『形態移行』フォーム・シフトがせいぜいだ。だが、あれはもしや・・・」

最後の方は、千冬が何を言っているのか、葵は聞き取れない。しかし、あれが正常な状態ではないということは葵にも理解できた。

正常の反対は異常。

つまり、今現在アリーナ内は異常事態に見舞われているということとだ。葵のそんな考えを肯定するかのように、泥状のISは一夏の懷に飛び込み、必殺の居合い斬りを放つ。

『ぐつつ！』

泥状のISによって開放回線オープン・チャンネルが開いたことにより、一夏の苦悶が観察室にも伝わる。

居合い斬りを何とか雪片式型で受け止めた一夏だったが、泥状のISは振り切った刀をそのまま上段に構え、縦一直線に鋭く振り下ろす。一夏は避けようと身体を動かしたが間に合わず、一閃を受けた白式が光る粒子となって消えていった。

太刀筋を見た千冬が僅かに右の眉を無意識に動かしたが、それに気付いた者は誰もいない。

「・・・山田先生、教師部隊をアリーナへ。状況の推移に注視しつつ、レベルDの警戒態勢を発令する」

「りよ、了解」

千冬の指示に従い、真耶が即座に行動する。いつものおっとりした姿からすれば信じられないほどの確で素早い動作だ。

「立花」

「は、はい」

千冬に呼ばれ、返事をしながら葵は嫌な予感に陥っていた。

フランス軍襲撃事件もクラス対抗戦も、なんだかんだで争いごとに巻き込まれ続けてきた葵である。二度あることは三度あるという諺もあるし、その上今回事件に巻き込まれているのは目の前の人物の弟だ。助けに行けとか普通に言いそうである。

しかし、葵の予想は裏切られた。

「おまえなら大丈夫だとは思うが、助けに行こうなどとは考えるなよ。先月の無人機とは大分違うが、同一犯の可能性も捨てきれん。おまえも狙われている可能性がある」

「は、はあ・・・」

葵は拍子抜けし、千冬に気の抜けた返事を返す。

当然といえば当然なのだが、学生な上に経歴を踏まえて新兵にも劣る葵を実戦に投入しないのは当たり前前の判断だ。ただ、いつも学園に助けてもらえない葵は、そんな当たり前前を失念していた。

葵が動く様子のないことを確認すると、千冬は意識をモニターの映るアリーナへ戻す。

『それがどうした!!』

「はあ!？」

アリーナでは生身の一夏が怒りの表情を浮かべ、泥状のISに突撃している最中だった。その無防備な姿に葵は驚きの声を上げる。

一夏が相対している相手は本当にISかどうかなのかすら怪しい物体だが、楽観的に考えても生身で、しかも無手でどうにかなる相手ではないだろう。そんな相手に殴りかかるなど、一夏の行動は葵にとって正気の沙汰とは思えなかった。

無茶な行動をする一夏を箒が後ろから羽交い絞めて止めさせている。一夏はそれを振り払おうとして、逆に箒に殴り飛ばされた。

「な、なにやっているんだ？」

いつも内心で呟く葵から言葉が漏れる。

『一体何だと言うのだ！ 分かるように説明しろ！』

箒は一夏に泥状のISに殴りかかった原因を聞く。

『ああ。あれは、千冬姉のデータだ。千冬姉だけのものなんだよ。それを・・・くそっ！』

どうやら一夏の目の前にいる泥状のISは、千冬のデータを基に作られているらしい。

『お前は・・・いつも千冬さん千冬さんだな』

『それだけじゃねえよ。あんな、わけわかんねえ力に振り回されてるラウラも気にいらねえ。ISとラウラ、どっちも一発ぶっ叩いてやらねえと気がすまねえ』

そう怒気を含んで話す一夏に、葵は声を大にして言いたい。

おまえの方がわけがわからない、と。

モンド・グロツン

第1回IS世界大会総合優勝者である千冬のデータは世界各国が持っているだろうし、彼女に憧れ、彼女の真似事をする人物はISの総数よりも多いと簡単に予想できる。

それに、他のスポーツなどでもいえることだが、それらを上手くなることのコツの1つは有名選手の動きを真似ることだ。

それらの人間に対しても、一夏は姉のデータは姉だけのものだと怒るつもりだろうか？

また、わけのわからない力に振り回されているラウラを怒っている場合ではないだろう、と葵は思った。明確なことはいえないが、あの泥状のISにラウラの意識が介入している様子は窺えない。おそらくは暴走。ならば、よくて救出。悪くて鎮圧するのが妥当だ。叩くのは何か違うだろう。

一夏たちの上を、千冬が指示した教師IS部隊が飛んでゆく。箒はそれを一夏に対して指差してみせた。

『見る。お前がやらなくても状況は收拾されるだろう。だから――』

『だから、無理に危ない場所へ飛び込む必要は無い、か？』
『そうだ』

箒の言に葵も同意する。もし、葵が今一夏の立ち位置にいるのなら、間違いなく教師部隊に任せて自分は退く。自身のISが使えるいならば、尚更だ。

そして、何より――

『違っぜ箒。全然違っ』

葵の思考を一夏の言葉が遮る。

『俺が『やらなきゃいけない』んじゃないんだよ。これは俺が『やりたいからやる』んだ。他の誰かがどうだとか、知るか。大体、ここで引いちまったらそれはもう俺じゃねえよ。織斑一夏じゃない』

一夏がそう断言した。

「な・・・に？」

一夏の言葉を聞いた葵の衝撃は凄まじかった。彼が生身で泥状のISに殴りかかった時も驚いたが、その比ではないほどに。

葵は一夏が言っていることを理解できなかった。

姉のデータを使われて怒ることはまだ分かる。だが、一夏は『やりたいからやる』と言った。泥状のISが暴走していることから、すでにアリーナの戦いは試合ではなく実戦である。それを『やりたい』と言った一夏を葵は理解できない。

葵もDSを馬鹿にされ、怒ってラウラにIS戦をふっかけた事はある。しかし、あれは『試合』。あくまでも命と命のやりとりをするものではない。ラウラがどう思っていたのかは知らないが、少なくとも葵の方はそのつもりで戦った。

また、葵も2度の実戦経験があるが、あれは『やらなければならぬ』状況であつたからで、『やりたい』と思つたことではない。自ら実戦で戦いたいという一夏とは正反対の考えだつた。

葵は観察室を出る。

無論、アリーナへ救援に行こうなどと思ったからではない。今の感情のまま、モニターを見続けることに疲れを感じたためだ。

部屋を出た葵は、移動せず壁に背を預ける。疲れを出すように、大きく息を吐く。

今まで一夏を避けてきた葵だが、別に葵は一夏を嫌ってはいなかった。葵が一夏を避けてきた理由は、この創作物の世界の主人公であるうと思われる一夏に関わると余計な騒動に巻き込まれそうというものだ。

つまり、一夏の主人公という立場を嫌ったのであり、織斑一夏という一個人に対しては、考えなしの行動に悪態をつくことはあっても、決して嫌ってはいない。

ある意味で、葵が一夏個人をきちんと意識したのは、これが初めてだった。

しばらくして葵が観察室に戻ると、アリーナでは全てが終わっており、気を失っているラウラを一夏が抱きとめているところだ。

葵が真耶に聞くと、一夏がシャルロットからISのエネルギーをもらい、それを使って零落白夜を発動。泥状のISを切り裂いてラウラを助け出したらしい。

葵は一夏の表情を見た。一夏は、戦いをやり遂げたことへの充実感が、あるいは別の何かかもしれないが、笑顔を見せている。

一夏に対して否定的な考えをしていた葵だったが、彼の顔を見ても嫌悪感を抱かなかった。

人間、相手を嫌うにしても、まずは相手がある程度理解しないと嫌うことはできない。

葵は一夏を理解できなかった。唯一分かるのは、自分とは大分考えの違う人間であるということだけだ。

第25話 傍観と不理解（後書き）

今までで一番遅い更新です。

本当にすみません・・・。

第26話 タッグマッチ最終戦

ラウラのIS暴走から2日後。

事故処理により、昨日はアリーナは使えず、1日空いた今日から再びトーナメントスタートである。いや、事故によりトーナメントが中止となり、各個人データ指標のため1回戦しか戦わないことが決定した今、これから行われるのは全てただの御膳試合だ。

それが発表された夕食時の食堂は、トーナメント優勝で一夏との交際権利を狙っていた女子たちの阿鼻叫喚が集約した場と化した。

それはともかく。

今回の暴走事故では蚊帳の外だった葵は、当事者だった一夏やシヤルロットと違い事情聴取されるなどということは当然なく、観察室で見たことに対する箝口令を千冬から言い渡されるだけだった。

だから、後は他の生徒と同じく1試合だけを行えば、今回のトーナメントは終わる。そう思っていた朝の矢先。千冬に呼ばれたことから、葵の日常は微妙に逸れることとなった。

千冬に呼ばれ、学園の応対室に入った葵が見たのは、なんともシユールなものだった。

黒髪の男性が土下座をしている。葵に向かって。後頭部と背中しか見えないが、日本人ではないだろう。

外国人が、自分に向かって綺麗に土下座している。それをシユール以外の何と表現すればいいのか、葵には分からなかった。

「・・・説明をお願いします」

部屋にいるもう1人。微妙に呆れた表情をしている千冬に葵は声をかける。

「この方は、今回フランス政府を代表してトーナメントの視察に来られたIS研究者だ」

「フランスの？ 先日の件ですか？」

フランス政府で葵が思い浮かぶのは、先日のR部隊襲撃だ。しかし、あの一件はフィリドールの没落で一応の決着をみたはずである。今更、フランス政府の人間が葵に用があるとは思えない。

葵は内心で首を傾げながら、頭を上げてもらい、話を聞くことにした。

「い、いえ、今回は君に——いえ、あなたにお願いがあります」

「・・・お願い？」

へりくだった態度で話し始めるフランス政府の人間を、葵は訝しんだ目で見つめる。

先日の襲撃事件はカティアが策謀した結果であり、フランス政府もその煽りを受けた被害者である、と葵も理性では分かっている。だが、感情は違う。自分を殺しかけた側の人間に好意的な感情を抱けるはずもなかった。

「あなたが戦う試合を勝っていたきたいのです。それも圧倒的に」
「・・・分かりませんね。なんでそんなことを、しかもなぜ今になつて言うんです？」

自分でも口調が厳しめになっていると自覚しつつも、葵はそれを直そうとしない。

「一昨日の事故で、今回のトーナメントはなしになりましたよね？」

それだと困るんですよ我が国は」

「困る？」

「ええつと・・・大変言い難いんですが、先日的一件で我が国の名声が地に落ちています。何せIS8機の侵攻をたつた2人の学生に止められたんですから。ですが、それは我らが弱かったのではなく、あなたが強すぎるだけだと世界に証明できれば・・・」

説明されれば葵にも目の前の男——否、フランス政府の思惑を理解できた。

つまり、フランス政府は各国が注目している今回のトーナメントで葵が勝ち抜けば、世界の認識は『フランスが弱い』のではなく、『葵が強い』により固まることを強く望んでいたのだろう。

もちろんそれでフランスの名声が戻るわけではない。何せ、名声が落ちた最大の要因は、葵を倒せなかったことではなく、IS学園に侵攻したことそのものだからだ。

だが、『ただの学生に負けた』よりも『学年で敵なしの天才学生に負けた』とかいう方が周りの印象が違うのもまた事実だろう。

「1試合のみとなってしまうては、強さを証明するのは難しい。ですが、試合内容が圧倒的であれば・・・」

「なんですか、それは」

男の話を遮った葵は、誰の目にも不機嫌だった。組んだ両腕、その右手人差し指がイラつきを抑えるためにトントンと叩く。

「ふざけているのなら悪いですが、本気で言っているのなら最悪ですよ」

「あなたには悪いですが、本気です。それに、これは我が国だけの意思ではありません」

「え・・・」

「本当だ、立花」

黙って成り行きを見つめていた千冬が2人の会話に入ってくる。

「他の国——特に、アメリカ政府がこの話を推している。各国政府の希望ともなれば、学園側も無下にはできない」

「またですか・・・」

フランス軍襲撃事件の事後処理と同じく、またもや他国の思惑に抗えなかった学園上層部に、葵は怒りを通り越して呆れるしかなかった。入室した時の表情から、千冬も同じ思いらしい。

「でも、なんとわれようと嫌ですよ。なんで殺されかけた俺が、あなた方のために戦わないといけないんですか」

「そうですか……。分かりました」

土下座までしたのに、思いのほかあっさり引き下がった男に葵は拍子抜けする。しかし、いいと言うなら文句はない。安堵と呆れが混じった息を吐き、葵は部屋を出て行こうとして男に背を向けた。

「これで我がフランスの名声回復は望めないでしょう。外交でイニシアチブを取れない国ではどのような弊害が起こるのか……。政治と経済は乱れ、その結果何人の人間が不幸に――」

独白のように呟く男に、再び葵の血が頭に上る。振り向き、親の仇のような視線を送った。

「その言い様な卑怯です……。！」

戦わなければ多くの人間が不幸になる。

そう言われては、葵は嫌々ながらも従うしか選択肢が出ない。

「私だって、言いたくて言っているわけではありません」

悲痛な表情を浮かべる男を見て、葵の頭が冷えてくる。

男の言葉は男の物ではなく、彼にそう言わせているのは、ここにい
ない海の向こうにいるお偉い誰かだろう。お偉方という人種は得
てしてそういうものだ。

とにかく、何を言おうとも男に決定権がない以上、言うだけ無駄
である。

それに、よく考えれば葵が戦わなかっただけで国家の基盤が崩れ
るはずない。多少大げさに話して、葵が騙されれば儲けものくらい
にしか考えていないだろう。それでも、断れば目の前の男は罰せら
れる。それではあまりに不憫だ、と葵は思った。

「……いいでしょう。戦いますよ」

様々な思考の末、葵は承諾する。

元から試合そのものはやる予定であったし、実戦をやれと言われ
るよりはマシだろう。そう自分に言い訳しなければやってられない
葵であった。

「……ご協力感謝します」

何となくであるが、今の言葉だけは男が自ら選んだ真摯なセリフ

のように葵は感じた。

「はぁ・・・」

「すまん、立花」

部屋を出て行った男の背が視界から消えると同時に、葵は溜息を吐く。そんな葵に千冬が声をかけた。

「別に織斑先生のせいじゃないでしょう。謝るべきは、もっと上の人です」

「そう言わずに受け取ってくれ。前回も今回も、私は何もできなかったのだから」

千冬は珍しく僅かに弱気な態度を見せた。どうやら、自分の無力さに堪えているらしい。

「それよりも、俺の試合についてです。もしかしてですけど、対戦相手が変わっているんじゃないですか？」

気落ちした場の空気を変える意味もあったが、気になることでもあったので葵は強引に話題を進めた。

「その通りだ」

「ああ、やっぱり・・・」

元々の葵の対戦相手は、専用機持ちでもないただの学生だ。いくら圧倒的に勝てと言われても、相手が並ではそれをやる意味があまりない。ならば、対戦相手を変えるくらいのことはするだろう。

入学以降、様々な事件に巻き込まれる葵は、嫌なことにそんな予想がつくほど非常な事態に慣れつつあった。

「おまえの対戦相手は、最も強さが目立つ面子になる予定だ。・・・予定と言っても、もうすでに決まっているようなものだがな」

「織斑とデユノアですか？」

「そうだ」

実際に強いか弱いかは戦ってみないと分からない点が多いが、強さが目立つ相手は専用機持ち以外にありえない。そして、今回のトーナメントでペアの両方が専用機持ちなのは一夏とシャルロットだけである。

「あの2人か・・・」

正直やり辛いと葵は思う。なぜなら、一夏に対しては一日の件以降、自分にとってどういう立ち位置にいる存在なのか、分からなくなっていたからだ。

「（まあ、話すわけでもないから問題ないか・・・）」

葵はそう結論付けて、自分を納得させた。

「ところで、おまえのペアだが――」

「知っています。敗者からの抽選ですよね？」

「いや、選べ」

「へ？」

葵からすつとんきような声が出た。

理解が追いついてこない葵の疑問に答えるように、千冬は話を続ける。

「あの男が言っていただろう、圧倒的に勝て、と。ならば、おまえも最良と思う相手を選べ。おまえの試合は一番最後だ。誰を選んで問題はない」

確かに1回戦しかない試合の一番最後ならば、誰を選んでもその相手に迷惑がかかることはない。しかし、苦手な女子ばかりのIS学園で、葵が良いと思う相手など――、

「（いや、いたな。1人だけ）」

ペアを組むなら、学園において彼女以上の存在はいないという人物に葵は心当たりがある。

「心当たりはあるようだな」

「ええ・・・」

そう答えるものの、葵は気乗りしない。

抽選ならば勝手に相手が決まってくれるのだが、選ぶということは自らその相手に声をかけなければならないからだ。

それを考えると、頭痛と溜息が同時に出る葵であった。

昼休み。

「鈴、お疲れー」

「お疲れ、ティナ」

午前中に試合を終えた鈴音は、トーナメントのペアであり、ルームメイトでもあるティナ・ハミルトンと共に昼食を取っていた。

いつもなら、所狭しと生徒たちで溢れかえっている食堂だが、試合の都合上、皆食事を取る時間がまちまちのため、今日はまばらだ。

「楽勝だったね、鈴」

蜂蜜たっぷりの、見ただけで口の中が甘くなりそうなハニートーストを頬張るティナを鈴音はうんざりそうに見つめた。

「アンタは、何もしていないじゃないの！」

「バレた？」

ティナが笑いながら頭をかく。

鈴音たちの対戦相手は4組の2人だった。ISを動かすだけで精一杯の相手など、代表候補生である鈴音にとっては敵ではない。その結果、鈴音だけで試合を決してしまい、彼女を援護する予定だったティナは何もすることがなかった。

「それにしても、物足りないのよね・・・」

「ラーメンの量が？」

「違うわよ！」

素で問いただしてくるティナに鈴音の怒号が飛ぶ。

鈴音が食べているラーメンの量は二倍以上だ。男子でも食の細い奴なら食べるのら難しいほど多い。それでも足りないというのなら、どれだけの大食漢なのか。

「物足りないのは、試合のこと！」

別に戦闘狂の毛があるわけではないが、先ほどの試合は弱い相手をいたぶるようで、鈴音は申し訳なささと物足りなさが合わさった複雑な心境を感じていた。

「・・・そりゃ代表候補生が満足する相手なんて、1年生じゃ数えるくらいしかないでしょ」

「分かってるわよ」

ティナの言う事はもっともだ。

たがが1年、されど1年。鈴音は一般の生徒と比べてIS操縦期間のアドバンテージがある。そんな彼女と同等以上に戦える相手は、他の専用機持ちたちくらいだ。

「納得できないなら、後で織斑君に相手をしてもらったら？ 仲良
いし、彼専用機持ちでしょ」

ティナはそう提案する。

「一夏ね・・・」

提案された鈴音は、微妙な表情を浮かべた。

放課後、一夏の自主練習に付き合い続けている鈴音は、彼の技量が未だに他の専用機持ちたちに及ばないと知っている。そんな相手と戦っても、この物足りなさは取れないだろう。

「（戦うんなら、断然あっち・・・）」

鈴音があつちと称するのは、この学園にいるもう1人の男子――
――葵のことだ。しかし、戦いたいと思って戦えるのならば、鈴音は
とつくの昔に葵に対して2度目のリベンジを果たしている。

「ね、それよりも、午後はどこの試合を・・・あ」

「？」

自分の後ろに見ながら動きを止めるティナを訝しみ、鈴音を後ろ
を振り返った。

「・・・隣、いいか？」

鈴音が向いた先には、非常に居心地が悪そうな表情をした葵がい
た。

「アンタから話しかけてくるなんて珍しいじゃない。まあ、いいわ。
座りなさいよ」

「ちよっ・・・鈴！」

慌てるティナを余所目に、葵は鈴音の隣に腰掛ける。

この時、鈴音は気付かなかったが、隣に座った割りに葵との距離は普通に隣に座られるより遠かった。

「どうかしたの、ティナ？」

「えっと・・・わ、わたし急用を思い出したから！」

ティナはハニートーストを口に放り込むと、食器を持って席から離れていく。去り際に見た彼女の瞳に怯えにも似た嫌悪感が混じっていたのを見て、鈴音は思い出した。

「・・・相変わらず、女子には嫌われているわね」

「自覚はしているよ」

安堵と自虐が半分ずつ混じった溜息を吐くと、葵は持ってきた昼食に手をつける。ちなみに、メニューはミックスフライ定食だ。

「で、何の用よ？」

鈴音は、葵に訪ねながらも彼に倣い自身も昼食を再開させる。隣にいる少年が、何の用もなしに自分に近づいてこないだろう程度には理解していた。

「単刀直入に言うと、次の試合で俺と組んでほしい」

「へえ……。それは、どういった心変わり？」

先日、ペアになるように誘った時は無下にされたのに、一転して今は逆の事を言う葵に鈴音は意地の悪い視線を横目で送る。

鈴音の視線に気付かないはずがないのに、葵は視線を合わさない。

「トーナメントと同じく、俺の事情も変わってね。試合の対戦相手が織斑・デユノアペアになったんだ」

「それで？」

「あー……。ほら、織斑って女子にちやほやされてムカつくじゃない？ だから、これを気にちよっとボコボコにしてやろうかと――」

「もういいわ。本当の理由は聞かないであげる」

「う……。」

打ち砕くように鈴音に言葉を遮られ、葵は呻き声を上げた。

葵が一夏の境遇に対して妬みを抱いていないことくらい、鈴音は分かる。そもそも、もし本当に妬んでいたのなら、葵の普段の行動が関わりないで下さいと言わんばかりに人を避けまくっていることと矛盾している。

「それで・・・どうかな？」

嘘がバレたためか、叱られた子どものように恐る恐る葵は言葉を紡ぐ。

「そうね・・・」

人差し指を顎に当てて考えるような仕草を取る鈴音だが、答えはすでに決まっている。しかし、嘘をつかれたことへの仕返しにと、ちよつとばかり葵の不安を煽るような態度をとっていた。

さらに、もう1つ。鈴音に名案が浮かんだ。

「ダメなら、別に・・・」

「ダメじゃないわ。でも——」

「でも？」

嬉々とした声を出す鈴音と対照的に、葵は嫌な予感を覚えていた。

「これ。貸しにしとくわね」

「・・・なんだって？」

驚いて振り向いた葵と鈴音の視線が一瞬交差する。すぐに身体が拒否反応を起こし、視線を逸らした葵だが、その瞳にはしてやりといった表情をした鈴音の顔が焼きついていった。

「だ・か・ら。貸し1つね。後で返してもらってから」

「マジ？」

「マジよ。これで交渉締結。今更、やめるなんて言っても受け付けないからね」

「あ、ああ・・・」

呻き声にも似た返事をした葵は、思いもしなかった方向へ飛んできた話に、「誘う相手、失敗したかな・・・」と口の中で呟いていた。

そんな葵の横で、鈴音はラーメンのスープを飲み終わり、食器を

片付けるために席を立つ。

葵に背を向けた彼女は、自分の求めたものと少し違うものの、面白くなりそうな未来に笑顔を隠しきれずにいた。

次の日。

トーナメント期日としては4日目。試合がトーナメントとして機能しなくなった今は、事実上の最終日である。とはいえ、予定試合のほとんどは昨日の内に消化しており、本日は第3アリーナで行われる1試合のみだ。

「俺って、実は幸運の持ち主なんじゃないだろうか？」

この4日間で最大の観客数を記録したアリーナの真ん中で、白式を装着した一夏は感慨深げに呟いていた。

「何言っているの一夏？」

ラファール・リヴァイヴ・カスタム？を装着して隣に並ぶシャルロットが、パートナーから発せられた突然の弱電波発言に訝しんだ視線を送る。

「ん……。いや、少し自分の境遇の良さを噛み締めていたところさ」

そう言う一夏の視線の先をシャルロットも追う。そこには、昨日急遽決まった一夏とシャルロットの対戦相手である葵と、そのペアである鈴音が共に自身のISを装着した状態で佇んでいた。

「分からなくてもないけど、突然話し出すからビックリしたよ」

毎日のように一夏と訓練を続けていたシャルロットは、彼が葵に憧れと対抗心にも似た思いを抱いていることに気付いていた。

一昨日のラウラに続いて、今日は葵との対戦である。どちらも一夏が戦いたいと強く思っていた相手であるだけに、今回の出来事に一夏が喜びを感じることは、シャルロットも理解できなくてはなかった。

「それにしても、立花のペアは鈴か……。あの2人って、そんなに仲がよかったのか？」

一夏の疑問に、シャルロットは回想する。そういえば、葵に自分の性別がバレたすぐ後、彼と話していたのは鈴音だ。一夏とペアを組んだあの日も、葵を誘っていたのは鈴音だし、シャルロット自身と担任副担任2人を除けば、もっとも葵と話しているのは彼女だろう。しかし、女性が苦手な葵のことだ。本当のところはどうなのか分からない。

『一夏！ 前回着かなかった勝負、今日は着けるからね！』

「望むところだ鈴！ 立花、おまえにも負けないぞ！」

テンションの高い2人に圧されているのか、葵は疲れたように溜息をつく。

そんな葵にシャルロットは声をかけた。

「葵、いい勝負をしようね」

『ああ、そうだなデユノ——「シャルロット」——・・・そうだなシャルロット』

ぴしゃりと言い放つシャルロットに、再び葵の溜息が漏れる。非常に名前を呼び辛そうだが、ならば慣れてもうらまでと、シャルロットは容赦しない。

『なに。アンタ、あの子のことを名前で呼ぶ事にしたの?』

女子を名前で呼ぶ葵が珍しかったらしく、鈴音が会話に入ってくる。

『呼ぶことにしたというか、呼ばされているというか・・・』

『なに、それ?』

葵の言う事の意味が図りかねるのか、鈴音は首を傾げている。

『み、みなさん。そろそろ試合開始の時間なので、気を引き締めてください』

大衆の面前で喋り続ける4人に対し、釘を刺すべく真耶が通信を入れてきた。千冬じゃなかったのは、彼女が我慢しているのか、真耶が気を使ったのか。どちらにしても、4人ともそれとなく状況の悪さを察し、口を紡いだ。

シグナルランプが点灯する。

騒いでいた鈴音が静かに一息吐き、意識を切り替える。先ほどまでの気分の高揚を試合中にまで持ち込む気はないらしい。隣の葵も、

何かするわけでもないが、目つきが段々と鋭さを帯びたものに変わってゆく。

一夏は無意識に左手を閉じたり開いたりしている。気分が高ぶっている証だ。シャルロットも黙祷と呼ぶには短く目を瞑り、戦闘に備えた。

5つあるシグナルランプが3つ目まで点灯した時、葵は各国政府がいるであろうアリーナのBIP席にそつと目を向ける。距離と高低差のため、アリーナ内からは人影くらいしか見えなかったが、感覚的にそこからの視線が自身に集中しているように思えた。

シグナルランプの5つ目、青いランプが点灯する。

タッグマッチの最終試合が今始まった。

『うおおおっ！！』

3日前のラウラ・箒戦と同じく、最初は一夏の突撃から始まった。相変わらず既存ISの一般的性能を無視してデタラメに加速する

白式が葵に迫る。

『（なんだ？）』

葵に接近する一夏だが、ある程度の距離まで近づくと徐々に心が乱されてゆく。なぜなら葵が全く動かないからだ。避ける様子もなく、受け止める様子もなければ、武器を展開しようとしてもしない。

罨

その考えが一瞬一夏の脳裏を過ぎるが、数秒にも満たない時間で動きを変えることはできない。疑問を振り切って、掲げた雪片式型を葵へ振り下ろす。

しかし、振り下ろした剣先に手応えを感じることはなかった。

『なっ！？』

一夏の口から驚愕の声が漏れる。それは葵の行動を見た故だ。

別に葵は超高速で動いたとか、特殊兵装で一夏の斬撃を無効化したとか、奇想天外な事を行ったわけではない。

ただ普通に、軸足とは反対の足を半歩後ろに下げて身体を逸らしただけだ。それは、狭い道で向かい側から来た人とすれ違うように自然で、一夏はとっさに反応できず、高速のまま葵の横を通り過ぎ

てアリーナの壁に激突した。

『い、一夏!?!』

激突時の轟音と舞った塵の中に消えたパートナーに、シャルロットは悲鳴に近い声を上げる。

「? 剣の軌道が前の試合と変わってない」

『まあ、一夏だしね・・・』

半ば呆れたような口調に反し、葵と鈴音の2人は迅速に行動を始めた。シャルロットを中心に、円軌道を鏡写しに描きながら彼女に射撃を浴びせる。ラファール・リヴァイヴを使う葵はアサルトマシンガン、甲龍を使う鈴音は龍砲だ。

『くっ・・・』

シャルロットは、左腕に装備されている灰色の鱗殻グレー・スケールと右腕に新たにシールドを呼び出し、左右から放たれる射撃に耐えた。というよりも耐えるしかない。下手に動くものなら、技量の高い2人のことだ。どちらかが防御を掻い潜って攻撃を当ててくるだろう。

『いつつ・・・』

激突した衝撃から一夏は、足元をおぼつかせながらも何とか立ち直る。

白式の爆発的な加速力が裏目に出ってしまった結果だ。もし、絶対防御が働いていれば衝撃を相殺し、もっと素早く立ち直ることができたのだろう。しかし、強固な防御力を誇るISは壁に全力で衝突した程度では働かない。通常の防御では衝撃を完全に緩和することはできなかった。

『くそ、もう1度だ！』

しかし、一夏はめげない。再度葵に突撃を敢行する。

馬鹿の1つ覚えのような行動だが、そもそも雪片式型しか武装のない白式では、基本戦術はこれ以外に取り様がない。

先ほど縦斬りを避けられたため、一夏は雪片式型を真横に引き、抜刀するような体勢を取る。

『これでええ！』

渾身の力を込め、一夏は雪片式型を振り払う。

シャルロットへの攻撃を続けていた葵は、そんな一夏の様子をチラリと横目で見える。しかし、今度も避けようとしなければ、防ぐこともしない。

「任せるよ」

葵はただ一言そう呟いた。

『オーライ!』

響くような返事と同時に、一夏と葵の間に巨大な刃が割り込んでくる。それが、一夏の攻撃を遮った。

その刃は一夏も見覚えがある。双天牙月だ。

『鈴か!』

『立花ばかり見ちゃって妬けるじゃないの、一夏!』

好戦的な声色の鈴音と一夏が互いの剣をぶつけ合う。剣の大きさは甲龍の双天牙月が勝っているが、剣を操るISの出力は白式が勝っている。総じて、機体性能による剣戟の威力は互角くらいだろう。

そうなると、勝敗は操縦者の技量に左右されるのだが――

『甘い!!』

『ちっ!』

やはり、技量は鈴音の方が一枚も二枚も上手だ。双天牙月の大きさからするとありえない剣捌きで一夏の剣戟をいなす。

一方、鈴が一夏の対応に回ったため、少なくなった射撃の弾幕から逃れたシャルロットは、葵と相對する。右腕のシールドを収納し、変わりにその手に射撃武器を取り出す。

『今度はこっちからいくよ、葵!』

叫ぶのとほぼ同時に、ラビット・スイッチ高速切替でアサルトライフル《ヴェント》の展開を終えたシャルロットが攻撃を開始する。

「む……!」

シャルロットの攻撃に素早く反応し、葵は上空へ退避。しかし、予想以上にシャルロットの追撃速度が早く、避けきれない。

「(くそっ! もう少し機体が反応してくれたら……)」

葵は内心で毒づく。

シャルロットの攻撃は葵にとっては反応しきれないものではなかった。だが、これ以上早く動けばおそらくISが止まる。ラウラ戦での経験から、葵は何となくではあるが自分のISの限界に予測がついていた。

仕方なくシールドを取り出し防御する。

『やっぱり取り出すの早いね。本当にそれ、ノーマルタイプのリヴィアヴなの？』

ラビット・スイッチ

高速切替でシールドを取り出した葵に、シャルロットが関心と呆れが混合した口調で尋ねた。

ラビット・スイッチ

普通のラファール・リヴィアヴを使う葵と、高速切替を使用するに特化したカスタム？を使うシャルロットの武装切替速度はほぼ互角。機体差があるのに互角ということは、操縦者の技量差に明確な違いがあることに他ならない。

「ご覧の通りだ」

『そっか、やっぱり葵は凄いね。でも———』

シャルロットは、アサルトライフルとシールドを収納し、新たな武装を取る。

『僕だつて、負けないよ！』

取り出した武装は、連装ショットガン《レイン・オブ・サタデー》。近距離でこそ絶大な威力を発揮するそれを有効に使用すべく、シャルロットは瞬間加速で、イクニッション・ブースト葵に近接する。

ショットガンから放たれる無数の弾丸を、葵は2度までは避けてみせたが、3度目はシールドで受けた。攻撃の反動に耐えられなかったのか、葵のシールドは弾かれてその腕から離れる。

——チャンス

その思考がシャルロットの脳裏を過ぎった。ショットガンを連射させつつ、近接ブレード《ブレード・スライサー》で葵に斬りかかる。

刃が葵に届こうとした瞬間。その突きは唐突に止められた。

無手になっていた葵が、シャルロットの突き出した腕の手首を掴んで、その動きを止めたのだ。

『！まさか、さっきのシールドは！』

「たぶん、考えの通りだよ」

葵の肯定にシャルロットは驚愕する。

先ほどのシールドは弾かれたのではなく、葵自ら飛ばしたのだ。ショットガンの攻撃の後、シャルロットが近接ブレードで斬りかかって来るのを読んだゆえの行動だったのだろう。

葵はシャルロットの腕を掴んだまま、身体を屈めて足払いするようにな彼女に蹴りを入れた。飛行機能を持つISはその程度で転ぶようなことはないが、葵はそれを見越し、シャルロットに強烈な手刀を叩き込み、その身体を地面に沈める。

打撃を加えたくらいでは、ISのシールドエネルギーはほとんど削れない。葵はさらなる追撃を加わえるべく、ハンドガンを取り出しシャルロットに照準を定めた。

『シャルロット!』

『待ちなさい一夏!』

そんなペアの危機に気付いた一夏が、シャルロットを助けるべく葵に突っ込んでくる。その後ろを鈴音が付いてくるが、加速性能にしても最高速度にしても白式の方が高いため、追いつけないようだ。

葵はシャルロットを気にしつつも、彼女に向けていたハンドガンを一夏に向けて放つ。銃弾が吸い込まれるように当たるが、エネルギーシールドを盾にした一夏は止まる気配がない。

そのまま試合開始時とほぼ同じように剣を振り上げながら、葵に迫る。

「（さすがに今度は紙一重ってわけにはいかないよな）」

思考に不理解な点がある一夏であるが、決して無能ではないことくらいは葵にも分かっていた。ただ未熟なだけ。得てしてそういう相手は練習中に上達しなくても、試合中に一気に実力を上げることがある。

漫画みたいな話ではあるが、そもそもこの世界はそういう世界なのだと葵は思っていた。少なくとも一夏に関しては。

葵は一夏の攻撃範囲から離脱すべく身体を浮上させようとするが、その動きがガクンと止まる。

「な!?!」

『一夏、今だよ!』

地面に伏していたシャルロットが、葵の足にしがみ付いてその動きを止めた。見た目が可憐な美少女である彼女が、こんな泥臭い戦い方をするとはいふ葵の予想外だ。

「（それだけ本氣つてことか！）」

読み違えた内心で舌打ちしながら、葵は強引にシャルロットを引き剥がす。

しかし、それは僅かに遅かった。

『しっ！』

零落白夜を伴った雪片式型のエネルギーの刃が葵の肩をかする。

物理ダメージはほとんどない。しかし、シールドエネルギーはそうはいかなかった。

「まさか、かすっただけでこんなに・・・！」

総エネルギー量のおよそ三割強を持っていかれ、葵は関心と呆れが混合した声を出す。

まさに白式は規格外。武器が1つだけだとか、中距離・遠距離戦ができないことなど、この攻撃力の前では些細な問題に過ぎない。

担い手がそれなりの実力があれば、であるが。

『どうだ!』

だから、一夏が自慢げにする様を、葵はまたもや関心と呆れを混合させた視線で見つめた。

今凄かったのは、一夏ではなく白式。それを一夏が自慢げにするのはおかしいだろう。一方で、強力な武装を得る運やその場の状況を味方になっているのも、ある意味で彼の力といえる。

「（实力まだ低い。けど、運や状況を味方にできる。・・・強いな織斑一夏という人間は）」

人間味は不理解。だが、戦闘面においては葵は一夏を的確に捉えていた。

『大丈夫？ てか、アンタちょっと腑抜けたんじゃない』

「・・・ごもつとも」

鈴音の指摘に葵は苦笑する。

気乗りしない頼み事、理解ができない相手、さらに先日は文字通りの死闘を演じたばかりのため。様々な要素が絡まった結果であるが、それが葵の反論材料にはならない。

それに、貸しになっているとはいえ、今の戦況は協力してもらっている鈴音に失礼だろう。

『で、どうすんの？ このままってわけじゃないんでしょ？』

「そうだね。せっかく凰さんに協力してもらっているんだし、先手押ししてみようかな」

葵の戦い方は相手の動きやクセを見極め、それに対応するというもの。このやり方は基本後手に回り、また長期戦にもなりやすい。

慣れないペアなら普段通りが一番勝率が高いが、何度も共闘経験のある鈴音ならば、彼女の気性を考えても短期決戦の方がいいだろう。そう葵は考えた。

『へー……。てことは、いつも通りでいいのね』

「ああ、いつも通りでいいんだ」

一呼吸置いた後、2人は行動を開始する。

『なに！？』

2人を見た一夏が在りえない物を見たばかりに驚きの声を上げ

る。

それは葵が前衛、鈴音が後衛で突っ込んでくる姿だ。機体特性的にも本人たちの操縦特性的にも普通は逆だ。

突っ込んでくる葵を迎えうつべく、一夏が構えを取る。

葵が一夏に近接した瞬間、彼の身体が沈む。屈んだ身体の上から、姿が隠れていた鈴音が現れ双天牙月を振り下ろす。同時に葵もショットガンを一夏に間近からぶっ放した。

『ぐあっ！！』

上と下からの同時攻撃。しかも、一夏からすれば異様とも思えるほど絶妙な連携を見せられ、対応しきれなかった彼は攻撃の衝撃で吹き飛ばされた。

飛ばされる一夏に白式から嫌な予感しか浮かばない警告音が響く。それはロック警告。相手は当然のように葵だ。いつの間にかその手にはスナイパーライフルが切替られ、吹き飛ばされているという不安定な一夏に、無慈悲な弾丸が放たれた。

今までの被弾に加えて、零落白夜の使用によって著しく減っていた白式のエネルギーは一気にゼロになる。

「まず1人」

『くそっ・・・』

悔しがる一夏を尻目に、葵の視線はシャルロットを捉えた。

すでに鈴音と切り結んでいるシャルロットに、葵はスナイパーライフルで狙いをつける。

シャルロットも狙われている状況に気付いているようで、自分と葵の間に常が鈴音がいるように工夫していた。これでは援護射撃もままならないだろう。

普通の腕しか持たない相手ならば。

「さすがに上手い。けど、——ターゲット、インサイト」

『ええっ！？』

シャルロットが驚くのも無理はない。葵は鈴音の存在がまるでないかのように、普通にスナイパーライフルを撃ったのだから。

ラウラと同じようにパートナーを無視した戦いをするのだろうか？

そんな思考がシャルロットの脳裏を掠めた瞬間。彼女は自分の認識の甘さをその身で受けることとなった。

1発目は右手。鈴音を捉えようとしていたハンドガンを落とされた。

2 発目は右脇。鈴音のほんの僅か横を抜けて捉えられた。

3 発目は左足。双天牙月を受けて踏ん張っていた軸足を抜かれ、そのまま倒れこんだ。

『凄すぎるよ・・・』

何がとはシャルロットが言うまでもない。

鈴音とシャルロット。2人の近接戦。その動きを的確に読んで、間にいる鈴音には全く当てずに、向こう側にいるシャルロットのみを捉え続ける葵の実力だ。しかも、ハンドガンなどの小口径銃ならともかく、大口径であるスナイパーライフルでやり遂げる様は神業としか言いようがない。

それと、シャルロットが驚いた点がもう1つある。

それは、鈴音の態度だ。自分の真後ろから自分に向かって遠慮なしに弾丸を放たれているを気にしている様子がまるでない。

いくら葵の腕がいいとは分かっているけどここまでギリギリの射線で撃たれているのだ。普通は多少なりに後ろに意識が向いてしまうはずである。

『葵を信頼しているんだね』

一瞬キョトンとした鈴音だったが、すぐにシャルロットの言葉ん
としてに気付く。

『そうね。アイツの腕は今まで見てきたし、見せ付けられもしたも
の。今更このくらいのことくらいじゃ、驚かないわよ。それに、こ
れくらいのことしてくれなきゃ、アタシが追っている意味もないし
ね』

誇らしげに語る鈴音。その瞳必ず追いつくという決意に満ちてい
る。

友情とは違う。けれど、確かに両者に存在する繋がりを核心しな
がら、シャルロットは最後の一闪をその身に受けた。

第27話 幕間 〱四者三様の思惑〱

試合が終わり、アリーナのVIP席は拍手に包まれた。

フランスの男性は試合内容が望んだものだったことに安堵し、アメリカから来た女性は噂以上の葵の実力に目を見開く。他の各国代表も概ね似たような反応だ。

ただ1人を除いては。

その女性は、同室の皆よりも後ろに立っていた。だから誰も気付かない。彼女の視線、その性質に。

侮蔑・嫌悪・苛立ち……。

負の感情を多量に含んだ視線を向ける先は、アリーナ中央。そこにいるのは葵だ。

「——認めない。織斑一夏はまだいい。あれが秀でているのは機体だ。あれ自身じゃない。だが立花葵、あいつはダメだ」

試合を見る前はただの噂だと思っていた。だが、現実は無情であ

る。噂だと思っていたものは確かに噂でしかなく、本当のところは噂以上だ。

それを知ったがゆえに、彼女は葵を看破できない。

「——認めるものか。男性のIS操縦者など、私は認めない」

光に目を背け、闇を求めるように。怨念にも似た言葉を呟きながら、彼女は去っていった。

同日未明。フランス某所。

都市から少し離れた郊外。人気の少ない場所としては不釣り合いなほどの巨大な施設の一室。ここでは幾人もが働いていた。最近はず夜を問わない重労働だが、スタッフたちに不満は少ない。

なぜなら、今日この瞬間にもその成果の花が咲こうとしていたのだから。

「——3、2、1、0。異常見られません。テスト工程全て終了しました」

「社長、どうでしょうか？」

無精ヒゲをこれでもかと生やし、いかにも私は寝てませんといった隈付きの目をした研究チームの責任者。その男が部屋の後ろに控える総責任者に視線を向ける。

「・・・うん。問題はないようだね」

「そ、それじゃ・・・」

「ああ。全て終了——というわけじゃないけど、これで完成したよ。我が社の第三世代型ISがね」

総責任者——マティウスが頷いた瞬間。開発室には怒号の如きの歓声上がる。

ある者は涙を流し、ある者は隣の間僚と抱き合い、ある者は安心してきつた顔でその場に倒れた。

「おー、おー。盛り上がってるね」

「先輩」

飄々とした雰囲気で見れたのはマイクだ。

本来ならば、開発室なんて極秘の塊のような場所に彼のような部外者は近寄る事すら許されない。

そう、部外者ならば。

「これも先輩のおかげです。このシステムの開発は先輩の手助けがなければ年内使ってもできなかったでしょう」

先日のR部隊襲撃事件以降、マティウスのデュノア社とマイクのDK社は業務提携の仲となっている。そのため技術者が提携先に派遣されているのは別におかしいことではない。しかし、その派遣された技術者が組織の長というのはやはりおかしいだろう。

「私は何もしてないぞ。てか、基礎はほとんどできてたじゃないか。大方今までできなかったのは、他の事に気が回り過ぎてたからだろ」

謙遜でも何でもなくマイクをそう思っている。そうでなければ、いくら自分が手伝ったからといっても僅か半月でこの成果を得られるはずもないのだから。

マイクの言葉を否定できず、苦笑しながら出来上がったばかりの新型ISにマティウスは目を向ける。

「細かいところはまで残ってますが、後は実施運用で問題なければ本当に完成です」

「悪いが、テストパイロットの方はこちらに融通してもらっぞ？」

「それは、もちろん。というよりも、こちらとしても願ったりかなったりなんですが、本当に大丈夫なんですか？」

「大丈夫だろ？ あいつもいつまでも自分の実力を出すのに、足枷にしかならないISを使うよりはいいと思ってくれるぞ。それよりも、お前のほうは上を説得できるのか？」

マイクとマティウスが押す操縦者はフランス人ではない。自国の新型ISに他国の人物が乗るなど、情報漏えいを含めても、政府が許可を出すはずがない。普通ならば。

「政府は彼に引け目を感じてますし、今日も学園の方で無茶な頼み事をしたばかりみたいですから問題ないでしょう。それに我が社の利は、国の利です。それが分からないわけでもないでしょう。それより先輩は、どうなんです？ せっかく説得が上手くいつてコアが手に入ったそうじゃないですか。手伝いを頼んだ僕が言うのも難ですが、こんなところで油を売っている場合じゃないでしょう？」

「かまわんよ。今はまだパーツの組み立て段階だ。私が直々にやることなどない。それよりも、DSではなくISにおけるあいつのデータがほしい。全力で動かしているデータがな。そのためには、あいつにいつまでもリヴァイヴに乗ってもらっわけにはいかないんだ

よ
」

マイクが今回の技術協力を行ったのは、それが最大の理由だ。正直、マティウスや自社など、二の次の理由にすぎない。

「それで、いつごろ渡せそうだ？」

「そうですね……。説得が順調にいけば、来月中ごろには彼に渡せそうです」

「7月中ごろか。確かその時期は、学園じゃ臨海学校をやる予定だったな」

「そうですが……。先輩何か変なこと考えてませんか？」

不敵に笑い始めたマイクにマティウスの不安が募る。

「大したことじゃないさ。ただ――」

「ただ？」

「ちょっとしたサプライズは必要だろ？」

笑いを堪えているマイクを尻目に、マティウスは力なく首を軽く振った。

後日。某所。

そこは奇妙な部屋であつた。

部屋の至る所には機械の備品がちりばめられ、ケーブルがさながら樹海のように広がっている。

そして、中央には部屋の主たる女性がいた。

女性も部屋の様相と同等か、それ以上に奇妙な人物だ。エプロンと背中のリボンが目を引く真つ青なワンピース、頭のカチューシャに機械的なウサギの耳。見た目だけでも十分に奇怪だが、この人物の本当に奇怪な部分はその内面である。そう気付いている人物は各国家の政府要人を除けばほんの僅かしかない。

その奇怪な人物——篠ノ之束は自身のラボで、彼女にしては珍しく鼻歌混じりにキーボードをありえないスピードで叩いている。

彼女がご機嫌な理由。それは、先ほど彼女にとっては3人しかない興味対象、その内2人が連続で連絡をくれたことだ。

妹である篠ノ之箒、友人である織斑千冬、その弟である織斑一夏。

3人とは7月の臨海学校で会うことが決まっている。とういうか先ほど決めた。

人間らしさとは乖離している束にして珍しく、人間らしい幸福感を覚えていた。

とにもかくにも、今は箒に渡す紅椿の最終調整を完璧にしなければならぬ。自分が本気を出せばすぐに終わってしまう。それは分かっているが、ゆっくり作業するという選択は束にはなかった。

その頭上を機械仕掛けのリスが通り過ぎる。振動としては僅かなもの。しかし、その僅かな揺れによって、機械の間に挟まっていたものが、はらりと束の手元に舞い降りる。

それは写真だった。映像媒体が主流の現代に至っては珍しい。その映像は束にとっても看破できるものではなく、暇つぶしをかねて現像したものだ。もっとも、この1枚ですぐに写真は飽きてしまったため、この部屋にあるのはこれっきりなのだが。

「ああ。そういえば、そうだ。なんで、忘れていたんだろうね？」

写真に映っているのは、2つの物体。

片方は人間。量産型のISを身に纏った2人目の男性IS操縦者。

片方は機械。人間型の上半身とサソリ型の下半身を無理やりくっつけた歪物。ゴーレム？ type キメラ 束がそう名付けたものだ。

この写真は5月のIS学園クラス対抗戦の折、侵入してきた奇形ISと葵の戦いを撮ったものだった。片やボロボロ、片や無傷の状態である。この写真だけ見て、どちらが勝ったのかと問えば10人中10人は無傷のキメラが勝ったと言っだろう。

しかし、実際に勝ったのは葵。それによって束のシナリオは大きく狂った。

クラス対抗戦での束の目的は、大小様々だったが、大きく分けて2つ。1つはゴーレムの稼動実験。2つ目は一夏に実績を上げさせるというものだ。

それは、単純に実績を上げれば一夏も喜ぶだろう、という程度のものだった。

本来のシナリオは、ゴーレム？を一夏が撃破した後、葵を殺したキメラも一夏が撃破する。そうすれば、一夏の実績としては不動のものが出来上がっただろう。そのために、キメラは白式でしか破壊できないほどの堅い防御力を持たせたというのに、実際はセシリアの援護があつたとはいえ、ただの量産型ISを使う葵に撃破されてしまった。

「面白いな。なんなんだろうこの子？ 私の予想を上回るなんてほんと、面白い」

それは、束が4人目に認識した興味対象。その誕生であった。

しかし、他の3人と4人目は興味であっても、その内容が大きく異なる。

それは、写真の裏側に殴り書きされた文字にしっかり現れていた。

sample
要観察対象

第27話 幕間 〈四者三様の思惑〉（後書き）

新年明けましておめでとうございます。紅だった人です。

そして、皆様。ほんとくに、申し訳ないです。またもや長い更新期間をもらってしまいました。さすがに一月越えるとは自分自身思いませんでしたよ。

まあ、謝罪もこの辺にしてあとがきです。

この27話をもちまして原作2巻までのストーリーは終わりを迎えました。そこでこの27話でたくさんの方の伏線を張ってしまい、回収できるか今から心配しております。

ISのアニメ放送から1年。IS二次創作がどこまで生き延びられるか分かりませんが、今年もどうぞよろしくお願いいたします。

あ、そうそう。今回の話の冒頭に出てきた女性はいよいよ出番ないんで、少し気長に待っていて下さい。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5814t/>

I S インフィニット・ストラトス Dream Soldier

2012年1月4日13時46分発行